

竪穴住居跡4号 (SH 4 : 第42図)

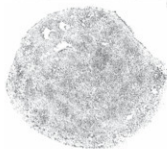
検出状況 A-17区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

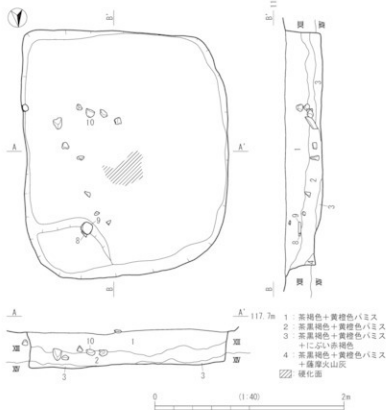
形状・規模 平面形状は方形で、長軸2.59m、短軸2.14m、検出面からの深さ0.38mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層を掘り抜きXIV層に達している。中央部周辺の床面には、貼床と思われる0.44m×0.25m程度の硬化面の広がりが見られる。遺構の北東角は他より10cm程度一段高くなっており、出入口口等である可能性も考えられる。

埋土 埋土は4つに分かれる。埋土1は、茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土でXI層に相当する。埋土2・埋土3・埋土4は、ともに茶黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。包含物(埋土2:黄橙色バミスのみ・埋土3:にぶい赤褐色の土・埋土4:薩摩火山灰)の違い等で分別した。

出土遺物 埋土中から13点の遺物が出土した。土器片3点、石器2点、礫8点であった。そのうち土器2点と石器1点を図化した。8(第42図)は、SH 5内の出土遺物1点と包含層遺物7点が接合した胴部である。外面には、綾杉状の貝殻条痕文を施す。また、外面上部には、被熱痕が確認できる。内面は、工具によるケズリや指によるナデも見られる。9(第42図)は、底部である。底



竪穴住居跡4号



- 1: 茶褐色+黄橙色バミス
- 2: 茶黒褐色+黄橙色バミス
- 3: 茶黒褐色+黄橙色バミス+にぶい赤褐色
- 4: 茶黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
- ☐ 硬化面

0 (1:3) 10cm

第42図 竪穴住居跡4号・出土遺物

面外部端部に、キザミは確認できないが、その上位には横位条痕文を施す。底面内部には、指おさが確認できる。8・9は、胎土は似通うが、同一個体とはならない。10（第42図）は安山岩製の磨石・敲石類である。下半分を欠損するが元は扁平な円礫と考えられ、表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。被熱しており欠損部周辺にススが付着する。

土器分類 8・9・図化していないもう1点は、いずれもIV類に該当する。

炭化物 床面で採取した炭化物は、科学分析の結果から、 ^{14}C 年代測定は、8226-7964calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

竪穴住居跡5号 (SH 5 : 第43図)

検出状況 F-23区、XII層中で検出された。

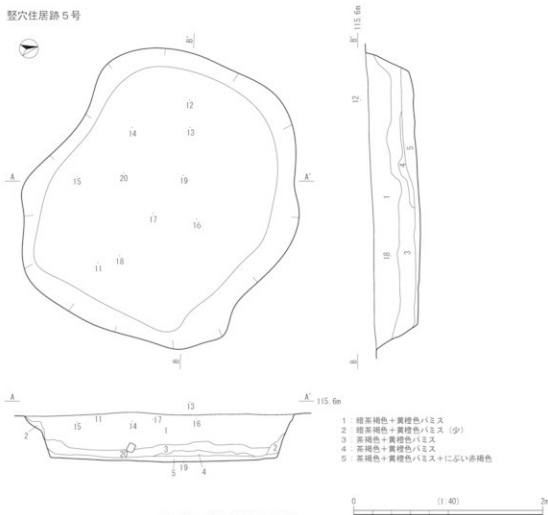
切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は不定形方形で、長軸3.05m、短軸2.63m。検出面からの深さは0.48mである。掘り方はXIII（薩摩火山灰）層を掘り抜きXIV層に達している。掘

り方直上には、貼床と考えられる土（埋土5）が水平に堆積している。

埋土 埋土は5つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に黄褐色バミスを含む土である。黄褐色バミスの包含量（埋土1>埋土2）の違い等で分層した。埋土3・埋土4・埋土5は、いずれも茶褐色の土に黄褐色バミスを含む土である。粘質の強さ（埋土3<埋土4<埋土5）や包含物（埋土5にのみ、にぶい赤褐色の土を含む）違い等で分層した。

出土遺物 埋土中から25点の遺物が出土した。うち10点を図化した。11（第44図）は、外反する口縁部片である。口縁部外面に、斜位貝殻刺突文を施す。やや丸みを帯びる口唇部は、文様をもたない。内面には、ナデをおこなう。12・13（第44図）は、器壁の薄い胴部で、胎土や施文等から同一個体と考えられる。12・13は、綾杉状の貝殻条痕文の上位に、貝殻刺突文を施す。写真図版では、上部の接合が外れている。14（第44図）も胴部である。綾杉状の貝殻条痕文の上に斜位貝殻刺突を施すことから、頸部近くと思われる。内面にはナデをおこな

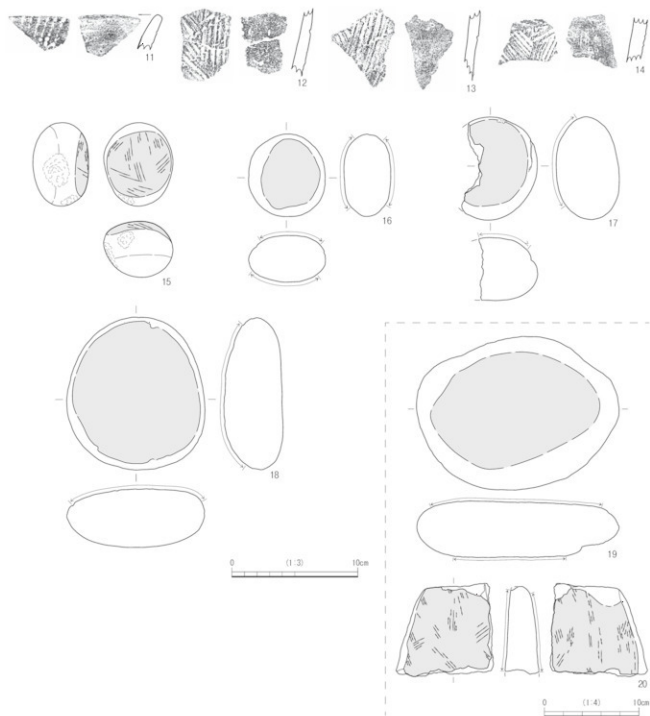


第43図 竪穴住居跡5号

う。15～18（第44図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。15は小ぶりの円礫の片面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。16は小ぶりでやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。17は左半分を欠損する。やや扁平な円礫の片面を磨面に使用してしている。被熱しており裏面から側面にかけてススが付着する。18は扁平な円礫の片面を磨面に使用している。19は砂岩製の石皿である。扁平な礫の表裏両面を広く磨面

に使用している。表面は特によく研磨され滑らかな状態である。20は破片資料だが、表裏両面の平坦部に磨面が残ることから石皿とした。

土器分類 11～14は、いずれもIV類に該当する。



第44図 竪穴住居跡5号出土遺物

竪穴住居跡6号 (SH 6 : 第45図)

検出状況 E-23区, XI層で検出された。

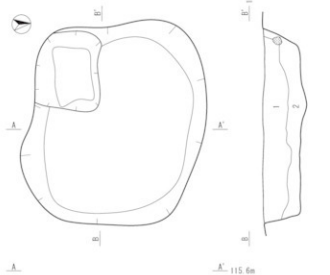
切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は長軸2.1m, 短軸1.88mとやや小型のものである。検出面からの深さは0.4mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 遺物は、出土していない。

竪穴住居跡6号



竪穴住居跡7号 (SH 7 : 第45図)

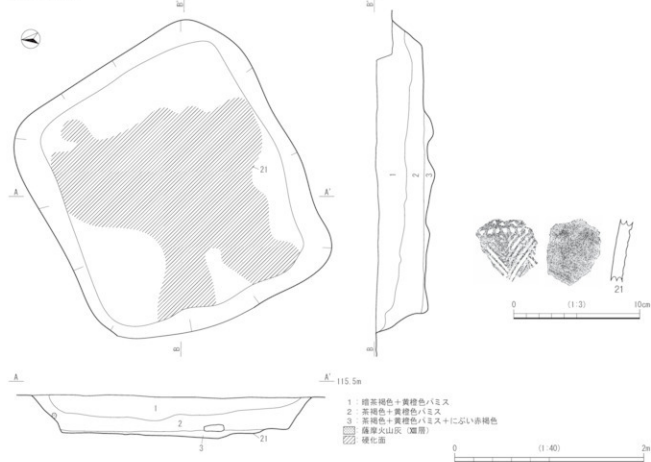
検出状況 E-23・24区, XII層で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は方形で、長軸3.00m, 短軸2.80m。検出面からの深さは0.47mである。掘り方はXⅢ(薩摩火山灰)層に達している。掘り方直上には、貼床と考えられる土(埋土3)が水平に堆積している。



竪穴住居跡7号



第45図 竪穴住居跡6号・竪穴住居跡7号・出土遺物

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2・埋土3は、ともに茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。粘質の強さ(埋土2<埋土3)や包含物(埋土3にのみ、にぶい赤褐色の土を含む)違い等で分層した。

出土遺物 埋土中から2点の遺物が出土した。土器片・礫が各1点で、土器片1点を図化した。21(第45図)は、頸部に近い胴部である。外面上位に、横位貝殻刺突文を、下位に綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面には、ナデをおこなう。

土器分類 21は、IV類に該当する。

竪穴住居跡8号(SH8:第46図)

検出状況 G-23区, XII層中で検出された。北側については、調査区外へ延びる。

切り合い 切り合いはない。

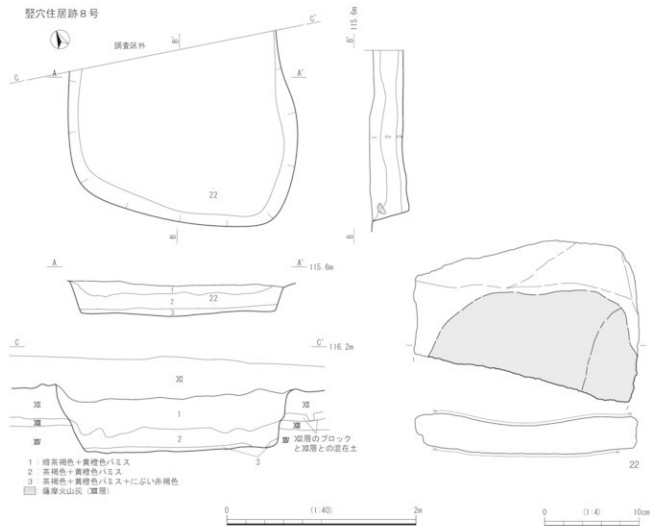
形状・規模 平面形状は不明である。現状の長軸2.40m、短軸1.80m、検出面からの深さは0.55mである。掘り方

はXIII(薩摩火山灰)層を掘り抜きXIV層に達している。掘り方直上には、粘土と考えられる土(埋土3)が水平に堆積している。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2・埋土3は、ともに茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。粘質の強さ(埋土2<埋土3)や包含物(埋土3にのみ、にぶい赤褐色の土を含む)違い等で分層した。

出土遺物 埋土中から2点の遺物が出土した。土器片1点・石器が1点である。そのうち石器1点を図化した。図化していない土器片は胴部である。外面に綾杉状の条痕文と貝殻刺突文をわずかに確認できる。22(第46図)は花崗岩製の石皿である。扁平な石材の表裏両面に磨痕が確認され、特に表面は緩やかに落ち窪んでいる。表面磨面の残存状態から、全体の1/2~2/3を欠損すると考えられる。

土器分類 胴部片は、IV類に該当する。



第46図 竪穴住居跡8号・出土遺物

竪穴住居跡9号 (SH9 : 第47図)

検出状況 G-24区, XII層中で検出された。北側については、調査区外へ延びる。
切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は不明である。現状の長軸2.66m、短軸1.04m、検出面からの深さは0.55mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層を掘り抜きXIV層に達している。掘り方直上には、貼床と考えられる土(埋土3)が水平に堆積している。

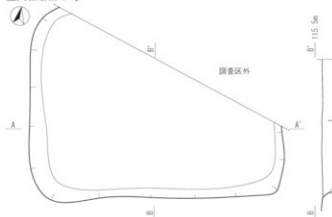
埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2・埋土3は、ともに茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。粘質の強さ(埋土2<埋土3)や包含物(埋土3にのみ、にぶい赤褐色の土を含む)違い等で分層した。

出土遺物 遺物は出土していない。

竪穴住居跡10号 (SH10 : 第47図)

検出状況 C-19区, XII層中で検出された。
切り合い 切り合いはない。

竪穴住居跡9号



- 1 暗茶褐色+黄橙色バミス
- 2 茶褐色+黄橙色バミス
- 3 茶褐色+黄橙色バミス+にぶい赤褐色

形状・規模 平面形状は方形で、長軸2.04m、短軸1.77m、検出面からの深さは0.20mである。掘り方は一部XIV層に達しているものの、基本的にはXIII(薩摩火山灰)層で取まり、床面として意識したものと思われる。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土で、XI層に類似する。埋土2は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土中にはわずかであるが炭化物が認められた。

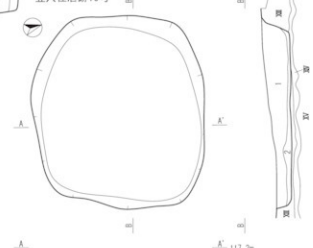
出土遺物 遺物は出土していない。

竪穴住居跡11号 (SH11 : 第48図)

検出状況 E-34・35区, XIII層上面で検出された。
切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は不定形方形で、長軸3.83m、短軸2.90mとやや大型のものである。検出面からの深さは0.15mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層で取まり、床面として意識したものと思われるが、住居中央から北側部分には2.8m×2.5m程の範囲で硬化面の広がり認められた。住居中央部東壁端からは土坑が検出され、住

竪穴住居跡10号



- 1 茶褐色+黄橙色バミス
- 2 暗茶褐色+黄橙色バミス

0 (1:40) 2m

第47図 竪穴住居跡9号・竪穴住居跡10号

居に付帯するものと考えられる。土坑の規模は0.8m×0.76mの円形状で、埋土からは炭化物が認められた。その他遺構内からは複数のピットが検出されたが、形状が不安定で位置も不規則なことから、樹根と判断した。

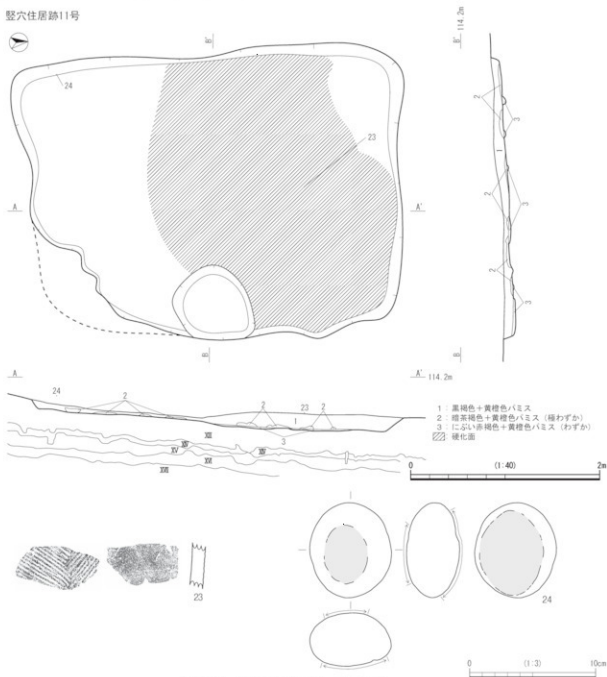
埋土 埋土は3つに分けられる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土で、Ⅻ層に類似する。埋土2は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを極わずかに含む土で、Ⅹ層に類似する。埋土3は、にぶい赤褐色の土(ⅩⅣ層)でわずかに黄橙色バミスを含む土である。埋土3は、上面が硬化しており、貼床の可能性も考えられる。

出土遺物 埋土中から出土した遺物のうち2点を図化した。

た。23(第48図)は、胴部である。外面に、綾杉状の貝殻条痕文を施し、内面にはナデをおこなう。また、図化していない他の土器片は、2点が底部、2点が胴部である。底部2点は、小破片だったり、剥落が激しかったりして、施文等が不明である。2点の胴部には、貝殻条痕文が確認できる。24(第48図)は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており側面にススが附着する。

土器分類 23や他の胴部片は、Ⅳ類に該当する。

竪穴住居跡11号



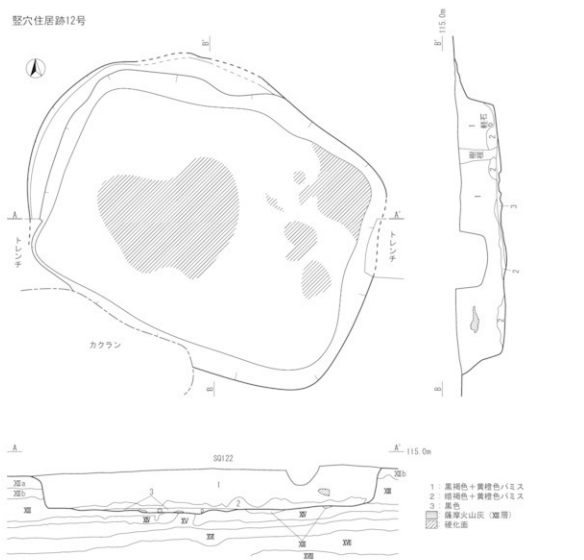
第48図 竪穴住居跡11号・出土遺物

竪穴住居跡12号 (SH12 : 第49図)

検出状況 B・C-25・26区, XI層中で検出された。
切り合い 住居中央部東側に集石遺構122号 (SQ122) が存在する。SH12の埋土を掘り込んでいることから、住居の埋没後に形成されたと考えられる。

形状・規模 平面形状は方形で、長軸3.74m、短軸3.03mとやや大型のものである。検出面からの深さは0.40mである。掘り方は一部XIV層に達しているものの、基本的にはXIII(薩摩火山灰)層で収まり、床面として意

識したものと思われる。住居中央の西側部分には1.38m×1.06m程の範囲で硬化面の広がり認められた。
埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、暗褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土3は、黒色の土に黄橙色バミスを含まない土である。埋土3は、上面が硬化しており、貼床の可能性も考えられる。
出土遺物 軽石が出土しているが、加工痕等は確認できなかった。



第49図 竪穴住居跡12号

竪穴住居跡13号 (SH13：第50図)

検出状況 C-27区, XII層上面で検出された。当初は、土坑を有する竪穴式住居跡として調査を進めた。

切り合い 土坑と思われていた壁面を精査したところ、連穴土坑21号 (SV21) と切り合っていることが確認された。SV21がSH13の硬化面を切っていることから、連穴土坑が後から作られたと判断した。

形状・規模 平面形状は横長で、長軸3.30m、短軸2.11mである。検出面からの深さは0.35mである。掘り方はXV層に達している。住居中央部周辺には1.85m×1.35m程の範囲で硬化面の広がりが見られた。

埋土 埋土は5つに分かれる。埋土1・埋土2は、極暗褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バ

ミスの包含量 (埋土1>埋土2) の違い等で分層した。また埋土2には、薩摩火山灰も含まれる。埋土3は、暗褐色の土に極わずかに黄橙色バミスと薩摩火山灰を含む土である。埋土4は、黒褐色の土に極わずかに黄橙色バミスを含む土である。埋土5は、黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。

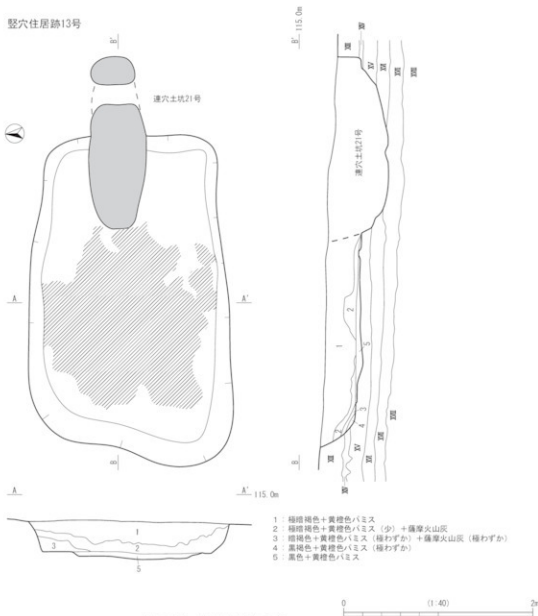
出土遺物 埋土中から出土した遺物は、いずれも確であった。

竪穴住居跡14号 (SH14：第51図)

検出状況 F-45区, XII層中で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は横長で、長軸2.63m、短軸1.80mである。検出面からの深さは0.43mである。掘り



第50図 竪穴住居跡13号

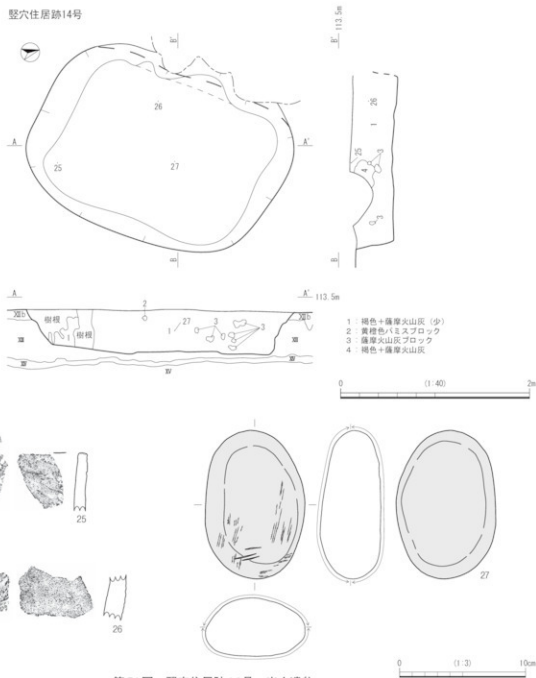
方はXIII（薩摩火山灰）層内で取まっており、床面として意識したものと思われる。B-B'の断面に見られる凹み部分は落ち込みで、北西壁側は樹根により擾乱を受けている。

埋土 埋土は4つに分かれる。埋土1・埋土4は、褐色の土である。黄褐色パミスは含まず、薩摩火山灰の包含量（埋土1<埋土4）の違い等で分層した。埋土2は、黄褐色のパミスブロックである。埋土3は、薩摩火山灰のブロックである。

出土遺物 埋土中から6点の遺物が出土した。土器片5点、石器1点で、うち3点を図化した。25（第51図）

は、外傾する口縁部である。口縁部外面に、斜位貝殻刺突文を、その下位には斜位貝殻条痕文を施す。ほぼ平坦な口唇部には、2つの刺突を一単位とする刺突文を施す。内面には、ナデをおこなう。26（第51図）は、胴部である。縦糸状の貝殻条痕文を施し、内面にはナデをおこなう。図化しなかった土器片3点は、いずれも胴部で、貝殻条痕文を施す。27（第51図）は安山岩製の磨石・敲石である。扁平な円縁の片面を磨面に使用している。

土器分類 25・26・他3点は、いずれもIV類に該当する。



第51図 竪穴住居跡14号・出土遺物

竪穴住居跡15号 (SH15：第52図)

検出状況 D・E-35区, XII層中で検出されたが、北側半分についてはXIII層での検出である。

切り合い 切り合いはない。

形状・規模 検出が遅く全形は不明である。現状の長軸3.04m、短軸2.40m、検出面からの深さは0.35mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層内で取っており、床面として意識したものと思われる。

埋土 埋土は、3つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、いずれも黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1=埋土2<埋土3)や粘性の強さ(埋土1=埋土2<埋土3)の違いで分層した。また、埋土3には炭化物が極少量含まれる。

出土遺物 埋土中から出土した遺物のうち1点を図化した。28(第52図)は安山岩製の磨石・敲石類である。下半分を欠損する。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。

図化はしていないが、縦杵状の貝殻条痕文を施す胴部1点も出土している。

土器分類 胴部片は、IV類に該当する。

竪穴住居跡16号 (SH16：第53図)

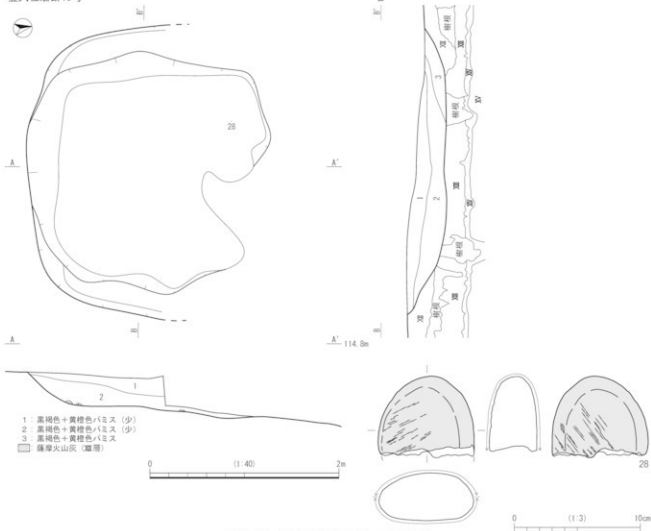
検出状況 L-56区, 先行トレンチ掘り下げ中にXIII層で住居の一部を検出した。先行トレンチを基に住居の広がりを確認したため、トレンチ以外の部分はXI層中で検出することができた。

切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は方形で、長軸2.50m、短軸2.21mである。検出面からの深さは0.55mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層内で取っており、床面として意識したものと思われる。

埋土 埋土は6つに分けられる。埋土1・埋土2・埋土5は、いずれも黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰を含む土である。黄橙色バミス(埋土1=埋土2>

竪穴住居跡15号



第52図 竪穴住居跡15号・出土遺物

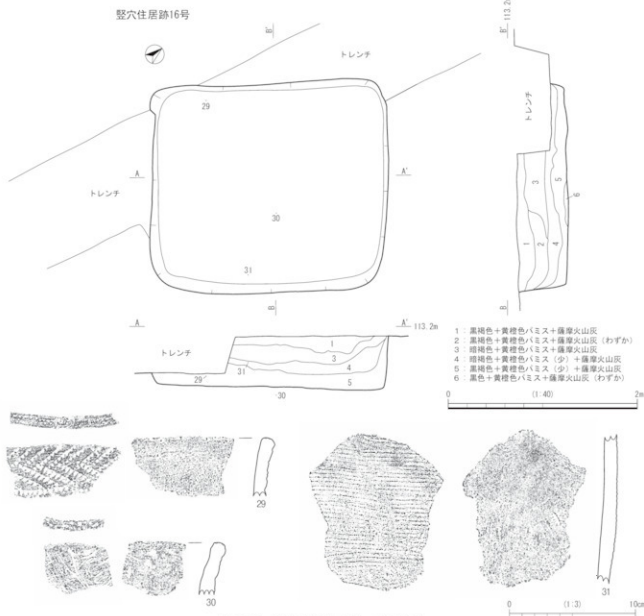
埋土5)と薩摩火山灰(埋土2<埋土1=埋土5)の包含量の違い等で分層した。埋土3・埋土4は、ともに暗褐色の土に黄褐色バミスと薩摩火山灰を含む土である。黄褐色バミスの包含量(埋土3>埋土4)の違い等で分層した。埋土6は、黒色の土に黄褐色バミスと薩摩火山灰をわずかに含む土である。

出土遺物 埋土中から14点の遺物が出土した。いずれも土器片である。そのうち3点を図化した。29(第53図)は、外反する口縁部である。口縁部外面には、羽状の貝殻刺突文が、その下位には横位刺突文を施す。羽状の刺突は、右上がり先で、右下がりをその後ろに施文する。また、横位刺突文は、右下がりの刺突文の後に施文されている。やや平坦な口唇部には、貝殻刺突を施す。内面には、ナデをおこなう。30(第53図)も、外反する

口縁部である。口縁部上位には、斜位刺突文や、ランダムな条痕を施文するが、施文具は不明である。やや丸みを帯びた口唇部にも工具不明の刺突文を施す。内面の整形は、多少雑である。29とは、同一個体とはならない。31(第53図)は、やや膨らみを帯びた胴部である。外面に、横位貝殻条痕文を施す。内面には、ナデヤス跡が確認できる。図化しなかった土器片の1点は、底部付近の胴部と思われる。外面は無文であるが、胎土や内面の調整等から30と同一個体と思われる。

また、図化しなかった土器片1点は口縁部で、29と同一個体と思われる。包含層遺物と接合した。

土器分類 29・30はいずれもⅣ類に、31はⅠ～Ⅲ類系に該当する。



- 1: 黒褐色+黄褐色バミス+薩摩火山灰
- 2: 黒褐色+黄褐色バミス+薩摩火山灰(わずか)
- 3: 暗褐色+黄褐色バミス+薩摩火山灰
- 4: 暗褐色+黄褐色バミス(少)+薩摩火山灰
- 5: 黒褐色+黄褐色バミス(少)+薩摩火山灰
- 6: 黒色+黄褐色バミス+薩摩火山灰(わずか)

第53図 竪穴住居跡16号・出土遺物

竪穴住居跡17号 (SH17: 第54図)

検出状況 H-34・35区, XIII層上面で検出した。この周辺の調査区の包含層中から出土する遺物は点数のみで、遺物の出土状況からは竪穴住居跡等の遺構の検出は全く予想されなかった。

切り合い 切り合いはない。なお、SH17を中心とする調査区内からは数基の土坑状のシミ痕が検出されたが、半蔵を行った結果すべて樹根と判断した。

形状・規模 平面形状は方形で、長軸1.71m、短軸1.44mと小型のものである。検出面からの深さは0.08mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層内で取まっており、床面として意識したものと思われる。

埋土 埋土は2つに分けられる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰を含む土でXI層に類似する。埋土2は、にぶい褐色の土に薩摩火山灰を含む土で、黄橙色バミスは含まない土でXIII層に類似する。

出土遺物 埋土中から1点の遺物が出土し図化した。32(第54図)は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕跡が認められる。特に左上側面は欠損後も敲打面として使用している。

竪穴住居跡18号 (SH18: 第55図)

検出状況 M-56・57区、先行トレンチ掘り下げ中にXIII層上面で一部を検出した。当初は56区までが調査範囲だったが、遺構が調査区外に延びることが判明したため、範囲を拡張し完掘を行った。先行トレンチを頼りに住居の広がりを確認したため、トレンチ以外の部分はXI層中で検出することができた。

切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は方形で、長軸2.97m、短軸

2.20mと比較的大型である。検出面からの深さも0.65mと深い。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層内で取まっており、床面として意識したものと思われる。

埋土 埋土は5つに分けられる。埋土1は、黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2・埋土3は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土2<埋土3)の違いで分層した。埋土4・埋土5は、暗褐色の土に薩摩火山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量(埋土4<埋土5)の違いや、埋土5には黄橙色バミスを含まないことから分層した。埋土1〜3にも薩摩火山灰は含まれる。

出土遺物 埋土中から出土した遺物2点は、礫であった。

竪穴住居跡19号 (SH19: 第55図)

検出状況 N-56区、先行トレンチ掘り下げ中にXIII層上面で一部を検出した。先行トレンチを頼りに住居の広がりを確認したため、トレンチ以外の部分ではXI層中で検出することができた。北側については調査区外(路線外)へ延びる。

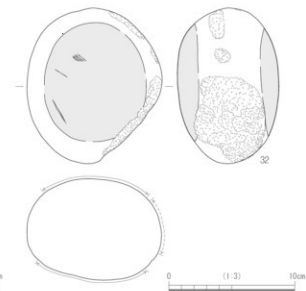
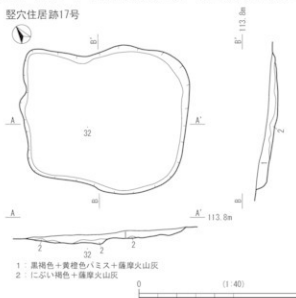
切り合い 切り合いはない。

形状・規模 平面形状は不明である。現状の長軸1.85m、短軸1.55m、検出面からの深さは0.42mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層内上面で取まっており、床面として意識したものと思われる。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違いで分層した。埋土3は、暗褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰をわずかに含む土である。

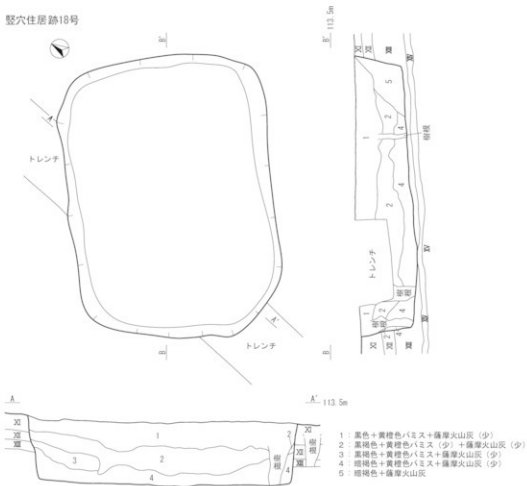
出土遺物 遺物は出土しなかった。

竪穴住居跡17号

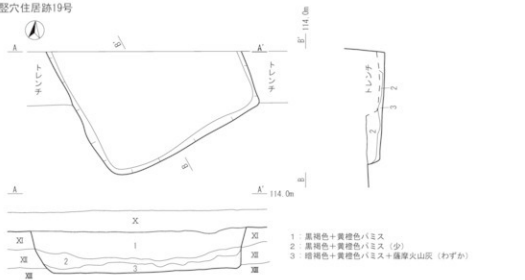


第54図 竪穴住居跡17号・出土遺物

竪穴住居跡18号



竪穴住居跡19号



第55図 竪穴住居跡18号・竪穴住居跡19号

竪穴住居跡20号 (SH20：第56図)

検出状況 M-57区, XIII層上面で検出した。

切り合い 切り合いはない。

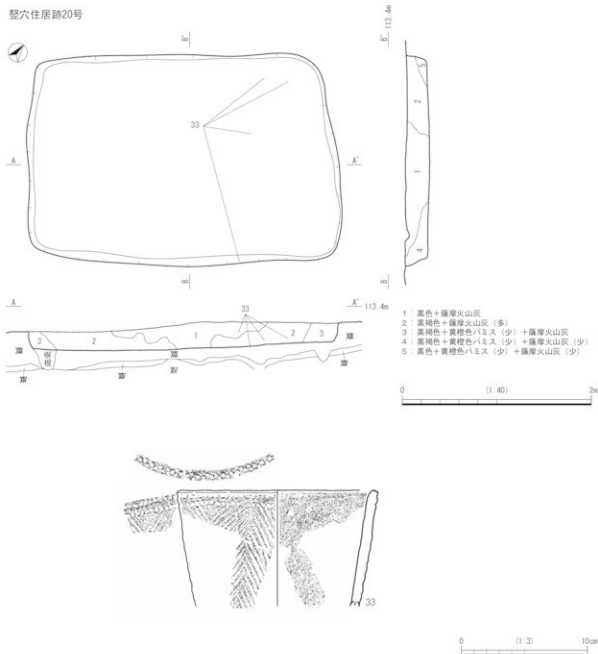
形状・規模 平面形状は横長で、長軸3.28m、短軸2.23mと比較的大型のものである。検出面からの深さは0.28mである。掘り方はXIII(薩摩火山灰)層内で取っており、床面として意識したものと思われる。

埋土 埋土は5つに分かれる。埋土1・埋土5は、ともに黒色の土に薩摩火山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量(埋土1>埋土5)の違い等で分層した。埋土2・埋土3・埋土4は、いずれも黒褐色の土に薩摩火

山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量(埋土2>埋土3>埋土4)の違い等で分層した。また、住居埋設過程の初期段階である三角形堆積は、黄褐色パミスを少量含むXII層に類似する。

出土遺物 埋土中から5点の遺物が出土した。いずれも土器片で、口縁部3点、胴部1点が接合し図化した。33(第56図)は、外傾する口縁部である。口縁部外面には、くり抜くような横位刺突文を2条、直下に綾杉状の条痕文を施す。口唇部には、刺突文を施す。内面はていねいなナデで、やや光沢を帯びている。

土器分類 33は、IV類に該当する。



第56図 竪穴住居跡20号・出土遺物

竪穴住居跡21号 (SH21 : 22図)

検出状況 H・I - 49区, XII層上面で検出した。

切り合い 切り合いはない。

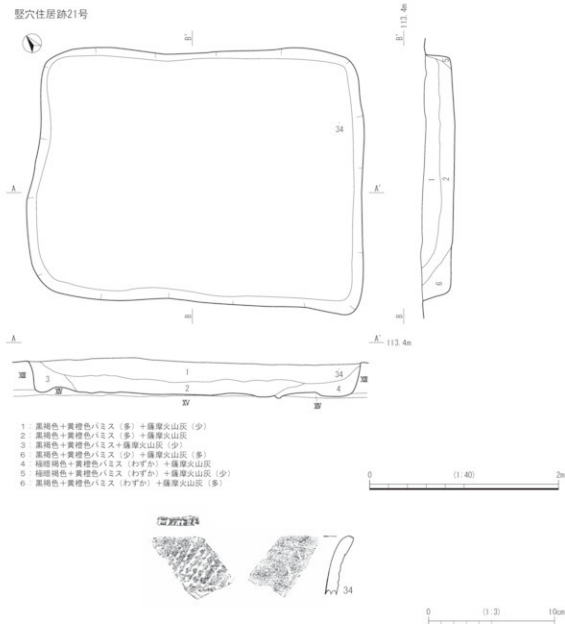
形状・規模 平面形状は方形で、長軸3.54m、短軸2.62mと比較的大型のものである。検出面からの深さは0.35mである。掘り方はXIV層直上まで及んでいるが、埋土や完掘後の断り切りでは貼床等の痕跡は確認されなかった。

埋土 埋土は6つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3・埋土6は、いずれも黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰を含む土である。黄橙色バミス(埋土1=埋土2>埋土3>埋土6)と薩摩火山灰(埋土1=埋土3<埋土2<埋土6)の包含量の違い等で分層した。埋土4・埋土5は、ともに極暗褐色の土にわずかに黄橙色バミス

と薩摩火山灰を含む土である。薩摩火山灰の包含量(埋土4>埋土5)の違い等で分層した。また、住居埋設過程の初期段階である三角形堆積は、XII層に類似する。その後住居中央部を中心に堆積する埋土1・埋土2は、XI層に類似する。

出土遺物 埋土中から3点の遺物が出土し、いずれも土器片であった。そのうち1点を図化した。34は、外反する口縁部である。口縁部外面には、斜位貝殻刺突文を、その下位に横位刺突文を施す。やや膨らみを帯びた口唇部には1~2mm程度のキザミを施す。内面にはナデをおこなう。図化しなかった2点は胴部で、ともに綾杉状の条痕文を施す。

土器分類 34・他2点は、いずれもIV類に該当する。



第57図 竪穴住居跡21号・出土遺物

第8表 竪穴住居跡一覧表

遺構名	検出区	検出層	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	長軸方向	検出面積 (㎡)	床面積 (㎡)	柱穴	炉跡	遺物	備考
			平面形状 (形状値)				壁面傾斜値					
SH1	B-12・13	XIII	218	188	0.14	東/西	4.10	3.92	—	—	○	SV1と重複
			方形 (0.86)				—					
SH2	B-13	XIII	197	176	0.30	東/西	3.47	2.64	—	—	○	科学分析
			不定形方形 (0.89)				0.76					
SH3	B-13・14	XII	253	236	0.37	東/西	5.59	5.37	—	—	○	SV9とSK54と重複
			方形 (0.93)				0.96					
SH4	A-17	XIII	259	214	0.38	北/南	5.54	5.07	—	—	○	科学分析
			方形 (0.83)				0.92					
SH5	F-23	XII	305	263	0.48	北西/南東	8.02	6.20	—	—	○	
			不定形方形 (0.86)				0.77					
SH6	E-23	XII	210	188	0.40	東/西	3.95	2.75	—	—	—	
			方形 (0.93)				0.70					
SH7	E-23・24	XII	300	280	0.47	北東/南西	8.40	6.20	—	—	○	
			方形 (0.93)				0.74					
SH8	G-23	XII	—	—	0.55 (壁) 0.32 (平)	(北東/南西)	—	—	—	—	○	調査区外へ
			—				—					
SH9	G-24	XII	—	—	0.55 (壁) 0.40 (平)	(東/西)	—	—	—	—	—	調査区外へ
			—				—					
SH10	C-19	XII	204	177	0.20	東/西	3.61	2.99	—	—	—	
			方形 (0.87)				0.83					
SH11	E-34・35	XIII	383	290	0.15	北/南	11.10	10.38	—	—	○	
			不定形方形 (0.75)				—					
SH12	B-C-25-26	XII	374	303	0.40	東/西	11.33	8.24	—	—	—	
			方形 (0.81)				0.73					
SH13	C-27	XIII	330	211	0.35	東/西	6.96	5.16	—	—	—	SV24と重複
			横長 (0.64)				0.74					
SH14	F-45	XII	263	180	0.43	北東/南西	4.73	3.16	—	—	○	
			横長 (0.68)				0.67					
SH15	D-E-35	XII	—	—	0.35	(東/西)	—	—	—	—	○	
			—				—					
SH16	L-56	XI	250	221	0.55	北東/南西	5.53	4.90	—	—	○	
			方形 (0.88)				0.89					
SH17	H-34・35	XIII	171	144	0.08	北東/南西	2.46	2.17	—	—	○	
			方形 (0.84)				—					
SH18	M-56-57	XI	297	220	0.65 (壁) 0.28 (平)	北西/南東	6.53	5.35	—	—	—	
			方形 (0.74)				0.82					
SH19	N-56	XI	—	—	0.42	(北西/南東)	—	—	—	—	—	調査区外へ
			—				—					
SH20	M-57	XIII	328	223	0.28	北東/南西	7.31	6.59	—	—	○	
			横長 (0.68)				0.90					
SH21	H・I-49	XIII	354	262	0.35	北西/南東	9.27	8.43	—	—	○	
			方形 (0.74)				0.91					

(2) 落とし穴 (略記号：ST)

落とし穴は、平成22年度の調査で3基、平成23年度の調査で5基、平成24年度の調査で1基の計9基が検出された。

本報告書では、下記に示すように落とし穴の各部分に名称を付し、規模を計測した。

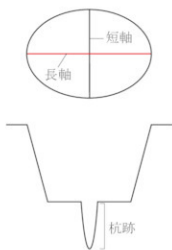
長 軸：検出面で、落とし穴の中心を通り、その落とし穴の広がりが長い方の長さ。

短 軸：長軸の真ん中を通り、長軸に対して垂直に広がる長さ。

深 さ：長軸と短軸の交点から底面までの長さ。

杭 跡：底面にある小ピットをさす。

杭跡の深さ：底面から杭跡の最深部までの長さ。



第58図 落とし穴の各部の名称

検出状況 落とし穴9基は、全て他遺構と重複せず検出された。Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層で検出されたものはない。

第9表 落とし穴の検出層

検出層	基 数	杭跡をもつ基数
Ⅻ層	1	0
ⅩⅢ層	8	7

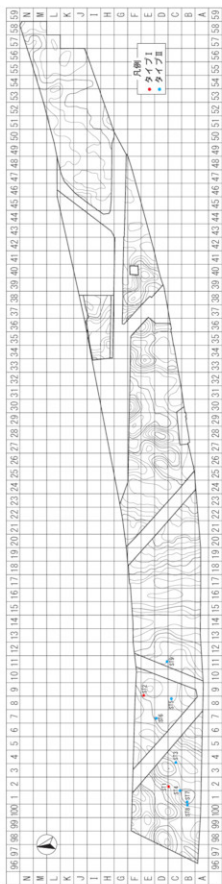
形状・規模 全形を把握できた9基のうち、落とし穴の検出面の形状を把握するため形状値(短軸÷長軸)を求め、以下のような定義を設定した。

横 長：形状値が、0.7未満で、長軸に対して左右に広がる形。

不定形横長：形状が整っていないと判断した横長。

方 形：形状値が、0.7～1で方形に近いもの。

不定形円形：形状が整っていないと判断した円形。



第59図 落とし穴タイプ別分布図

第10表 落とし穴の検出面の形状

形状	基数	形状	基数
横長	3基	方形	1基
不定形横長	3基	不定形円形	2基

落とし穴の規模を把握する基準として、断面形状値(長軸×深さ)を求め、タイプ別に分類した。

タイプ 形態分類のことである。

タイプⅠ：主深値が、1.5以上のもの

タイプⅡ：主深値が、1.5未満のもの

第11表 落とし穴のタイプ

タイプ	基数	杭跡をもつ基数
Ⅰ	2	0
Ⅱ	7	7

タイプⅠのものは、ST 1・ST 2の2基で、杭跡をもたず、検出面の形状は不定形円形である。タイプⅡのものは、ST 3～ST 9の7基で、全てが杭跡をもち、検出面の形状に不定形円形はない。タイプⅠとタイプⅡは、断面形状や杭跡の有無に違いがある。タイプⅠは落とし穴としての機能を果たしていたのか、明確ではないが、落とし穴としての機能差(捉える獲物の違いなど)と考

え、ここでは落とし穴とした。

分布 落とし穴は、やや帯状に、11グリッドから西側に全9基が存在する。また、5グリッドを境に西側に5基、東側に4基と群をなし、且つそれぞれの群にタイプⅠが1基ずつ存在する。

各落とし穴 本遺跡で検出された落とし穴をタイプ別に報告する。

タイプⅠ

落とし穴1号 (ST 1：第60図)

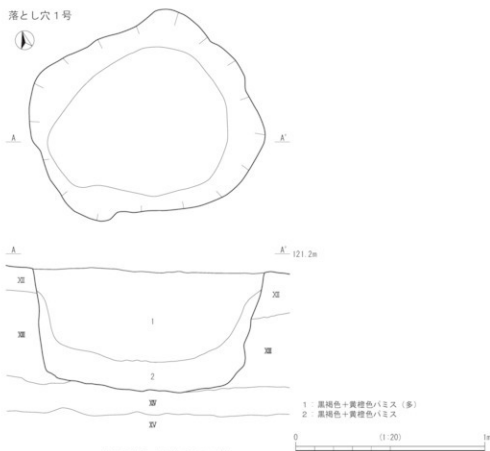
検出状況 C-2区、Ⅺ層で検出された。

形状 平面形状は不定形円形で、杭跡は確認されていない。底面はⅩV層まで達する。

規模 平面形は長軸1.22m、短軸1.01m、底面の長軸0.94m、短軸0.76m、検出面からの深さ0.62mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミス(埋土1>埋土2)を含む土である。また埋土2は、埋土1より黄橙色バミスの粒子がやや大きめである。

出土遺物 遺物の出土は見られない。



第60図 落とし穴1号

落とし穴2号 (ST2 : 第61図)

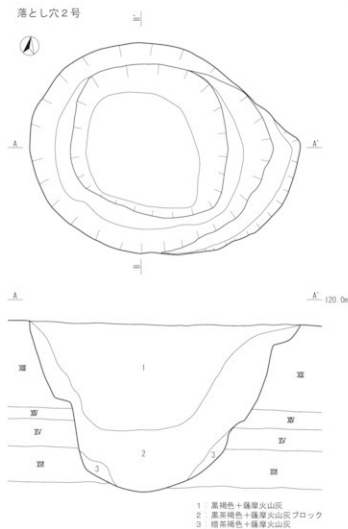
検出状況 E-8・9区, XIII層で検出された。

形状 平面形状は不定形円形で、南側中に段を有する。杭跡は確認されていない。

規模 平面形は長軸1.43m、短軸1.10mで、底面の長軸0.58m、短軸0.58m、検出面からの深さ0.86mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に薩摩火山灰を含む土である。埋土2は、黒茶褐色の土に薩摩火山灰ブロックを含む土である。埋土3は、暗茶褐色の土に薩摩火山灰を含む土である。他の落とし穴とは、埋土状況が異質である。

出土遺物 遺物の出土は見られない。



タイプII

落とし穴3号 (ST3 : 第61図)

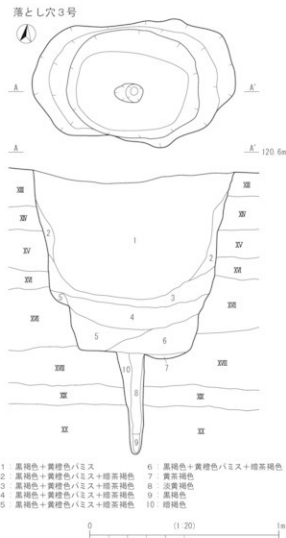
検出状況 C-4区, XIII層で検出された。

形状 平面形状は不定形横長で、底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規模 平面形は長軸1.07m、短軸0.62mで、底面の長軸0.58m、短軸0.40m、検出面からの深さ0.90mである。杭跡の深さは0.53mである。

埋土 埋土は10に分かれる。埋土1～埋土6は、いずれも黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量は、埋土1>埋土3>埋土2>埋土6=埋土5>埋土4となる。また、埋土2～埋土6には暗茶褐色の土(埋土2～埋土5>埋土6)も含まれる。埋土7は、黄茶褐色の土である。埋土8は、淡黄褐色の土で硬質である。埋土9は、黒褐色の土で砂質である。埋土10は、暗褐色の土で砂質である。

出土遺物 遺物の出土は見られない。



第61図 落とし穴2号・落とし穴3号

落とし穴4号 (ST 4 : 第62図)

検出状況 C-2区, XIII層で検出された。

形状 平面形状は不定形横長で、底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

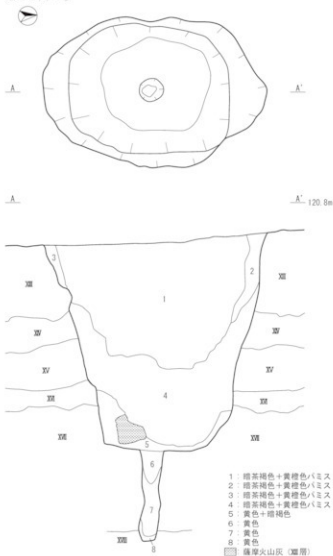
規模 平面形は長軸1.18m、短軸0.77mで、底面は長軸0.54m、短軸0.48m、検出面からの深さ1.10mである。杭跡の深さは0.47mである。

埋土 埋土は8つに分かれる。埋土1～埋土4は、いずれも暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

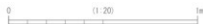
色調の明るさ(埋土1=埋土2<埋土3=埋土4)や黄橙色バミスの包含量(埋土3<埋土4<埋土2<埋土1)の違い等で分層した。埋土5～埋土8は、いずれも黄色の土である。包含物や質感の違い(埋土5:暗褐色の土が混入、埋土6:やや硬め、埋土7:粒子が小さく砂質、粒子が極小で軟質且つ粘質)等で分層した。

出土遺物 遺物の出土は見られない。

落とし穴4号



第62図 落とし穴4号



落とし穴5号 (ST5 : 第63図)

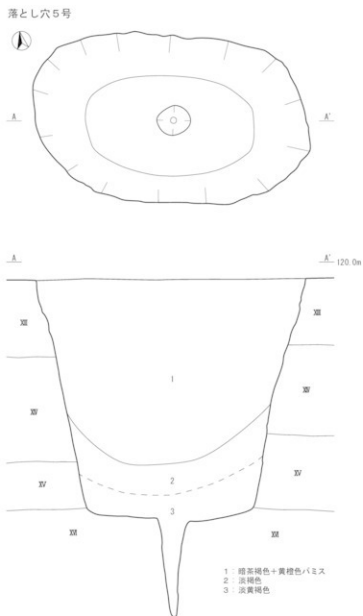
検出状況 C-8区, XIII層で検出された。

形状 平面形状は横長で、底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規模 平面形は長軸1.44m, 短軸0.88mで、底部の長軸0.88m, 短軸0.52m, 検出面からの深さ1.25mである。杭跡の深さは0.55mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄褐色バミスを含む土である。埋土2は、淡褐色でやや柔らかい土である。埋土3は、淡黄褐色の土で杭跡には、砂質が強い土が多く含まれている。

出土遺物 遺物の出土は見られない。



第63図 落とし穴5号

落とし穴6号 (ST 6 : 第64図)

検出状況 D-7区, XIII層で検出された。

形状 平面形状は方形で、底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規模 平面形は長軸0.94m, 短軸0.69mで、底面は長軸0.50, 短軸0.30m, 検出面からの深さ1.21mである。杭跡の深さは0.36mである。

出土遺物 遺物の出土は見られない。

落とし穴7号 (ST 7 : 第64図)

検出状況 B-1区, XIII層で検出された。

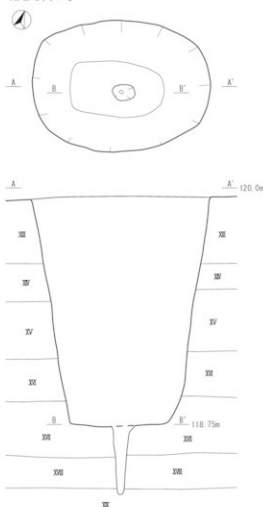
形状 平面形状は横長で、底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規模 平面形は長軸1.02m, 短軸0.57mで、底面の

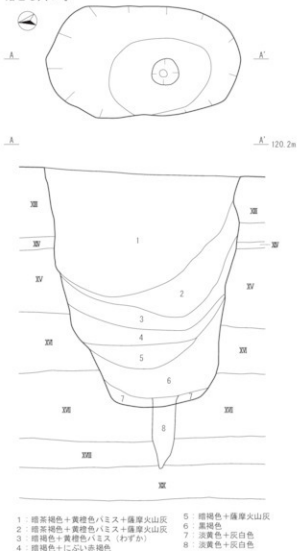
長軸0.50m, 短軸0.38m, 検出面からの深さ1.22mである。杭跡の深さは0.37mである。

埋土 埋土は8つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に黄褐色パミスと薩摩火山灰を含む土である。色調の明るさの違い(埋土1>埋土2)で分層した。埋土3・埋土4・埋土5は、いずれも暗褐色の土である。包含物(埋土3:わずかな黄褐色パミス, 埋土4:にぶい赤褐色の土, 埋土5:薩摩火山灰)の違い等で分層した。埋土6は、黒褐色の土で、他の包含物はほとんど含まれない。埋土7・埋土8は、ともに淡黄色の土に灰白色の土を含む土である。灰白色の土の包含量(埋土7>埋土8)や砂質の強さ(埋土7<埋土8)で分層した。埋土8は、杭跡のみに確認された埋土である。出土遺物 遺物の出土は見られない。

落とし穴6号



落とし穴7号



- | | |
|----------------------|--------------|
| 1: 暗茶褐色+黄褐色パミス+薩摩火山灰 | 5: 暗褐色+薩摩火山灰 |
| 2: 暗茶褐色+黄褐色パミス+薩摩火山灰 | 6: 茶褐色 |
| 3: 暗褐色+黄褐色パミス (わずかな) | 7: 淡黄色+灰白色 |
| 4: 暗褐色+にぶい赤褐色 | 8: 淡黄色+灰白色 |

第64図 落とし穴6号・落とし穴7号



落とし穴8号 (ST8 : 第65図)

検出状況 B-100区, XII層で検出された。

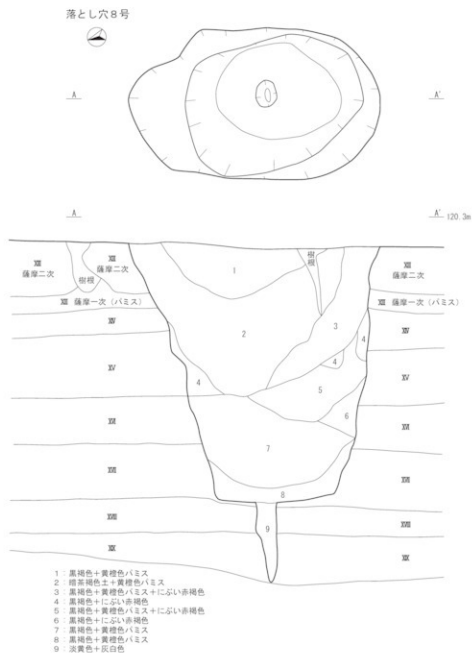
形状 平面形状は不定形横長で、底面のほぼ中央に杭跡をもつ。

規模 平面形は長軸1.33m、短軸0.79mで、底面の長軸0.66m、短軸0.50m、検出面からの深さ1.34mである。杭跡の深さは0.42mである。

埋土 埋土は9つに分かれる。埋土1・埋土3～埋土8は、いずれも黒褐色の土である。各層の黄橙色バミ

スの包含量は、埋土1＝埋土3＝埋土7>埋土5>埋土8となり、埋土4・埋土6には含まれない。また、にぶい赤褐色の土の混入量は、埋土4>埋土3>埋土5＝埋土6となり、埋土1・埋土7・埋土8には含まれない。埋土2は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土9は、淡黄色の土に灰白色の土が混ざり、やや粘性のある砂質で杭跡のみに確認された埋土である。

出土遺物 遺物の出土は見られない。



第65図 落とし穴8号

落とし穴9号 (ST9 : 第66図)

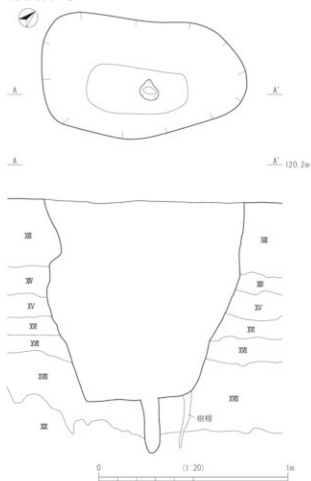
検出状況 D-11区, XIII層で検出された。

形状 平面形状は横長で、底面のはほぼ中央に杭跡をもつ。また、壁面や底面には工具痕が確認されている。

規模 平面形は長軸1.06m, 短軸0.62mで、底面の長軸0.54m, 短軸0.24m, 検出面からの深さ1.32mである。杭跡の深さは0.28mである。

出土遺物 遺物の出土は見られない。

落とし穴9号



第66図 落とし穴9号

第12表 落とし穴一覧表

遺構名	検出区	検出層	平面形状	検出面			底面		杭跡(数) (深さm)	断面形状値 (長軸×深さ)	タイプ	備考
				長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	長軸 (m)	短軸 (m)				
ST 1	C-2	XII	不定形円形	1.22	1.01	0.62	0.94	0.76	—	1.97	I	
ST 2	E-8・9	XIII	不定形円形	1.43	1.10	0.86	0.58	0.58	—	1.66	I	
ST 3	C-4	XIII	不定形横長	1.07	0.62	0.90	0.58	0.40	1つ (0.53)	1.19	II	
ST 4	C-2	XIII	不定形横長	1.18	0.77	1.10	0.54	0.48	1つ (0.47)	1.07	II	
ST 5	C-8	XIII	横長	1.44	0.88	1.25	0.88	0.52	1つ (0.55)	1.15	II	
ST 6	D-7	XIII	方形	0.94	0.69	1.21	0.50	0.30	1つ (0.36)	0.78	II	
ST 7	B-1	XIII	横長	1.02	0.57	1.22	0.50	0.38	1つ (0.37)	0.84	II	杭跡の深さは、見 通し
ST 8	B-100	XIII	不定形横長	1.33	0.79	1.34	0.66	0.50	1つ (0.42)	0.99	II	
ST 9	D-11	XIII	横長	1.06	0.62	1.32	0.54	0.24	1つ (0.28)	0.80	II	

(3) 連穴土坑 (略記号: SV)

本遺跡では、2つの土坑が地中のトンネルで繋がった土坑をセットで連穴土坑と称した。また、明確な地中のトンネルは見られないが、ブリッジが崩落したと考えられるものも連穴土坑とした。連穴土坑は、平成23年度の調査で13基、平成24年度の調査で5基、平成25年度の調査で4基、平成26年度の調査で18基の計40基が検出された。

本報告書では、下記に示すように連穴土坑の各部分に名称を付けている。

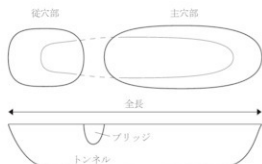
従穴部：連穴土坑の小さい方の土坑をいう。

主穴部：連穴土坑の大きな方の土坑をいう。

トンネル：小さな土坑と大きな土坑が地中で繋がっている空間部分をいう。

ブリッジ：トンネルの上にあたる部分をいう。

全長：ブリッジ部分を含む、主穴部外端から従穴部外端までの長さを表す。



第67図 連穴土坑の各部の名称①

また、従穴部・トンネル・主穴部の規模を計測するにあたり、次のような決まりを設定した。

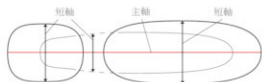
主軸：従穴部・ブリッジ・主穴部のほぼ中心を通り、全長・従穴部・主穴部それぞれの主軸の長さ。

従穴部位置：主軸に沿って、主穴部から従穴部方向をいう。

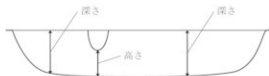
短軸：従穴部・トンネル・主穴部のそれぞれの主軸の真ん中で、主軸に対して垂直に交わり、各部の端までの長さ。

深さ：従穴部・主穴部それぞれの主軸と短軸が交わる点での、検出位置から底面までの長さ。

高さ：トンネルの主軸と短軸が交わる点から底面までの長さ。



第68図 連穴土坑の各部の名称②



第69図 連穴土坑の各部の名称③

また、次のような範囲を設定し、記号(A~D)を付け、一覧表(第19表~第21表)では、最深部にあたる位置のアルファベットに○を付した。さらに、底面の傾斜方向が分かるよう矢印等(→:右へ下る, ←:左へ下る, 一:ほぼ平坦)で示した。最深部の範囲や傾斜に関して、5cm未満の差は、平坦として取り扱っている。



第70図 連穴土坑の最深部位置の範囲

A：従穴部の範囲

B：ブリッジの範囲

C：主穴部のブリッジ側半分範囲

D：主穴部のブリッジ側でない半分範囲

最深部が不明なものは4基ある。最深部の位置する範囲は、以下ようになる。(色つけ部分が最深部)

第13表 連穴土坑の最深部位置

A	B	C	D	基数 (36基に対する割合)
	11			B : 11基 (31%)
	8	8		BC : 8基 (22%)
4	4	4		ABC : 4基 (11%)
4				A : 4基 (11%)
3	3			AB : 3基 (8%)
		2		C : 2基 (6%)
1	1	1	1	ABCD : 1基 (3%)
	1	1	1	BCD : 1基 (3%)
		1	1	CD : 1基 (3%)
			1	D : 1基 (3%)
12	28	17	4	←各最深部位置の基数

各範囲の底面の傾斜方向が分かるものは、36基ある。各範囲の傾斜方向の数をまとめたものを以下に示す。

第14表 連穴土坑の底面傾斜方向

範囲	方向	範囲	方向	範囲	方向	範囲	基数
A		B		C	←	D	26基
A	→	B		C		D	21基
A		B	←	C		D	17基
A		B	→	C		D	4基
A	←	B		C		D	4基
A		B		C	→	D	1基

主穴部(CD)へ向って傾斜するものは少なく、ブリッジ(B)へ向って傾斜するものが多い。

さらに、ブリッジの残存状況を、残存状況がよいものには○を、一部崩落がしているものには△を、崩落が著しいものには×を表に付している。

検出状況 単独で検出された連穴土坑は35基である。他の遺構と切り合って検出された連穴土坑は5基である。そのうち、連穴土坑1号・9号・21号の3基は、堅穴住居跡と重複して検出され、連穴土坑16号・17号の2基は、互いに重複して検出されている。連穴土坑の検出層は、XI層で3基、XIII層で37基、IX、X、XII層では検出されていない。

形状 従穴・主穴の形状について、以下のような定義を設定した。

縦長:(従穴部・主穴部のそれぞれの短軸)÷(従穴部・主穴部のそれぞれの主軸)が、0.7未満、もしくは1.3より大きいもので、主軸に対して上下に広がる形。

不定形縦長:形状が整っていないと判断した縦長。

横長:(従穴部・主穴部のそれぞれの短軸)÷(従穴部・主穴部のそれぞれの主軸)が、0.7未満、もしくは1.3より大きいもので、主軸に対して左右に広がる形。

不定形横長:形状が整っていないと判断した横長。

方形・円形:(従穴部・主穴部のそれぞれの短軸)÷(従穴部・主穴部のそれぞれの主軸)が、0.7～1.3のもの。

不定形方形:形状が整っていないと判断した方形。

不定形円形:形状が整っていないと判断した円形。

タイプ:形態分類のことである。

I類:縦長・不定形縦長

II類:横長・不定形横長

III類:方形・不定形方形・円形・不定形円形

従穴部・主穴部の形態分類は、以下のようになる。

第15表 連穴土坑の従穴部と主穴部の形状タイプ

	I類	II類	III類	不明
従穴部	17基	0基	20基	3基
主穴部	0基	36基	0基	4基

第16表 従穴部と主穴部の形状タイプ組み合わせ

従穴部	主穴部	計
I類	II類	16基
III類	II類	20基

従穴部と主穴部の組み合わせは、「III類(従穴部)+II類(主穴部)」が20基、「I類(従穴部)+II類(主穴部)」が16基である。

従穴部位置をまとめると、以下(第71図)のようになる。北から南西方向に位置するものが多い。

規模 全長を把握できた連穴土坑は37基である。検出層の違いがあることから一概にはいえないが、最大の



第71図 連穴土坑の主軸の方向

ものが連穴土坑20号(検出層: XIII層)の2.35m、最小のものが連穴土坑28号(検出層: XIII層)の1.45m、平均値が1.76mであった。1.5m台・1.7m台の連穴土坑が各9基で、それぞれ全体のおよそ25%を占める。

本遺跡の連穴土坑の従穴部・ブリッジ・主穴部の各主軸・各短軸の平均値を以下に示す。

第17表 従穴部・ブリッジ・主穴部の主軸・短軸の平均値

	主軸平均値(m)	短軸平均値(m)
従穴部	0.35	0.47
ブリッジ	0.16	0.33
主穴部	1.27	0.64

本報告書では、主穴部と従穴部の規模差を比較するため、「主従値」を提示した。主従値は、「(主穴部の主軸)÷(従穴部の主軸)×(主穴部の短軸)÷(従穴部の短軸)」で求めた。つまり、この値が大きい程、規模差が大きいということになる。

第18表 主従値

	主従値
平均	5.45
最大値	9.26 (S V 4)
最小値	2.41 (S V 23)

分布 調査区の中央部に境に、調査区の西側(調査区B・C)と東側(調査区F)に集中して広がる傾向が見られる。以下の点に着目して、連穴土坑の分布を示す。

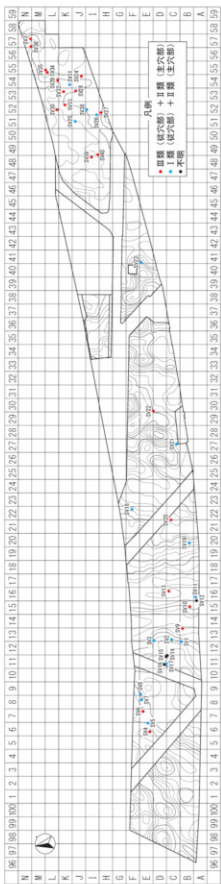
A タイプ別(第72図)

「III類(従穴部)+II類(主穴部)」のタイプは、赤(●)で、「I類(従穴部)+II類(主穴部)」のタイプは、青(●)で、不明は黒(●)で示している。

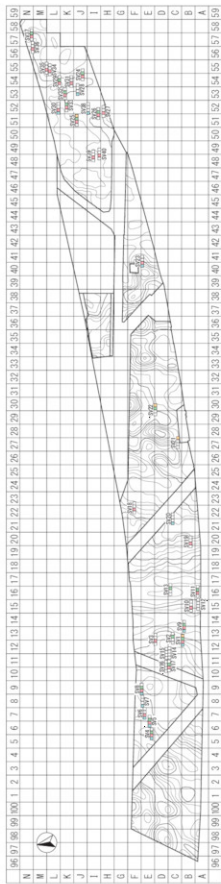
イ 最深部位置別(第73図)

連穴土坑の最深部位置(第13表)に付した色別に示している。

各連穴土坑 本遺跡で検出された連穴土坑を検出した順に報告する。



第72図 連穴土坑タイプ別分布図



第73図 最深部位置別分布図

連穴土坑1号 (SV 1 : 第74図)

検出状況 SV 1は、B-12・13区において、従穴部、ブリッジはXIII層上面で、主穴部の一部は、堅穴住居跡1号 (SH 1)の床面で検出された。SH 1の調査中から、従穴部が北側に確認されており、SH 1調査前に調査を行った。

切り合い SH 1と切り合い、SV 1は、SH 1の後に構築されている。

形状 従穴部の形状はI類に、主穴部の形状はII類に属し、「I+II」タイプになる。底面全体が最深部 (A B C D)で、本遺跡の中では、このSV 1のみがもつ底面形状である。従穴部は、底面から壁面をやや掘り込み、内傾しながら立ち上がった後、急傾斜になり一段有して再度急傾斜で開口する。主穴部は、壁面から急傾斜で立ち上がった後、SH 1の底面に達する。ブリッジ断面は、角が丸みを帯び、下部が鋭角となるホームベース状に近いが、従穴部の方へ鋭角に掘り込まれている。

規模 全長は1.58mと本遺跡の連穴土坑の中では、やや短めである。主従値は5.89で本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑2号 (SV 2 : 第74図)

検出状況 SV 2は、C-13区において、XIII層上面で検出された。また、検出時には、時期の新しいピットが主穴部に確認されていた。調査終了後に、主軸に合わせて断り割ったが、底面下に変化は見られなかった。

切り合い 切り合いは、ない。

形状 従穴部の形状はI類に、主穴部の形状はII類に属し、「I+II」タイプになる。最深部は、主穴部 (C)である。従穴部は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は、最深部位置から緩やかにスロープ状に立ち上がった後、壁面からラップ状に開口する。ブリッジ断面は、下部が幅狭となり丸みを帯びる縦長の四角形である。

規模 全長は1.81mで、本遺跡の連穴土坑のはほぼ平均的な長さである。主従値は2.54で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が2番目に小さい。

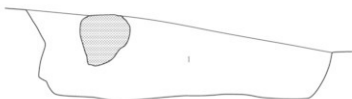
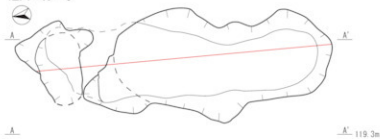
埋土 埋土は、3つに分かれる。埋土1は、

暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、ブリッジの主穴側上部にのみ堆積し、埋土1に薩摩火山灰 (XIII層) が混入している土である。埋土3は、新しい時期のピットに伴う埋土で、黒色の土である。

出土遺物 出土していない。

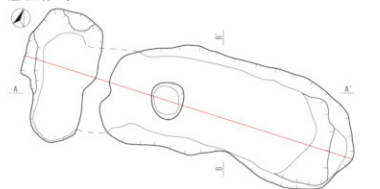
炭化物 炭化物は、トンネル付近で、小粒のものがわずかに確認されたが、採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑1号



1: 暗茶褐色+黄橙色バミス
 薩摩火山灰 (薄層)

連穴土坑2号



1: 暗茶褐色+黄橙色バミス
 2: 暗茶褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
 3: 黒色
 薩摩火山灰 (薄層)

0 (1:20) m

第74図 連穴土坑1号・連穴土坑2号

連穴土坑3号 (SV 3 : 第75図)

検出状況 SV 3は、D-13区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、最深部位置からやや緩やかに立ち上がった後、ほぼ垂直に開口する。主穴部は、最深部位置からへの字を描くような形状で、壁面ではほぼ垂直に立ち上がり、その後ラップ状に開口する。ブリッジは、縦長の長方形で構築時に近い形状で崩落したと思われる。

規模 全長は2.08mと本遺跡の連穴土坑の中では、3番目に長い。主径は5.77で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

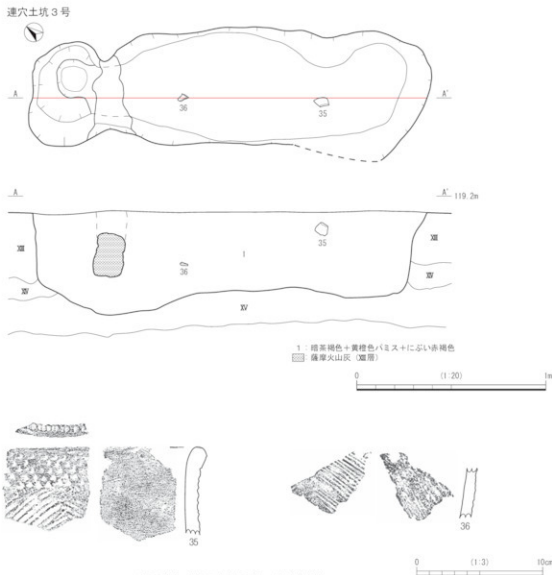
埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に黄橙色バミス

を含む土に、にぶい赤褐色粘質の土(XIV層)が混入している土である。

出土遺物 埋土中からは、土器片2点が出土し、2点とも図化した。35(第75図)は、口縁部片である。やや相反する口縁部外面には斜位貝殻刺突文を施し、その刺突文直下から綾形状の条痕文を施す。また、ふっくらと膨れた口唇部頂部に幅3~5mm程度のキザミを施す。内面は、ナデをおこなう。36は、外面に斜位貝殻刺突文を施す胴部で、内面は、ナデをおこなう。この2点は接合しなかったことや、条痕文の幅の違いから同一個体ではないと判断した。

土器分類 35・36は、ともにIV類に該当する。

炭化物 主穴部のブリッジ側底面から1cmほどの炭化物が出土し採取したが、科学分析等は行っていない。明確な焼土は確認されなかった。



第75図 連穴土坑3号・出土遺物

連穴土坑4号 (SV 4 : 第76図)

検出状況 SV 4は、E-6区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部～主穴部ブリッジ側(ABC)となる。従穴部は、底面からはほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は、最深部位置から水平に半分まで広がった後、ほぼ垂直に立ち上がり、その後段を有するようにスロープ状に開口する。トンネルの主軸は、本遺跡の連穴土坑の中では最大である。ブリッジ断面は、横長の長方形であるが、下部は主穴部から従穴部へとやや鋭角に掘り込まれている。

規模 全長は1.95mで、本遺跡の連穴土坑の中では、長めである。主従値は9.26と本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が最も大きい。従穴部と主穴部の規

模差や、トンネルの主軸の長さ、主穴部の底面からの立ち上がりの様子から、他の連穴土坑と様子が異なる。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、暗茶褐色の土に、黄褐色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄褐色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。

出土遺物 礫がブリッジに刺さるように出土したが、石器ではなかった。

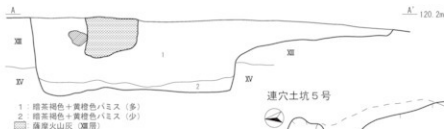
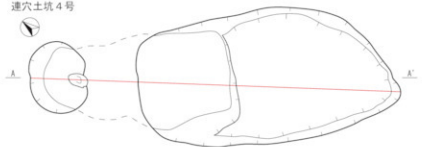
炭化物 埋土中に、極小の炭化物をわずかに確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑5号 (SV 5 : 第76図)

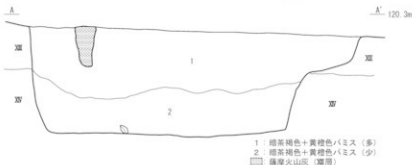
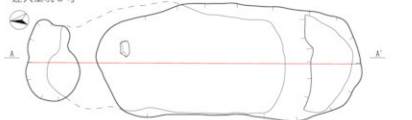
検出状況 SV 5は、E-6区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

連穴土坑4号



連穴土坑5号



第76図 連穴土坑4号・連穴土坑5号



形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部～主穴部ブリッジ部(ABC)となる。従穴部は、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は、最深部位置からほぼ水平に広がり、壁面でやや垂直気味に立ち上がった後、一段有るように緩やかになり、再度やや垂直気味に開口する。ブリッジ断面は、従穴部が握り込まれる舌状形である。

規模 全長は1.77mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は7.53で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が大きい。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に、黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。

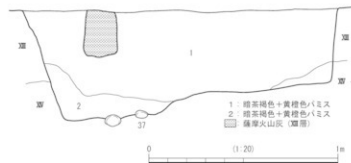
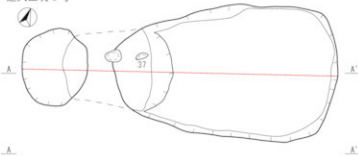
出土遺物 礫が底面で1点出土したが石器ではなかった。

炭化物 埋土中に、極小の炭化物をわずかに確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑6号(SV6:第77図)

検出状況 SV6は、E-7区において、XIII層上面で検出された。

連穴土坑6号



1: 暗茶褐色+黄橙色バミス
2: 暗茶褐色+黄橙色バミス
備厚火山灰(XIII層)

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部とブリッジ部(AB)である。従穴部は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。主穴部は、最深部位置から、やや緩やかに5cm程度立ち上がった後、一段有るように水平面が広がり、壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は、下部が若干幅広くなる縦長の台形状である。

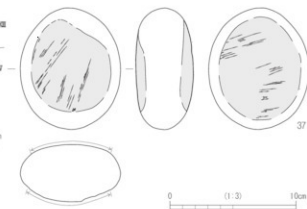
規模 全長は1.67mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は5.98で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は2つに分かれ、埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に、黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。

出土遺物 埋土中から、遺物が2点出土した。そのうち1点は石器1点で、もう1点は礫であった。石器を図化した。37(第77図)は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。

炭化物 炭化物は、従穴部底面及び主穴部底面で確認され、採取した。従穴部で採取した炭化物は、科学分析の結果から¹⁴C年代測定は8,149-7,966calBCを、主穴部で採取した炭化物の¹⁴C年代測定は8,010-7,781calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

A' 120 cm



第77図 連穴土坑6号・出土遺物

連穴土坑7号 (SV 7 : 第78図)

検出状況 SV 7は、E-8区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部(A)である。従穴部は、底面からやや垂直気味に立ち上がる。主穴部は、最深部位置からスロープ状に緩やかに立ち上がった後、壁面でやや膨らみをもちながら垂直気味に開口する。ブリッジ中央部は崩落しているが、南西側にやや残存していることから、推定ラインを破線で示した。

規模 全長は1.72mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は7.41で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土である。埋土1には、黄橙色バミスを含み、埋土2には、黄橙色バミスを含まないことから、分層した。

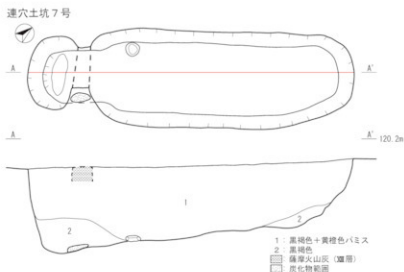
出土遺物 礫が底面で1点出土したが、石器ではなかった。

炭化物 ブリッジ下の底面付近で炭化物が多く確認され、採取した。採取した炭化物は、科学分析の結果から¹⁴C年代測定は8.235-7.963calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

2)や黄橙色バミスの量(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。

出土遺物 埋土中に流れ込むように礫が12点出土しているが、石器等は含まれていなかった。

炭化物 埋土中に、わずかな炭を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。



連穴土坑8号 (SV 8 : 第78図)

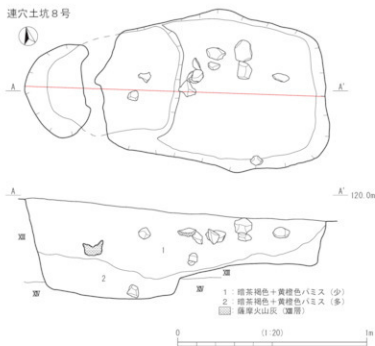
検出状況 SV 8は、E-9区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部~主穴部ブリッジ側(ABC)となる。従穴部は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。主穴部は、最深部位置から水平に広がった後、10cm程度垂直気味に立ち上がり、一段有して壁面でほぼ垂直に開口する。ブリッジは、崩落して埋土中にその痕跡の一部は確認できるが、形状は不明である。

規模 全長は1.59mと本遺跡の連穴土坑の中では、短めの長さである。主従値は6.94で、本遺跡の中では、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に、黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土



第78図 連穴土坑7号・連穴土坑8号

連穴土坑9号 (SV9 : 第79図)

検出状況 SV9は、B-13・14区において、従穴部、ブリッジはXIII層上面で、主穴部の一部は、堅穴住居跡3号(SH3)の床面で検出された。

切り合い SH3と切り合う。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部～主穴部ブリッジ側(ABC)となる。従穴部は、底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は、底面最深部から、スロープ状に立ち上がった後、一段有して、壁面ではほぼ垂直に開口する。ブリッジは、多少崩落しているが、構築時のまま崩落したと思われる。ブリッジ断面は、主穴部側が鋭角となる縦長の平行四辺形状であるが、主穴部側が一部掘り込まれている。

規模 全長は1.68mと本遺跡の連穴土坑の中では、ほぼ平均的な長さである。主従値は3.13で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が4番目に小さい。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に、黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。埋土3は、暗茶褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)の土が若干混入している土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑10号 (SV10 : 第79図)

検出状況 SV10は、B-15区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面から膨らみをもちながらやや急傾斜で立ち上がる。主穴部は、最深部からスロープ状に立ち上がった後、壁面ではほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は、従穴部側は、従穴部を左にしてくの字状に、主穴部側は垂直に掘り込まれ、下部が丸みを帯びる縦長状である。

規模 全長は1.56mと本遺跡の連穴土坑の中では、短めの長さである。主従値は3.32で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が小さい。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、

暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土で、埋土のほとんどを占める。埋土3は、黒色で粘性が強い土で、ブリッジの底面付近にのみ堆積する。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土で、埋土3の両端上部に薄く堆積している。

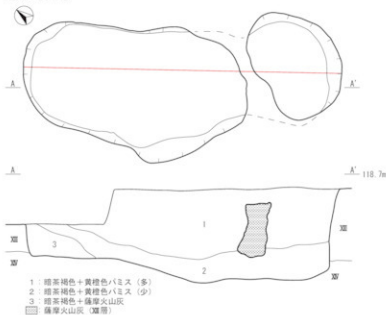
出土遺物 礫が6点出土したが、石器ではなかった。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

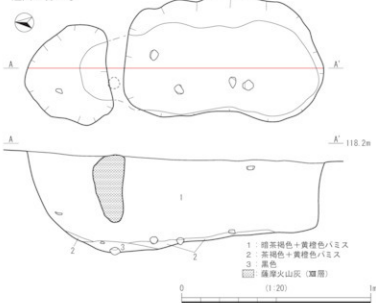
連穴土坑11号 (SV11 : 第80図)

検出状況 SV11は、A-16区において、XIII層上面で検出された。

連穴土坑9号



連穴土坑10号



第79図 連穴土坑9号・連穴土坑10号

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ側(BC)である。従穴部は、底面からはほぼ垂直気味に立ち上がった後、ラッパ状に立ち上がる。主穴部は、最深部位置からやや緩やかに立ち上がりながら一段有した後、壁面ではほぼ垂直に開口する。ブリッジは、多少崩落しているが、構築時のまま崩落したと思われる。ブリッジ断面は、縦長の四角形状である。

規模 全長は150mと本遺跡の連穴土坑の中では、2番目に短い長さである。主従値は3.47で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が小さい。

埋土 埋土は、3つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、いずれも暗茶褐色の土に黄褐色バミスを含む土である。黄褐色バミスの大きさ(埋土1<埋土2)や混入している土(埋土3)のみ、にぶい赤褐色の土(XIV層)の違いで分層した。

出土遺物 礫が3点出土しているが、石器ではなかった。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑12号(SV12:第80図)

検出状況 SV12は、A-15・16区において、XII層上面で検出された。検出時の平面形状から、連穴土坑と判断した。東側の一部は樹根の影響を受けている。

切り合い 切り合いはない。

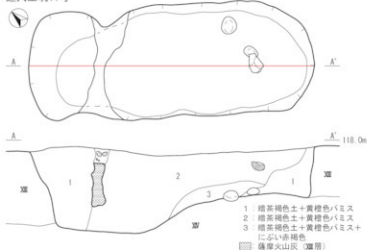
形状 従穴部・主穴部ともに形状は不明であることから、タイプは不明とした。最深部位置は、推定で従穴部(A)かブリッジ下(B)と思われるが、明確でないため一覧表には示していない。推定される従穴部は、底面から壁面を若干掘り込み、やや内傾しながら立ち上がった後、ラッパ状に開口する。推定される主穴部は、最深部からスロープ状に立ち上がった後、壁面でやや垂直気味に開口する。ブリッジは、完全に崩落し痕跡等も確認できなかった。

規模 全長は155mと本遺跡の連穴土坑の中では、5番目に短い長さである。主従値は不明である。

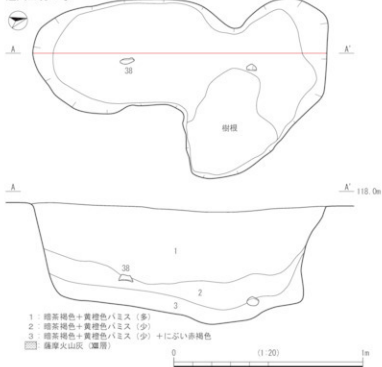
埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、ともに暗茶褐色の土に、黄褐色バミスを含む土である。埋土1と埋土2は、色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄褐色バミスの包含

量(埋土1)埋土2)の違い等で分層した。埋土3は、にぶい赤褐色の土(XIV層)が混入しており、黄褐色バミスの量も少ない土である。

連穴土坑11号



連穴土坑12号



- 1 暗茶褐色土+黄褐色バミス(多)
 - 2 暗茶褐色土+黄褐色バミス(少)
 - 3 暗茶褐色土+黄褐色バミス(少)+にぶい赤褐色
- 薩摩火山灰(XIV層)



第80図 連穴土坑11号・連穴土坑12号・出土遺物

出土遺物 埋土中から2点の遺物が出土し、土器が1点、礫が1点であった。土器1点を図化した。38（第80図）は、底部近くの胴部である。外面上位には、綾杉状に貝殻炭痕文を、その下部には横位貝殻炭痕文を施し、綾杉状の貝殻炭痕文を、その下部には横位貝殻炭痕文を施す。

土器分類 38は、IV類に該当する。

炭化物 主穴部の底面付近で木炭が確認され、採取した。採取した炭化物は、科学分析の結果から¹⁴C年代測定は8273-8170calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑13号 (SV13 : 第81図)

検出状況 SV13は、C-16区において、XIII層上面で検出された。当初は、楕円形状のシミを土坑と判断し調査を行った。半截を行ったところ底面に礫が確認された。これまでの調査から土坑の底面には礫がなく、連穴土坑の底面には礫が見られたことから、北西部上面の精査を

行った。その結果30cm程度の小ピットを検出し、埋土を掘り下げたところ、貫通したことから、小ピットを従穴部、当初の土坑を主穴部とした。

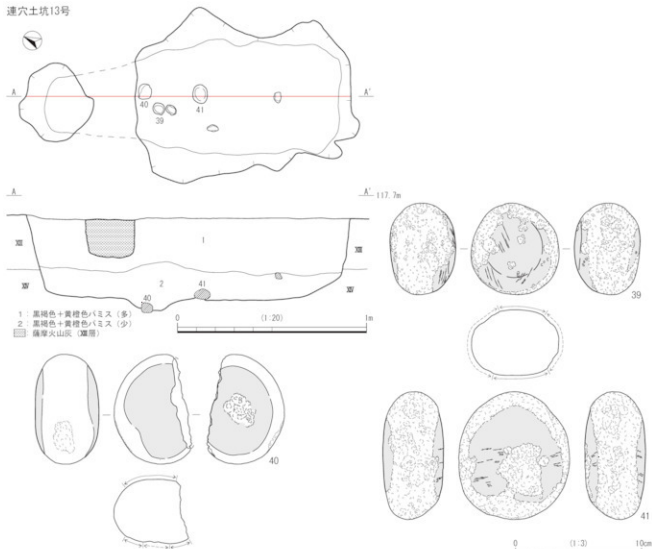
切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、主穴部ブリッジ部(C)である。従穴部は、底面から急傾斜で立ち上がる。主穴部は、最深部位置から緩やかに立ち上がった後、ほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は、四角形で上部と下部の幅差はほとんど見られない。

規模 全長は1.71mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主径値は6.49で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に、黄褐色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄褐色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分離した。

連穴土坑13号



第81図 連穴土坑13号・出土遺物

出土遺物 埋土中から6点の礫が出土した。そのうち3点は石器で、3点は礫であった。石器3点を図化した。39～41(第81図)は安山岩製の磨石・敲石類である。いずれも扁平な円礫の表裏両面を磨面や敲面に使用し、側面にも敲打痕が認められる。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑14号(SV14:第82図)

検出状況 SV14は、C・D-11・12区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部・主穴部ともに形状は不明であることから、タイプは不明とした。最深部位置は、推定で従穴部(A)がブリッジ下(B)と思われるが、明確でないため一覧表には示していない。推定される従穴部は、底面から急傾斜に立ち上がった後、ラップ状に開口する。推定される主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がった後、一度急傾斜になり再びスロープ状に開口する。南西壁面の一部にブリッジの痕跡は確認できたが、多くは崩落し埋土中にも痕跡等を確認できなかった。

規模 全長は1.54mと本道跡の連穴土坑の中では、短めの長さである。主従値は不明である。

埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に、黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 埋土中で採取した木炭は、科学分析の結果から¹⁴C年代測定は8,233-7,964calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑15号(SV15:第83図)

検出状況 SV15は、C・D-11区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部・主穴部ともに形状は不明であることから、タイプは不明とした。最深部位置は、推定で従穴部～主穴部(ABCD)と思われるが、明確でないため一覧表には示していない。底面はほぼ水平に広がり安定している。推定される従穴部は、底面から壁面を若干掘り込み、やや内傾しながら立ち上がった後、急傾斜に開口する。推定される主穴部は、壁面からやや垂直気味に立ち上がった後、ラップ状に開口する。ブリッジは、完全に崩落し痕跡等も確認できなかった。

規模 全長・主従値ともに不明とした。

埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に、黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 埋土中に、わずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。

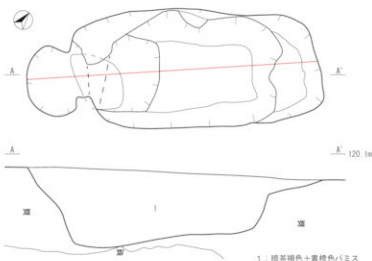
連穴土坑16号(SV16:第84図)

検出状況 SV16は、D-11区において、XIII上面で検出された。

切り合い SV17と切り合い、SV17以前に構築されている。

形状 従穴部の形状はI類に属すが、主穴部の形状は不明とした。最深部は、推定でブリッジ下(B)と思われるが、明確でないため一覧表には示していない。

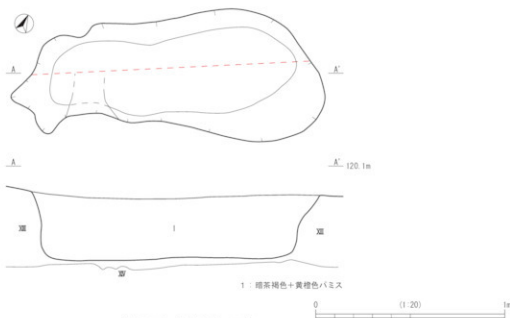
連穴土坑14号



第82図 連穴土坑14号

0 (1:20) 1m

連穴土坑15号



第83図 連穴土坑 15号

従穴部は、底面からやや急傾斜に立ち上がる。主穴部の立ち上がりは不明である。ブリッジ断面は、従穴部を右に見て、上部より下部がやや幅広となる逆ノの字状である。

規模 全長・主従値ともに不明とした。

埋土 埋土については、次のSV17の埋土で、合わせて記述する。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑 17号 (SV17: 第84図)

検出状況 SV17は、C・D-11区において、XIII層上面で検出された。

切り合い SV16と切り合い、SV16の後に構築されている。

形状 従穴部の形状はI類に、主穴部の形状はII類に属し、「I+II」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ側(BC)である。従穴部は、底面からやや急傾斜に立ち上がる。主穴部は、最深部位置から緩やかに立ち上がり、一段有した後に、壁面でやや急傾斜に開口するが、途中で壁面を一部掘り込んでいる。ブリッジ断面は細長く、下部にいくに従ってやや幅広となるが、従穴部だけが一部掘り込まれ、従穴部を左に見て逆ノの字形になっている。SV16とSV17の平面及び断面形状に共通点が幾つか確認できる。

規模 全長・主従値ともに不明とした。

埋土 埋土については、SV16・17、合わせて記述

する。埋土は3つに分かれる。埋土3は、SV16・17のブリッジ下の底面付近にのみ堆積し、にぶい褐色で粘質性のある土である。埋土3は、XIV～XVI層の土より粘性が低く、XIV～XVI層相当とならないことから、炭や炭化物等の影響を受けた可能性もある。埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に、黄褐色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄褐色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。埋土1はSV17にのみに、埋土2はSV16にのみ確認され、埋土1が埋土2を切っていることから、SV16とSV17に構築された時期に差があると判断した。

出土遺物 出土していない。

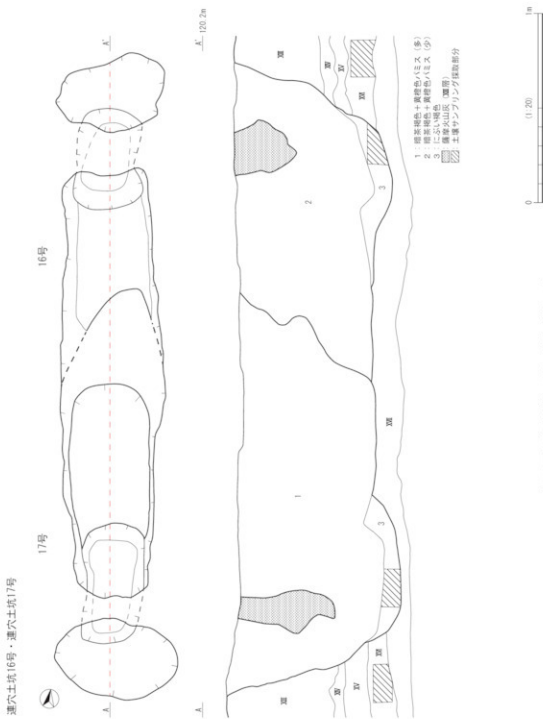
炭化物 埋土1と埋土2に、わずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は確認されなかった。第84図にある湖掛け範囲の土壌をサンプル採取したが、分析等は行っていない。

連穴土坑 18号 (SV18: 第85図)

検出状況 SV18は、F-22区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はI類に、主穴部の形状はII類に属し、「I+II」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)であるが、本遺跡の中では、最も深くまで掘り込まれている連穴土坑である。従穴部は、底面からやや垂直気味に立ち上がった後、急傾斜で開口する。主穴部は、最深部位置から段を二段有しながら緩やかに立ち上



がった後、ほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は、従穴部の方が鋭角に掘り込まれる逆三角形形状である。

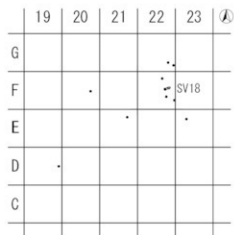
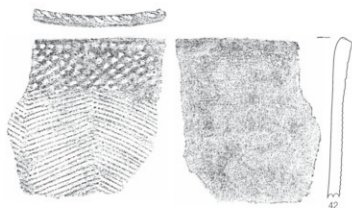
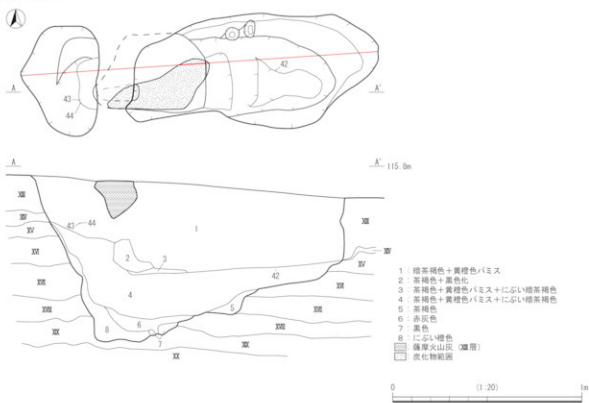
規模 全長は1.89mと本遺跡の連穴土坑の中では、やや長めである。主従値は3.36で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が小さい。

埋土 埋土は8つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色でXVI層に類似するが、被熱等の影響を受けたと思われる黒色化した土である。埋土3・埋土4は、ともに茶褐色

の土に黄橙色バミスを含み、にぶい暗茶褐色の土(XIV層)が混入する土である。土のしまり具合(埋土3)埋土4)や粘性の強さ(埋土3)埋土4)の違い等で分層した。埋土5は、茶褐色の土で、黄橙色バミスを含まない。埋土6は、赤灰色で5mm～5cm程度の橙色のブロックを含み、若干粘質がある土である。埋土7は、炭化物を含む黒色の土である。埋土8は、にぶい橙色で粘質のある土である。

SV18は、埋土状況から、ブリッジ(埋土2)の部分が

連穴土坑18号



0 (1:1000) 20m

0 (1:3) 10cm

第85図 連穴土坑18号・出土遺物・分布図

もう一つのブリッジ)・トンネル(埋土4の部分)がもう一つのトンネル)がもう一つ存在した可能性を否定できないが、本報告では、ブリッジ・トンネルを各1つで報告した。

出土遺物 埋土中から7点の遺物が出土した。いずれも土器で、そのうち3点を図化した。42(第85図)は、口縁部片である。ほぼ直行する口縁部外面に、横位貝殻刺突文を1条施し、その直下に斜位貝殻刺突文を、その刺突文の下部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。また、平坦な面をもつ口唇部に幅4mm程度のキザミを施す。内面は、ナデをおこなう。43(第85図)は、外面に横位貝殻刺突文を施す胴部である。接合はしなかったが、胎土や施文方法から43と同一固体と思われる土器片11点が包含層からも出土している。その分布状況は第85図で示した。44(第85図)は、外面に斜位貝殻条痕文を施す胴部である。綾杉状の条痕文の一部と思われる。42～44は、同一固体とはならない。

土器分類 42・44はⅣ類に、43はⅤ類に該当する。

炭化物 埋土中に、わずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。ブリッジ下及び主穴部ブリッジ側底面で焼土が確認された。

連穴土坑19号(SV19:第86図)

検出状況 SV19は、B-20区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、最深部位置からやや急傾斜で立ち上がった後、一度緩やかになるが、すぐに垂直気味に開口する。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がり、一段有した後、壁面で急傾斜で開口する。ブリッジ断面は、検出面を平坦にして半円状であるが、主穴部をやや掘り込んでいる。

規模 全長は1.72mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主径値は860で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が2番目に大きい。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、ともに黒色の土にわずかに黄褐色バミスを含む土である。粘性の強さ(埋土1=埋土3<埋土2)や土のしまり具合(埋土1>埋土2=埋土3)の違い等で分層した。断面にあるAの層は、熱変化によって壁面等が変色したと判断したことから埋土にはしていない。

出土遺物 出土していない。

炭化物 埋土中で採取した木炭は、科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、8,230-7,964calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑20号(SV20:第86図)

検出状況 SV20は、C-21・22区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部(A)である。従穴部は、最深部位置から垂直に立ち上がった後、一段有して再度垂直気味に開口する。主穴部は、水平に安定して広がった後、壁面で急傾斜で開口する。ブリッジの残りはわずかだが、その断面は、検出面を平坦に半円状になるが、従穴部をやや掘り込んでいる。

規模 全長は2.35mと本遺跡の連穴土坑の中では、最大の長さである。主径値は2,85で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が3番目に小さい。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に、黄褐色バミスを含む土である。黄褐色バミスの包含量(埋土1>埋土2)や粘性の強さ(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。断面にあるAの層は、熱変化によって壁面等が変色したと判断したことから埋土にはしていない。

出土遺物 出土していない。

炭化物 埋土中で採取した木炭は、科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、8,150-7,965calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑21号(SV21:第87図)

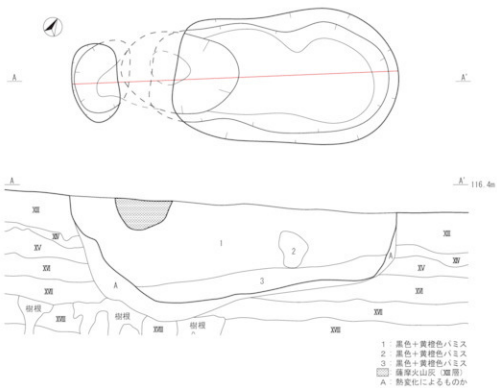
検出状況 SV21は、C-27区において、従穴部は堅穴住居跡13号(SH13)の東側のXIII層上面で、主穴部はSH13検出面内で検出された。SH13壁面及び上面東側に円形状のシミを確認した。そのシミ状部分の精査を行ったところ、従穴部と地中で繋がったことから連穴土坑とした。**切り合い** SH13と切り合い、SV21はSH13の後に構築されている。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、主穴部(D)で、本遺跡の中では、このSV21のみである。従穴部は、底面からやや緩やかに立ち上がった後、一段有してすぐに垂直に開口する。主穴部は、ブリッジ下から緩やかな傾斜をもって下り、その後緩やかな傾斜で立ち上がる。ブリッジ断面は、四角形状で下部の方が若干幅広となるが、主穴部の方から従穴部へとやや掘り込まれている。

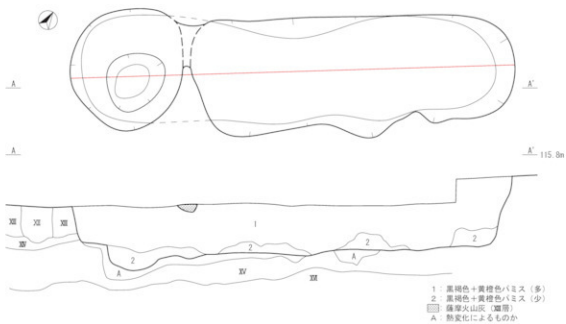
規模 全長は1.82mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主径値は5,83で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は4つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄褐色バミスを含む土である。埋土3は、暗褐色の土に黄褐色バミスと薩摩火灰(XIII層)

連穴土坑19号



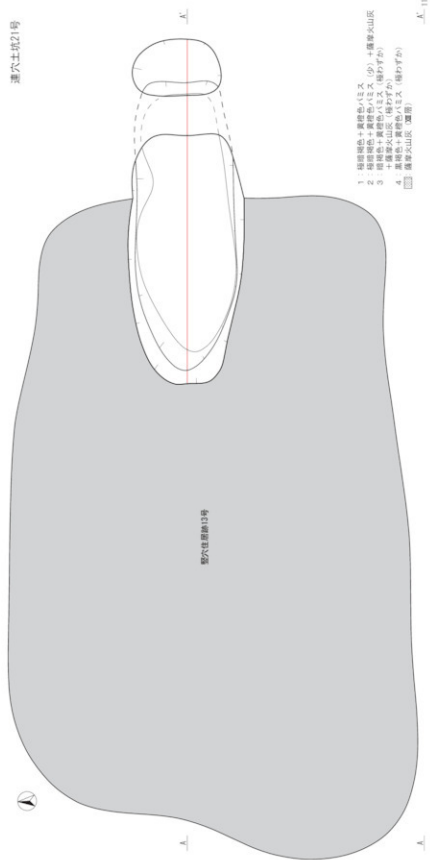
連穴土坑20号



第86図 連穴土坑19号・連穴土坑20号

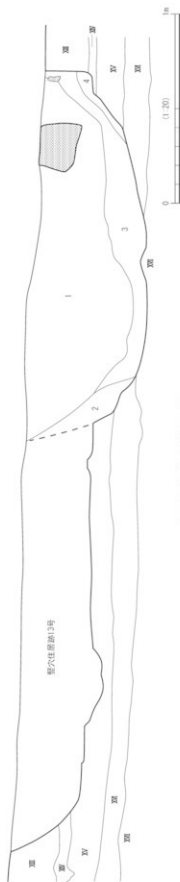


連六土坑21号



- 1 緑褐色土+黄褐色ハズス
 2 緑褐色土+黄褐色ハズス (少) + 黄褐色山区
 3 黄褐色土+黄褐色ハズス (緑わずか)
 4 黄褐色土+黄褐色ハズス (緑わずか)
 [] 黄褐色山区 (XIV)

A - 115.0m



第87図 連六土坑21号

を含む土である。埋土4は、黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑22号 (SV22: 第88図)

検出状況 SV22は、D・E-30区において、XIII層上面で検出された。検出時は、小土坑と大土坑が隣り合っていたので、連穴土坑を意識して調査を行った。また、このSV22と切り合うように西側に縦長に伸びる土坑状のシミも同時に検出された。SV22に伴う遺構として調査を行ったが、壁面や床面が不安定であったことから、樹根と判断した。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、主穴部(CD)で、本遺跡の中では、このSV22のみである。従穴部は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は、ブリッジ下からはほぼ水平に広がり、壁面からは急傾斜で立ち上がる。ブリッジ断面は、横長の長方形状であるが、下部は主穴部・従穴部ともにやや掘り込まれ、若干下部が尖り気味である。

規模 全長は1.73mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は8.54で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が4番目に大きい。

埋土 埋土は、3つに分かれる。埋土1・埋土3は、ともに暗茶褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土1>埋土3)の違い等で分層した。埋土2は、黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 埋土中及び底面に炭化物を確認し、採取したが、科学分析は行っていない。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑23号 (SV23: 第88図)

検出状況 SV23は、E-41区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部とブリッジ下(AB)である。従穴部は、底面から急傾斜で立ち上がるが、壁面に多少の凹凸が確認できる。主穴部は、最深部位置から緩やかに立ち上がりながら一段有した後、壁面ではほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は、若干従穴部に向かって舌状形である。

規模 全長は1.55mと本遺跡の連穴土坑の中では、5番目に短い長さである。主従値は2.41で、本遺跡の中

では、従穴部と主穴部の規模差が最も小さい。

埋土 埋土は8つに分かれる。埋土1・埋土5は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土1>埋土5)の違い等で分層した。埋土7も黒褐色の土であるが、黄褐色パミスは含まない。埋土2・埋土3・埋土4は、ともに黒色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土2>埋土3>埋土4)の違い等で分層した。埋土6は、暗褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。埋土8は、褐色の土で粘性が強い土である。また、埋土8の下位には、A(暗褐色の土で粘性が強い土)とB(暗褐色の土に黒褐色の土がブロック状に混入し、粘性の強い土)が確認されたが、近くの旧石器先行トレンチでも、AとB同様の土が確認されているため、SV23に伴う埋土と判断しなかった。

出土遺物 埋土中からは、3点の遺物が出土した。土器が1点、礫が2点であった。そのうち土器1点を図化した。45(第88図)は、外面に綾杉状の貝殻条痕を施す胴部で、内面はナデをおこなう。

土器分類 45は、Ⅳ類に該当する。

炭化物 埋土8の下部から採取した炭化物は、科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、8,232.7,956calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑24号 (SV24: 第89図)

検出状況 SV24は、J-54区において、XI層下位で検出された。

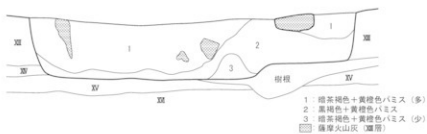
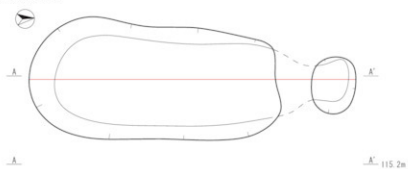
切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ脚(BC)である。従穴部は、底面から垂直気味に立ち上がった後、急傾斜で開口する。主穴部は、最深部位置からならかに立ち上がり、水平に広がった後、壁面で垂直になり、その後ラッパ状に開口する。ブリッジ断面は、三角フラスコ状である。

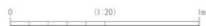
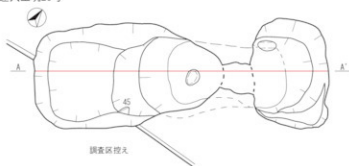
規模 全長は2.04mと本遺跡の連穴土坑の中では、長めだが、XI層で検出された連穴土坑の中では、2番目に長く、XIII層で検出された連穴土坑も含めると5番目に長い。主従値は5.22で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は7つに分かれる。埋土1は、黒色の土に黄褐色パミスを含む土である。埋土2・埋土4・埋土5・埋土6は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土だが、色調の明るさ(埋土2>埋土4=埋土6>埋土5)や黄褐色パミスの包含量(埋土5>埋土2=埋土4>埋土6)の違い等で分層した。埋土3と埋土7は、ともに暗褐色の土であるが、色調の明るさ(埋土3<埋土7)の違い等で分層した。

連穴土坑22号

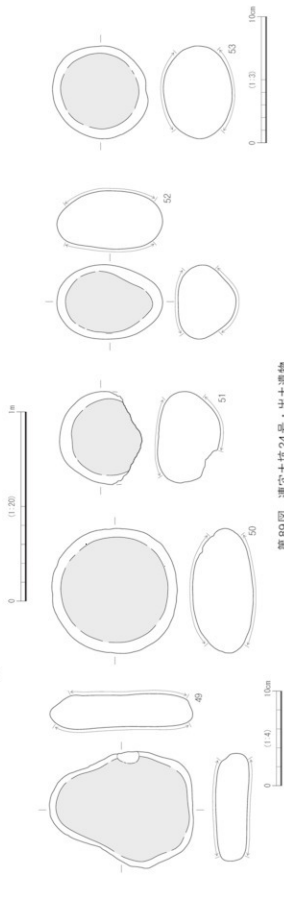
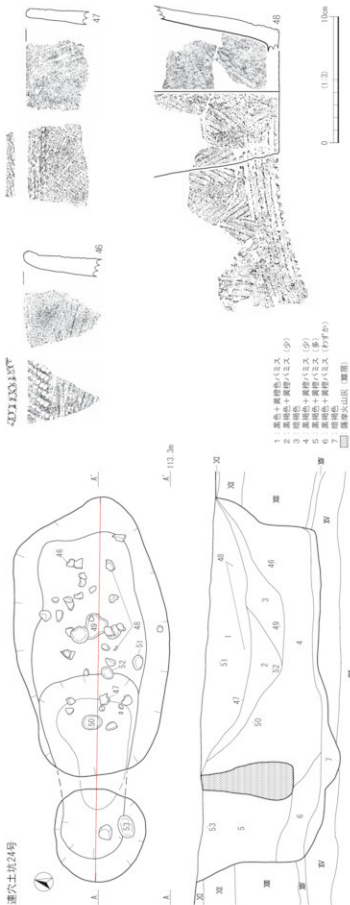


連穴土坑23号



第88図 連穴土坑22号・連穴土坑23号・出土遺物

連穴土坑24号



第89図 連穴土坑24号・出土遺物

出土遺物 埋土中からは、41点の遺物が出土し、土器が9点（口縁部片2点・胴部片5点・底部片2点）、石器が5点、礫が26点であった。そのうち土器3点と石器5点を図化した。46（第89図）は、口縁部端部のみがやや外反する口縁部である。口縁部外面は、斜位貝殻刺突文を施し、その刺突文の直下に斜位貝殻条痕文を施す。また、丸みを帯びた口唇部には幅3～4mm程度のキザミを施す。内面には、工具による調整が一部に確認できる。47（第89図）は、直行気味の口縁部である。口縁部外面には、横位貝殻刺突文を施し、その刺突文の直下は綾杉状の貝殻条痕文を施す。また、やや丸みを帯びた口唇部には幅1mm程度のキザミを3つ斜位に施す。内面には、工具による調整が一部に確認できる。48（第89図）は、底部である。外面には綾杉状の胴部文様に加え、胴部下部は横位貝殻条痕文となっている。また、底部外面端部には、幅2～3mm程度のキザミを施す。図化していない胴部片5点には、いずれも綾杉状の条痕文が認められ同一個体の可能性はあるが、接合しなかった。49～53（第89図）は磨石・敲石類である。いずれも扁平な円礫の表裏両面を磨面や敲面に使用している。49は砂岩製で、50～53は安山岩製である。

土器分類 46～48は、いずれもⅣ類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑25号（SV25：第90図）

検出状況 SV25は、J-51区において、Ⅺ層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下～主穴部（BCD）で、本遺跡の中では、このSV25のみの底面形状である。従穴部は、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は、水平に広がった後、壁面でやや垂直に立ち上がった後、ラバ状になり、再度垂直に開口する。ブリッジは、調査中に崩落したためその形状は不明である。

規模 全長は2.09mとⅪ層で検出された本遺跡の連穴土坑の中では、最も長い。Ⅺ層で検出された連穴土坑も含めると2番目に長い。主径値は8.55で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差は3番目に大きい。

埋土 埋土は5つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3・埋土4は、ともに黒褐色の土に黄橙バミスを含む土である。色調の明るさ（埋土4>埋土2>埋土3>埋土1）の違い等で分層した。埋土5は、暗茶褐色の土で粘性が強い土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑26号（SV26：連25・26図）

検出状況 SV26は、I-51・52区において、ⅩⅢ層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ側（BC）である。従穴部は、底面からやや急傾斜して立ち上がった後、垂直に開口する。主穴部は、最深部位置から緩やかに段を有するように立ち上がった後、壁面を掘り込み、やや内傾しながら立ち上がり、その後垂直に開口する。ブリッジ断面は、四角形状であるが、下部は、従穴部から主穴部側へ掘り込まれている。

規模 全長は1.87mと本遺跡の連穴土坑の中では、ほぼ平均的な長さである。主径値は7.08で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

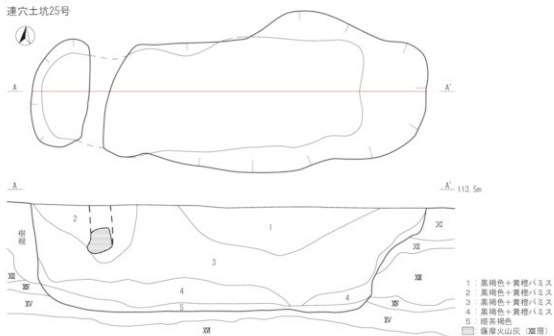
埋土 埋土は、5つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3とも黒褐色の土に黄橙バミスを含む土である。色調の明るさ（埋土1<埋土2<埋土3）や黄橙バミスの包含量（埋土1>埋土2>埋土3）の違い等で分層した。埋土4は、暗褐色の土で粘性が非常に強くなり余りない土である。

出土遺物 埋土中からは、4点の土器が出土し、うち2点を図化した。この2点は、包含層遺物3点と接合し、口縁部から胴部までの資料となった。接合した5点の分布状況を第91図で示した。54（第91図）は、ほぼ直行する口縁部をもつ。口縁部外面には、斜位貝殻刺突文を施し、その直下に横位貝殻刺突文を1条施す。胴部には、横位貝殻刺突文の直下から綾杉状の貝殻条痕を施す。横位貝殻刺突文が、胴部文様との区画となる。また口縁部外面上部には、瘤状突起をもつ。瘤状突起は面取りをされる。前面上部と左側面は欠損する。瘤状突起にも口縁部同様の斜位貝殻刺突文を施すが、前面では縦位となる。口唇部は、平坦で刺突文を斜位に施す。

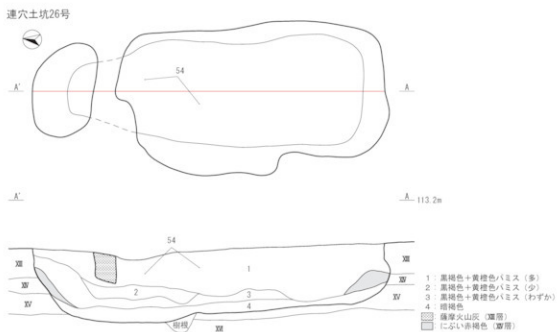
土器分類 54は、Ⅳ類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑25号

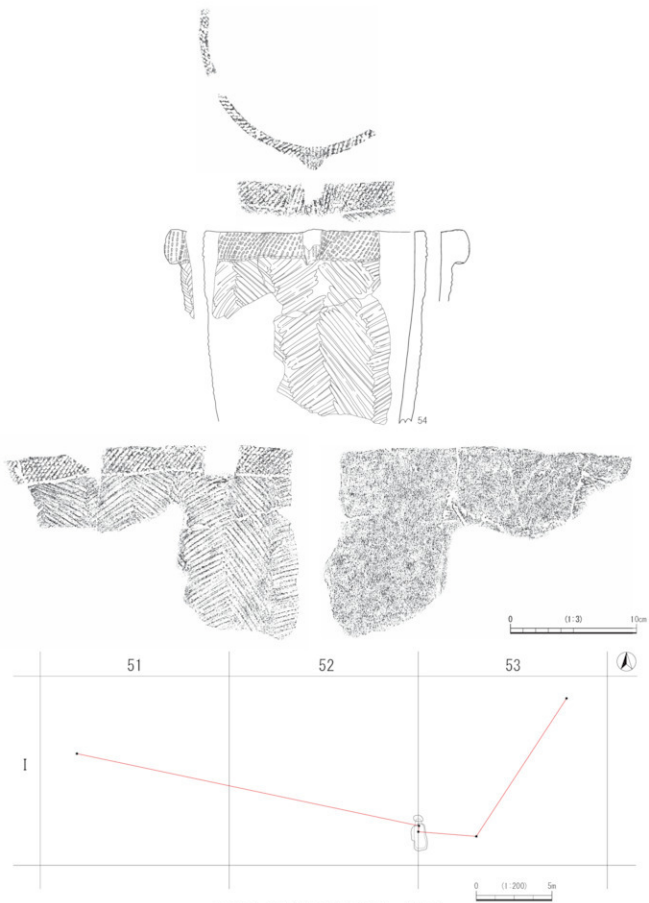


連穴土坑26号



第90図 連穴土坑25号・連穴土坑26号

0 (1:20) 1m



第91图 連穴土坑26号出土遺物・分布図

連穴土坑 27号 (SV27 : 第92図)

検出状況 SV27は、H-52区において、XIII層で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面から影を帯びながら立ち上がった後、垂直に開口する。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がった後、壁面を掘り込み、やや内傾しながら立ち上がり、その後急傾斜に開口する。ブリッジ断面は、下部がやや丸みを帯びる四角形状である。

規模 全長は1.92mと本遺跡の連穴土坑の中では、長めである。主従値は6.72で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋土 埋土は、4つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、ともに黒褐色の土に、黄褐色パミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2<埋土3)や黄褐色パミスの包含量(埋土1>埋土2>埋土3)の違い等で分層した。埋土4は、褐色の土で粘性が非常に強いが、しまりのない土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑 28号 (SV28 : 第92図)

検出状況 SV28は、J-53区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部(A)である。従穴部は、壁面をやや掘り込み、緩く内傾しながら立ち上がり、その後垂直に開口する。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がるが、最終的な立ち上がりは樹根の影響で確認できない。ブリッジ断面は、下部が若干幅広となる四角形状である。

規模 全長は1.45mと本遺跡の連穴土坑の中では、1番短い。主従値は5.13で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は、6つに分かれる。埋土1・埋土5・埋土6は、ともに極暗褐色の土である。色調の明るさ(埋土1=埋土5>埋土6)や混入している土(埋土1:黄褐色パミス・埋土5:薩摩火山灰・埋土6:なし)の違い等で分層した。埋土2・埋土3・埋土4は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土2<埋土3=埋土4)や粘性の強さ(埋土2=埋土4>埋土3)、しまり具合(埋土2=埋土4>埋土3)の違い等で分層した。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑 29号 (SV29 : 第93図)

検出状況 SV29は、L-54区において、XII層中で検出された。他の連穴土坑と比べ、XII層中で黄褐色パミスが濃く集中していたため形状を特定することができた。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ側(BC)である。従穴部は、底面からはほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は、最深部位置から一度緩やかに立ち上がり、その後スロープ状に段を有するように立ち上がった後、壁面で急傾斜に開口するが、途中で一段有し、再度急傾斜で開口する。一段有する箇所は、およそ20cm程度で、薩摩火山灰(XIII)層上面に構築されている。ブリッジ断面は、下部になるにつれて少しずつ幅広になり、主穴部側につま先部分がある長靴状である。

規模 全長は1.86mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さであるが、XII層で検出された連穴土坑の中では、1番短い。主従値は8.46で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が5番目に大きい。

埋土 埋土は、8つに分かれる。埋土1・埋土4・埋土5は、ともに黒色の土に黄褐色パミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1>埋土5>埋土4)や黄褐色パミスの包含量(埋土1<埋土4<埋土5)の違い等で分層した。埋土2・埋土3・埋土6は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。色調の明るさ(埋土2>埋土6>埋土3)や黄褐色パミスの包含量(埋土2>埋土6>埋土3)の違い等で分層した。埋土7は、褐色の土で非常に粘性が強くしまりが少ない土である。埋土8は、暗褐色の土で粘性が非常に強くややしまりのある土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 従穴部底面の底面付近に多くの炭化物を確認し、採取した。科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、8,274-8,170calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

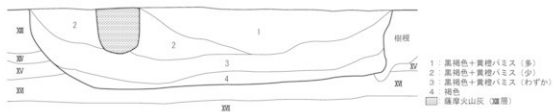
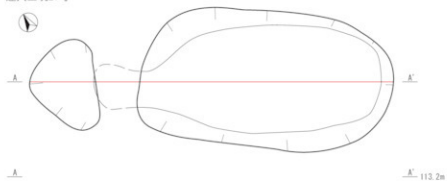
連穴土坑 30号 (SV30 : 第93図)

検出状況 SV30は、L-52区において、XIII層上面で検出された。

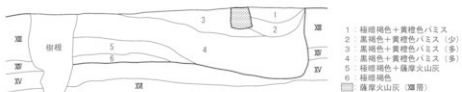
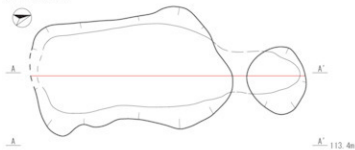
切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部とブリッジ下(AB)である。従穴部は、底面からはほぼ垂直気味に立ち上がる。主穴部は、最深部位置からスロープ状に段を有するように立ち上がった後、壁面を若干掘り込みながら影を帯びながら開口する。ブリッジ断面は、縦長の長方形形状である。

連穴土坑27号



連穴土坑28号



第92図 連穴土坑27号・連穴土坑28号



規模 全長は1.55mと本遺跡の連穴土坑の中では、短い長さである。主従値は5.23で、本遺跡の中では、平均的な従穴と主穴との規模差である。

埋土 埋土は、樹根による影響を受けているが6つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。しまりの強さ(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。埋土3は、黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土4は、極暗褐色の土に若干薩摩火山灰(XIII)層を含む土である。埋土5は、暗褐色の土でわずかに黄橙色バミスを含む土である。埋土

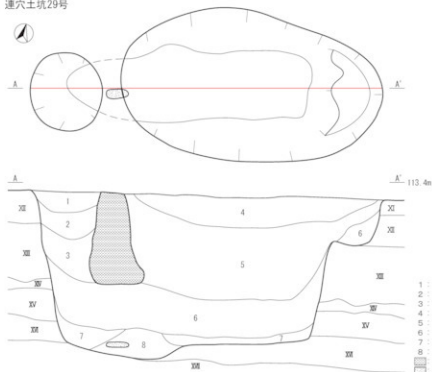
6は、褐色の土で粘性が強くしまりのない土である。

出土遺物 埋土中からは、3点の遺物が出土し、土器が1点、礫が2点であった。土器1点を図化した。55(第93図)は底部である。底面外面には光沢が確認でき、丁寧に磨かれたと思われる。底部付近の胴部は、剥落があるものの横位具幾条直文を施す。底部外面端部には、明確なキザミは確認できない。底部側面に僅かだが接合線が確認できる。

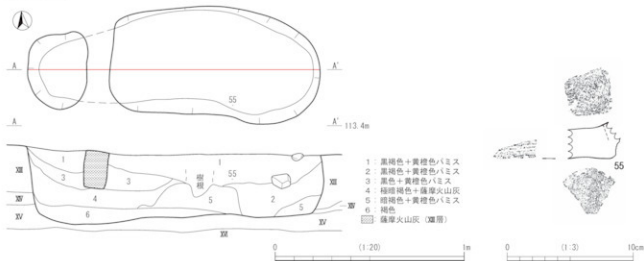
土器分類 55は、IV類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑29号



連穴土坑30号



第93図 連穴土坑29号・連穴土坑30号・出土遺物

連穴土坑31号 (SV31 : 第94図)

検出状況 SV31は、K-54区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面から急傾斜で立ち上がる。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がった後、壁面で急傾斜して開口する。ブリッジ断面は、縦長の長方形状であるが、従穴部側は丸みを帯びながら下部に向かい、主穴部側は垂直に下部に向かう。最下部は、主穴部側から従穴部側に斜めに掘り込まれている。

規模 全長は1.72mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は3.83で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が小さめである。

埋土 埋土は、樹根による影響を受けているが8つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3・埋土6は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土2<埋土1<埋土3<埋土4)や黄橙色バミスの包含量(埋土1<埋土3<埋土2<埋土6)の違い等で分けられる。埋土5も黒褐色の土であるが、黄橙色バミスは含まれず、薩摩火山灰(XIII層)を含んでいる。また、埋土5の一部には、にぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。埋土4・埋土7は、ともに暗褐色の土で、色調の明るさ(埋土4<埋土7)や粘性の強さ(埋土4<埋土7)の違い等で分層した。

出土遺物 埋土中からは、3点の土器片が出土し、1点

を図化した。56(第94図)は、胴から底部である。胎土には、2mm程度の金雲母も確認できる。胴部は、綾杉状の貝殻条痕文を施し、その下位には、横位貝殻条痕文を3~4条施す。その施文順はまず、4条の横位貝殻条痕文を施し、一部をナゲ消した後、綾杉状の貝殻条痕文を施す。胴部内面及び底部外面には、指おさえが見られる。底部外面端部に、明確なキザミは確認できない。胴部側面から底部にかけて接合線が確認できる。また、図化しなかった2点のうち1点は胴部で、外面に綾杉状の貝殻条痕文を施す。胎土に金雲母が含まれないことから、56とは同一個体とは言えない。もう1点は、底部で、底部外面端部には、貝殻刺突文を斜位に施す。刺突文を施す前に貝殻による器面調整を確認できる。胎土には、黒色鉱物・白色鉱物・ガラス質鉱物が含まれる。

土器分類 56と胴部片はⅣ類に、図化していない底部はⅤ類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

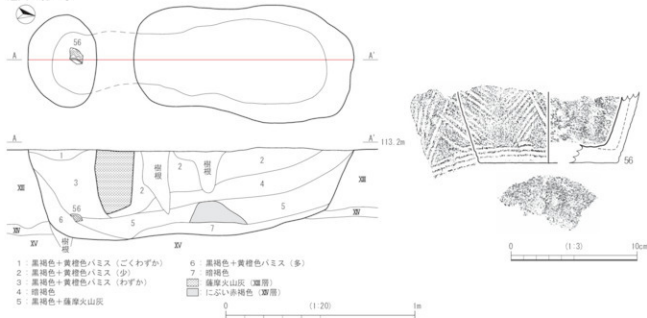
連穴土坑32号 (SV32 : 第95図)

検出状況 SV32は、K-53区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ側(BC)である。従穴部は、底面からやや緩やかに立ち上がった後、ほぼ垂直に開口する。主穴部は、最深部位置から緩やかに立ち上がり、ほぼ水平に広がりが段を有した後、壁面でやや急傾斜で開口

連穴土坑31号



第94図 連穴土坑31号・出土遺物

する。ブリッジ断面は、縦長の長方形状であるが、主穴部側から従穴部側へと掘り込まれている。

規模 全長は1.74mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は5.50で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は、9つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土4・埋土6は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2=埋土4<埋土6)や黄橙色バミスの包含量(埋土2>埋土4>埋土6>埋土1)の違い等で分層した。また、埋土4には、薩摩火山灰(XIII層)がやや含まれている。埋土3・埋土5・埋土7は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスやにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。色調の明るさ(埋土3=埋土5<埋土7)や黄橙色バミスの包含量(埋土7<埋土3<埋土5)の違い等で分層した。埋土8は、褐色の土で粘性が非常に強くしまりのない土であ

る。埋土8の上層の一部に、にぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。

出土遺物 埋土中からは、1点の土器片が出土し、図化した。57(第95図)は、底部である。胴部下位には横位貝殻条痕文を6条施し、その上位に縦杉状の貝殻条痕文を施す。横位条痕文を縦杉状の条痕文が切っていることからその施文順は、横位貝殻条痕文が先となる。底部外面端部には、明確なキザミは確認できない。

土器分類 57は、IV類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

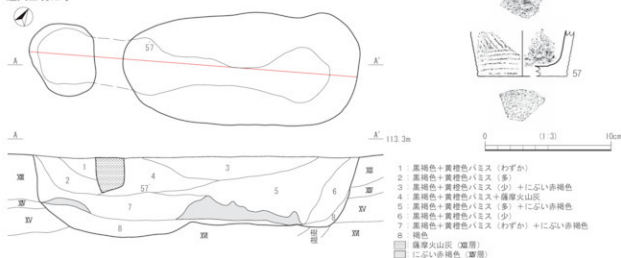
連穴土坑33号(SV33:第95図)

検出状況 SV33は、K-52区において、XIII層上面で検出された。

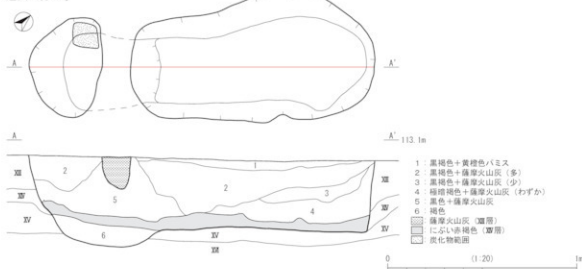
切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類

連穴土坑32号



連穴土坑33号



第95図 連穴土坑32号・出土遺物・連穴土坑33号

に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ側(BC)である。従穴部は底面から、ラップ状に立ち上がる。主穴部は、最深部位置から急傾斜で立ち上がった後、段を有して水平に広がり、壁面で垂直に開口する。ブリッジ断面は、主穴部側に丸みをもつ舌状形である。

規模 全長は1.83mと本遺跡の連穴土坑の中では、やや長めの長さである。主従値は4.46で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が小さめである。

埋土 埋土は、7つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、ともに黒褐色の土である。色調の明るさ(埋土2<埋土1<埋土3)や混入しているバミスやその含量(埋土1:黄橙色バミス・埋土2:薩摩火山灰>埋土3:薩摩火山灰)の違い等で分層した。埋土4は、極暗褐色の土にわずかに薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。埋土5は、黒色の土に薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。埋土6は、褐色で粘性が非常に強くしまりのない土である。また、埋土6の上層には、にぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。

出土遺物 出土していない。

炭化物 従穴部の底面付近で採取した炭化物は、科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、8.139-7.968calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

連穴土坑34号(SV34:第96図)

検出状況 SV34は、L-55区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面からほぼ垂直に立ち上

がる。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がった後、壁面で急傾斜に開口する。ブリッジ断面は、検出面が平坦でやや横長の半円形状である。

規模 全長は1.63mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は7.25で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が大きめである。

埋土 埋土は、8つに分かれる。埋土1・埋土5・埋土6は、ともに黒褐色の土で黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土5<埋土1<埋土6)や黄橙色バミスの含量(埋土1>埋土5>埋土6)の違い等で分層した。埋土2は、極暗褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土だが、黄橙色バミスの含量の方がやや多い。埋土3は、黒色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土だが、薩摩火山灰(XIII層)の含量の方がやや多い。埋土4は、にぶい赤褐色の土(XIV層)に薩摩火山灰(XIII層)のバミスを多く含む土である。埋土7は、黒褐色の土で、粘性が非常に強くしまりのない土である。埋土7の上層の一部に、にぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。

出土遺物 出土していない。

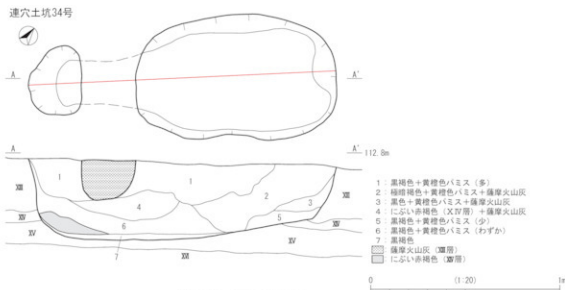
炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

連穴土坑35号(SV35:第97図)

検出状況 SV35は、L・M-55区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面から一度ラップ状に立ち上がった後、一段有した後垂直に開口する。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がった後、壁面



第96図 連穴土坑34号

ではほぼ垂直になって、その後急傾斜で開口する。ブリッジ断面は、下部がやや幅狭となる横長の長方形で、主穴部から従穴部にかけて掘り込まれている。

規模 全長は2.05mと本遺跡の連穴土坑の中では、4番目に長い。主従径は3.27で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が5番目に小さい。

埋土 埋土は、6つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。埋土3・埋土4は、ともに暗褐色の土である。色調の明るさ(埋土3>埋土4)の違い等で分層した。また埋土4には、薩摩火山灰(XIII層)が混入している。埋土5は、褐色の土で、粘性が非常に強くなり

がない土である。主穴部の底面の一部には、にぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。

出土遺物 出土していない。

炭化物 従穴部の底面付近で採取した炭化物は、科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、8,134-7,969calBCを示した。明確な焼土は確認されなかった。

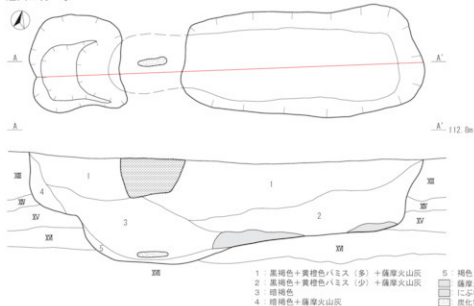
連穴土坑36号(SV36:第97図)

検出状況 SV36は、M・N-57区において、XIII層上面で検出された。

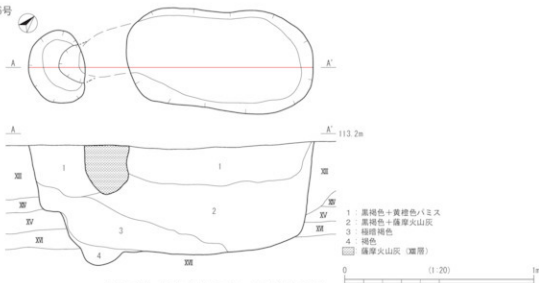
切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面から急傾斜で立ち上が

連穴土坑35号



連穴土坑36号



第97図 連穴土坑35号・連穴土坑36号

り、一段有した後、やや垂直に開口する。主穴部は、ほぼ水平に広がり壁面でやや垂直に開口する。ブリッジ断面は、主穴部側の一部がやや掘り込まれている逆釣鐘状である。

規模 全長は1.51mと本遺跡の連穴土坑の中では、3番目に短い長さである。主従値は4.36で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は、4つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や混入するパミス(埋土1:黄橙色パミス・埋土2:薩摩火山灰)の違い等で分層した。埋土3は、極暗褐色の土で、粘性が若干ある土である。埋土4は、褐色の土で、粘性が強くなりまがいない土である。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や焼土は、確認されなかった。

連穴土坑37号 (SV37: 第98図)

検出状況 SV37は、N-57区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下と主穴部ブリッジ側(BC)である。従穴部は、底面からやや垂直気味に立ち上がる。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がった後、壁面で急傾斜で開口する。ブリッジ断面は、従穴部は下部が幅狭くなるような弧状形に、主穴部はほぼ垂直に掘り込まれている。

規模 全長は1.67mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は4.81で、本遺跡の中では、平均的な主穴部の規模差である。

埋土 埋土は6つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土4は、ともに黒褐色の土である。色調の明るさ(埋土2<埋土1<埋土4)や混入するパミス(埋土1と埋土2:黄橙色パミス・埋土4:薩摩火山灰)の違い等で分層した。埋土3は、黒色の土に薩摩火山灰(XIII層)をわずかに含む土である。埋土5は、暗褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土であるが、若干黄橙色パミスの方が多く含まれる。埋土2と埋土3を切るように、にぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。

出土遺物 出土していない。

炭化物 炭化物や焼土は、確認されなかった。

連穴土坑38号 (SV38: 第99図)

検出状況 SV38は、I-52区において、XIII層上面で検出された。検出時は、連穴土坑と意識せず調査を開始した。半截中に薩摩火山灰(XIII層)をブリッジにして、小土坑と大土坑がトンネルで繋がったことから、連穴土坑とした。

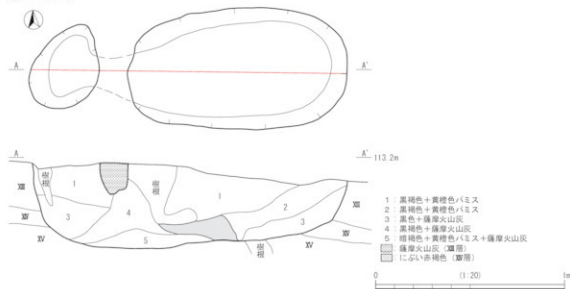
切り合い 切り合いはない。

形状 従穴部の形状はⅠ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅰ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、従穴部(A)である。従穴部は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は、底面から階段状に数段有しながらスロープ状に立ち上がり、壁面では急傾斜に開口する。ブリッジ断面は、下部がやや幅狭くなる縦長の四角形状で、下部はやや丸みを帯びる。

規模 全長は1.96mと本遺跡の連穴土坑の中では、長めの長さである。主従値は6.01で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に薩摩火山灰(X

連穴土坑37号



第98図 連穴土坑37号

Ⅲ層)を含む土で、粘性はないがしまりは強い土である。
出土遺物 埋土中からは、1点の遺物が出土した。遺物は石器で図化した。58(第99図)は砂岩製の石皿である。扁平な円盤の表裏両面に使用痕跡が認められる。
炭化物 炭化物や焼土は、確認されなかった。

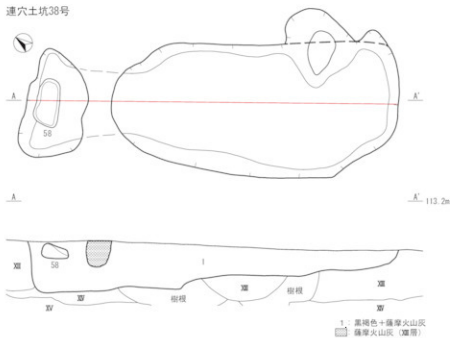
連穴土坑39号(SV39:第99図)

検出状況 SV39は、I-48区において、XIII層上面で検出された。
切り合い 切り合いはない。

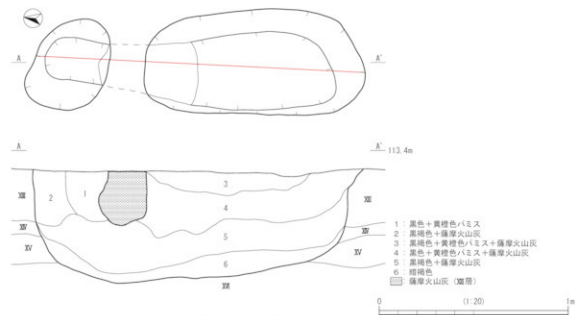
形状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。主穴部は、最深部位置からスロープ状に立ち上がり、壁面ではほぼ垂直になった後、急傾斜で開口する。ブリッジ断面は、主穴側には丸みのない、幅広い丸底ラスコ状である。

規模 全長は1.75mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は3.44で、本遺跡の中では、従穴部と主穴部の規模差が小さめである。

連穴土坑38号



連穴土坑39号



第99図 連穴土坑38号・出土遺物・連穴土坑39号

埋 土 埋土は、6つに分かれる。埋土1・埋土4は、ともに黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。色調や黄橙色バミスの包含量は同等であるが、埋土4には、薩摩火山灰(XIII層)が混入していることから分層した。埋土2・埋土3・埋土5は、ともに黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。色調の明るさ(埋土2=埋土3>埋土5)や黄橙色バミスの有無(埋土3にのみ含まれる)の違い等で分層した。埋土6は、暗褐色の土で、粘性が強くしまりのない土である。

出土遺物 出土していない。

炭 化 物 炭化物や焼土は、確認されなかった。

連穴土坑40号 (SV40：第100図)

検出状況 SV40は、I-49区において、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形 状 従穴部の形状はⅢ類に、主穴部の形状はⅡ類に属し、「Ⅲ+Ⅱ」タイプになる。最深部は、ブリッジ下(B)である。従穴部は、底面から急傾斜で立ち上が

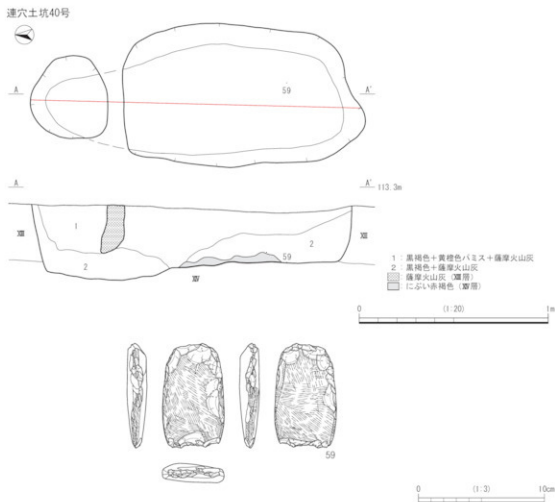
る。主穴部は、最深部位置から緩やかに立ち上がった後、水平に広がり壁面からほぼ垂直に開口する。ブリッジ断面は、従穴部側が尖った舌状である。

規 模 全長は1.75mと本遺跡の連穴土坑の中では、平均的な長さである。主従値は5.25で、本遺跡の中では、平均的な従穴部と主穴部の規模差である。

埋 土 埋土は、3つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。埋土1にのみ、黄橙色バミスを含むことから分層した。主穴部の底面の一部に、にぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。

出土遺物 埋土中からは、1点の遺物が出土した。遺物は石器で図化した。59(第100図)は頁岩製の磨製石斧である。小型で薄手に成形しており、表裏両面及び側面を丁寧に研磨している。刃部には研磨後の剥離痕が残り、一定方向に細かく調整していることから、欠損後に再加工を施した可能性がある。

炭 化 物 炭化物や焼土は、確認されなかった。



第100図 連穴土坑40号・出土遺物

第19表 運六土坑一調査表

※ 灰化物の△は、見られたがごく少量のため採取していない。○は、採取しているが分析を行っていない。
 ※ 縦穴・トンネル・主穴の欄の「―」は、不明を表す。
 ※ 灰化物・焼土の位置・遺物の欄の「―」は、無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	縦穴部：タイプ			フタ	トンネル			主穴部：タイプ			全長 (m)	主穴・縦穴 (層)	主穴部からみた 灰化物方向	灰化物 (年代測定 (年代測定 はcalBC)	焼土 (焼土の位置)	出土遺物	備考
			主軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)		主軸 (m)	短軸 (m)	高さ (m)	主軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)							
SV1	B- 12-13	XII	I	0.22	0.38	0.43	○	0.16	0.37	0.18	II	1.58	5.89	北	—	—	—	—	SH 1と重複
			II	1.20	0.41	0.29	—	—	—	—	①-②-③-④	5.50	—	—	—	—	—	—	—
SV2	C-13	XII	I	0.38	0.68	0.32	○	0.09	0.45	0.14	II	1.81	2.54	西	△	—	—	—	—
			II	1.34	0.49	0.27	—	—	—	—	A-B→C→D	3.50	—	—	—	—	—	—	—
SV3	D-13	XII	I	0.31	0.54	0.44	△	0.16	—	—	II	2.08	5.77	北西	○	—	—	—	—
			III	0.29	0.37	0.41	○	0.28	0.40	0.18	II	1.95	9.26	北西	△	—	—	—	—
SV4	E-6	XII	I	0.27	0.41	0.55	○	0.11	0.47	0.35	II	1.77	7.53	北	—	—	—	—	—
			III	0.34	0.41	0.47	○	0.14	0.37	0.32	II	1.67	5.98	南西	縦穴R.149- 7.966 主穴S.010- 7.781	—	—	—	—
SV5	E-6	XII	I	0.25	0.38	0.44	×	0.09	0.28	—	II	1.72	7.41	南西	8.235- 7.963	—	—	—	—
			III	0.31	0.45	0.48	△	0.09	0.51	—	II	1.59	6.94	西	△	—	—	—	—
SV6	E-7	XII	I	0.45	0.55	0.49	△	0.09	0.42	—	II	1.68	3.80	①-②-③-④	—	—	—	—	—
			III	0.41	0.49	0.42	○	0.09	0.32	0.17	II	1.56	3.32	南東	—	—	—	—	—
SV7	E-8	XII	I	0.41	0.49	0.42	○	0.09	0.32	0.17	II	1.56	2.60	①-②-③-④	—	—	—	—	—
			III	0.34	0.56	0.41	△	0.06	0.39	—	II	1.50	3.47	北西	—	—	—	—	—
SV8	E-9	XII	I	0.31	0.45	0.48	△	0.09	0.51	—	II	1.59	6.94	①-②-③-④	—	—	—	—	—
			III	0.45	0.55	0.49	△	0.09	0.42	—	II	1.68	3.13	南東	—	—	—	—	—
SV9	B- 13-14	XII	I	0.41	0.49	0.42	○	0.09	0.32	0.17	II	1.56	2.60	A→②→C→D	—	—	—	—	—
			III	0.34	0.56	0.41	△	0.06	0.39	—	II	1.50	3.47	北西	—	—	—	—	—
SV10	B-15	XII	I	0.41	0.49	0.42	○	0.09	0.32	0.17	II	1.56	2.60	A→②→C→D	—	—	—	—	—
			III	0.34	0.56	0.41	△	0.06	0.39	—	II	1.50	3.47	北西	—	—	—	—	—
SV11	A-16	XII	I	0.34	0.56	0.41	△	0.06	0.39	—	II	1.50	3.47	A→②→C→D	—	—	—	—	—
			III	0.34	0.56	0.41	△	0.06	0.39	—	II	1.50	3.47	北西	—	—	—	—	—

第20表 運穴土坑一覽表2

※ 灰化物の△は、見られたがごく少量のため採取していない。○は、採取しているが分析を行っていない。
 ※ 灰穴・トンネル・主穴の欄の「-」は、不明を表す。
 ※ 灰化物・焼土の位置・遺物の欄の「-」は、無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	灰穴部：タイプ		トンネル		ブリッジ		灰化物	焼土	出土遺物		備考
			主軸 (m)	短軸 (m)	高さ (m)	主軸 (m)	短軸 (m)	残存			主軸 (m)	短軸 (m)	
SV12	A-15・16	XII	-	-	-	-	×	-	8Z73-8170	-	○	-	
			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SV13	C-16	XII	III		0.27	0.21	○	北西	-	-	-	○	
			0.20	0.41					0.39	1.14	0.70	0.43	A-B→C→D
SV14	C・D-11・12	XII	-	-	-	-	×	-	8Z33-7964	-	-	-	
			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SV15	C・D-11	XII	-	-	-	-	×	-	△	-	-	-	
			-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SV16	D-11	XII	I		0.23	0.23	○	北	-	-	-	-	SV17と重複
			0.33	0.53					0.37	-	-	-	-
SV17	C・D-11	XII	I		0.11	0.19	○	南	-	-	-	-	SV16と重複
			0.41	0.66					0.62	-	-	-	-
SV18	F-22	XII	I		0.19	-	△	西	△	△	○	○	
			0.40	0.57					0.32	1.30	0.59	0.53	A→B→C→D
SV19	B-20	XII	I		0.30	0.40	○	南西	8Z0-	8Z0-	-	-	
			0.24	0.40					0.40	1.18	0.70	0.46	A→B→C→D
SV20	C-21・22	XII	III		0.05	0.55	△	南西	285	8150-	-	-	
			0.59	0.65					0.34	1.71	0.64	0.24	④→B→C-D
SV21	C-27	XII	I		0.20	0.46	○	東	583	-	-	-	SH13と重複
			0.30	0.46					0.34	1.32	0.61	0.63	A→B→C→D
SV22	D・E-30	XII	III		0.19	0.25	○	北	854	○	-	-	
			0.23	0.30					0.25	1.31	0.60	0.30	A-B→C→D

第21表 運六土坑一調査3

※ 灰化物の△は、見られたがごく少量のため採取していない。○は、採取しているが分析を行っていない。
 ※ 灰穴・トンネル、主穴の欄の「-」は、不明を表す。
 ※ 灰化物・焼土の位置・遺物の欄の「-」は、無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	灰穴部：タイプ		トンネル		ブリッジ 残存	主穴部：タイプ		主穴部からみた 灰穴部方向	灰化物 (年代測定 はcalBC)	焼土	出土遺物	備考			
			主軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸 (m)		短軸 (m)	高さ (m)						主軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
SV23	E-41	XII	I	0.40	0.37	0.63	○	0.15	0.28	0.43	II	2.41	北東 ③-⑤-⑧-C-D	-	○		
				1.00	0.55	0.46											
SV24	J-54	XI	III	0.49	0.48	0.62	○	0.07	0.23	0.20	II	5.22	西 A-⑧-C-D	-	○		
				1.48	0.83	0.60											
SV25	J-51	XI	I	0.30	0.55	0.52	△	-	-	-	II	8.55	西 A-⑧-C-⑨	-	-		
				1.68	0.84	0.55											
SV26	I- 51-52	XII	I	0.34	0.46	0.31	○	0.11	0.31	0.21	II	7.08	北 A-⑧-C-D	-	○		
				1.42	0.78	0.33											
SV27	H-52	XII	III	0.35	0.41	0.34	○	0.23	0.23	0.19	II	6.72	北西 A-⑧-C-D	-	-		
				1.34	0.72	0.40											
SV28	J-53	XII	III	0.31	0.36	0.37	○	0.08	0.21	0.23	II	5.13	北 ③-⑤-B-C-D	-	-		
				1.06	0.54	0.34											
SV29	L-54	XI	III	0.33	0.41	0.75	○	0.10	0.30	0.38	II	8.46	西 A-⑧-C-D	-	-		
				1.43	0.80	0.78											
SV30	L-52	XII	III	0.31	0.29	0.37	○	0.13	0.39	0.19	II	5.23	西 ③-⑤-C-D	-	○		
				1.11	0.57	0.32											
SV31	K-54	XII	I	0.36	0.48	0.45	○	0.20	0.29	0.15	II	3.83	南 A-⑧-C-D	-	○		
				1.16	0.57	0.44											
SV32	K-53	XII	III	0.35	0.38	0.32	○	0.15	0.24	0.24	II	5.50	南西 A-⑧-C-D	-	○		
				1.24	0.59	0.36											
SV33	K-52	XII	III	0.39	0.49	0.41	○	0.15	0.37	0.31	II	4.46	南西 A-⑧-C-D	-	-		
				1.29	0.66	0.35											

第22表 運穴土坑一覽表4

※ 灰化物の△は、見られたがごく少量のため採取していない。○は、採取しているが分析を行っていない。
 ※ 運穴・トンネル・主穴の欄の「―」は、不明を表す。
 ※ 灰化物・焼土の位置・遺物の欄の「―」は、無しを表す。

遺構名	検出区	検出層	運穴部：タイプ			トンネル			主穴部：タイプ			全長 (m)	主穴・運穴 (倍)	主穴部からみた 底面傾斜 A→B←C→D	灰化物 (年代測定 はcalBC)	焼土 (焼土の位置)	出土遺物	備考		
			主軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸 (m)	短軸 (m)	高さ (m)	主軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)									
SV34	L-55	XII	III	0.28	0.35	0.39	○	0.24	0.23	0.21	1.11	0.64	0.35	1.63	7.25	A→B←C→D	―	―	―	
				0.44	0.49	0.30														II
SV35	L・M-55	XII	III	0.44	0.49	0.30	○	0.33	0.31	0.26	1.28	0.55	0.35	2.05	2.90	A→B←C→D	―	―	8.134-7.969	―
				0.30	0.39	0.35														
SV36	M・N-57	XII	III	0.30	0.39	0.35	○	0.23	0.25	0.37	0.98	0.52	0.54	1.51	3.30	A→B←C→D	―	―	―	―
				0.36	0.41	0.37														
SV37	N-57	XII	III	0.36	0.41	0.37	○	0.15	0.19	0.22	1.11	0.64	0.34	1.67	3.10	A→B←C→D	―	―	―	―
				0.32	0.55	0.27														
SV38	I-52	XII	I	0.32	0.55	0.27	○	0.13	0.34	0.13	1.51	0.70	0.14	1.96	4.70	△→B←C→D	―	―	―	○
				0.39	0.48	0.52														
SV39	I-48	XII	III	0.39	0.48	0.52	○	0.19	0.24	0.31	1.17	0.55	0.53	1.75	3.00	A→B←C→D	―	―	―	―
				0.41	0.43	0.37														
SV40	I-49	XII	III	0.41	0.43	0.37	○	0.09	0.40	0.17	1.25	0.74	0.27	1.75	3.00	A→B←C→D	―	―	―	○

(4) 土坑 (略記号: SK)

土坑は、平成23年度の調査で7基、平成24年度の調査で20基、平成25年度の調査で53基、平成26年度の調査で24基の計104基が検出された。

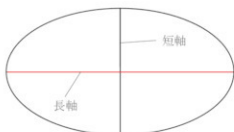
本報告書で、下記に示すように土坑の各部分に名称を付し、規模を計測した。

長 軸: 検出面で、土坑のほぼ中心を通り、その土坑の広がりが長い方の長さ。

短 軸: 長軸の真ん中を通り、長軸に対して垂直に広がる長さ。

方 位: 長軸がのびている方向。

最深部深さ: 長軸で、その土坑で最も深い部分の長さ。



第101図 土坑の各部の名称

形 状 土坑の形状について、形状を把握するため形状値(短軸÷長軸)をもとめ、以下のような定義を設定した。また、形状の定義は連穴土坑の定義と同じである。

横 長: 形状値が、0.7未満で、長軸に対して左右に広がる形。

不定形横長: 形状が整っていないと判断した横長。

方形・円形: 形状値が、0.7～1のもの。

不定形方形: 形状が整っていないと判断した方形。

不定形円形: 形状が整っていないと判断した円形。

規 模 長軸及び短軸を把握できた土坑は94基である。

検出層に違いがあることから一概にはいえないが、長軸が最大のものはSK21(検出層: XIII層)で2.77m、最小のものはSK94(検出層: X層)で0.40m、平均値は1.19mであった。短軸が最大のものはSK67(検出層: XIII層)で1.80m、最小のものはSK94(検出層: X層)で0.36m、平均値は0.66mであった。

第23表 長軸・短軸の平均値及び最大値・最小値

	長 軸	短 軸
平均値(m)	1.19	0.66
最大値(m)	2.77(SK21)	1.80(SK67)
最小値(m)	0.40(SK94)	0.36(SK94)

検出状況 単独で検出された土坑は98基である。他の遺構と切り合って検出された土坑は6基である。そのうち、土坑54号は堅穴住居跡3号と重複して検出され、土坑4号・7号の2基は土坑67号と重複して検出された。また、土坑99号と土坑100号は互いに重複して検出された。

第24表 土坑の検出層

検出層	基数(割合)
X 層	2基(2.0%)
XI 層	4基(3.8%)
XII 層	9基(8.7%)
XIII 層	89基(85.6%)

タイプ 形態分類のことである。以下の5つのタイプに分類した。

タイプI: 平面形状が横長、もしくは不定形横長で、規模や断面形状などの形相から、連穴土坑を想見させるもの。

タイプII: 平面形状が横長、もしくは不定形横長で、断面形状などの形相から、連穴土坑を想見させるもの。タイプIより大型もしくは小型と判断したもの。

タイプIII: 検出面の形状が横長・不定形横長のもの。

タイプIV: 検出面の形状が円形・方形・不定形円形・不定形方形のもの。

タイプV: 柱穴状の形状で、掘り込みが深いもの。

不 明: 調査区外へ広がるか、攪乱の影響等で全形状が把握できないもの。

分 布 I～IV類のタイプ毎に色を付け、土坑の分布(第102図)を示す。

I 類: ● (赤) II 類: ● (青) III 類: ● (緑) IV 類: ● (黄)

V 類: ● (黒) 不明: ● (黒)

調査区B～Fに広く分布するが、分布密度は調査区DとFが高い。特に、調査区Dの西端(B～G-21～27区)に密集する。その範囲に分布する土坑は、タイプIII・IVが多い。また、タイプIやIIは、土坑の密集範囲からやや外れた範囲に広がる。調査区A・Gでは検出されていない。調査区Bでは、東端にのみ分布する。調査区Cでは、中央外に散漫的な分布を示す。調査区Eでは、東端に1基のみ分布する。

以上のように、土坑の分布には調査区間で差が見られる。また、タイプによる分布にもやや差が見られる。

各土坑 本遺跡で検出された土坑を、タイプ毎、長軸と短軸の和の大きい順に報告する。



第102図 土坑タイプ別分布図

第25表 土坑の検出層毎のタイプ基数(基)

	タイプⅠ	タイプⅡ	タイプⅢ	タイプⅣ	タイプⅤ	不明
X層	—	—	1	—	1	—
XI層	—	—	1	1	—	2
XII層	—	—	3	2	—	4
XIII層	8	12	41	24	—	4
合計	8	12	46	27	1	10

タイプⅠ

土坑1号 (SK1 : 第103図)

検出状況 C-31区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半截等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。南側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。北側壁面は、底面から数段有るように緩やかに立ち上がった後、急傾斜で開口する。

規模 長軸は206m、短軸は0.75mで、最深部は0.35mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土3は、ともに暗茶褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。黄橙色バミス(埋土3>埋土1)と薩摩火山灰(埋土3>埋土1)の包含量の違い等で分層した。埋土2は、暗赤褐色の土に黄橙色バミスを含むが、薩摩火山灰(XIII層)は含まない土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑2号 (SK2 : 第104図)

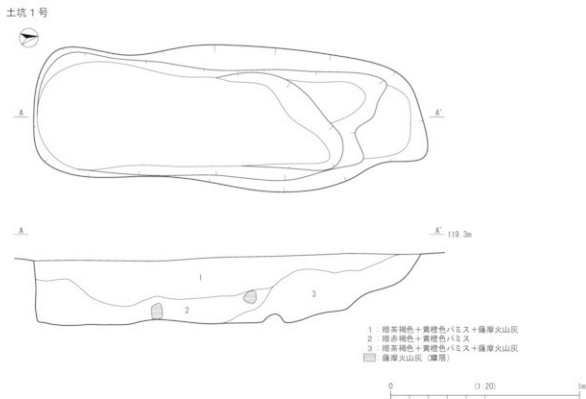
検出状況 C-33区, XIII層上面で検出された。SK2の南側には、樹根による攪乱が見られたが、SK2の一部は、その攪乱を切って構築されていた。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、南側の一部にくびれをもつ不定形横長である。底面は比較的安定している。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は、南側壁面より底面からやや緩く立ち上がる。

規模 長軸は1.99m、短軸は0.70m、最深部は0.50mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスとごくわずかに炭化物を含む土である。一部に薩摩火山灰(XIII層)のブロックが認められる。埋土2も、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含むが、



第103図 土坑1号

埋土1よりその包含量は少なく、粘性が強い土である。
出土遺物 埋土中から3点の遺物が出土した。土器片が2点、石器が1点である。いずれも図化した。60は、外反する口縁部上部に、横位貝殻刺突文を一条巡らし、直下に羽状の貝殻刺突文を施す。その下位には、条痕文は確認できない。肥厚する口唇部には、2パターン(XとYとする)のキザミを施す。Xパターンは、6mm(長さ)×2mm(幅)ほどのキザミを口唇部に垂直に施す。Yパターンは、2~8mm(長さ)×1mm(幅)ほどのキザミを、口縁部外面に施した羽状の刺突文と同じ方向に施す。Xパターンキザミから、Yパターンへ移行する順が切り合い関係で観察できる。内面には、ナデをおこなう。62(第104図)は、包含層遺物1点と接合した口縁部である。外反する口縁部外面に斜位刺突文を施す。また、口唇部には幅1~3mmほどのキザミを施す。内面には、工具による調整やナデをおこなう。60と62は、同一個体にならない。61(第104図)は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円環の片面を磨面に使用している。
土器分類 60・62とも、IV類に該当する。
炭化物 埋土1にのみ、わずかな炭化物を確認したが、採取等は行わなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑3号 (SK3 : 第105図)

検出状況 E-17区、XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半截等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。北側壁面・南側壁面ともに、底面からやや急傾斜で立ち上がる。
規模 長軸1.76m、短軸0.56m、最深部は0.42mである。

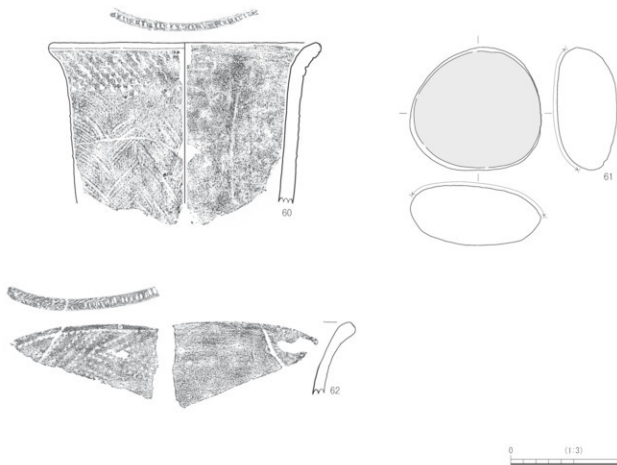
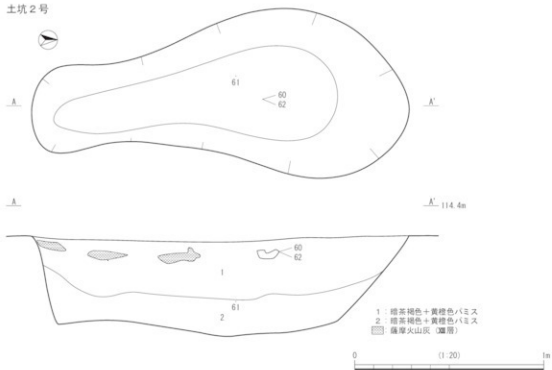
埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、暗褐色の土で、黄橙色バミスをほとんど含まない土である。

出土遺物 埋土2からは、1点の遺物が出土し、図化した。63(第105図)は胴部である。上位には、刺突文のような勝が認められるが、刺突間が5mmと長い。胴部は、横位条痕文を施すが、さほど長くはない。内面には、ナデをおこなう。

土器分類 IV類に該当する。

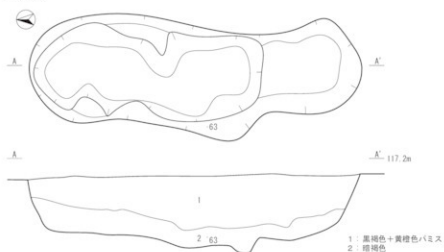
炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑2号



第104图 土坑2号·出土遺物

土坑3号



1: 黒褐色+黄褐色パミス
2: 暗褐色

土坑4号 (SK 4: 第105図)

検出状況 E-17区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半裁等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い SK 4とSK 7は、SK67を切って構築されている。

形状 平面の形状は、横長である。西側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。東側壁面は、底面から数段有るように緩やかに立ち上がった後、急傾斜で開口する。

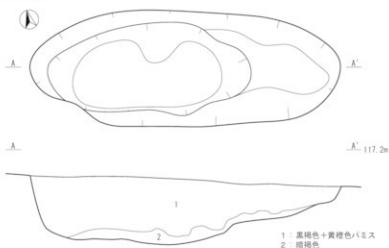
規模 長軸1.64m, 短軸0.61m, 最深部は0.35mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。埋土2は、暗褐色の土で黄褐色パミスを含まない土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

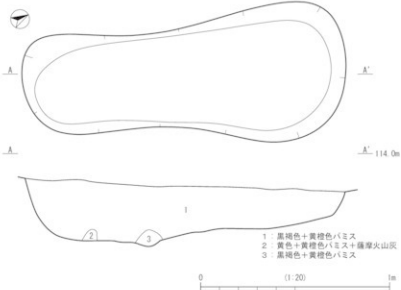
炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑4号



1: 黒褐色+黄褐色パミス
2: 暗褐色

土坑5号



1: 黒褐色+黄褐色パミス
2: 黄褐色+黄褐色パミス+層状火山灰
3: 黒褐色+黄褐色パミス

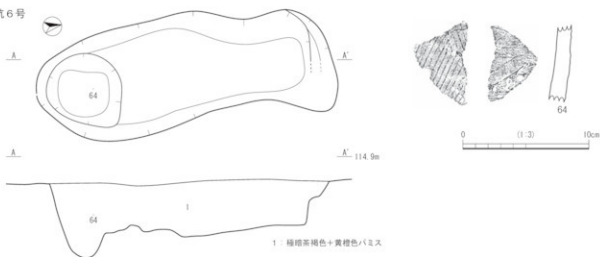
土坑5号 (SK 5: 第105図)

検出状況 E-34区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半裁等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

第105図 土坑3号・出土遺物・土坑4号・土坑5号

土坑 6号



形状 平面の形状は、南側の一部にくびれをもつ不定形横長である。南側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。北側は、底面中央付近からスロープ状に立ち上がった後、急傾斜で開口する。掘り込みは、XIII層で収まる。

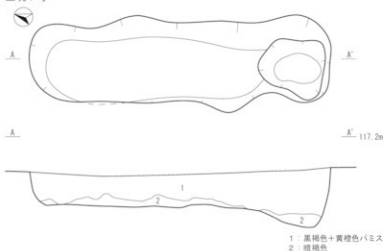
規模 長軸1.70m、短軸0.53m、最深部は0.32mである。

埋土 埋土は3つに分けられる。埋土1・埋土3は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。その包含量(埋土1>埋土3)の違い等で分層した。埋土2は、黄色の土に多くの薩摩火山灰(XIII層)と、黄橙色バミスをわずかに含む土である。

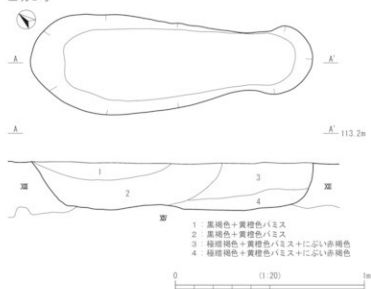
出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑 7号



土坑 8号



土坑 6号 (SK 6 : 第106図)

検出状況 C・D-32区、XIII層上面で検出された。検出時の形状が不安定で、樹根の可能性も考慮しながら、サブレンヂを設定するなどして調査を行った。結果、SK 6は、樹根の攪乱内に構築されていることが確認された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がった後、短く一段有して急傾斜で開口する。南側底面の一部が深くなっている。

規模 長軸1.50m、短軸0.58m、最深部は0.40mである。

埋土 埋土は単層で、緑褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

第106図 土坑 6号・出土遺物・土坑 7号・土坑 8号

出土遺物 埋土中からは、1点の遺物が出土し、図化した。64(第106図)は胴部である。綾杉状の貝殻条痕文を施す。土器が十分に乾燥しないうちに調整を行ったのか、指によるナデの後に、下の方へ胎土が一部流れ落ちている様子も確認できる。

土器分類 64は、IV類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑7号(SK7:第106図)

検出状況 E-17・18区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半裁等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い SK7とSK4は、SK67を切って構築されている。

形状 平面の形状は、不定形横長である。北側壁面・南側壁面ともに、底面からやや急傾斜で立ち上がる。底面は安定しているが、南側一部のみ深くなっている。

規模 長軸1.59m、短軸0.42m、最深部は0.31mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。埋土2は、暗褐色の土で、黄褐色パミスを含まない土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑8号(SK8:第106図)

検出状況 J-52区, XIII層上面で検出された。検出時

の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半裁等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、南東側の一部にくびれをもつ不定形横長である。底面は安定しており、XIV層上部をわずかに掘り込む。北西壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。南東壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

規模 長軸1.49m、短軸0.45m、最深部は0.24mである。

埋土 埋土は4つに分かれる。埋土1・埋土2は黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土1>埋土2)の違いで分層した。埋土3・埋土4は、極暗褐色の土に、黄褐色パミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土3>埋土4)の違い等で分層した。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

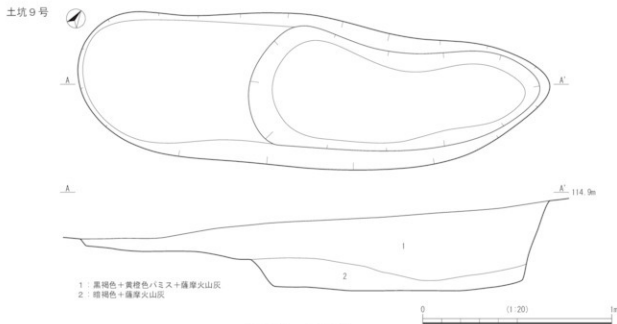
タイプII

土坑9号(SK9:第107図)

検出状況 B・C-25区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半裁等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。中央より



第107図 土坑9号

東側壁面に向かいスロープ状に立ち上がる底面を一段有し、その段より15cm程深い位置に西側壁面に水平に広がる底面を一段有する。東側壁面・西側壁面ともに、底面から急傾斜で開口する。

規模 長軸2.48m、短軸0.81m、最深部は0.42mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に、黄褐色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。埋土2は、暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)のみを含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑10号 (SK10：第108図)

検出状況 I-46区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。中央より北側壁面に向かい水平に広がる底面を一段有し、その段より10cm程深い位置に南側壁面に水平に広がる底面を一段有する。北側壁面・南側壁面ともに、底面からほぼ垂直気味に開口する。

規模 長軸1.37m、短軸0.70m、最深部は0.34mである。

埋土 埋土は、4つに分かれる。埋土1・埋土3は、ともに黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。薩摩火山灰(埋土1>埋土3)とにぶい赤褐色の土(埋土1<埋土3)の包含量の違い等で分層した。埋土2は、暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土(XIV層)をまじらせた状態を含む土である。

出土遺物 埋土中からは、2点の遺物が出土した。石器が1点、鏝が1点であった。石器1点を図化した。65(第108図)はホルンフェルス製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の全体を磨面に使用し、表裏中央に深い敲打痕が認められる。被熱しており右側面周辺にススが附着する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑11号 (SK11：第108図)

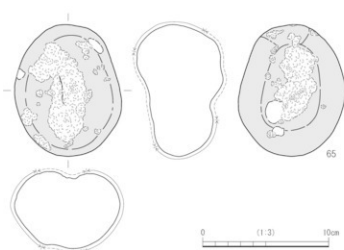
検出状況 J-50区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

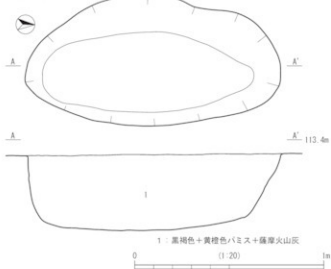
形状 平面の形状は、横長である。底面は水平に広がり、安定している。南側壁面は、底面から垂直気味に立ち上がる。北側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸1.35m、短軸0.69m、最深部は0.40mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄褐色バミスと



土坑11号



第108図 土坑10号・出土遺物・土坑11号

薩摩火山灰 (XIII層) を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑12号 (SK12: 第109図)

検出状況 C・D-33区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半截等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は掘りすぎの影響で推定であるが、横長である。底面は水平に広がり安定している。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がった後、やや緩やかな傾斜をもつが、再度急傾斜し開口する。北側壁面は、底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。

規模 長軸1.39m, 短軸0.58m, 最深部は0.63mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、暗褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土3は、極赤褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。各埋土の黄橙色バミスの包含量は、埋土2>埋土1>埋土3となる。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 埋土中に、わずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑13号 (SK13: 第109図)

検出状況 E-28区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、西側壁面に向かってスロープ状に下傾斜する。西側壁面・東側壁面ともに、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

規模 長軸1.36m, 短軸0.60m, 最深部は0.46mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2ともに、黒褐色の土に、黄橙色バミスと薩摩火山灰 (XIII層) を含む土である。黄橙色バミスの包含量 (埋土1<埋土2) で分層した。

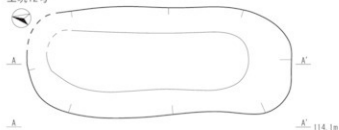
出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑14号 (SK14: 第109図)

検出状況 H-49区, XIII層上面で検出された。検出時は、従穴部と考えられる小土坑を確認していたため、連穴土坑の可能性を考慮し、調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

土坑12号



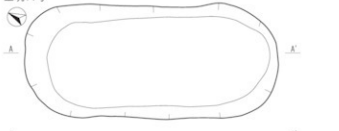
- 1: 暗褐色+黄橙色バミス
- 2: 黒褐色+黄橙色バミス
- 3: 極赤褐色+黄橙色バミス

土坑13号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
- 2: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

土坑14号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰+にふい赤褐色
- 2: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰+にふい赤褐色
- 3: 黒褐色+黄橙色バミス+にふい赤褐色

第109図 土坑12号～14号

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、ほぼ水平に広がり安定している。北西側壁面は、急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。

規模 長軸1.33m、短軸0.59m、最深部は0.30mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。色調の明るさ(埋土1=埋土3<埋土2)やにぶい赤褐色の土の包含量(埋土1<埋土3<埋土2)の違い等で分層した。埋土1と埋土2には、薩摩火山灰(XIII層)も含まれている。その包含量は、埋土2<埋土3となる。

出土遺物 埋土中からは、1点の遺物が出土したが、確であった。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑15号(SK15:第110図)

検出状況 J-48区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、北西側壁面に向かい階段状に下傾斜する。北西側壁面は、底面から垂直に立ち上がった後、急傾斜で開口する。南東側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。

規模 長軸1.21m、短軸0.61mである。最深部は0.38mとなる。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄褐色パミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。埋土2は、暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)を含む土であるが、黄褐色パミスは含まない。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑16号(SK16:第110図)

検出状況 I-49区、XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半裁等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。中央より南西側壁面側の底面は、ほぼ水平に広がり安定している。中央より北東側壁面側の底面は、その方向へやや下傾斜する。南西側壁面側の底面は、ほぼ垂直に立ち上がった後、ラッパ状に開口する。北東側壁面は、急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸1.23m、短軸0.55m、最深部は0.30mである。

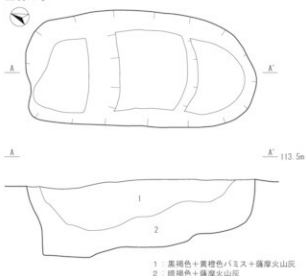
埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、

ともに黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。薩摩火山灰(埋土1>埋土2)とにぶい赤褐色の土(埋土1<埋土2)の包含量の違い等で分層した。埋土3は、極暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土を含む土である。埋土3は、埋土1や埋土2と比較し、薩摩火山灰が多く含まれる。

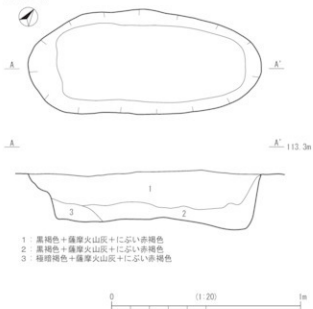
出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑15号



土坑16号



第110図 土坑15号・土坑16号

土坑 17号 (SK17: 第111図)

検出状況 C-31区, XIII層上面で検出された。検出時には, SK17の南側に近接して小土坑と思われる円形のシミ状の痕跡が確認できた。SK17を主穴, そのシミ状痕跡部を従穴として調査を行ったが, トンネルやブリッジの痕跡が確認できなかった。また, そのシミ状痕跡部の埋土や底面, 壁面等が不安定であったことから, シミ状痕跡部は樹根とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は, 中央にややくびれをもつ横長である。南側壁面は, 底面からほぼ垂直に立ち上がった後, ラッパ状に開口する。北側壁面は, 底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。

規模 長軸1.17m, 短軸0.54m, 最深部は0.39mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は, 黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は, 極暗褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。埋土3は, 暗褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は, 確認されなかった。

土坑 18号 (SK18: 第111図)

検出状況 D-25区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は, 不定形横長である。中央から南側壁面へ向かう底面は, ほぼ水平に広がり, 南側壁面は, 底面からやや急傾斜で立ち上がる。北側壁面上位から中央までの底面は, やや階段状に下傾斜する。

規模 長軸1.08m, 短軸0.55m, 最深部は0.27mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は, ともに黒褐色の土にわずかに黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違いで分層した。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は, 確認されなかった。

土坑 19号 (SK19: 第112図)

検出状況 K-48区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は, 不定形横長である。西側壁面は, 底面から急傾斜で立ち上がった後, 緩やかに開口する。東側壁面は, 底面から垂直に立ち上がる。底面は, への字を右へ180度回転させた形状である。

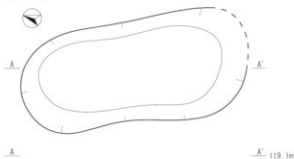
規模 長軸1.05m, 短軸0.44m, 最深部は0.33mである。

埋土 埋土は4つに分けられる。埋土1・埋土2は, ともに黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。薩摩火山灰の包含量(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。埋土4も黒褐色の土だが, 薩摩火山灰(XIII層)のみ含まれる土である。埋土3は, 極暗褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。

出土遺物 埋土中からは, 1点の遺物が出土した。その1点を図化した。66(第112図)は安山岩製の磨石・敲石類である。破片資料だが元はやや扁平な円礫と考えられ, 表裏両面を磨面に使用し, 側面に敲打痕が認められる。

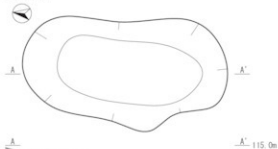
炭化物 炭化物や明確な焼土は, 確認されなかった。

土坑17号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス
- 2: 極暗褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
- 3: 暗褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰(ごくわずか)

土坑18号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス
- 2: 黒褐色+黄橙色バミス
- 3: 薩摩火山灰(XIII層)

0 (1/20) 1m

第111図 土坑17号・土坑18号

土坑20号 (SK20: 第112図)

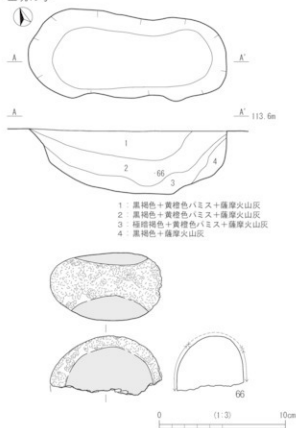
検出状況 B-22・23区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

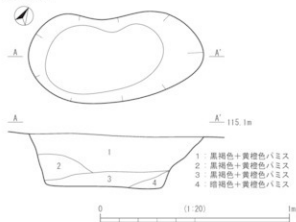
形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は水平に広がり安定している。北東側壁面は、底面からは垂直に立ち上がった後、やや急傾斜で開口する。南西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸0.92m、短軸は0.45m、最深部は0.28mである。

土坑19号



土坑20号



第112図 土坑19号・出土遺物・土坑20号

埋土 埋土は4つに分かれる。埋土1・埋土2・埋土3は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土1<埋土2<埋土3)の違いで分離した。埋土4は、暗褐色の土に黄褐色パミスをわずかに含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

タイプⅢ

土坑21号 (SK21: 第113図)

検出状況 D-36区, XIII層上面で検出された。SK21周辺には、不定形なビット状の樹根が点在しており、SK21も樹根の痕跡が一部に確認された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、北側壁面から中央にかけて水平に広がり、中央から南側壁面にかけて水平に広がる。南側壁面・北側壁面ともに、底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸2.77m、短軸0.71m、最深部は0.25mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄褐色パミスをわずかに含む土である。埋土2・埋土3ともに、暗褐色の土である。黄褐色パミスの有無(埋土2:有、埋土3:無)等で分離した。

出土遺物 埋土中からは、2点の遺物が出土し、そのうち1点を図化した。67(第113図)は胴部である。外面に綾杉状の条痕文を施す。内面は、やや光沢を帯び、指によるナデをおこなう。出土したもう1点も胴部であった。外面に綾杉状の条痕文を施す。条痕の凹凸の差から、p253と同一個体とは言い難い。

土器分類 2点とも、Ⅳ類に該当する。

炭化物 埋土中に、わずかな炭化物を確認したが、採取等ではできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑22号 (SK22: 第113図)

検出状況 C-27区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、半截等を行い調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、北側・中央・南側に各一段ずつ有する。北側壁面・南側壁面は、ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸2.31m、短軸0.73m、最深部は0.20mである。

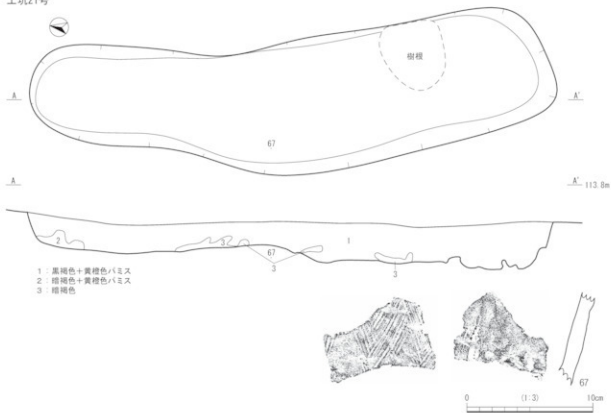
埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに暗褐色の土である。埋土1は、黄褐色パミスを含

む土である。埋土2は、黄橙色バミスと薩摩火山灰(XⅢ層)を含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1<埋土2になる。

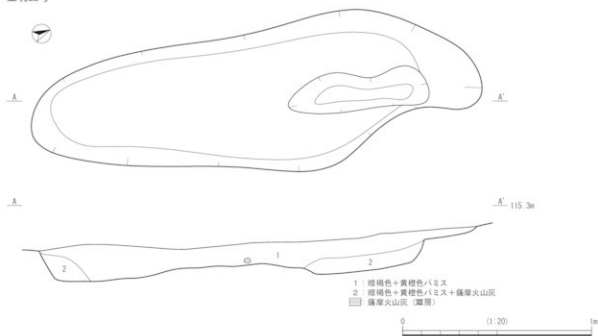
出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 埋土中に、わずかな炭化物を確認したが、採取等ではできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑21号



土坑22号



第113図 土坑21号・出土遺物・土坑22号

土坑23号 (SK23: 第114図)

検出状況 E-18区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は不定形横長である。底面は、北側壁面から南側壁面に向かい緩やかに下傾斜する。北側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。南側壁面は、底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。

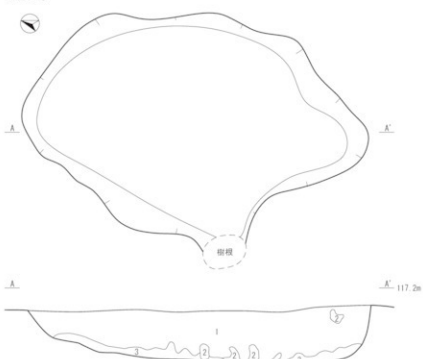
規模 長軸1.80m、短軸1.20m、最深部は0.30mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、明黄褐色の土で、黄橙色バミスは含まない土である。埋土3は、暗褐色の土で、黄橙色バミスは含まない土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑23号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス
- 2: 明黄褐色
- 3: 暗褐色

土坑24号 (SK24: 第114図)

検出状況 I-48区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、ほぼ水平に広がる。北側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

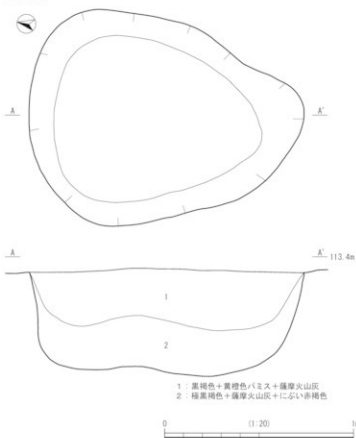
規模 長軸1.46m、短軸1.02m、最深部は0.55mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰 (XIII層) を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス<薩摩火山灰となる。埋土2は、極黒褐色の土に薩摩火山灰 (XIII層) を含み、にぶい赤褐色の土 (XIV層) をまだら状に含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑24号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
- 2: 極黒褐色+薩摩火山灰+にぶい赤褐色

土坑25号 (SK25: 第115図)

検出状況 F-29区, XIII層上面で検出された。南西部の一部を掘りすぎたため、破線を用いて、平面と底面の形状を推定ラインを表現した。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、北西から南東へ向かい緩やかに下傾斜

第114図 土坑23号・土坑24号

する。北西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がった後、緩やかに開口する。南東側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

規 模 長軸1.45m、短軸0.90m、最深部は0.36mである。

埋 土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス>薩摩火山灰となる。埋土2は、褐色の土に、黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭 化 物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑26号(SK26:第115図)

検出状況 F-24区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形 状 平面の形状は、横長である。底面は、水平に広がる。南側壁面・北側壁面は、ともに底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規 模 長軸1.38m、短軸0.75m、最深部は0.32mである。

埋 土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスが含まれる土である。埋土2は、埋土1に薩摩火山灰(XIII層)のブロックが混入する土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭 化 物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑27号(SK27:第116図)

検出状況 C-26区、XII層中で検出された。北側は、一部樹根による攪乱を受けている。

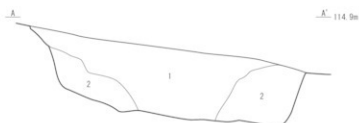
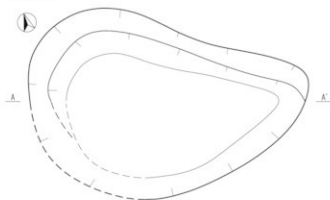
切り合い 切り合いはない。

形 状 平面の形状は推定であるが、不定形横長とした。底面は、三つの段を有する。西側壁面は、底面から垂直気味に立ち上がった後、一度段を有するように緩やかに広がり、その後急傾斜で開口する。東側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がった後、一度傾斜は緩くなり、段を有するように広がるが、再度急傾斜で開口する。

規 模 長軸1.57m、短軸は推定で0.73m、最深部は0.36mである。

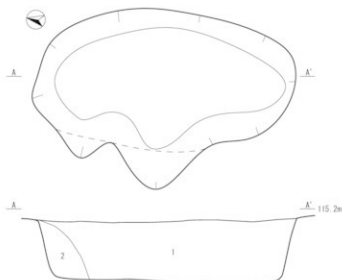
埋 土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違いで分層した。また、埋土1と埋土2の黄橙色バミスと薩摩火山灰の包含量は、ともに黄橙色バミス>薩摩火山灰となる。埋土3は、暗赤褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。黄橙色バ

土坑25号



1: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
2: 褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

土坑26号



1: 暗茶褐色+黄橙色バミス
2: 暗茶褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

0 (1:20) 1m

第115図 土坑25号・土坑26号

ミスと薩摩火山灰の包含量は、黄橙色バミス>薩摩火山灰となる。

出土遺物 遺物は、埋土2の上位から土器片が数点出土した。剥落が激しかったり、小破片であったりすることから図化はしていない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑28号 (SK28: 第116図)

検出状況 F-25区, XIII層上面で検出された。土坑の切り合いの可能性を考慮し調査を行ったが、埋土が一定であることから一つの土坑とした。切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する。北東と南西には段を有する。北西壁面・南東壁面は、ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸1.27m, 短軸0.88m, 最深部は0.23mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑29号 (SK29: 第116図)

検出状況 C-25・26区, XII層で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、南側の一部にややくびれをもつ不定形横長である。底面は、中央から北側付近に柱穴状に掘り込まれ、最深部を形する。南側壁面・北側壁面は、ともに最深部から急傾斜で立ち上がった後、一度は水平に広がり、再度急傾斜になり開口する。

規模 長軸1.54m, 短軸は0.57m, 最深部は0.41mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。埋土3も黒褐色の土であるが、黄橙色バミスに加え薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス>薩摩火山灰となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

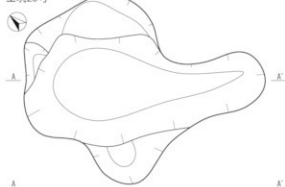
炭化物 埋土2・埋土3にわずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑27号



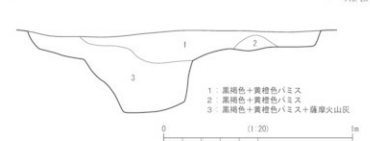
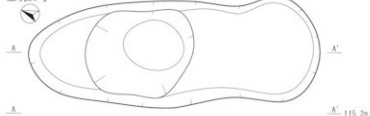
- 1: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
- 2: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
- 3: 暗褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

土坑28号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

土坑29号



- 1: 黒褐色+黄橙色バミス
- 2: 黒褐色+黄橙色バミス
- 3: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

第116図 土坑27号～29号

土坑30号 (SK30: 第117図)

検出状況 K-51区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、南東側が柄杓の柄になるような形状である。北西側壁面・南東側壁面は、ともに底面から垂直に立ち上がる。

規模 長軸1.37m, 短軸0.59m, 最深部は0.32mである。

埋土 埋土は7つに分かれる。埋土1は、暗褐色の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)をまだら状に含む土である。埋土2・埋土3は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土をまだら状に含む土である。色調の明るさ(埋土2>埋土3)と黄橙色バミスの包含量(埋土2>埋土3)の違いで分層した。埋土4も黒褐色の土で、薩摩火山灰(XIII層)を含むが黄橙色バミスは含まない土である。埋土5は、暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土をまだら状に含む土である。底面直上の一部には、薩摩火山灰(XIII層)のブロックとにぶい赤褐色の土(XIV層)が堆積している。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑31号 (SK31: 第117図)

検出状況 E-34区, XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し、調査を進めた。結果、遺構の一部を落ち込みと判断し、検出時より長軸が短くなり、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は3つの段を有している。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がった後、ほぼ水平に広がり、再度やや急傾斜で開口する。

規模 長軸1.13m, 短軸0.79m, 最深部は0.48mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 埋土中に、わずかな炭化物を確認したが、採取等ではできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

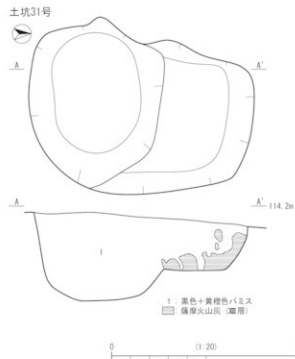
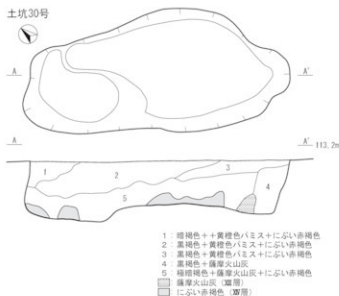
土坑32号 (SK32: 第118図)

検出状況 C-27区, XII層中で検出された。検出時の形状がやや不明瞭であったため、半截等を行いながら調

査を行った。結果、一部に樹根による攪乱が確認された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、西側壁面から東側へ緩やかに下傾斜した後、東側壁面へ向かい緩やかに上傾斜になる。東側壁面は、底面からやや緩やかに立ち上がる。



第117図 土坑30号・土坑31号

規模 長軸1.37m、短軸0.63m、最深部は0.23mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。黄褐色パミスの包含量(埋土1>埋土2)の違いで分層した。出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土中に、わずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑33号 (SK33: 第118図)

検出状況 F-35区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、東側から西側へ向かい緩やかに下傾斜した後、水平に広がる。西側壁面・東側壁面は、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.40m、短軸0.59m、最深部は0.17mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、褐色の土に黄褐色パミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄褐色パミス<薩摩火山灰となる。また、埋土1には、薩摩火山灰(XIII層)のブロックが混在している。埋土2は、極暗褐色の土に黄褐色パミスが含まれる土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑34号 (SK34: 第118図)

検出状況 I-53区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、北側先端に若干のくびれをもつ不定形横長である。底面は、ほぼ水平に広がる。南側壁面は、底面から垂直に立ち上がった後、ラッパ状に開口する。北側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

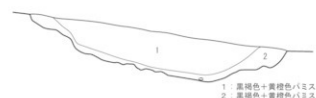
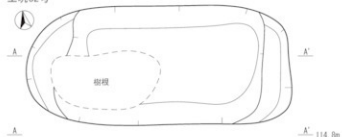
規模 長軸1.40m、短軸0.58m、最深部は0.28mである。

埋土 一部樹根による攪乱を受けているが、埋土は3つに分かれる。埋土1は黒色の土に黄褐色パミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄褐色パミス<薩摩火山灰となる。埋土2は、暗褐色の土に黄褐色パミスとまだら状にぶい赤褐色の土(XIV層)を含むが、薩摩火山灰(XIII層)は含まない土である。底面直上には、薩摩火山灰(XIII層)のブロックが堆積する。

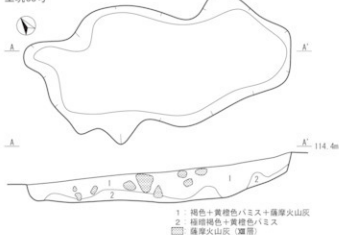
出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

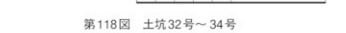
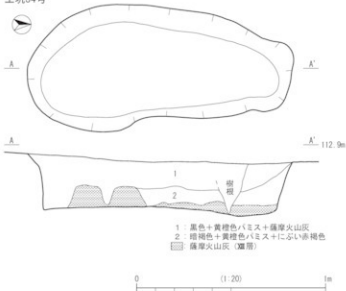
土坑32号



土坑33号



土坑34号



第118図 土坑32号～34号

土坑35号 (SK35: 第119図)

検出状況 F-22・23区, XIII層上面で検出された。検出時には、SK35と連続するように東側に小型の土坑と思われるシミ状の痕跡が確認できた。SK35を主穴、そのシミ状痕跡を従穴と考えて調査を行った。結果、シミ状痕跡部分は、SK35との間にブリッジやその痕跡が確認できなかったことや、壁面や底面が不安定だったことから、樹根跡とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、2つの段を有する。東側壁面は、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。西側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がった後、一度緩やかな立ち上がりになり、その後ほぼ垂直に開口する。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.35m、短軸0.62m、最深部は0.27mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑36号 (SK36: 第119図)

検出状況 F-23区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、中央に若干のくびれをもつ不定形横長である。底面は、南東壁面直下が柱穴状に掘り込まれ、北西側に向かいやや水平に広がる。南東側壁面・南西側壁面は、ともに底面からやや垂直気味に立ち上がる。掘り込みは、XIV層まで達する。

規模 長軸1.30m、短軸0.64m、最深部は0.35mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。黄橙色パミスの包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。埋土3は、茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

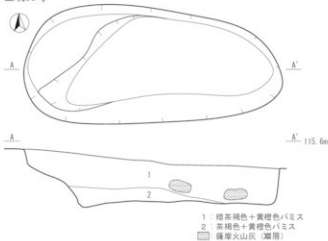
土坑37号 (SK37: 第119図)

検出状況 L-53区, XIII層上面で検出された。

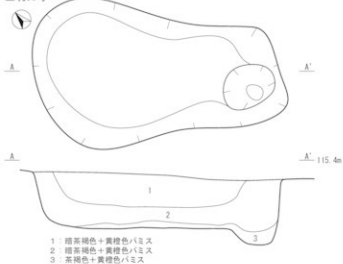
切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、北側から南側に向かって緩やかに下傾斜する。北側壁面・南側壁面は、ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

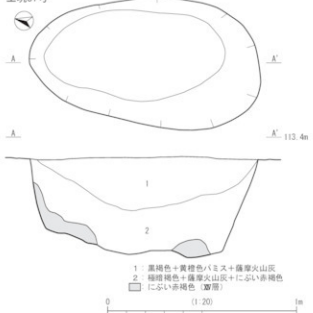
土坑35号



土坑36号



土坑37号



第119図 土坑35号～37号

規模 長軸1.22m、短軸0.67m、最深部は0.53mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄褐色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄褐色バミス>薩摩火山灰となる。埋土2は、極暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とまだら状にぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。底面直上の一部には、ぶい赤褐色の土(XIV層)の土が堆積している。

出土遺物 遺物は、出土していない。
炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑38号(SK38:第120図)

検出状況 F-24区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、ほぼ水平に広がる。南西側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。北東側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸1.29m、短軸0.50m、最深部は0.30mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄褐色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄褐色バミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑39号(SK39:第120図)

検出状況 K-49区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、ほぼ水平に広がる。北側壁面は、底面から垂直に立ち上がる。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸1.26m、短軸0.55m、最深部は0.33mである。

埋土 埋土は4つに分かれる。埋土1は、黒色の土に黄褐色バミスを含む土である。埋土2・埋土3・埋土4は、ともに黒褐色の土である。それぞれの埋土に含まれる土(埋土2:黄褐色バミスと薩摩火山灰、埋土3:黄褐色バミス、埋土4:薩摩火山灰とぶい赤褐色の土)の違い等で分層した。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑40号(SK40:第120図)

検出状況 F-46区、X層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面はほぼ水平に広がる。南西側壁面・北東側壁面は、ともに底面から

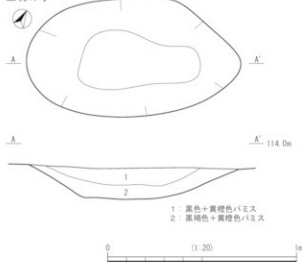
土坑38号



土坑39号



土坑40号



第120図 土坑38号～40号

やや緩やかに立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。規模 長軸1.13m、短軸0.63m、最深部は0.17mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒色の土にわずかに黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、黒褐色の土にわずかに黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土1・埋土2に、わずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑41号 (SK41：第121図)

検出状況 E-25区、XIII層上面で検出された。本土坑の南側には樹根による攪乱が確認された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、水平に広がる。北西側壁面・南東側壁面は、ともにやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.05m、短軸0.68m、最深部は0.25mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)をわずかに含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑42号 (SK42：第121図)

検出状況 E-25区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、東側から西側へ緩やかに下傾斜する。東側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。西側壁面は、底面から東側よりもやや緩やかに立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.10m、短軸0.60m、最深部は0.18mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)をわずかに含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

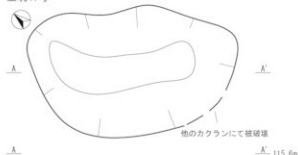
土坑43号 (SK43：第121図)

検出状況 F-24・25区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

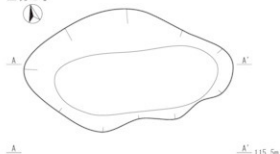
形状 平面の形状は、東側に若干のくびれをもつ不定形横長である。底面は、東側から西側に向かって数段有しながら緩やかに下傾斜する。西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。

土坑41号



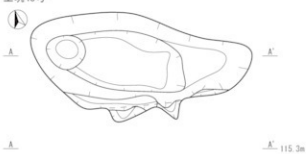
1：黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

土坑42号



1：黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

土坑43号



1：黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

第121図 土坑41号～43号

規模 長軸1.15m、短軸0.52m、最深部は0.30mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色パミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑44号(SK44:第122図)

検出状況 I-46区、XIII層上面で検出された。検出時の形状から、連穴土坑の可能性を考慮し調査を進めた。結果、ブリッジやその痕跡、明確な被熱痕が確認できなかったことから、連穴土坑とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、南側から北側へ向かって緩やかに下傾斜する。南側壁面は、底面からやや緩やかに立ち上がる。北側壁面は、底面から垂直に立ち上がる。

規模 長軸1.12m、短軸0.54m、最深部は0.21mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とまだら状にぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。埋土2は、極暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とまだら状にぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑45号(SK45:第122図)

検出状況 F-20区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、南東側から北西側に向かって緩やかに下傾斜する。北西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.08m、短軸0.57m、最深部は0.34mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色パミスとぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑46号(SK46:第122図)

検出状況 E-23区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、

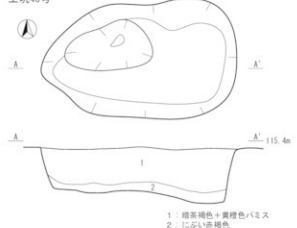
土坑44号



土坑45号



土坑46号



第122図 土坑44号～46号

一部に見られる凹みは、樹根の影響の可能性もあるが、西側から東側へ向かって緩やかに下傾斜する。西側壁面・東側壁面は、ともに底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.03 m、短軸0.60 m、最深部は0.30 mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。埋土2は、にぶい赤褐色でXIV層に類似する土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑47号 (SK47: 第123図)

検出状況 J-53区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面はほぼ水平に広がる。北側壁面・南側壁面は、ともに底面からほぼ垂直に立ち上がる。

規模 長軸1.03 m、短軸0.57 m、最深部は0.40 mである。

埋土 一部樹根による影響を受けているが、埋土は3つに分かれる。埋土1は、黒色の土である。埋土2は、黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。埋土3は、暗褐色の土にとまだら状ににぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑48号 (SK48: 第123図)

検出状況 M-55区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

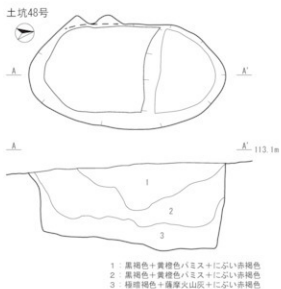
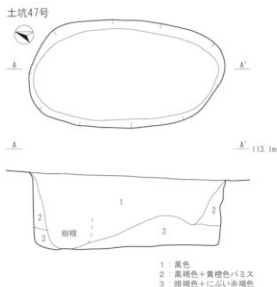
形状 一部樹根による影響が確認されたが、平面の形状は、横長である。底面は、南側から北側へ向かって緩やかに下傾斜する。南側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がった後、やや急傾斜で開口する。北側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がった後、垂直に開口する。

規模 長軸1.04 m、短軸0.56 m、最深部は0.46 mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、黒褐色の土に黄褐色パミスとまだら状ににぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。埋土3は、極暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。



第123図 土坑47号・土坑48号

土坑49号 (SK49: 第124図)

検出状況 E・F-22区, XIII層上面で検出された。検出時には, SK49と連続するように西側に小型の土坑と思われるシミ状の痕跡が確認できた。SK49を主穴, そのシミ状痕跡を従穴と考えて調査を行った。結果, シミ状痕跡部分は, SK49との間にブリッジとその痕跡が確認できなかったことや, 壁面や底面が不安定だったことから, 樹根跡とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は, 不定形横長である。底面は, ほぼ水平に広がる。西側壁面・東側壁面は, ともに急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸1.04m, 短軸0.55m, 最深部は0.30mである。

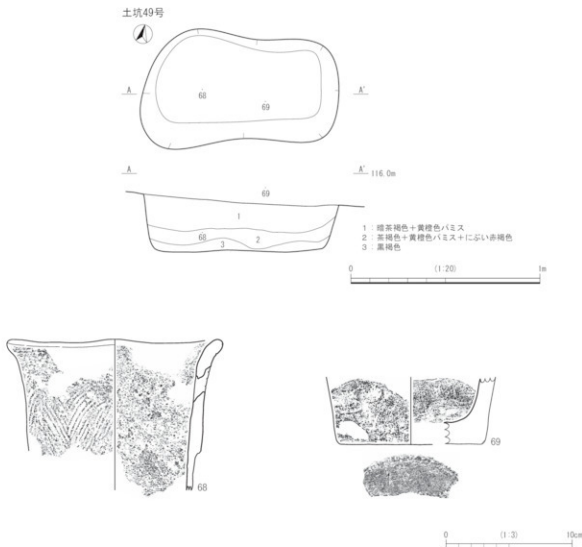
埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は, 暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は, 茶褐色

の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。埋土3は, 黒褐色の土(XV層)である。

出土遺物 埋土中からは, 3点の遺物が出土し, そのうち2点を図化した。68(第124図)は, 外反しやや波状になる口縁部である。内外面ともに, 摩滅や剥落が著しいが, 口縁部外面上部には横位刺突文を, その直下には綾杉状の条痕文を施す。焼成後に開けたと思われる穿孔が口縁部近くにある。69は, 平底になる底部である。底部外面は, やや光沢を帯びている。胴部は摩滅が著しいが, 底部外面端部には, キザミを施す。底部内面は, 指おさえが確認できる。68と69が同一個体かどうかの判別はできない。もう1点は, 極小破片かつ剥落が激しいため, 型式等の判断はできなかった。

土器分類 68・69は, ともにIV類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は, 確認されなかった。



第124図 土坑49号・出土遺物

土坑50号 (SK50 : 第125図)

検出状況 F・G-22区, XIII層上面で検出された。検出時には, SK50の南側に近接してSK91が検出された。SK50を主穴, SK91を従穴として調査を行った。結果, トンネルやブリッジの痕跡が確認できなかったため, 別々の土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は, 不定形横長である。底面は, 南側から北側へ向かって緩やかに傾斜する。南側壁面は, 底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は, 底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは, XIII層で収まる。

規模 長軸1.20m, 短軸0.37m, 最深部は0.36mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は, 暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は, 茶褐色の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は, 確認されなかった。

土坑51号 (SK51 : 第125図)

検出状況 I-46区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

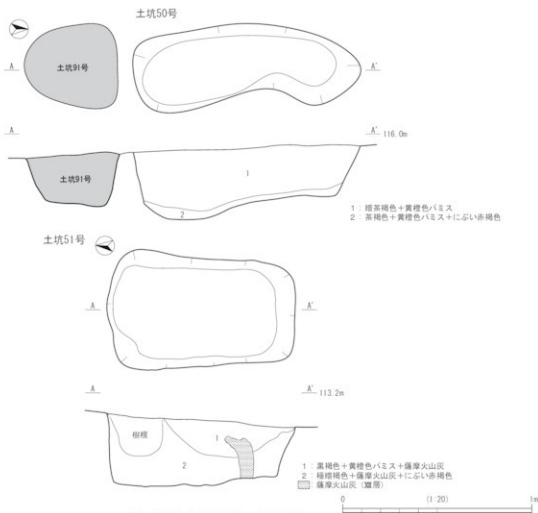
形状 平面の形状は, 横長である。底面は, ほぼ水平に広がる。北側壁面は, 底面からほぼ垂直気味に立ち上がる。南側壁面は, 底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸1.00m, 短軸0.57m, 最深部は0.36mである。

埋土 一部樹根による影響を受けているが, 埋土は3つに分かれる。埋土1は, 黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は, 黄橙色バミス>薩摩火山灰となる。埋土2は, 極暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とまだら状ににぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は, 確認されなかった。



第125図 土坑50号・土坑51号

土坑52号 (SK52: 第126図)

検出状況 D-9区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。掘り込みの一部は、XIV層まで達している。底面は、北東から南西に向かって緩やかに下傾斜するが、南東壁面付近で緩やかな傾斜になる。北東壁面・南西壁面は、ともに底面からはほぼ垂直気味に立ち上がる。

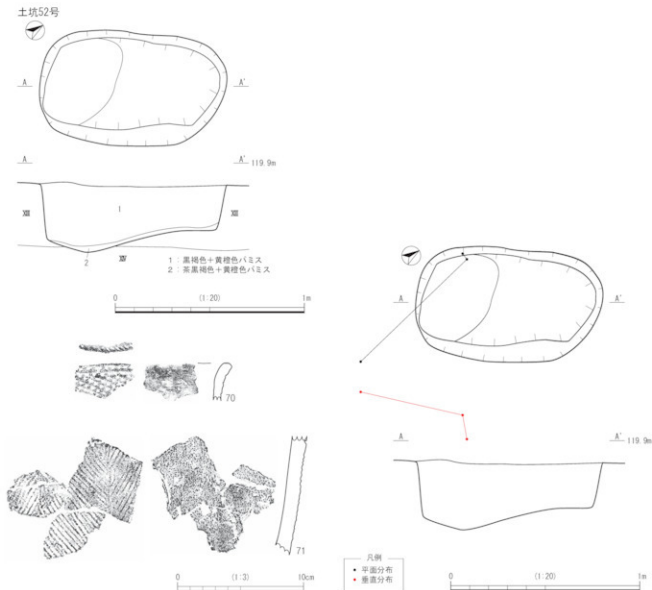
規模 長軸0.98m、短軸0.58m、最深部は0.35mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 埋土1からは、5点の遺物が出土した。うち3点は土器片で、2点は礎であった。そのうち2点を図化した。70(第126図)は、口縁部である。外反する口縁部外面上部に、横位刺突文を2条施し、その直下に、斜位刺突文を施す。また、やや膨らんだ口唇部頂上には、幅3~5mm程度のキザミを施す。内面は、ナデをおこなう。71(第126図)は、胴部外面に貝殻条痕文を施す。包含層出土遺物3点と接合した。胴部上位の一部に方向は不明瞭だが、刺突文を施し、その下位には、綾杉状の条痕文を施す。内面はナデをおこなう。図化した2点は胎土や器壁の厚みの違いから同一個体ではないと判断した。

土器分類 土器片は、いずれもIV類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。



第126図 土坑52号・出土遺物・分布図

土坑53号 (SK53：第127図)

検出状況 B-23区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、南側壁面直下から北側に向かってやや急な下傾斜だが、北側壁面付近で急傾斜になった後、そのまま垂直に立ち上がる。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

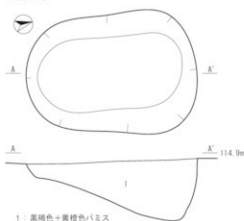
規模 長軸0.90m、短軸0.62m、最深部は0.33mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土にわずかに黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑53号



1：黒褐色+黄橙色バミス

土坑54号 (SK54：第127図)

検出状況 B-13区、XIII層上面で検出された。

切り合い 堅穴住居跡3号 (SH3) と切り合う。埋土がSH3と一様であることから、SH3との新旧関係は不明確であるが、SH3に伴う施設とは断定し難い。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、ほぼ水平に広がる。西側壁面・東側壁面は、ともにほぼ垂直気味に立ち上がる。掘り込みは、XIV層まで達する。

規模 長軸0.90m、短軸0.61m、最深部は0.25mである。

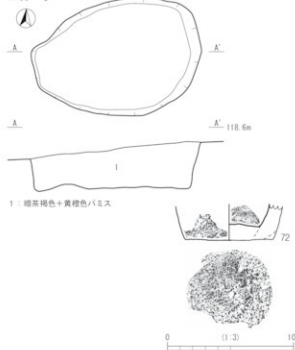
埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 埋土中からは、1点の遺物が出土し、図化した。72 (第127図) は、底部である。内外面ともに剥落が激しく施文等の有無が判断できなかった。接合痕が確認できる。はじめに底部の円盤を作り、その側面に胴部を貼り付けたと推測できる。

土器分類 明確な型式判断はできなかった。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑54号



1：暗茶褐色+黄橙色バミス

土坑55号 (SK55：第127図)

検出状況 D-26区、XIII層上面で検出された。一部樹根による影響を受けている可能性がある。

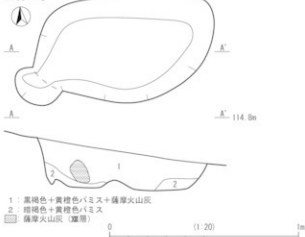
切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、中央と東側に一部凸部をもつが水平に広がる。西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.90m、短軸0.57m、最深部は0.23mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰 (XIII層) を含む土である。埋土2は、暗褐色の土に黄橙色バミスを含むが薩摩火山灰 (XIII層) は含まない土である。また、埋土1の下部の

土坑55号



1：黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰
2：暗褐色+黄橙色バミス
3：薩摩火山灰 (XIII層)

第127図 土坑53号・土坑54号・出土遺物・土坑55号

一部に薩摩火山灰 (XIII層) のブロックが確認できる。
 出土遺物 遺物は出土していない。
 炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑56号 (SK56: 第128図)

検出状況 D-26区, XIII層上面で検出された。
 切り合い 切り合いはない。
 形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、北西側に柱状の凹み部があり、中央から南東側にかけて水平に広がる。北西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。
 規模 長軸0.96m、短軸0.51m、最深部は0.39mである。
 埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。その包含量は、埋土1<埋土2となる。また、埋土2には、ごくわずかだが薩摩火山灰 (XIII層) が含まれる。

出土遺物 遺物は、出土していない。
 炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

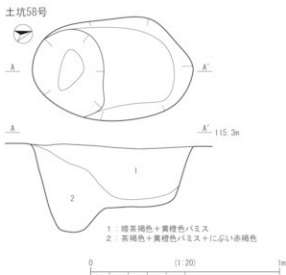
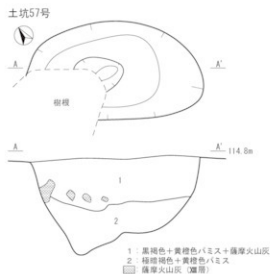
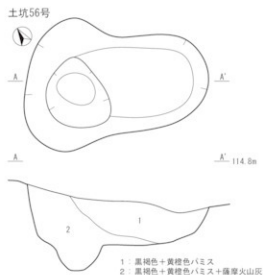
土坑57号 (SK57: 第128図)

検出状況 E-32区, XIII層上面で検出された。
 切り合い 切り合いはない。
 形状 一部、樹根の攪乱を受け推定だが、平面の形状は横長とした。北西側壁面は、最深部位置からやや急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は、最深部位置からやや緩やかに立ち上がった後、水平に広がるが、再度やや急傾斜で開口する。
 規模 長軸0.91m、短軸0.52m、最深部は0.51mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰 (XIII層) を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス<薩摩火山灰となる。埋土2は、極暗褐色の土にごくわずかに黄橙色バミスを含むが、薩摩火山灰 (XIII層) は含まない土である。
 出土遺物 遺物は出土していない。
 炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑58号 (SK58: 第128図)

検出状況 F・G-23区, XIII層上面で検出された。
 切り合い 切り合いはない。
 形状 平面の形状は、横長である。底面は、北側に柄杓の柄を置いたような形状で、南側に柱状の凹み部をもち、北側は水平に広がる。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。北側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIV層まで達している。
 規模 長軸0.85m、短軸0.54m、最深部は0.47mである。



第128図 土坑56号～58号

埋 土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色バミスとぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭 化 物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑59号(SK59:第129図)

検出状況 B-22区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形 状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、北西から南東に向かって緩やかに下傾斜する。南東側壁面は、床面から急傾斜で立ち上がる。北西側壁面は、床面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規 模 長軸0.89m、短軸0.50m、最深部は0.19mである。

埋 土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭 化 物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑60号(SK60:第129図)

検出状況 N-57区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形 状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、水平に広がる。西側壁面・東側壁面は、ともにほぼ垂直に立ち上がる。

規 模 長軸0.93m、短軸は0.45m、最深部は0.39mである。

埋 土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や薩摩火山灰の包含量(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭 化 物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑61号(SK61:第129図)

検出状況 E-10区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形 状 平面の形状は、横長である。北側壁面上部から緩やかに下傾斜した後、やや水平に広がり、その後急傾斜で立ち上がり南側壁面を形成する。掘り込みは、XIII層で収まる。

規 模 長軸0.86m、短軸0.50m、最深部は0.22mである。

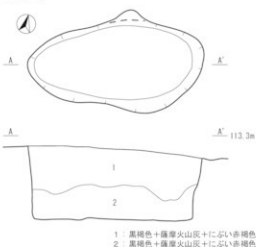
埋 土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の

土坑59号



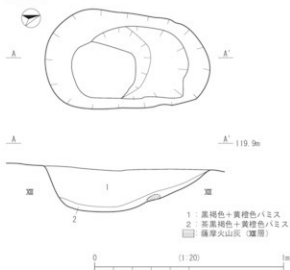
1: 黒褐色+黄橙色バミス

土坑60号



1: 黒褐色+薩摩火山灰+ぶい赤褐色
2: 黒褐色+薩摩火山灰+ぶい赤褐色

土坑61号



1: 黒褐色+黄橙色バミス
2: 黒褐色+黄橙色バミス
■ 薩摩火山灰(埋層)

第129図 土坑59号～61号

土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。底面直上の一部には、薩摩火山灰(XIII層)のブロックが堆積している。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑62号 (SK62: 第130図)

検出状況 M-55区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。東側壁面は、ほぼ垂直に掘り込まれた後、西側へやや緩やかに下傾斜し、その後ほぼ水平に広がる。西側壁面は、底面からやや壁面を掘り込むように弧状に立ち上がる。

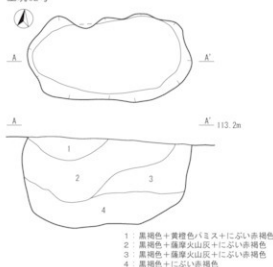
規模 長軸0.87m、短軸0.44m、最深部は0.47mである。

埋土 埋土は4つに分けられる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスとまだら状にふい赤褐色の土(XIV層)は含むが、薩摩火山灰(XIII層)は含まない土である。埋土2・埋土3も、ともに黒褐色の土で薩摩火山灰(XIII層)とまだら状にふい赤褐色の土(XIV層)は含むが、黄橙色バミスは含まない土である。薩摩火山灰の包含量(埋土2<埋土3)の違いで分層した。また、埋土4も、黒褐色の土にふい赤褐色の土(XIV層)は含むが、黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含まない土である。

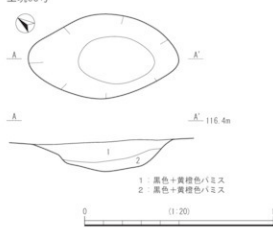
出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑62号



土坑63号



第130図 土坑62号・土坑63号

土坑63号 (SK63: 第130図)

検出状況 C-21区, XI層で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形横長である。底面は、中央が若干凹むが水平に広がる。南東側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。北西側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がった後、緩やかに開口する。

規模 長軸0.79m、短軸0.45m、最深部は0.16mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。しよりの強さ(埋土1>埋土2)や炭化物の有無(埋土1:なし、埋土2:わずかに有り)等の違いで分層した。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土2に、わずかな炭化物を確認したが、採取等ではできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑64号 (SK64: 第131図)

検出状況 E・F-29区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、水平に広がる。南側壁面・北側壁面は、ともに底面から垂直気味に立ち上がる。

規模 長軸0.72m、短軸0.44m、最深部は0.38mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。その包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 埋土中から、遺物が1点出土し、図化した。73(第131図)は花崗岩製の石皿である。破片資料で、扁平な石材の片面を使用面としている。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑65号 (SK65: 第131図)

検出状況 D-25区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、横長である。底面は、一部樹根の影響を受けている。東側壁面は、底面からやや緩やかに立ち上がる。西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がった後、一段有するが、すぐにやや急傾斜で開口する。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.67m, 短軸0.44mである。最深部は0.14mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスとごくわずかに炭化物を含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土に、ごくわずかな炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑66号 (SK66: 第131図)

検出状況 G-24区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

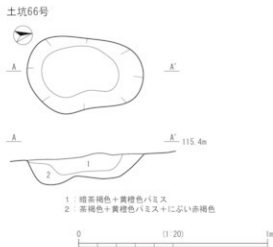
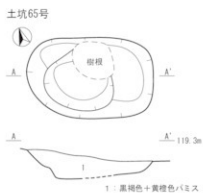
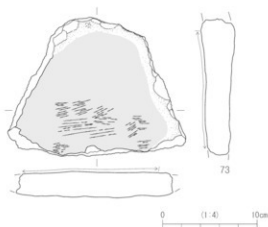
形状 平面の形状は、不定形横長である。北側壁面上部からやや急傾斜で南側へ掘り込まれた後、ほぼ水平に広がって段を有するが、再度、緩やかに南側へ下傾斜し、最深部となる。その後、やや急傾斜で南側壁面を形成する。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.62m, 短軸0.38m, 最深部は0.14mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土(XIII層)を含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1<埋土2となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。



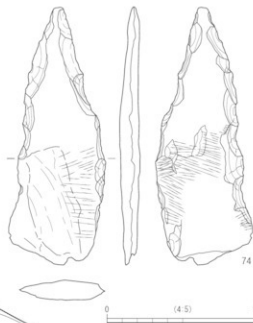
第131図 土坑64号・出土遺物・土坑65号・土坑66号

タイプM

土坑67号 (SK67: 第132図)

検出状況 E-17・18区, XIII層上面で検出された。検出時の形状や規模から、堅穴住居跡の可能性を考慮し、半截等を行い調査を進めた。結果、平面形状や壁面の立ち上がりの不安定さから、堅穴住居跡とはせず土坑とした。

土坑67号



1: 黒褐色+黄棕色パズル



第132図 土坑67号・出土遺物

切り合い SK67は、SK4とSK7によって切られている。SK67の方が、SK4・SK7以前に構築されていた。

形状 平面の形状は、不定形方形である。底面は、多少の凸凹はあるが、ほぼ水平に広がる。北側壁面・西側壁面は、ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。南側壁面・東側壁面は、ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸2.09m、短軸1.80m、最深部は0.16mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 74(第132図)はホルンフェルス製の石槍である。両側縁より押圧剥離を施したのち、表裏両面を研磨し薄く成形している。形状から刺突具としての使用も考えられる。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑68号(SK68:第133図)

検出状況 C-24区、XIII層上面で検出された。検出時の形状が方形であったため、堅穴住居跡の可能性を考慮して調査を行った。結果、底面に凹凸が多く、貼床も確認できなかったことから堅穴住居跡とはせず土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、方形である。底面は、凹凸が多く見られる。東側壁面・西側壁面は、ともに急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

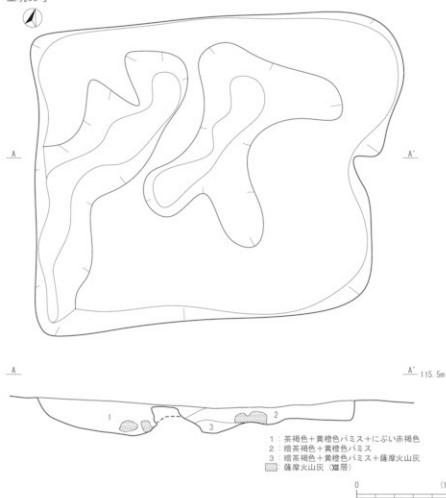
規模 長軸1.68m、短軸1.60m、最深部は0.17mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、茶褐色の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)が含まれる土である。埋土2・埋土3は、ともに暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土中には、薩摩火山灰(XIII層)やにぶい赤褐色の土(XIV層)のブロックが認められる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑68号



第133図 土坑68号

土坑69号 (SK69: 第134図)

検出状況 C-23区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、円形である。底面は、緩やかな波状を形する。南西側壁面・北東側壁面は、ともにやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で取まる。

規模 長軸1.58m, 短軸1.22m, 最深部は0.10mである。

埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。一部には、薩摩火山灰(XIII層)のブロックが認められる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑70号 (SK70: 第135図)

検出状況 B・C-14区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形円形である。底面は、北東側から南西側に向かって緩やかに下傾斜する。北東側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。南西側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がった後、一段有るようにやや水平に広がって、再びほぼ垂直に開口する。掘り込みは、XV層上面まで達する。

規模 長軸1.53m, 短軸1.24m, 最深部は0.63mである。

埋土 埋土は単層で、茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 埋土中や検出面上から、14点の遺物が出土した。石器は、磨石・敲石が4点、石皿が1点、9点は鏝であった。そのうち5点を図化した。75～79(第135図)は安山岩製の磨石・敲石類で、いずれも扁平な円鏝を用いている。75・76は表裏両面を磨面に使用し、側面全体に敲打痕が認められる。77は下半分が欠損しており、残存部分の全体を磨面に使用している。78は安山岩製の石皿である。破片資料で扁平な鏝の表裏両面を使用面としている。被熱しており右側欠損部にスス、タールが付着する。79は表裏両面を磨面に使用するが、表面および側面の敲打痕は範囲が狭い。被熱しており裏面にススが付着する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

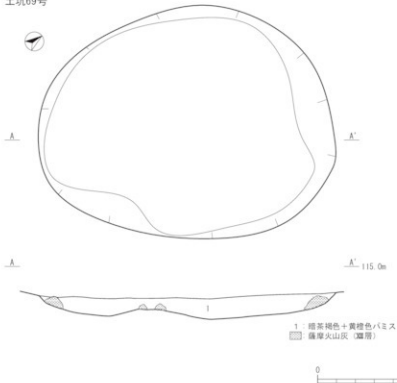
土坑71号 (SK71: 第136図)

検出状況 C-13区, XIII層上面で検出された。

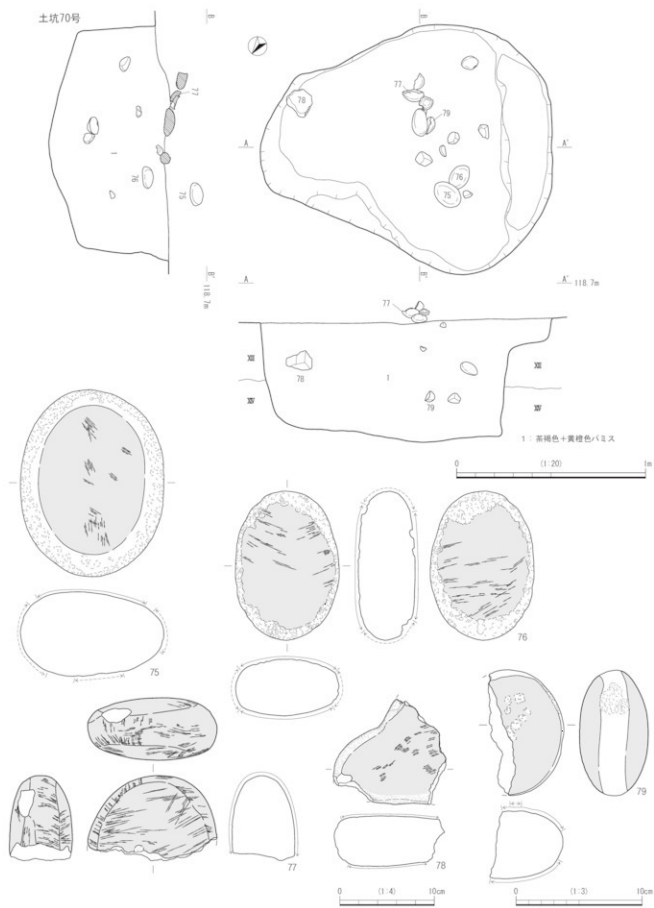
切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。底面は、西側から東側に向かってスロープ状に傾斜している。西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がった後、やや急傾斜になって開口する。掘り込みは、XIV層まで達している。

土坑69号



第134図 土坑69号



第135图 土坑70号·出土遗物

規模 長軸1.28m、短軸1.20m、最深部は0.44mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、褐色の土に黄橙色バミスは含まない土である。埋土2は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土3は、埋土2に薩摩火山灰(XIII層)が混入している土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑72号(SK72:第136図)

検出状況 F-22区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、方形である。底面は水平に広がる。西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.40m、短軸1.00m、最深部は0.26mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑73号(SK73:第136図)

検出状況 E-32区、XII層で検出された。検出時の形状が、不明瞭だったため、サブトレンチを設定し、土坑の範囲を確認した。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形円形である。底面は、検出面のおよそ1/5の大きさで水平に広がる。南側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がった後、緩やかになるが、その後急傾斜で開口する。北側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がった後、一段有した後にやや急傾斜で開口する。

規模 長軸1.24m、短軸は1.14m、最深部は0.46mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス>薩摩火山灰となる。埋土2は、にぶい黄褐色の土に黄橙色バミスを含むが、薩摩火山灰(XIII層)を含まない土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土に、炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑74号(SK74:第136図)

検出状況 C-24・25区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。底面には、凹凸が一部に確認できる。北側壁面・南側壁面は、ともに底面からやや急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸1.27m、短軸1.06m、最深部は0.20mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス>薩摩火山灰となる。埋土1の一部には、薩摩火山灰(XIII層)のブロックが混在する。埋土2は、褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑75号(SK75:第137図)

検出状況 I-47・48区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

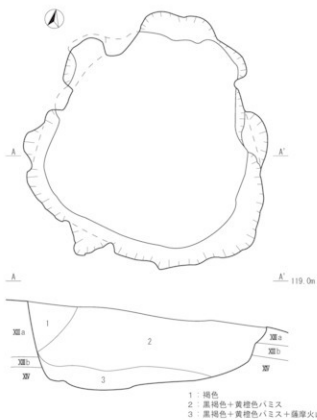
形状 平面の形状は、方形である。北側壁面上部から下部まで垂直に掘り込まれている。底面は、そこから水平に広がった後、緩やかに傾斜して南側壁面下部に至る。南側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みの一部は、XV層まで達している。

規模 長軸1.13m、短軸1.00m、最深部は0.36mである。

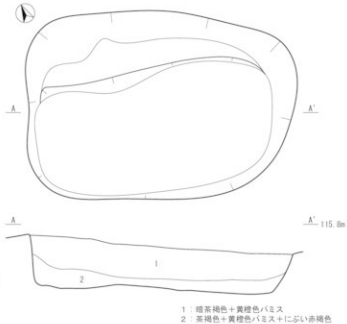
埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)やにぶい赤褐色の土の包含量(埋土1<埋土2)の違い等で層別した。

出土遺物 埋土中からは、21点の遺物が出土した。土器片が11点、石器が1点、礫が9点であった。そのうち土器2点と石器1点を図化した。80(第137図)は、SK75内出土遺物2点が接合した口縁部から胴部である。口縁部外面は、横位刺突文を2条施す。胴部外面は、綾杉状と縦位の貝殻条痕文を施す。刺突文と条痕文の施文順は、条痕文が先、横位刺突文が後となる。また、口唇部には幅2~3mm程度のキザミを施す。内面は、ナデをおこなう。81(第137図)は、SK75内出土遺物5点が接合した胴部から底部である。胴部外面は、斜位貝殻条痕文を底部端部近くまで施す。胴部内面はナデをおこなう。底部内面には指おさえが確認できる。80と81は、胎土・色調などが類似しているが、条痕文の幅に差異が見られ、接合しないことから、同一個体ではないと判断

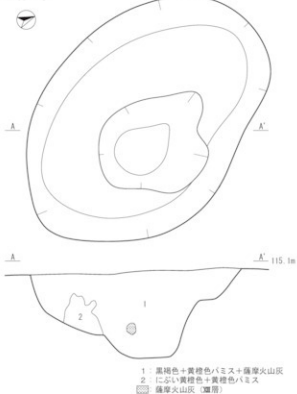
土坑71号



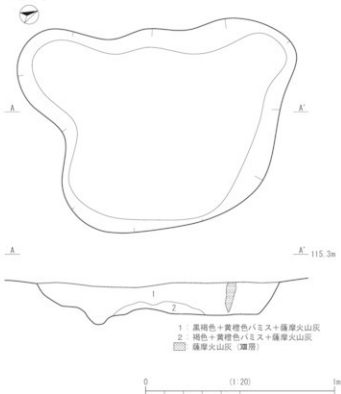
土坑72号



土坑73号

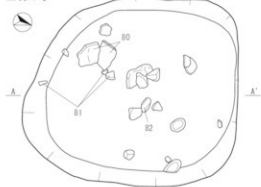


土坑74号

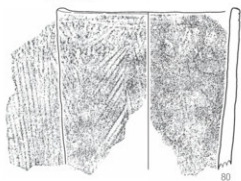
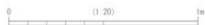


第136図 土坑71号~74号

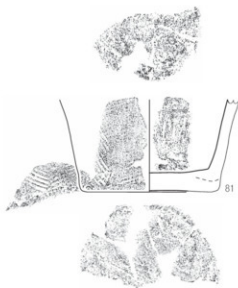
土坑75号



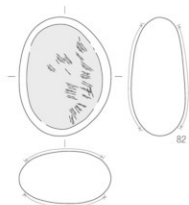
1 黒褐色+薩摩火山灰+にぶい赤褐色
2 黒褐色+薩摩火山灰+にぶい赤褐色



80



81



82



第137图 土坑75号・出土遺物

した。82 (第137図) はホルンフェルス製の磨石・敲石である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。遺物が全体的に、南西側から北西側に遺物は出土しているが、出土位置に差が見られる。南西側から北西側に流れ込んだ可能性が高い。

土器分類 80・81は、ともにIV類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑76号 (SK76: 第138図)

検出状況 G-22区。XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。西側壁面上部・東側壁面上部から、最深部に向かって弧を描くように掘り込まれ、丸底状になっている。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.88m、短軸0.84m、最深部は0.33mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色バミスとにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑77号 (SK77: 第138図)

検出状況 F-27区。XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、円形である。底面は、柄杓の柄の方を北側に向けて置いたように2つの段を有するように広がる。南側壁面・北側壁面は、ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸0.96m、短軸0.75m、最深部は0.44mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)や黄橙色バミスの包含量(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。

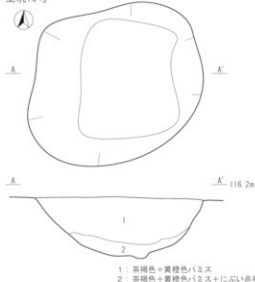
出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑78号 (SK78: 第138図)

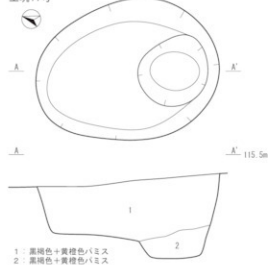
検出状況 I-51区。XI層で検出された。検出時には、ややまとまった状態で10個程度の小礫が確認された。当初は集石遺構を考慮して調査を行った。結果、礫が表面にしか確認されなかったことから、SK78に流れ込んできた可能性が高いと判断し、集石遺構とはせず土坑とした。

土坑76号



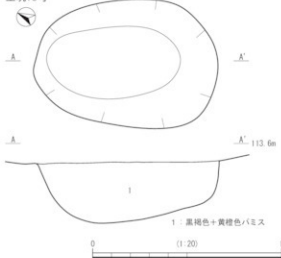
1: 茶褐色+黄橙色バミス
2: 茶褐色+黄橙色バミス+にぶい赤褐色

土坑77号



1: 黒褐色+黄橙色バミス
2: 黒褐色+黄橙色バミス

土坑78号



1: 黒褐色+黄橙色バミス

第138図 土坑76号～78号

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、方形である。面は、北西側から南東側に向かって緩やかに傾斜する。北西側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。南東側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸0.97m、短軸0.68m、最深部は0.31mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 埋土に、炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑79号 (SK79: 第139図)

検出状況 K-52区、XII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、円形である。底面は、水平に広がる。南西側壁面・北東側壁面は、ともにほぼ垂直気味に立ち上がる。

規模 長軸0.75m、短軸0.75m、最深部は0.25mである。

埋土 一部樹根による影響を受けているが、埋土は4つに分かれる。埋土1・埋土3は、ともに黒褐色の土に薩摩火山灰(XII層)とにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。にぶい赤褐色の土の包含量(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。また埋土1には、黄橙色バミスも含まれる。埋土2は、極暗褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XII層)、にぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。各埋土の薩摩火山灰とにぶい赤褐色の土、黄橙色バミスの包含量は、次のようになる。薩摩火山灰は、埋土1=埋土3<埋土2、にぶい赤褐色の土は、埋土1<埋土2<埋土3、黄橙色バミスは、埋土1>埋土2である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑80号 (SK80: 第139図)

検出状況 C-24区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形円形である。底面は、土坑中央より東側は水平に広がり、西側は若干掘り込まれている。西側壁面は、底面から緩やかに傾斜して立ち上がる。東側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.88m、短軸0.62m、最深部は0.15mである。

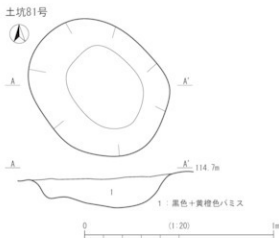
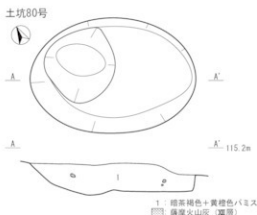
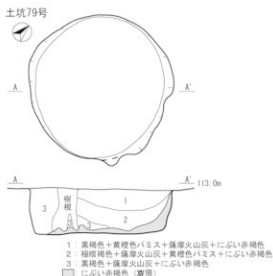
埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。一部に薩摩火山灰(XIII層)のブロックが認められる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑81号 (SK81: 第139図)

検出状況 B-25区、XII層で検出された。検出時に若干の礫が含まれており、掘り込みを伴う集石遺構の可能性



第139図 土坑79号～81号

性を考慮して調査を行った。結果、埋土中からはそれ以上の礫は出土しなかったことから、埋まる過程の凹みにたまったものと判断し、集石遺構とはしなかった。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、円形である。東側壁面上部から、底面に向かいやや急傾斜で掘り込まれた後、なだらかに西側へ向かってスロープ状に立ち上がる。その後、やや下傾斜となった後に、やや急傾斜で西側壁面を形成する。

規模 長軸0.74 m、短軸0.71 m、最深部は0.17 mである。

埋土 埋土は単層で、黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。炭化物も確認できた。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 埋土に、炭化物を確認したが、採取等はできなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑 82号 (SK82：第140図)

検出状況 C-24区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。南側壁面上部から底面へ向かいやや急傾斜に掘り込まれた後、やや緩やかになるが、再度やや急傾斜で底面へ達する。北側壁面上部から底面へ向かい緩やかに掘り込まれた後、急傾斜で底面へ達する。底面はやや弧状である。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.78 m、短軸0.69 m、最深部は0.26 mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1は、黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土3も、黒褐色の土であるが、黄橙色バミスは含まず、薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。一部に、薩摩火山灰(XIII層)のブロックが認められる。

出土遺物 埋土中からは、2点の遺物が出土した。そのうち1点を図化した。83(第140図)は、口縁部である。やや内湾する口縁部外面には貝殻復縁部による横位及び斜位の刺突文を施す。内面は、ナデをおこなう。図化できなかったもう1点は、胴部外面に、山形押型文を施す。

土器分類 83はV類に、もう1点はIX類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑 83号 (SK83：第140図)

検出状況 F-26・27区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

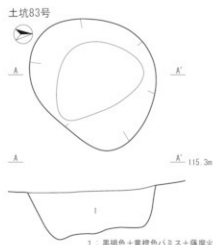
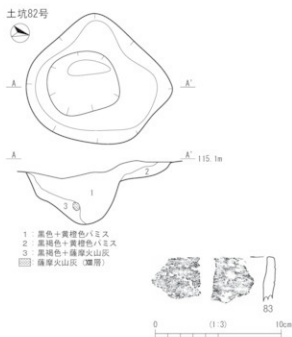
形状 平面の形状は、不定形円形である。底面は、北側から南側に向かって緩やかに下傾斜する。南側壁

面・北側壁面は、ともに底面から急傾斜で立ち上がる。規模 長軸0.68 m、短軸0.66 m、最深部は0.25 mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。



第140図 土坑82号・出土遺物・土坑83号

土坑84号 (SK84: 第141図)

検出状況 F-26・27区, XIII層上面で検出された。南東部は、掘りすぎのため破線を用いて、平面形状を推定ラインで示した。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形円形である。北側壁面上部から、底面に急傾斜で掘り込まれ、一度水平に広がる。その後、やや急傾斜で更に掘り込まれた後、急傾斜で立ち上がった後、ラッパ状に南側壁面を形成する。

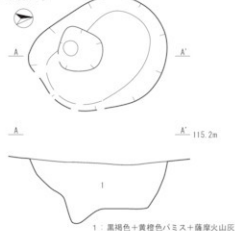
規模 長軸0.73m、短軸は推定で0.60m、最深部は0.32mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XIII層)を含む土である。その包含量は、黄橙色バミス<薩摩火山灰となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑84号



1: 黒褐色+黄橙色バミス+薩摩火山灰

土坑85号 (SK85: 第141図)

検出状況 E-8・9区, XIII層で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。西側壁面上部から急傾斜で底面へ掘り込まれ、そこから東側壁面へ向かって緩やかに急傾斜し、そのまま東側壁面上部へ向かう。掘り込みは、XIII層で収まる。

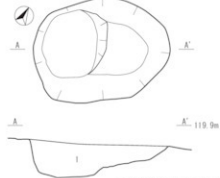
規模 長軸0.73m、短軸0.54m、最深部は0.18mである。

埋土 埋土は単層で、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土に、炭化物を確認し、採取したが科学分析等は行わなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑85号



1: 暗茶褐色+黄橙色バミス

土坑86号 (SK86: 第141図)

検出状況 E-22区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。底面は、中央より北西側は水平に広がり、中央より南東側へ緩やかに下傾斜する。南東側壁面・北西側壁面は、ともに急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

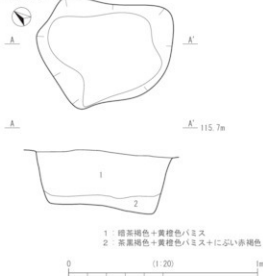
規模 長軸0.72m、短軸0.53m、最深部は0.30mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶黒褐色の色の土に黄橙色バミスと濃い赤褐色の土(XIV層)を含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑86号



1: 暗茶褐色+黄橙色バミス
2: 茶黒褐色+黄橙色バミス+濃い赤褐色

第141図 土坑84号～86号

土坑87号 (SK87: 第142図)

検出状況 G-23区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形円形である。底面は、土坑ほぼ中央におよそ半径5cmの水平な広がりを見せる。西側壁面上部・東側壁面上部は、ともに底面へ向かい緩やかに段を有するように掘り込んだ後、急傾斜で掘り込まれる。掘り込みは、XIV層まで達する。

規模 長軸0.65m、短軸0.50m、最深部は0.35mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色バミスと、にぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。黄橙色バミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

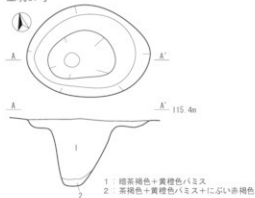
炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

の明るさ(埋土1<埋土2)や粘性の強さ(埋土1<埋土2)の違い等で分層した

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土1に、炭化物を確認したが、採取等ではなかった。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑87号



土坑88号 (SK88: 第142図)

検出状況 K・L-56区, XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、方形である。底面は、水平に広がる。西側壁面・東側壁面は、ともに底面からは垂直に立ち上がる。

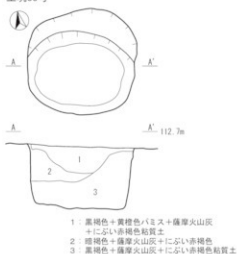
規模 長軸0.57m、短軸0.55m、最深部は0.33mである。

埋土 埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土3は、黒褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色粘質土(XIV層)を含む土である。薩摩火山灰の包含量(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。また、埋土1は、黄橙色バミスを含む。埋土2は、暗褐色の土に薩摩火山灰(XIII層)とにぶい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑88号



土坑89号 (SK89: 第142図)

検出状況 B-22区, XIII層上面で検出された。

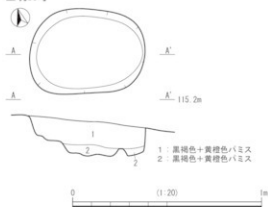
切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、方形である。底面は、3つの段を有する。西側壁面上部から東壁面へ向かい、急傾斜で掘り込まれわずかな段を有し、緩やかな下傾斜をしてさらに一段有する。その後再び急傾斜で掘り込まれ、東側壁面へ水平に広がる。東側壁面は、底面から垂直に立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.60m、短軸0.45m、最深部は0.18mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。色調

土坑89号



第142図 土坑87号～89号

土坑90号 (SK90：第143図)

検出状況 E-28・29区、XIII層上面で検出された。西側の一部は、樹根の影響の可能性もある。建物跡に伴う柱穴の可能性が考えられたが、周囲に本土坑と同様の土坑や住居跡のような遺構が確認されなかったため、土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形円形である。底面は、水平に広がる。北西側壁面・南東側壁面は、ともに底面から急傾斜で立ち上がる。

規模 長軸0.50m、短軸0.49m、最深部は0.30mである。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄褐色バミスと薩摩火山灰 (XIII層) を含む土である。その包含量は、黄褐色バミス>薩摩火山灰となる。一部に薩摩火山灰 (XIII層) のブロックが混在する。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑91号 (SK91：第143図)

検出状況 F-22区、XIII層上面で検出された。検出時には、SK91の北側に近接してSK50が検出された。SK91を従穴、SK50を主穴として調査を行った。結果、トンネルやブリッジの痕跡が確認できなかったため、

別々の土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。底面は、水平に広がる。南側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がる。北側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。掘り込みは、XIII層で取まる。

規模 長軸0.50m、短軸0.45m、最深部は0.28mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄褐色バミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄褐色バミスとにぶい赤褐色の土 (XIV層) を含む土である。黄褐色バミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

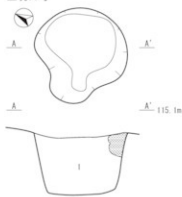
土坑92号 (SK92：第143図)

検出状況 C-22区、XIII層上面で検出された。建物跡に伴う柱穴の可能性が考えられたが、周囲に本土坑と同様の土坑や住居跡のような遺構が確認されなかったため、単独の土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

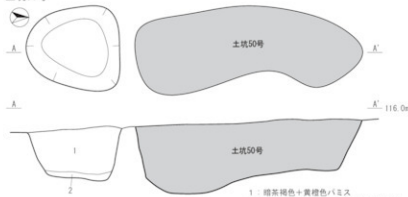
形状 平面の形状は、円形である。底面は水平に広がる。北西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。南

土坑90号



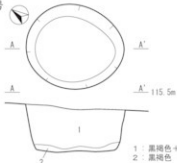
1 黒褐色+黄褐色バミス+薩摩火山灰
2 薩摩火山灰 (XIII層)

土坑91号



1 暗茶褐色+黄褐色バミス
2 茶褐色+黄褐色バミス+にぶい赤褐色

土坑92号



1 黒褐色+黄褐色バミス
2 黒褐色

土坑93号



1 暗茶褐色+黄褐色バミス
2 茶褐色+黄褐色バミス+にぶい赤褐色

第143図 土坑90号～93号

東側壁面は、底面から垂直気味に立ち上がる。

規模 長軸0.51m、短軸0.45m、最深部は0.25mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土2も、黒褐色の土だが、黄橙色パミスは含まない土である。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑93号 (SK93：第143図)

検出状況 G-22区、XIII層上面で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、不定形方形である。底面は、水平に広がる。西側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。東側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。掘り込みは、XIII層で収まる。

規模 長軸0.48m、短軸0.41m、最深部は0.25mである。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1は、暗茶褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。埋土2は、茶褐色の土に黄橙色パミスとふい赤褐色の土(XIV層)を含む土である。黄橙色パミスの包含量は、埋土1>埋土2となる。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

タイプV

土坑94号 (SK94：第144図)

検出状況 I-51区、X層で検出された。

切り合い 切り合いはない。

形状 平面の形状は、円形である。底面は、円形状に水平に広がる。南西側壁面・北東側壁面は、ともに底面から垂直気味に立ち上がった後、急傾斜で開口する。

規模 長軸0.40m、短軸0.36m、最深部は0.81mである。

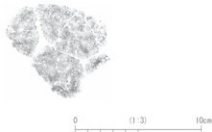
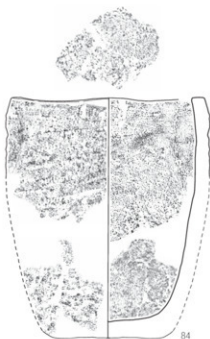
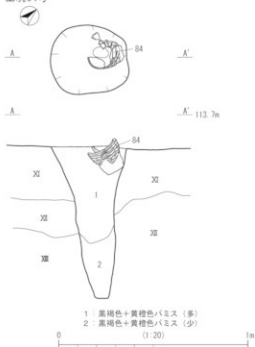
埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄橙色パミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)の違い等で分層した。

出土遺物 SK94の北壁に接するように口縁部を上に向け、南へ傾いた状況で土器が出土した。84(第144図)がそれである。84は、口縁部から底部までおよそ1/3が残存している。器面は剥落が著しく、外面に貝殻腹縁による刺突文を横位や斜位に施す。口縁部は内湾し、口唇部は平坦に面取りされ、ミガキのようなナデをおこない光沢を帯びる。内面はナデをおこなう。

土器分類 V類に該当する。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑94号



第144図 土坑94号・出土遺物

不明

土坑 95号 (SK95: 第145図)

検出状況 C-26区, XII層で検出された。北側が樹根による攪乱を受けているため、切り合い・形状・規模の全体は把握できない。検出時の形状から、竪穴住居跡の可能性を考慮し調査を行ったが、樹根による影響が大きかったため、土坑とした。

切り合い 切り合いはない。

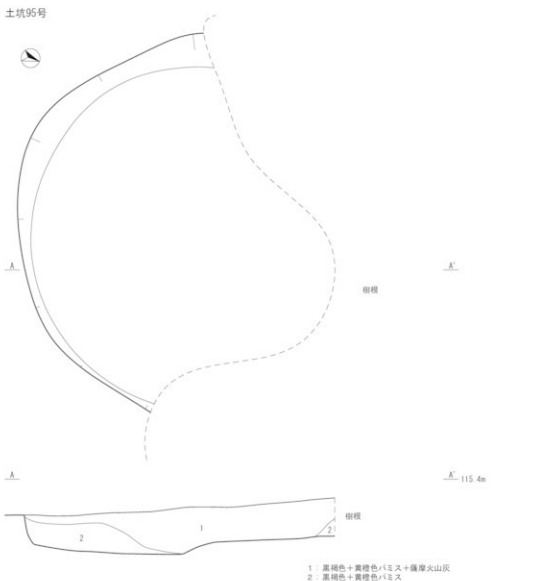
形状 西側壁面上部から、垂直気味に掘り込まれ底

面に達した後、緩やかに東へ下傾斜しながら広がる。その後、やや緩やかに傾斜するが、すぐに水平に広がる。

規模 不明である。

埋土 埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄褐色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1>埋土2)の違い等で分層した。また、埋土1には、薩摩火山灰(XIII層)もわずかに含まれる。出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。



第145図 土坑95号

土坑96号 (SK96: 第146図)

検出状況 B-23区, XI層, 現道から控えをとった境で検出された。検出面から底面近くで炭化物が多く確認できた。当初はXI層上面で検出したが, 壁面にXI層からの掘り込みが確認できたため, 拡張し調査を行った。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い 現状では, 切り合いはない。

形状 現状では, 北西側壁面は, 底面から急傾斜で立ち上がった後, ラッパ状に開口する。南東側壁面は, 底面からやや急傾斜で立ち上がった後, 緩やかになり, 再度やや急傾斜になって, その後, ほは垂直気味に開口する。

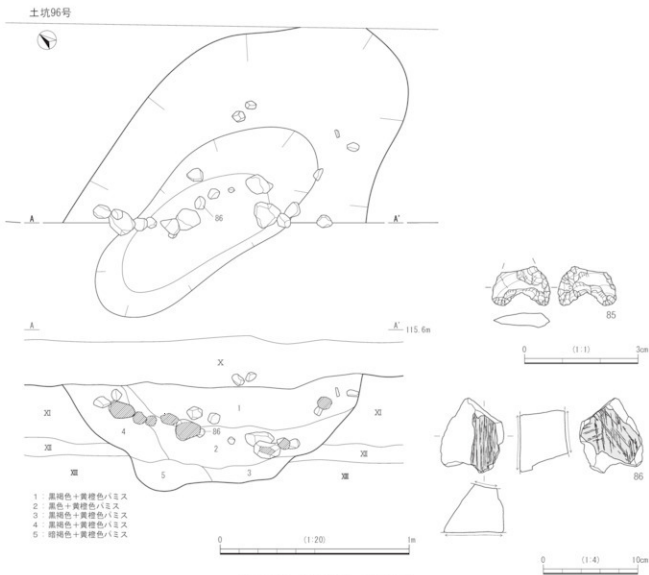
規模 現状では, 不明である。

埋土 現状では, 埋土は5つに分かれる。埋土1・埋土3・埋土4は, とともに黒褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1=埋土3<埋

土4)や黄橙色バミスの包含量(埋土1=埋土3>埋土4)の違い等で分層した。埋土2は, 黒色の土に黄橙色バミスを含む土である。埋土5は, 暗褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。各埋土の黄橙色バミスの包含量は, 埋土2<埋土4<埋土1=埋土3<埋土5となる。

出土遺物 埋土中から, 遺物が22点出土した。うち石器2点を図化した。85(第146図)は黒曜石製の凹基無茎鏃である。先端部を欠損する。表面に主要剥離面が残し, 基部にやや浅い抉りを持つ。86は砂岩製の石皿である。破片資料だが元は扁平な碟を用いたと考えられる。向かい合う2面に磨面が残し, 一方は平坦, もう一方は緩い傾斜も持つことから表裏を決定した。

炭化物 埋土中で採取した炭化物は, 科学分析の結果から, 燐茎(ノビル等の球根)であることが確認された。明確な焼土は確認されなかった。



第146図 土坑96号・出土遺物

土坑97号 (SK97: 第147図)

検出状況 B-23・24区, XⅢ層上面, 現道から控えをとった境で検出された。当初はXⅢ層上面で検出したが, 壁面上層からの掘り込みを確認したため, 安全面に配慮した上で拡張し, 壁面部分は2日間調査を行った。SK97は, 次年度以降の調査区内に広がる。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い 現状では, 切り合いはない。

形状 現状では, 底面は, 水平に広がる。北側壁面・南側壁面は, ともに底面から垂直に立ち上がった後, 急傾斜になり, その後ラッパ状に開口する。

規模 現状では, 不明である。

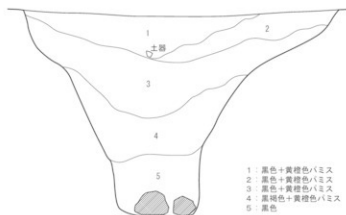
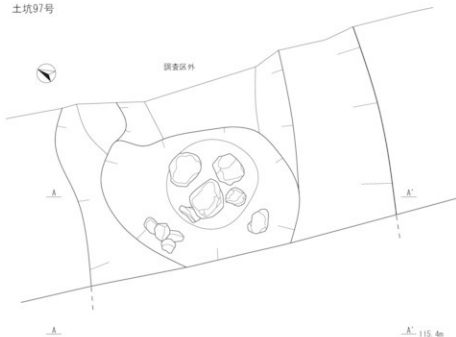
埋土 現状では, 埋土は5つに分かれる。埋土1・

埋土2・埋土3は, ともに黒色の土に黄橙色バミスと炭化物をわずかに含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1<埋土2<埋土3)の違い等で分層した。埋土5も, 黒色の土で炭化物を多く含むが, 黄橙色バミスは含まない土である。埋土4は, 黒褐色の土に黄橙色バミスと炭化物を含み, しまり具合が非常に強い土である。

出土遺物 遺物は, 壁面には土器片や礫が, 底面からは拳大~乳児の人頭大近くの礫が出土している。調査区外は, 今後調査予定のため, 壁面や底面にある土器や礫をそのまま埋め戻している。

炭化物 埋土中に, 炭化物を確認し採取したが, 科学分析等は行っていない。明確な焼土は, 確認されなかった。

土坑97号



- 1: 黒色+黄橙色バミス
- 2: 黒色+黄橙色バミス
- 3: 黒色+黄橙色バミス
- 4: 黒褐色+黄橙色バミス
- 5: 黒色

0 (1:20) 1m

第147図 土坑97号

土坑98号 (SK98：第148図)

検出状況 D-36区、XI層上面、平成25年度調査区外との境で検出された。検出時は、堅穴住居跡の可能性を考慮し調査を行った。結果、検出時より遺構が小規模になったり、全貌が見通せないことから、今回の調査では、土坑として取り扱うこととした。検出面はXII層中であつたが、調査区境の壁面に、XI層からの掘り込みが確認できた。平面の形状と断面が一致しないのはそのためである。SK98は、北側の樹根を切つて構築されている。SK98は、次年度以降の調査区内に広がる。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い 現状では、切り合いはない。

形状 現状では、北側壁面上部・南側壁面上部からお椀状に掘り込まれている。

規模 現状では、不明である。

埋土 現状では、埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。色調の明るさ(埋土1<埋土2)と黄褐色パミスの包含量(埋土1>埋土2)の違いで分層した。底面の一部に薩摩火山灰(XIII層)のブロックが確認できる。

出土遺物 遺物は、壁面に土器片が出土している。調査区外は、今後調査予定のため、壁面の土器はそのまま埋め戻している。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑99号・土坑100号 (SK99・SK100：第148図)

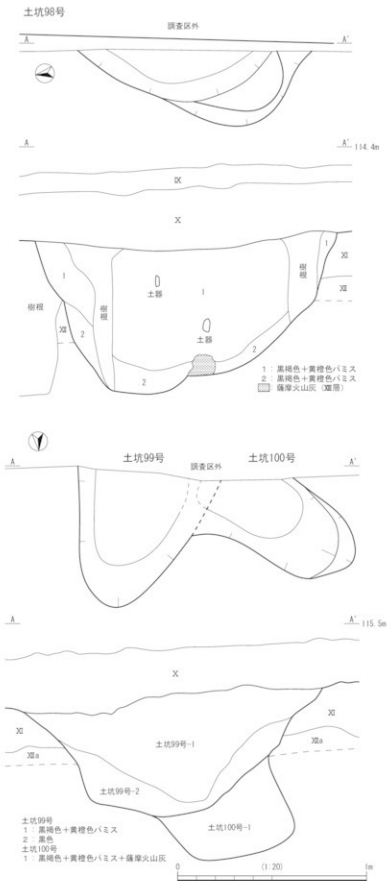
検出状況 B-30区、XII層、調査区外との境で検出された。平面の形状では、新旧の把握が難しかったが、調査区外との壁面で掘り込みの立ち上がりから、新旧関係を把握した。

切り合い 現状では、SK99が、SK100を切っている。

形状 SK99は、東側壁面上部から西側に向かってやや緩やかに掘り込まれた後、急傾斜になって掘り込まれ、その後水平気味に底面を構築する。西側壁面は、底面からやや急傾斜で立ち上がった後、急傾斜になり、その後ラップ状に開口する。SK100の底面は水平に広がる。

規模 現状では、不明である。

埋土 現状では、SK99の埋土は、2つに分かれる。埋土1は、黒褐色の土に黄褐色パミスを含む土である。埋土2は、黒色の土に黄褐色パミスは含まない土である。埋土1・2は、



第148図 土坑98号～100号

ともに炭化物をわずかに含む。現状では、SK100の埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスとごくわずかに薩摩火山灰(XIII層)火山灰を含む土である。底面付近には、にぶい赤褐色の土(XIV層)がまばらに混入している。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 埋土中に、炭化物を確認し採取したが、科学分析等は行っていない。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑101号(SK101:第149図)

検出状況 B-26区, XII層, 調査区外との境で検出された。壁面に検出面より上部から掘り込みがあることが確認できた。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い 現状では、切り合いはない。

形状 現状では、底面は、水平に広がる。北側壁面は、底面から垂直に立ち上がる。

規模 現状では、不明である。

埋土 現状では、埋土は3つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに極暗褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミスの包含量(埋土1>埋土2)の違いで分層した。埋土3は、明黄褐色の土である。黄橙色

バミスは含まない。埋土の一部に薩摩火山灰(XIII層)のブロックが混在する。

出土遺物 遺物は、出土していない。

炭化物 埋土中に、炭化物を確認し採取したが、科学分析等は行っていない。明確な焼土は、確認されなかった。

土坑102号(SK102:第149図)

検出状況 A-16区, XIII層上面, 調査区外との境で検出された。検出面はXIII層であるが、壁面から掘り込みはXI層から始まっていることが確認できた。

切り合い 現状では、掘り込みはない。

形状 現状では、底面は水平に広がる。西側壁面・東側壁面は、ともに底面から垂直に立ち上がる。掘り込みはXIV層まで達する。

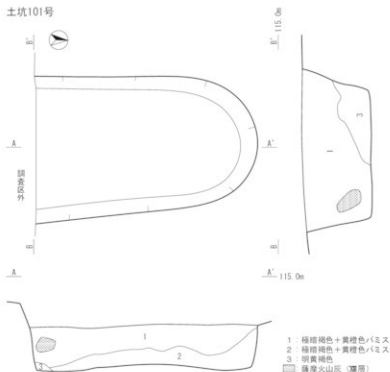
規模 現状では、不明である。

埋土 現状では、埋土は2つに分かれる。埋土1・埋土2は、ともに茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。黄橙色バミス以外の混入している土(埋土1:なし, 埋土2:にぶい赤褐色の土(XIV層))の違い等で分層した。

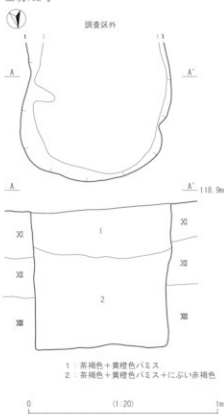
出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑101号



土坑102号



第149図 土坑101号・土坑102号

土坑103号 (SK103: 第150図)

検出状況 F-24区, XⅢ層上面で検出された。調査区外との境で検出された。壁面に検出面より上部から掘り込みがあることが確認できた。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い 現状では、切り合いはない。

形状 現状では、底面は水平に広がる。北側壁面は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。南側は、底面から壁面を少し掘り込みながら立ち上がり、その後逆「ノ」の字状になりながら開口する。

規模 現状では、不明である。

埋土 現状では、埋土は単層で、暗茶褐色の土に黄橙色バミスを含む土である。

出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑104号 (SK104: 第150図)

検出状況 F-27区, XⅢ層上面で検出された。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。南側一部は、樹根と思われる影響を受けている。切り合い・形状・規模の全体は把握できない。

切り合い 不明である。

形状 底面は、ほぼ水平に広がる。北側壁面は、底面から急傾斜で立ち上がる。

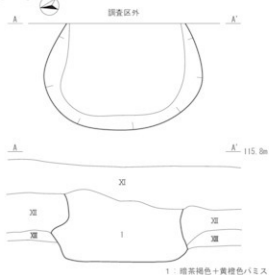
規模 不明である。

埋土 埋土は単層で、黒褐色の土に黄橙色バミスと薩摩火山灰(XⅢ層)をわずかに含む土である。

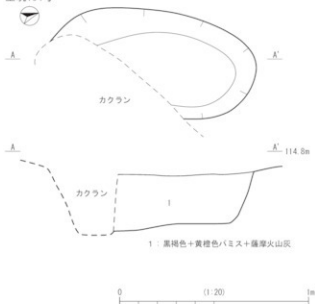
出土遺物 遺物は出土していない。

炭化物 炭化物や明確な焼土は、確認されなかった。

土坑103号



土坑104号



第150図 土坑103号・土坑104号

第26表 土坑一覽表1

遺跡名	検出区	検出層	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	炭 化 物	焼 土	遺 物	タイ プ	備 考	運次土坑の可能性											
											主軸		短軸 (m)	長深部 深さ	主軸× 短軸	ア	イ	ウ	エ	オ	可能性	
											長さ(m)	方位										
SK1	C-31	XII	楕長	2.06	0.75	—	—	—	I		2.06	南/北	0.75	0.35	2.75	○	○	○	○	○	○	○
SK2	C-33	XII	不定形楕長	1.99	0.70	—	—	—	I		1.95	南/北	0.66	0.50	2.05	○	○	○	○	○	○	○
SK3	E-17	XII	不定形楕長	1.76	0.56	—	—	—	I		1.76	北/南	0.56	0.42	3.14	○	○	○	○	○	○	○
SK4	E-17	XII	楕長	1.64	0.61	—	—	—	I	SK67と重複	1.64	西/東	0.61	0.35	2.69	○	○	○	○	○	○	○
SK5	E-34	XII	不定形楕長	1.70	0.53	—	—	—	I		1.70	南/北	0.53	0.32	3.21	○	○	○	○	○	○	○
SK6	C-D-32	XII	不定形楕長	1.50	0.58	—	—	—	I		1.56	南/北	0.58	0.40	2.69	○	○	○	○	○	○	○
SK7	E-17・18	XII	不定形楕長	1.59	0.42	—	—	—	I	SK67と重複	1.58	北/南	0.42	0.31	3.76	○	○	○	○	○	○	○
SK8	J-52	XII	不定形楕長	1.49	0.45	—	—	—	I		1.49	北西/南東	0.45	0.24	3.31	○	○	○	○	○	○	○
SK9	B-C-25	XII	不定形楕長	2.48	0.81	—	—	—	II		2.19	南西/北東	0.80	0.42	3.11	○	○	○	○	○	○	○
SK10	I-46	XII	楕長	1.37	0.70	—	—	—	I		1.37	北/南	0.70	0.34	1.96	○	○	○	○	○	○	○
SK11	J-50	XII	楕長	1.35	0.69	—	—	—	II		1.36	南/北	0.69	0.40	1.97	○	○	○	○	○	○	○
SK12	C-D-33	XII	楕長	1.39	0.58	○	—	—	II		1.39	北/南	0.58	0.63	2.40	○	○	○	○	○	○	○
SK13	E-28	XII	楕長	1.36	0.60	—	—	—	II		1.37	西/東	0.60	0.46	2.28	○	○	○	○	○	○	○
SK14	H-49	XII	楕長	1.33	0.59	—	—	—	II		1.33	北西/南東	0.59	0.30	2.25	○	○	○	○	○	○	○
SK15	J-48	XII	楕長	1.21	0.61	—	—	—	II		1.20	北/南	0.61	0.38	1.97	○	○	○	○	○	○	○
SK16	I-49	XII	楕長	1.23	0.55	—	—	—	II		1.23	北東/南西	0.55	0.30	2.24	○	○	○	○	○	○	○
SK17	C-31	XII	楕長	1.17	0.54	—	—	—	II		1.22	北西/南東	0.54	0.39	2.26	○	○	○	○	○	○	○
SK18	D-25	XII	不定形楕長	1.08	0.55	—	—	—	II		1.08	南/北	0.56	0.27	1.93	○	○	○	○	○	○	○
SK19	K-48	XII	不定形楕長	1.05	0.44	—	—	—	I		1.05	西/東	0.44	0.33	2.39	○	○	○	○	○	○	○
SK20	B-22-23	XII	不定形楕長	0.92	0.45	—	—	—	II		0.90	北東/南西	0.44	0.28	2.05	○	○	○	○	○	○	○
SK21	D-36	XII	不定形楕長	2.77	0.71	○	—	—	III		2.73	南/北	0.70	0.25	3.90	○	○	○	○	○	○	△
SK22	C-27	XII	不定形楕長	2.31	0.73	○	—	—	III		2.38	北/南	0.73	0.20	3.26	○	○	○	○	○	○	△
SK23	E-18	XII	不定形楕長	1.80	1.20	—	—	—	III		1.80	北/南	1.20	0.30	1.50	○	○	○	○	○	○	△
SK24	I-48	XII	不定形楕長	1.46	1.02	—	—	—	III		1.46	北/南	1.05	0.55	1.39	○	○	○	○	○	○	△
SK25	F-29	XII	不定形楕長	1.45	0.90	—	—	—	III		1.45	西/東	0.90	0.36	1.61	○	○	○	○	○	○	△
SK26	F-24	XII	楕長	1.38	0.75	—	—	—	III		1.37	南/北	0.75	0.32	1.83	○	○	○	○	○	○	△
SK27	C-26	XII	不定形楕長	1.57	(0.73)	—	—	—	III		1.57	南西/北東	(0.73)	0.36	—	—	—	—	—	—	—	—
SK28	F-25	XII	不定形楕長	1.27	0.88	—	—	—	III		1.26	北西/南東	0.90	0.23	1.40	○	○	○	○	○	○	△
SK29	C-25-26	XII	不定形楕長	1.54	0.57	○	—	—	III		1.54	南/北	0.57	0.41	2.70	○	○	○	○	○	○	△
SK30	K-51	XII	不定形楕長	1.37	0.59	—	—	—	III		1.41	北西/南東	0.61	0.32	2.31	○	○	○	○	○	○	△
SK31	E-34	XII	不定形楕長	1.13	0.79	○	—	—	III		1.19	南/北	0.80	0.48	1.49	○	○	○	○	○	○	△
SK32	C-27	XII	楕長	1.37	0.63	○	—	—	III		1.37	西/東	0.63	0.23	2.17	○	○	○	○	○	○	△
SK33	F-35	XII	不定形楕長	1.40	0.59	—	—	—	III		1.30	北西/南東	0.63	0.17	2.06	○	○	○	○	○	○	△
SK34	I-33	XII	不定形楕長	1.40	0.58	—	—	—	III		1.39	南/北	0.58	0.28	2.40	○	○	○	○	○	○	△
SK35	F-22-23	XII	楕長	1.35	0.62	—	—	—	III		1.35	西/東	0.62	0.27	2.18	○	○	○	○	○	○	△

第27表 土坑一覽表2

遺跡名	検出区	検出層	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	炭 化 物	焼 土	遺 物	ク イ ブ	備 考	運次土坑の可能性									
											長さ(m)	主軸 方位	短軸 (m)	最深部 深さ	主軸× 短軸	ア	イ	ウ	エ	オ
SK36	F-23	XII	不定形楕長	1.30	0.64	—	—	—	III		1.38	北西/南東	0.65	0.35	212	○	×	○	×	△
SK37	L-53	XII	楕長	1.22	0.67	—	—	—	III		1.22	南/北	0.67	0.53	182	○	×	○	×	△
SK38	F-24	XII	不定形楕長	1.29	0.50	—	—	—	III		1.30	南西/北東	0.52	0.30	250	○	○	○	○	○
SK39	K-49	XII	不定形楕長	1.26	0.55	—	—	—	III		1.26	北東/南西	0.55	0.33	229	○	×	○	○	○
SK40	F-46	X	楕長	1.13	0.63	○	—	—	III		1.13	南西/北東	0.63	0.17	179	○	○	○	×	△
SK41	E-25	XII	不定形楕長	1.05	0.68	—	—	—	III		1.06	北西/南東	0.68	0.25	156	○	×	○	×	△
SK42	E-25	XII	不定形楕長	1.10	0.60	—	—	—	III		1.07	西/東	0.58	0.18	184	○	×	○	×	△
SK43	F-24・25	XII	不定形楕長	1.15	0.52	—	—	—	III		1.16	北西/南東	0.56	0.30	207	○	○	○	○	○
SK44	I-46	XII	楕長	1.12	0.54	—	—	—	III		1.12	南/北	0.54	0.21	207	○	○	○	○	△
SK45	F-20	XII	不定形楕長	1.08	0.57	—	—	—	III		1.13	北西/南東	0.58	0.34	195	○	○	○	○	△
SK46	E-23	XII	不定形楕長	1.03	0.60	—	—	—	III		1.03	西/東	0.60	0.30	172	○	○	○	×	△
SK47	J-53	XII	楕長	1.03	0.57	—	—	—	III		1.04	北西/南東	0.57	0.40	261	○	○	○	○	△
SK48	M-55	XII	楕長	1.04	0.56	—	—	—	III		1.04	南/北	0.56	0.46	180	○	○	○	○	△
SK49	E・F-22	XII	不定形楕長	1.04	0.55	—	○	—	III		1.04	西/東	0.55	0.30	189	○	○	○	×	△
SK50	F・G-22	XII	不定形楕長	1.20	0.37	—	—	—	III	SK91と岩接	1.20	南/北	0.37	0.36	324	○	×	×	○	△
SK51	I-46	XII	楕長	1.00	0.57	—	—	—	III		1.00	北/南	0.57	0.36	175	○	○	○	○	△
SK52	D-9	XII	楕長	0.98	0.58	—	○	—	III		0.98	北東/南西	0.58	0.35	169	○	○	○	×	△
SK53	B-23	XII	楕長	0.90	0.62	—	—	—	III		0.90	北/南	0.64	0.33	140	○	○	○	○	△
SK54	B-13	XII	不定形楕長	0.90	0.61	—	○	—	III	SH 3と重覆	0.89	南西/北東	0.61	0.25	146	○	○	○	×	△
SK55	D-26	XII	不定形楕長	0.90	0.57	—	—	—	III		0.96	西/東	0.54	0.23	178	○	○	○	○	△
SK56	D-26	XII	不定形楕長	0.96	0.51	—	—	—	III		0.96	北西/南東	0.51	0.39	188	○	○	○	○	△
SK57	E-32	XII	楕長	0.91	0.52	—	—	—	III		0.91	北西/南東	0.52	0.51	175	○	○	○	○	△
SK58	F・G-23	XII	楕長	0.85	0.54	—	—	—	III		0.85	南/北	0.54	0.47	157	○	○	○	○	△
SK59	B-22	XII	不定形楕長	0.89	0.50	—	—	—	III		0.89	南東/北西	0.50	0.19	178	○	○	○	×	△
SK60	N-57	XII	不定形楕長	0.93	0.45	—	—	—	III		0.93	西/東	0.45	0.39	207	○	○	○	○	△
SK61	E-10	XII	楕長	0.86	0.50	—	—	—	III		0.86	北/南	0.50	0.22	172	○	○	○	×	△
SK62	M-55	XII	不定形楕長	0.87	0.44	—	—	—	III		0.87	西/東	0.44	0.47	198	○	○	○	○	△
SK63	C-21	XI	不定形楕長	0.79	0.45	○	—	—	III		0.79	南東/北西	0.45	0.16	176	○	○	○	×	△
SK64	E・F-29	XII	楕長	0.72	0.44	—	○	—	III		0.73	南/北	0.43	0.38	170	○	○	○	○	△
SK65	D-25	XII	楕長	0.67	0.44	○	—	—	III		0.66	南東/北西	0.48	0.14	138	○	○	○	×	△
SK66	G-24	XII	不定形楕長	0.62	0.38	—	—	—	III		0.62	南/北	0.38	0.14	163	○	○	○	×	△
SK67	E-17・18	XII	不定形方形	2.69	1.80	—	○	—	IV	SK 4・SK 7と重覆	2.69	北西/南東	1.80	0.16	116	○	×	×	×	△
SK68	C-24	XII	方形	1.68	1.60	—	—	—	IV		1.68	東/西	1.60	0.17	105	×	○	×	×	△
SK69	C-23	XII	円形	1.38	1.22	—	—	—	IV		1.38	北西/南東	1.22	0.10	130	×	○	×	×	△
SK70	B・C-14	XII	不定形円形	1.53	1.24	—	—	○	IV		1.53	北西/南西	1.16	0.63	132	×	○	×	×	△

第28表 土坑一覽表3

通稱名	検出区	検出層	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	炭 化 物	遺 物	タイ プ	備 考	運次土坑の可能性										
										主軸		短軸 (m)	最西部 深合	主軸× 短軸	ア	イ	ウ	エ	オ	可能性
										長さ(m)	方位									
SK71	C-13	XII	不定形方形	1.28	1.20	—	—	IV		1.30	北/南	1.20	0.44	1.08	×	×	×	×	△	
SK72	F-22	XII	方形	1.40	1.00	—	—	IV		1.40	北西/南東	1.00	0.26	1.40	×	×	×	×	△	
SK73	E-32	XII	不定形円形	1.24	1.14	○	—	IV		1.48	北西/南東	1.05	0.46	—	—	—	—	—	△	
SK74	C-24・25	XII	不定形方形	1.27	1.06	—	—	IV		1.39	北/南	0.98	0.20	1.42	×	×	×	×	△	
SK75	I-47・48	XII	方形	1.13	1.00	—	○	IV		1.13	北/南	1.00	0.36	1.13	×	×	×	×	△	
SK76	G-22	XII	不定形方形	0.88	0.84	—	—	IV		0.88	西/東	0.84	0.33	1.05	×	×	×	×	△	
SK77	F-27	XII	円形	0.96	0.75	—	—	IV		0.96	南/北	0.75	0.44	1.28	×	×	×	×	△	
SK78	I-51	XI	方形	0.97	0.68	○	—	IV		0.97	南東/北西	0.68	0.31	—	—	—	—	—	△	
SK79	K-52	XII	円形	0.75	0.75	—	—	IV		0.77	北西/南東	0.75	0.25	1.03	×	×	×	×	△	
SK80	C-24	XII	不定形円形	0.88	0.62	—	—	IV		0.85	北西/南東	0.63	0.15	1.35	×	×	×	×	△	
SK81	B-25	XII	円形	0.74	0.71	○	—	IV		0.78	西/東	0.64	0.17	—	—	—	—	—	△	
SK82	C-24	XII	不定形方形	0.78	0.69	—	○	IV		0.74	北/南	0.70	0.26	1.06	×	×	×	×	△	
SK83	F-26・27	XII	不定形円形	0.68	0.66	—	—	IV		0.71	南/北	0.61	0.25	1.16	×	×	×	×	△	
SK84	F-26・27	XII	不定形円形	0.73	0.60	—	—	IV		0.66	北西/南東	0.65	0.32	1.02	×	×	×	×	△	
SK85	E-8・9	XII	不定形方形	0.73	0.54	○	—	IV		0.73	北東/南西	0.54	0.18	1.35	×	×	×	×	△	
SK86	E-22	XII	不定形方形	0.72	0.53	—	—	IV		0.72	南東/北西	0.53	0.30	1.36	×	×	×	×	△	
SK87	G-23	XII	不定形円形	0.65	0.50	—	—	IV		0.65	西/東	0.50	0.35	1.30	×	×	×	×	△	
SK88	K-L-56	XII	方形	0.57	0.55	—	—	IV		0.55	西/東	0.55	0.33	1.04	×	×	×	×	△	
SK89	B-22	XII	方形	0.60	0.45	○	—	IV		0.60	東/西	0.45	0.18	1.33	×	×	×	×	△	
SK90	E-28・29	XII	不定形円形	0.50	0.49	—	—	IV		0.50	北東/南西	0.49	0.30	1.02	×	×	×	×	△	
SK91	F-22	XII	不定形方形	0.50	0.45	—	—	IV	SK50と直接	0.50	南/北	0.45	0.28	1.11	×	×	×	×	△	
SK92	C-22	XII	円形	0.51	0.45	—	—	IV		0.51	北東/南西	0.45	0.25	1.13	×	×	×	×	△	
SK93	G-22	XII	不定形方形	0.48	0.41	—	—	IV		0.49	南東/北西	0.40	0.25	1.23	×	×	×	×	△	
SK94	I-51	X	円形	0.40	0.36	—	○	V		0.40	北東/南西	0.36	0.81	1.11	×	×	×	×	△	
SK95	C-26	XI	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK96	B-23	XI	—	—	—	○	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK97	B-23・24	XII	—	—	—	○	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK98	D-36	XI	—	—	—	—	○	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK99	B-30	XII	—	—	—	○	—	不明	SK100と重複	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK100	B-30	XII	—	—	—	○	—	不明	SK99と重複	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK101	B-26	XI	—	—	—	○	—	不明	SK99と重複	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK102	A-16	XII	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK103	F-24	XII	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
SK104	F-27	XII	—	—	—	—	—	不明		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

(5) 集石遺構 (略記号: SQ)

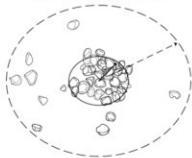
集石遺構は、平成23年度の調査で47基、平成24年度の調査で29基、平成25年度の調査で89基、平成26年度の調査で27基の計192基が検出された。

本報告書での集石遺構の一覧表(第31表~第36表)の見方について下記に示す。

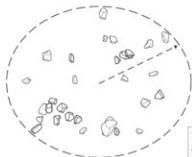
総 礫 数: 個々の集石遺構を構成している石器を含めた礫の総数。

範 囲: 個々の集石遺構の範囲を、「集中部」と「全体」で示し、同心円を用いて半径(m)で表し、その範囲を5cm単位で示した。「集中部」とは、集石遺構内で礫が密集している範囲で、「全体」とは、密集している箇所の中心部からその集石遺構を構成している範囲全体のことである。集中部についての判断は、礫と礫の間の空間の差や、礫同士の上下の重なり合いを目安に行った。また、礫の集中部が見られない集石遺構には、「一」を用いた。第151図で例を示す。

【集中部のある集石遺構】



【集中部のない集石遺構】



実線: 集中部
破線: 全体

第151図 集石遺構の範囲

掘り込み部: 個々の集石遺構に伴う掘り込みが確認できたものは「○」、掘り込みが確認できなかったものは「-」で示した。深さは、検出面から最深部の深さを示している。

出土土器: 個々の集石遺構内から出土した土器があれば「○」を付けた。出土土器とは、その集石遺構が使用されていた時期を特定するものとは限らない。また本文中には、出土した土器の分類を、本遺跡の土器分類に合わせて提示している。

石材別個数: 個々の集石遺構を構成する礫の素材を個数で示している。石材は、安山岩、ホルンフェルス、砂岩、凝灰岩のみ掲載しているため、合計が総個数にならない場合もある。記載以外の石材には、泥岩、頁岩、花崗岩が見られた。

重量別個数: 個々の集石遺構を構成する礫一つひとつの重量ごとに幾つあるかを個数で示している。

タイプ: 形態分類のことである。

上野原遺跡・稲荷追跡(埋文センター)の分類方法を参考に、本遺跡縄文時代早期の集石遺構を次のように分類した。

タイプI: 明確な集中部が見られず、掘り込み部のないもの。

タイプII: 明確な集中部が見られ、掘り込み部のないもの。

タイプIII: 明確な集中部が見られ、掘り込み部のあるもの。

タイプIV: 明確な集中部は見られないが、掘り込み部のあるもの。

第29表 タイプ別基数

	集中部	掘り込み部	基数	集石遺構全体に占める割合(%)
I類	無	無	95	49%
II類	有	無	52	27%
III類	有	有	30	16%
IV類	無	有	15	8%

検出層: 田原追ノ上遺跡における集石遺構の検出層別基数及びタイプ別基数は、下表のとおりである。

第30表 検出層別のタイプ基数及び検出層で占める割合

	タイプ				計
	I	II	III	IV	
X層	38基	27基	9基	5基	79基
XI層	55基	24基	18基	6基	103基
XII層	2基	1基	2基	4基	9基
XIII層	—	—	1基	—	1基
計	95基	52基	30基	15基	192基

集石遺構は、IX層では検出されていないが、X層で79基、XI層で103基、XII層で9基、XIII層で1基検出されている。

分布 分布 I～IV類のタイプ毎に色を付け、集石遺構の分布を第152図に示す。また、第153図には各集石遺構検出の層を示す。

タイプⅠ：● タイプⅡ：● タイプⅢ：● タイプⅣ：●

集石遺構は、調査区Bの東端～Gに広く分布するが、調査区Aからは検出されていない。また、タイプⅠは調査区全体に広がるが、調査区C・Dに集中する傾向がある。タイプⅢ・Ⅳは、調査区Dの南西部に集中する傾向がある。

X層で検出された集石遺構は、調査区B～Gまではほぼ全体に広がる。また、XII層検出の集石遺構は、調査区Dの南西部に集中する傾向がある。

各集石遺構 以下、タイプ別に報告する。各タイプは以下のとおりである。

タイプⅠ：SQ1～SQ95

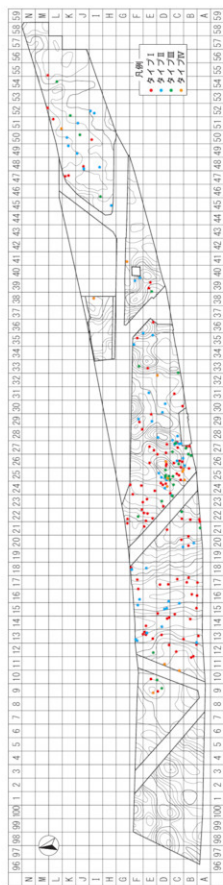
タイプⅡ：SQ96～SQ147

タイプⅢ：SQ148～SQ177

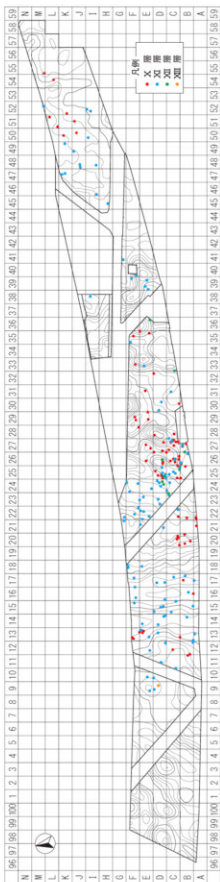
タイプⅣ：SQ178～SQ192

被熱の有無については、目視により判断した。

また、炭化物が多く確認され、採取し科学分析を実施したものについては、その結果を示している。



第152図 集石遺構タイプ別分布図



第153図 集石遺構検出層別分布図

タイプI

集石遺構1号 (SQ1 : 第154図)

検出状況 E-29区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は7個である。礫は、中心から半径0.15mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。200～300gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

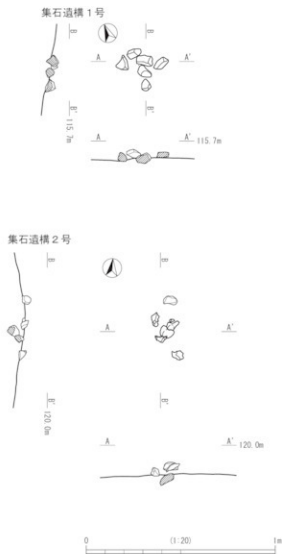
集石遺構2号 (SQ2 : 第154図)

検出状況 B-11区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は7個である。礫は、中心から半径0.20mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と泥岩のみで、構成礫のほとんどが熱を受けている。100g以下の礫がほとんどである。

出土土器 出土していない。



第154図 集石遺構1号・集石遺構2号

集石遺構3号 (SQ 3 : 第155図)

検出状況 E-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は8個である。礫は, 中心から半径0.25mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルスのみで, ほとんどの礫が熱を受けている。

出土土器 出土していない。

集石遺構4号 (SQ 4 : 第155図)

検出状況 D-26・27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は8個である。礫は, 中心から半径0.25mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩や砂岩・凝灰岩が主体で, 構成礫全体の約63%が熱を受けている。

出土土器 出土していない。

集石遺構5号 (SQ 5 : 第155図)

検出状況 B-12区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は11個である。礫は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, すべての構成礫が熱を受け

ている。100g以下の礫で半数を占める。

出土土器 出土していない。

集石遺構6号 (SQ 6 : 第155図)

検出状況 E・F-13区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は12個である。礫は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫のほとんどが熱を受けている。1~100gと100~200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

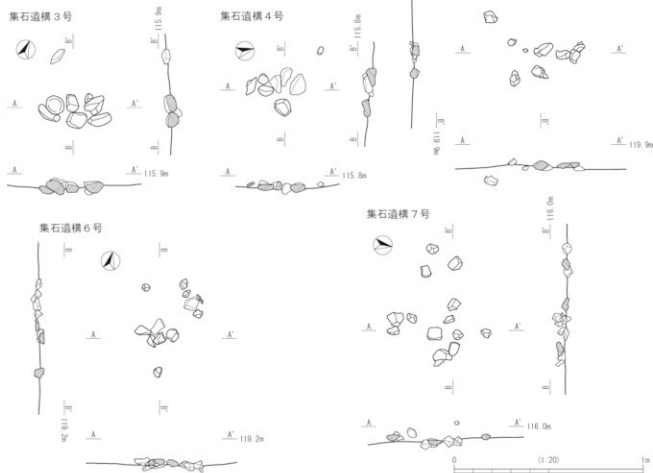
集石遺構7号 (SQ 7 : 第155図)

検出状況 A-22区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は14個である。礫は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 全ての構成礫が熱を受けている。100~200gの礫が多く, 磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。



第155図 集石遺構3号~7号

集石遺構 8号 (SQ 8 : 第156図)

検出状況 A-22区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は15個である。礫は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礫構成 ほぼ安山岩のみで, 構成礫全体の約60%が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 9号 (SQ 9 : 第156図)

検出状況 C-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は6個である。礫は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩のみで, ほとんどの礫が熱を受けている。800~900gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 10号 (SQ10 : 第156図)

検出状況 C-20区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は24個である。礫は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

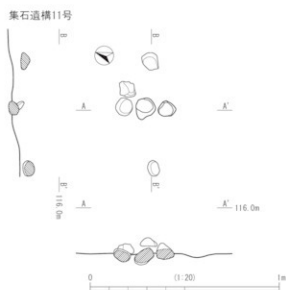
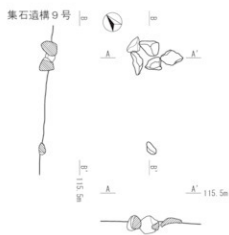
集石遺構 11号 (SQ11 : 第156図)

検出状況 E-27区, X層で検出された。構成礫総数は6個である。

規模 構成礫総数は6個である。礫は, 中心から半径0.35mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩のみで, 熱を受けている礫は少ない。1000gを超える礫1個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。



第156図 集石遺構 8号～11号

集石遺構 12号 (SQ12: 第157図)

検出状況 C-22区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は15個である。礫は, 中心から半径0.35mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で, ほとんどの礫が熱を受けている。100~200gの礫が多いが, 1000gを超えている礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 13号 (SQ13: 第157図)

検出状況 F-29区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は16個である。礫は, 中心から半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体の約50%が熱を受けている。100g以下の礫が多く, 磨石・敲石類や砥石の転用品が確認され, 砥石1点を図化した。87(第157図)は砂岩製の砥石である。破片資料で扁平な石の片面を使用面としている。

出土土器 出土していない。

集石遺構 14号 (SQ14: 第157図)

検出状況 C-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は17個である。礫は, 中心から半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で, 構成礫全体の約30%が熱を受けている。100~200gと, 200~300gの礫が多い。

出土土器 小破片の胴部が2点出土している。接合はできなかったが, 色調や胎土, 施文方法から同一個体と思われる。いずれも図化はしていない。

土器分類 XI類(不明)に該当するが型式判別はできなかった。

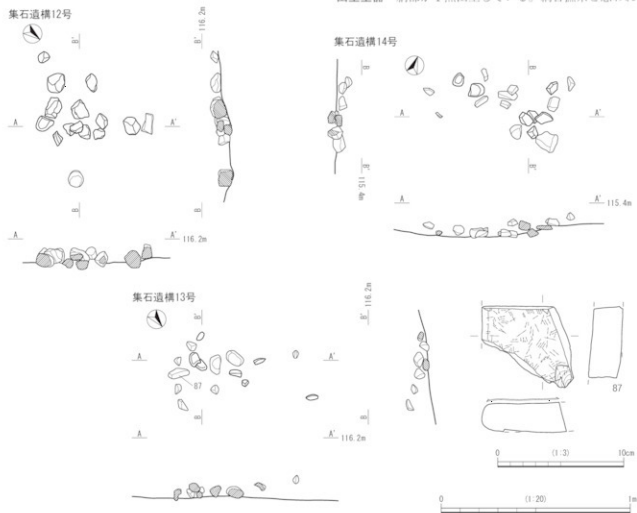
集石遺構 15号 (SQ15: 第158図)

検出状況 D-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は51個である。礫は, 中心から半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多い。

出土土器 胴部が1点出土している。網目捺糸と思われる

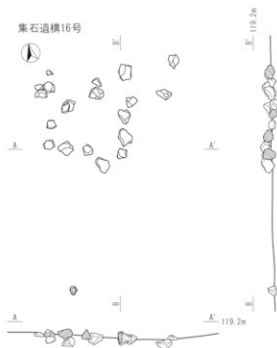
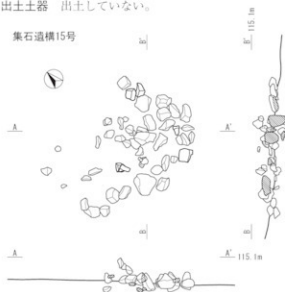


第157図 集石遺構 12号・集石遺構 13号・出土遺物・集石遺構 14号

る施文を施す。胎土には、角閃石は含まれているが、金雲母は確認できない。接合しなかったが、集石遺構36号(SQ36)内出土遺物の95と同一個体と思われる。
土器分類 X類に該当する。

集石遺構16号(SQ16:第158図)

検出状況 E-13区, X層で検出された。
規模 構成礫総数は21個である。礫は、中心から半径0.45mの範囲に広がる。
礫構成 安山岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多い。
出土土器 出土していない。

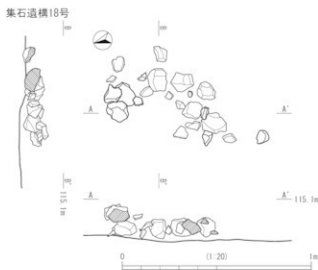
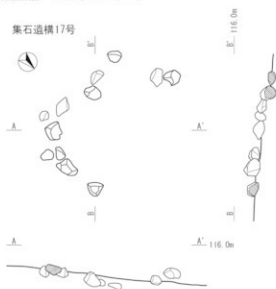


集石遺構17号(SQ17:第158図)

検出状況 F-28区, X層で検出された。
規模 構成礫総数は12個である。礫は、中心から半径0.45mの範囲に広がる。
礫構成 はほぼ安山岩で、構成礫全体の約70%が熱を受けている。300～400gの礫が多い。
出土土器 出土していない。

集石遺構18号(SQ18:第158図)

検出状況 B-25区, X層で検出された。
規模 構成礫総数は23個である。礫は、中心から半径0.45mの範囲に広がる。
礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫4個も含まれる。
出土土器 出土していない。



第158図 集石遺構15～18号

集石遺構 19号 (SQ19: 第159図)

検出状況 C-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は14個である。礫は, 中心から半径0.50 mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩と安山岩が主体で, 構成礫全体の約70%が熱を受けている。100 g以下の礫が多いが, 1000 gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 口縁部が1点出土している。図化はしていない。口縁部外面上部に, 横位の山形押型文を施す。その直下に斜位の山形押型文を施す。施文順は, 横位→斜位である。口唇部外面端部は丸みを帯び, そこから1.7cm程口縁部内面に内傾し, 稜をもつ。口縁部内面の稜までの部分に, 横位の山形押型文を施す。

土器分類 K類に該当する。

集石遺構 20号 (SQ20: 第159図)

検出状況 B-22区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は11個である。礫は, 中心から半径0.55 mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩のみで, ほとんどの礫が熱を受けている。100~200 g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

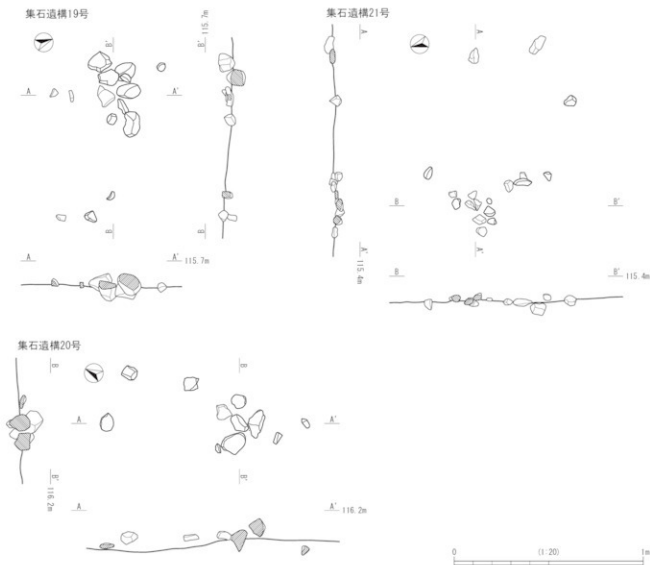
集石遺構 21号 (SQ21: 第159図)

検出状況 C-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は18個である。礫は, 中心から半径0.55 mの範囲に広がる。

礫構成 構成礫は安山岩が多く, 次いで凝灰岩が多く含まれ, 構成礫の約40%が熱を受けている。100 g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。



第159図 集石遺構19号~21号

集石遺構 22号 (SQ22 : 第160図)

検出状況 M-55区, X層で検出された。

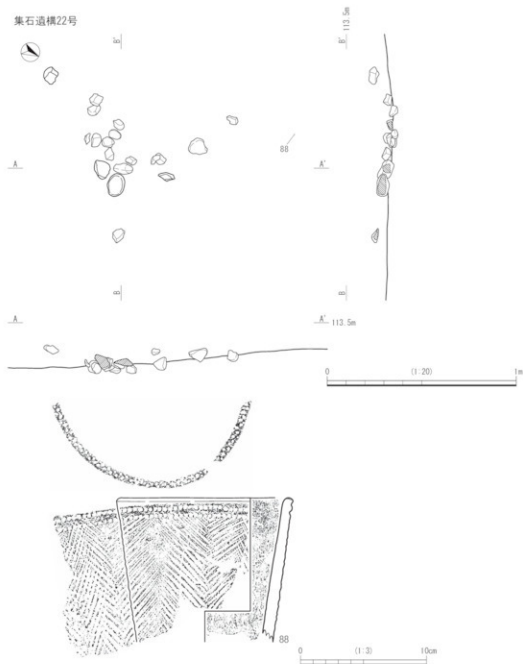
規模 構成礫総数は19個である。礫は, 中心から半径0.55mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で, 構成礫の約20%が熱を受けている。100~200gの礫が多い。

出土土器 口縁部~胴部が3点, 小破片の底部が1点出土している。そのうち1点を図化した。88(第160図)は, 外傾する口縁部である。口縁部外面には, くり抜くような横位刺突文を施し, 直下に綾杉状の条痕文を施す。口唇部は刺突文を施す。内面はていねいなナデがお

こなわれやや光沢を帯びる。他の胴部の1点は, 綾杉状の貝殻条痕文を施す。もう1点の外面は摩滅が激しく, 分類判断はできなかった。底部は剥落が著しいが, 底部付近の胴部に横位貝殻条痕文をわずかに確認できる。この破片にのみ, 5mm程度の小礫も含まれている。また, 残存状況から底面の半径は, 2~3cmと推定される。3点とも金雲母は含まれていないが, 同一個体の可能性は低い。いずれも図化はしていない。

土器分類 88と胴部1点・底部は, いずれもIV類に該当する。



第160図 集石遺構22号・出土遺物

集石遺構23号 (SQ23：第161図)

検出状況 C-13区、X層で検出された。

規模 構成礫総数は、29個である。礫は、中心から半径0.65 mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体のほとんどの礫が熱を受けている。100 g以下の礫が多く、磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

集石遺構24号 (SQ24：第161図)

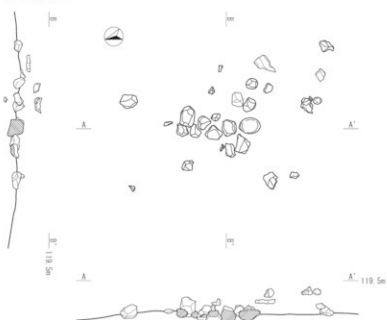
検出状況 B-20区、X層で検出された。

規模 構成礫総数は17個である。礫は、中心から半径0.65mの範囲に礫全体が広がる。

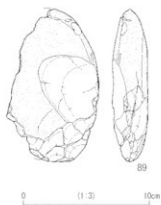
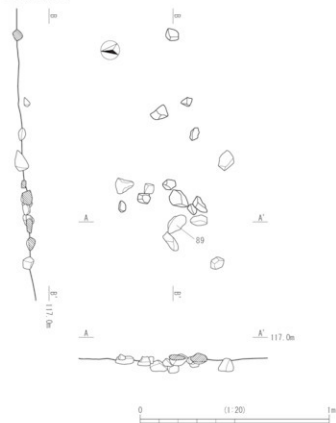
礫構成 安山岩が半数近くで、凝灰岩とホルンフェルスが同程度含まれ、構成礫全体の約50%が熱を受けている。200～300 gの礫が多い。89 (第161図)はホルンフェルス製の礫器である。扁平な円礫の縁辺3辺を表裏両面から打ち欠き刃部を作り出している。

出土土器 出土していない。

集石遺構23号



集石遺構24号



第161図 集石遺構23号・集石遺構24号・出土遺物

集石遺構 25号 (SQ25 : 第162図)

検出状況 A・B-16区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は24個である。礫は, 中心から半径0.70mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩を主体に, 7種の石材で構成され, 構成礫全体のおよそ半数が熱を受けている。100～200gの礫が多いが, 1000～1500g, 1500～2000gの礫各1個, 2000～2500gの礫3個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 26号 (SQ26 : 第162図)

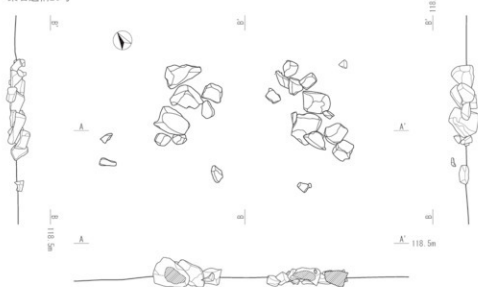
検出状況 D-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は26個である。礫は, 中心から半径0.70mの範囲に広がる。

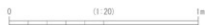
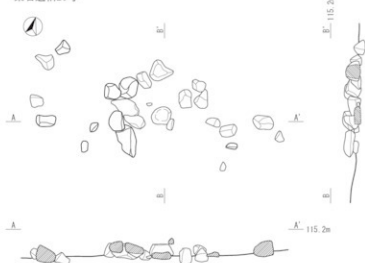
礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが, 1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構25号



集石遺構26号



第162図 集石遺構25号・集石遺構26号

集石遺構 27号 (SQ27 : 第163図)

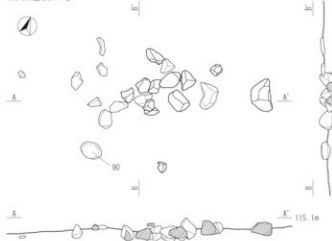
検出状況 D-26区, X層で検出された。

規模 構成礎総数は22個である。礎は, 中心から半径0.70mの範囲に広がる。

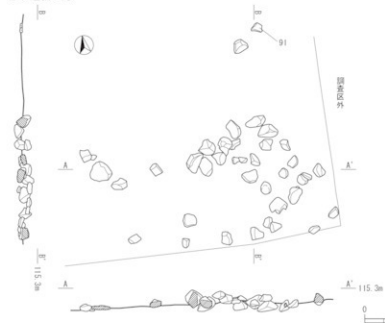
礎構成 安山岩が主体で, 構成礎全体の約50%が, 熱を受けている。100g以下の礎が多いが, 1000gを超える礎3個も含まれる。90(第163図)は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化する。

出土土器 底部が1点出土している。剥落もあり型式の判断はできなかった。胎土には, ガラス質鉱物が多く含まれるが, 金雲母は含まれていない。図化はしていない。

集石遺構27号



集石遺構28号



集石遺構 28号 (SQ28 : 第163図)

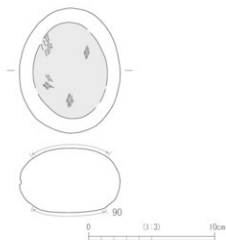
検出状況 B-27区, X層で検出された。

規模 構成礎総数は39個である。礎は, 中心から半径0.70mの範囲に広がる。

礎構成 ホルンフェルスと凝灰岩, 安山岩が主体で, 熱を受けている礎は確認できなかった。100~200gの礎が多い。

出土土器 胴部が2点, 底部が1点出土している。そのうち1点を図化した。91(第163図)は胴部で, 包含層出土遺物1点と接合した。やや光沢を帯びている外面に, 山形押型文を縦位に施す。内面は, 工具によるナデをおこなう。もう1点の胴部は, 摩擦や剥落が激しいが, 山形押型文を施す。胎土には, 金雲母が含まれている。施文幅や胎土の違いから, 91とは, 同一個体とは言い難い。底部は平底になると思われ, 胴部に連珠押型文を施す。

土器分類 3点とも, IX類に該当する。



第163図 集石遺構27号・出土遺物・集石遺構28号・出土遺物

集石遺構 29号 (SQ29: 第164図)

検出状況 C-27区、X層で検出された。

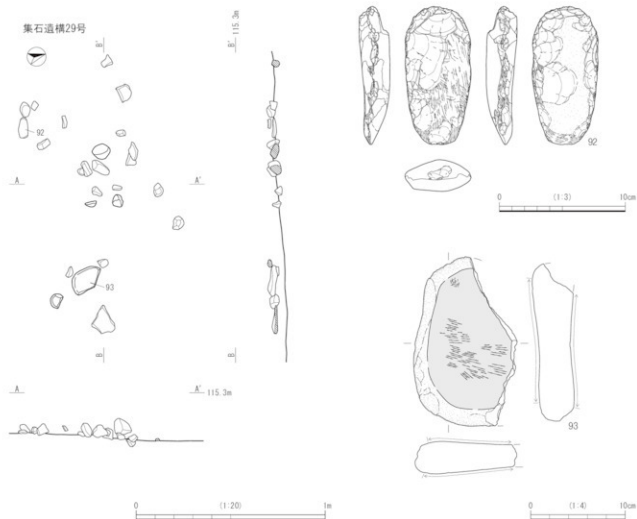
規模 構成礎総数は21個である。礎は、中心から半径0.75mの範囲に広がる。

礎構成 凝灰岩と安山岩が主体で、構成礎全体の約20%が熱を受けている。100～200gの礎が多い。磨石・敲石類や石皿の転用品が確認され、図化した。92(第164図)はホルンフェルス製の磨製石斧である。刃部が基部より狭く、薄手で小型である。表面や刃部を丁寧に研磨しているものの表面に自然面が残る。表面から側縁にかけての剥離は、研磨部分との関係から使用による破損と考えられる。93は安山岩製の石皿である。破片資料で扁平な石の表裏全面を磨面に使用している。被熱し

ており表面から欠損部にかけてススが附着する。

出土土器 胴部が3点、口縁部が1点出土した。胴部の3点は、ともに菱形押型文を斜位に施す。そのうち2点は、包含層出土遺物と接合した。接合された図が、549(第318図)である。もう1点の胴部も、文様の大きさや施文方法、胎土が同様である。この1点とは接合しなかったが、いずれも同一個体と思われる。胎土には、金雲母は含まれていない。口縁部も、包含層出土遺物及びSQ36出土遺物と接合した。接合、復元された図が、645(第331図)である。

土器分類 胴部はIX類に、口縁部はXI類に該当する。



第164図 集石遺構29号・出土遺物

集石遺構 30号 (SQ30 : 第165図)

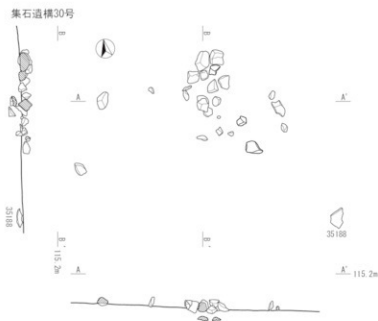
検出状況 C-30区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は25個である。礫は、中心から半径0.75mの範囲に広がる。

礫構成 砂岩と安山岩、凝灰岩、ホルンフェルスが同程度で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多い。

出土土器 外面の剥落が著しいが、外反する口縁部が1点出土している。口唇部はやや平坦でキザミを施す。口縁部外面上位に、斜位貝殻判突文を施すことがわずかに確認できる。胎土には、金雲母は含まれていない。図化はしていない。

土器分類 IV類に該当する。



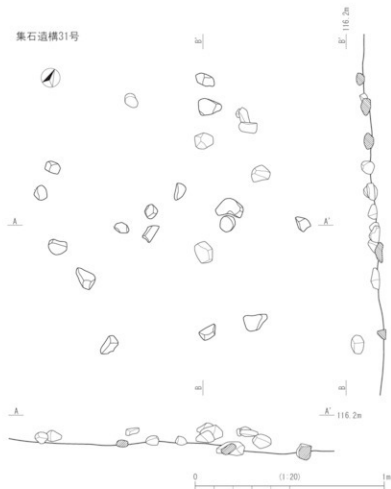
集石遺構 31号 (SQ31 : 第165図)

検出状況 E-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は23個である。礫は、中心から半径0.80mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約70%が熱を受けている。200~300gと400~500gの礫が多い。石皿・砥石が確認された。

出土土器 出土していない。



第165図 集石遺構30号・集石遺構31号

集石遺構 32号 (SQ32 : 第166図)

検出状況 B-20区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は21個である。礫は, 中心から半径0.80mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体の約60%が熱を受けている。1000gを超える礫4個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 33号 (SQ33 : 第166図)

検出状況 C-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は26個である。礫は, 中心から半径0.85mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩, 砂岩が主体で, 構成礫全体の約50%が熱を受けている。200~300gの礫が多いが, 2500gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 小破片の銅部が1点出土している。剥落が激しく型式の判断はできなかった。胎土には, ガラス質鉱物が多く含まれるが, 金雲母は含まれていない。固化はしていない。

集石遺構 34号 (SQ34 : 第167図)

検出状況 D-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は31個である。礫は, 中心から半径0.85mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩を主体にホルンフェルスとのみ構成され, 構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

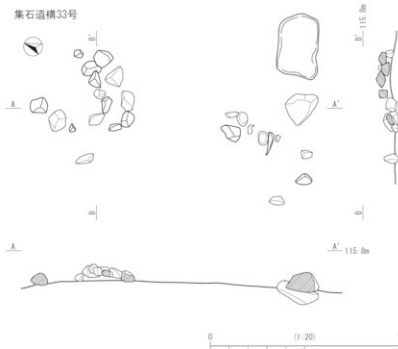
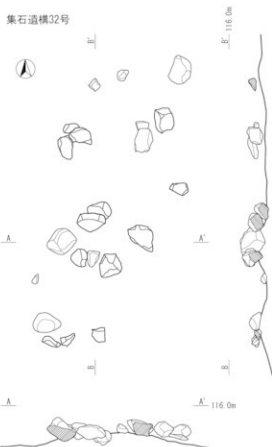
集石遺構 35号 (SQ35 : 第167図)

検出状況 F-35区, X層で検出された。

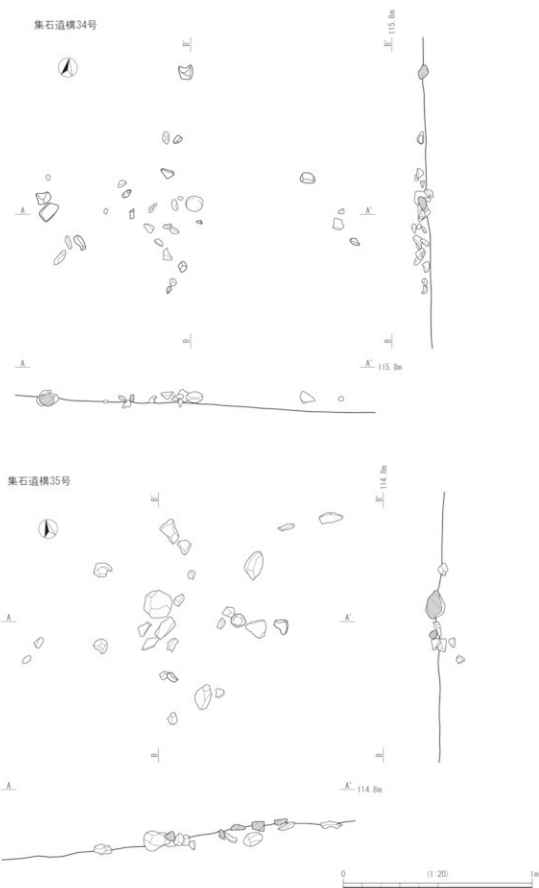
規模 構成礫総数は26個である。礫は, 中心から半径0.95mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体の約20%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが, 1000gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第166図 集石遺構32号・集石遺構33号



第167図 集石遺構34号・集石遺構35号

集石遺構 36号 (SQ36 : 第168図)

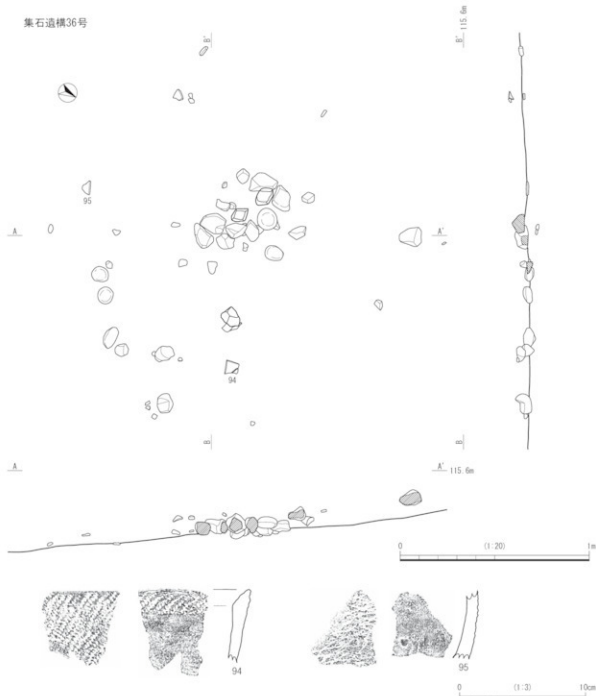
検出状況 C-27区、X層で検出された。

規模 構成礫総数は42個である。礫は、中心から半径1.00mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルス、凝灰岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫が1点含まれる。

出土土器 胴部が11点、口縁部が2点出土した。そのうち2点を図化した。94・95 (第168図)である。94は、直行する口縁部で、L R縄文を施す。口唇部の外面側端

部は尖頭状で、そこから1.8cm程内傾した後、後をもつ。後に至る口唇部内面にも、外面と同一のL R縄文を横位に施す。内面は、工具によるナデをおこなう。94は、包含層出土遺物及び集石遺構29号 (SQ29) 内出土遺物と接合した。接合、復元された図が645 (第331図)である。95は、網目熱糸文を外面に施す胴部である。施文方法や胎土等から、集石遺構15号 (SQ15) 内出土遺物と同一個体と思われる。残り10点の胴部のうち5点の胴部には外面に連珠押型文を施す。1点はなだらかな山形押型文を施し、1点は枝回転によると思われるイチ



第168図 集石遺構36号・出土遺物

ゴの外見のようなツブツブを外面に施す。1点には流水文を外面に施す。この1点は、173(第240図)と489(第308図)と同一個体と考えられる。残りの2点の文様は不明である。もう1点の口縁部はやや外反し、口唇部は棒状工具による刺突状の斜条痕文を施す。外面及び口縁部内面に、枝回転によると思われるイチゴの外見のようなツブツブを施す。

土器分類 94はXI類に、95はX類に該当する。また図化していない連珠押型文と山形押型文を施す胴部はIX類に、流水文を施す胴部はVI類に、枝回転によると思われる胴部と口縁部は、XII類に該当する。

集石遺構37号(SQ37:第169図)

検出状況 C-12区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は28個である。礫は、中心から半径1.05mの範囲に広がる。

礫構成 ほほは安山岩で、構成礫全体の約80%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1500~2000gの礫1個と、2000~2500gの礫1個も含まれる。

出土土器 小破片の胴部が1点出土している。剥落が激しく型式の判断はできなかった。胎土には、金雲母が含まれていない。図化はしていない。

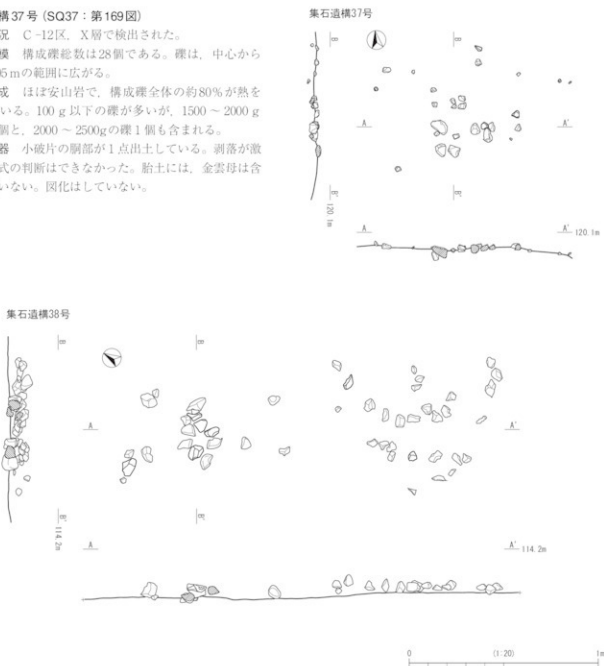
集石遺構38号(SQ38:第169図)

検出状況 L-51区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は49個である。礫は、中心から半径1.05mの範囲に広がる。

礫構成 ホルンフェルスと安山岩が主体で、構成礫全体の約20%が、熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。



第169図 集石遺構37号・集石遺構38号

集石遺構 39号 (SQ39: 第170図)

検出状況 A-13区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は13個である。礫は, 中心から半径0.35mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩のみで, 全ての構成礫が熱を受けている。100g以下の礫が半数を占める。

出土土器 出土していない。

集石遺構 40号 (SQ40: 第170図)

検出状況 D-14区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は10個である。礫は, 中心から半径0.20mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 熱を受けている礫は少ない。100~200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 41号 (SQ41: 第170図)

検出状況 G-22区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は7個である。礫は, 中心から半径0.20mの範囲に広がる。

礫構成 構成礫は凝灰岩のみで, 全ての構成礫が熱を受けている。

出土土器 出土していない。

集石遺構 42号 (SQ42: 第170図)

検出状況 C-25区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は6個である。礫は, 中心から半径0.20mの範囲に広がる。

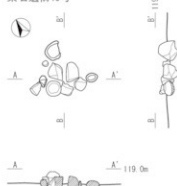
礫構成 安山岩とホルンフェルス, 凝灰岩で, 構成礫全体の約30%が熱を受けている。

出土土器 出土していない。

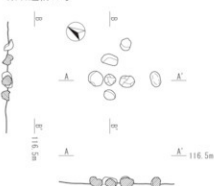
集石遺構39号



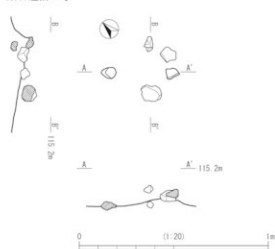
集石遺構40号



集石遺構41号



集石遺構42号



第170図 集石遺構39号~42号

集石遺構43号 (SQ43: 第171図)

検出状況 C-17区, XI層で検出された。

規模 構成礎総数は19個である。礎は, 中心から半径0.25mの範囲に広がる。

礎構成 安山岩が主体で, 全ての構成礎が熱を受けている。100~200gの礎が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構45号 (SQ45: 第171図)

検出状況 F-17区, XI層で検出された。

規模 構成礎総数は15個である。礎は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礎構成 安山岩が主体で, 構成礎全体のほとんどが熱を受けている。400~500gの礎が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構44号 (SQ44: 第171図)

検出状況 E-13区, XI層で検出された。

規模 構成礎総数は9個である。礎は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。

礎構成 安山岩が主体で, 構成礎全体のほとんどが熱を受けている。600g以下の礎で構成されている。

出土土器 出土していない。

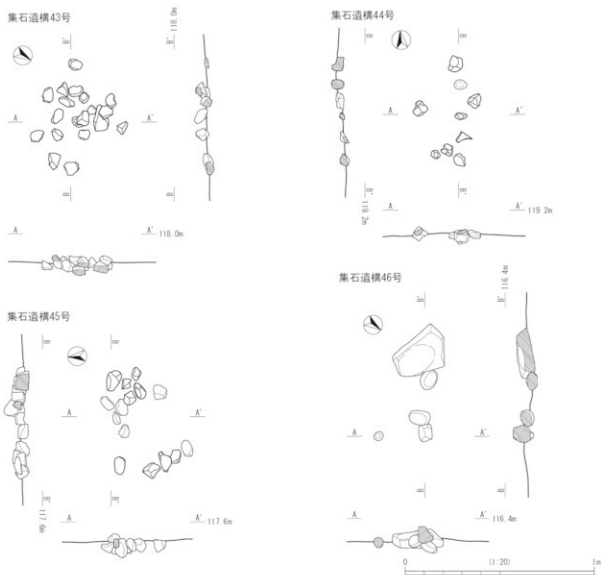
集石遺構46号 (SQ46: 第171図)

検出状況 E-22区, XI層で検出された。

規模 構成礎総数は5個である。礎は, 中心から半径0.35mの範囲に広がる。

礎構成 凝灰岩が主体で, 熱を受けている礎は1個のみ確認できた。礎の重さはまばらだが, 3000gを超える礎1個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第171図 集石遺構43号~46号

集石遺構47号 (SQ47: 第172図)

検出状況 B-17区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は9個である。礫は、中心から半径0.35mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。400～500gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構48号 (SQ48: 第172図)

検出状況 D-23区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は19個である。礫は、中心から半径0.35mの範囲に広がる。

礫構成 ほぼ凝灰岩で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構49号 (SQ49: 第172図)

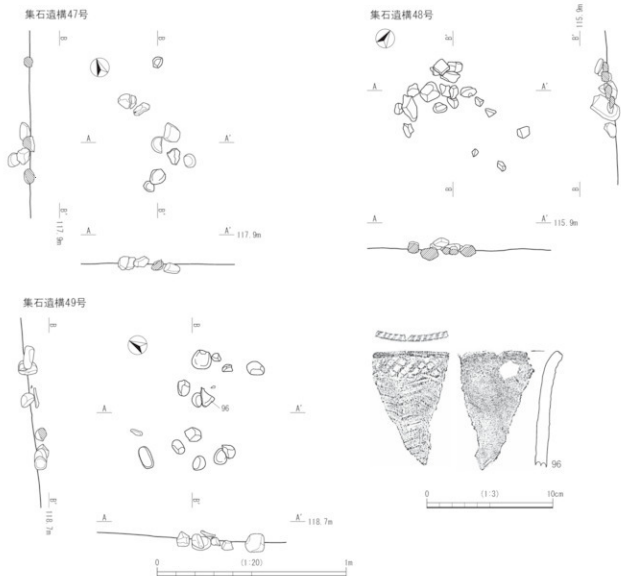
検出状況 C-15区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は13個である。礫は、中心から半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 ほぼ安山岩で、ほとんどの礫が熱を受けている。300～400gの礫が多い。

出土土器 口縁部が1点出土し、円化した。96(第172図)である。外反する口縁部外面上位に、斜位に押しき状の刺突文を施し、その直下に斜位貝殻条痕文を施す。口唇部は、平坦で2mm程のキザミを斜位に施す。口唇部、内面は光沢を帯びている。

土器分類 IV類に該当する。



第172図 集石遺構47号～49号・出土遺物

集石遺構50号 (SQ50: 第173図)

検出状況 D-17区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は17個である。礫は、中心から半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 構成礫は安山岩が約半数で砂岩・凝灰岩等も含まれ、構成礫全体の約70%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。磨石・敲石類の転用品が確認され、円化した。97(第173図)は凝灰岩製の磨石・敲石類である。破片資料だが元は扁平な円礫と考えられ、片面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化し磨面にススが附着する。

出土土器 出土していない。

集石遺構51号 (SQ51: 第173図)

検出状況 F-22区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は12個である。礫は、中心から

半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩のみで、熱を受けている礫は確認できなかった。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

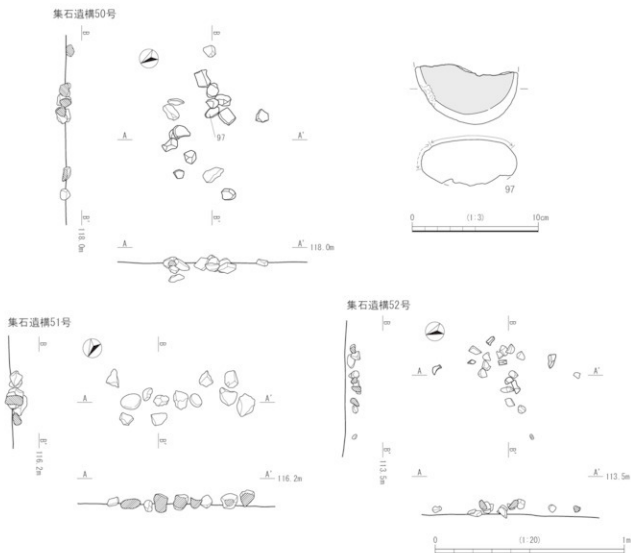
集石遺構52号 (SQ52: 第173図)

検出状況 E-39区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は21個である。礫は、中心から半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。



第173図 集石遺構50号・出土遺物・集石遺構51号・集石遺構52号

集石遺構 53号 (SQ53 : 第174図)

検出状況 B-27区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は18個である。礫は, 中心から半径0.40mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で, 熱を受けている礫は1個しか確認できなかった。100g以下の礫が多いが, 1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 54号 (SQ54 : 第174図)

検出状況 A・B-12区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は10個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩のみで, 全ての構成礫が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 55号 (SQ55 : 第174図)

検出状況 D-13区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は27個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫のほとんどが熱を受けている。200~300gと300~400gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

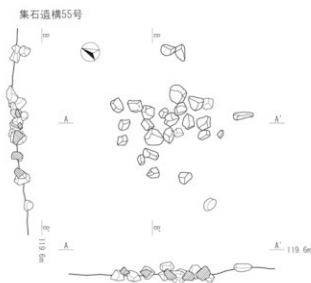
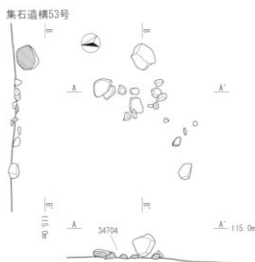
集石遺構 56号 (SQ56 : 第174図)

検出状況 D-12区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は16個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 ほぼ安山岩で, 構成礫全体の約80%が熱を受けている。100~200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。



第174図 集石遺構53号~56号

集石遺構 57号 (SQ57: 第175図)

検出状況 D-14区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は23個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 ほぼ安山岩で, 熱を受けている礫は少ない。200~300gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 58号 (SQ58: 第175図)

検出状況 D-9区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は13個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩のみで, 全ての構成礫が熱を受けている。400~500gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 59号 (SQ59: 第175図)

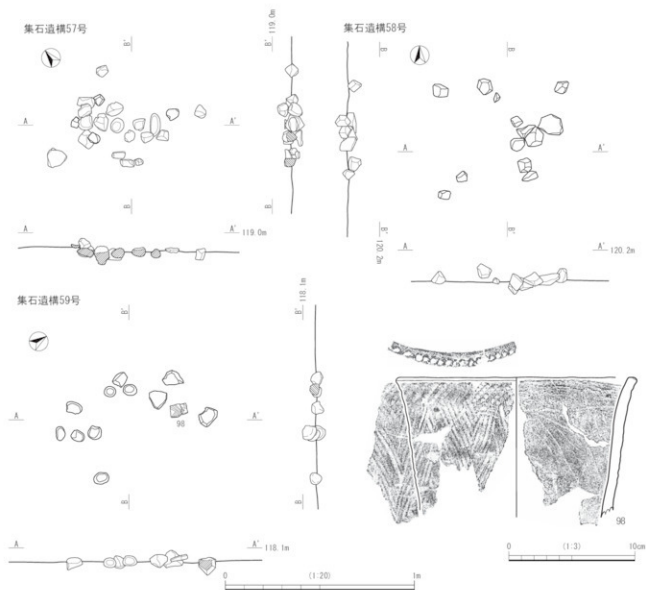
検出状況 D-17区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は11個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩のみで, 全ての構成礫が熱を受けている。200~300gと300~400gの礫が多いが, 1000~1500gの礫1個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 口縁部が1点出土し, 円化した。98(第175図)である。やや外反する口縁部外面上位に, 斜位貝殻刺突文を施し, その直下に綾杉状の条痕文を施す。口唇部外面端部に, 5mm程の刺突状のキザミを斜位に施す。内面は, 貝殻による調整の跡が確認できる。

土器分類 IV類に該当する。



第175図 集石遺構57号~59号・出土遺物

集石遺構 60号 (SQ60: 第176図)

検出状況 D-24区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は17個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 花崗岩が主体で, 全ての構成礫が熱を受けている。100g以下の礫が多いが, 1000gを超える礫4個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 61号 (SQ61: 第176図)

検出状況 C-25区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は15個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体の約30%が熱

を受けている。100g以下の礫が多いが, 1000gを超える礫3個も含まれる。

出土土器 出土していない。

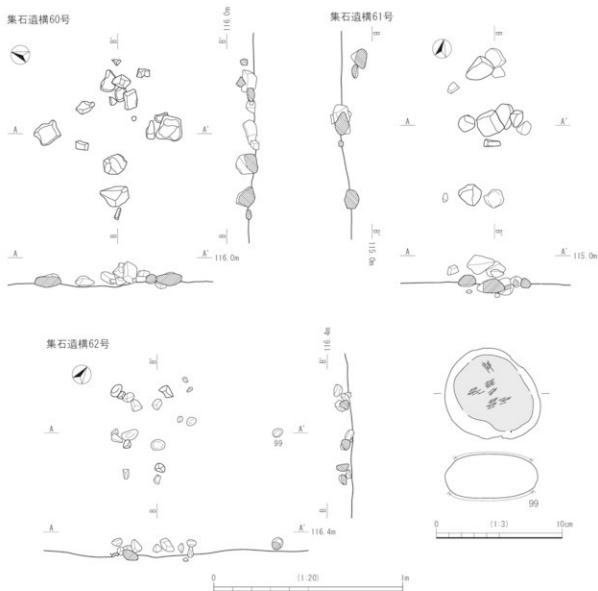
集石遺構 62号 (SQ62: 第176図)

検出状況 D-21区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は19個である。礫は, 中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体の約30%が熱を受けている。100~200gの礫が多い。磨石・敲石類が確認され, 固化した。99(第176図)は安山岩製の磨石・敲石類である。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており側面にススが附着する。

出土土器 出土していない。



第176図 集石遺構60号～62号・出土遺物

集石遺構63号 (SQ63：第177図)

検出状況 C-31区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は12個である。礫は、中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。200～300gの礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 小破片の口縁部が1点出土している。外反する口縁部外面上位に、斜位刺突文をやや不規則的に施し、その下位には、横位条痕文を1条施す。口唇部に文様をもたない。胎土には、金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類 IV類に該当する。

半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 ホルンフェルスと安山岩が主体で、構成礫全体の約60%が熱を受けている。100g以下の礫が多い。100(第177図)はホルンフェルス製の磨製石斧である。刃部の破片資料で、表面右側から裏面にかけて広く剥離痕が残るがやや磨滅しており、成形時のものと考えられる。

出土土器 出土していない。

集石遺構65号 (SQ65：第177図)

検出状況 E-22区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は5個である。礫は、中心から半径0.50mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩のみで、熱を受けている礫は確認できなかった。1000gを超える礫2個も含まれる。

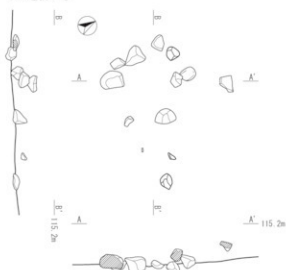
出土土器 出土していない。

集石遺構64号 (SQ64：第177図)

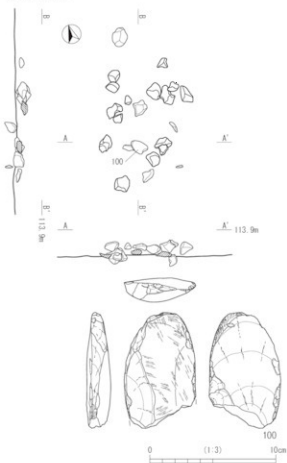
検出状況 K-47区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は22個である。礫は、中心から

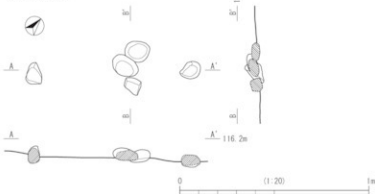
集石遺構63号



集石遺構64号



集石遺構65号



第177図 集石遺構63号・集石遺構64号・出土遺物・集石遺構65号

集石遺構 66号 (SQ66: 第178図)

検出状況 E-14区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は20個である。礫は、中心から半径0.50mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 67号 (SQ67: 第178図)

検出状況 F-18区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は11個である。礫は、中心から半径0.50mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は確認できなかった。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 胴部が1点出土し、図化した。101(第178図)である。やや膨らみをもつ胴部に、縦杉状の貝殻条痕文を施す。内面は、光沢を帯びている。

土器分類 IV類に該当する。

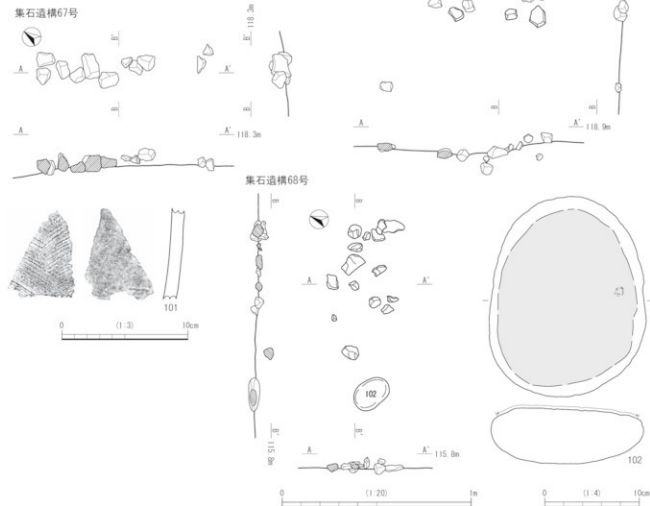
集石遺構 68号 (SQ68: 第178図)

検出状況 F-24区, XI層で検出された。構成礫総数は16個である。

規模 構成礫総数は16個である。礫は、中心から半径0.50mの範囲に広がる。

礫構成 花崗岩と凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、3000gを超える礫1個も含まれる。石皿の転用品が確認され、図化した。102(第178図)は安山岩製の石皿である。扁平な礫の片面を使用面としている。被熱しており全体的にススが附着する。

出土土器 出土していない。



第178図 集石遺構66号・集石遺構67号・出土遺物・集石遺構68号・出土遺物

集石遺構69号 (SQ69: 第179図)

検出状況 M-52区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は27個である。礫は, 中心から半径0.50mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で, 構成礫全体の約40%が熱を受けている。100~200gの礫が多く, 磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

集石遺構70号 (SQ70: 第179図)

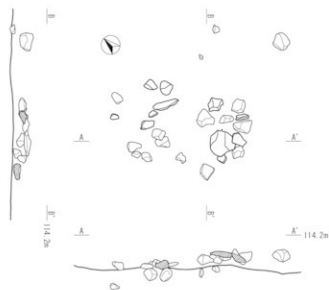
検出状況 B-14区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は19個である。礫は, 中心から半径0.55mの範囲に広がる。

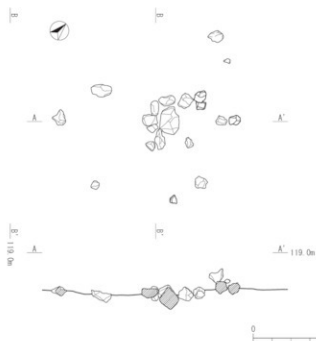
礫構成 安山岩をはじめ, 5種の石材で構成され熱を受けている礫は少ない。300~400gの礫が多いが, 2000~2500gの礫1個も含まれる。

出土土器 小破片の胴部が1点出土している。貝殻条痕文を2条施すが, 明確な型式の判断はできなかった。胎土には, 金雲母は含まれていない。図化はしていない。

集石遺構69号



集石遺構70号



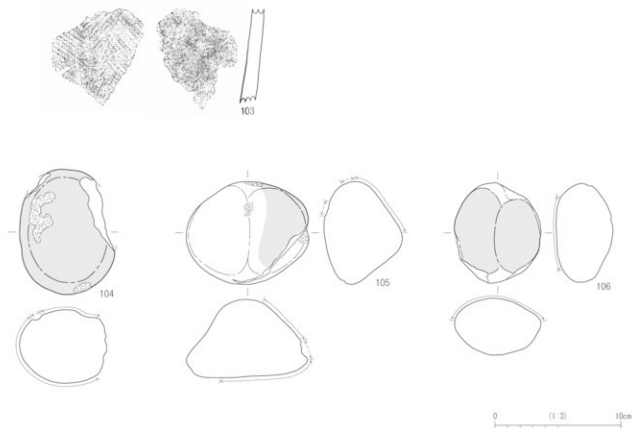
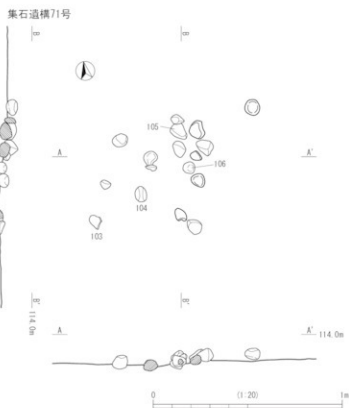
第179図 集石遺構69号・集石遺構70号

集石遺構71号 (SQ71 : 第180図)

検出状況 J-48区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は19個である。礫は、中心から半径0.55mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。300～400gの礫が多い。104～106 (第180図)は、いずれも安山岩製の磨石・敲石類である。104はやや扁平な円礫の全面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。105は三角形の礫で、表面右側から表面を磨面に利用しており、表面と側面の一部で敲打痕が認められる。106は扁平な円礫の表面を磨面に使用している。これら3点はいずれも被熱している。出土土器 胴部が1点出土し、図化した。103 (第180図)である。103は、綾杉状の貝殻条痕文を施す。内面は、貝殻によるナデをおこなう。土器分類 IV類に該当する。



第180図 集石遺構71号・出土遺物

集石遺構 72号 (SQ72: 第181図)

検出状況 I-50区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は13個である。礫は、中心から半径0.55mの範囲に広がる。

礫構成 はば安山岩で、構成礫全体の約50%が熱を受けている。200～300gの礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 73号 (SQ73: 第181図)

検出状況 E-24区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は21個である。礫は、中心から半径0.60mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。200～300gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

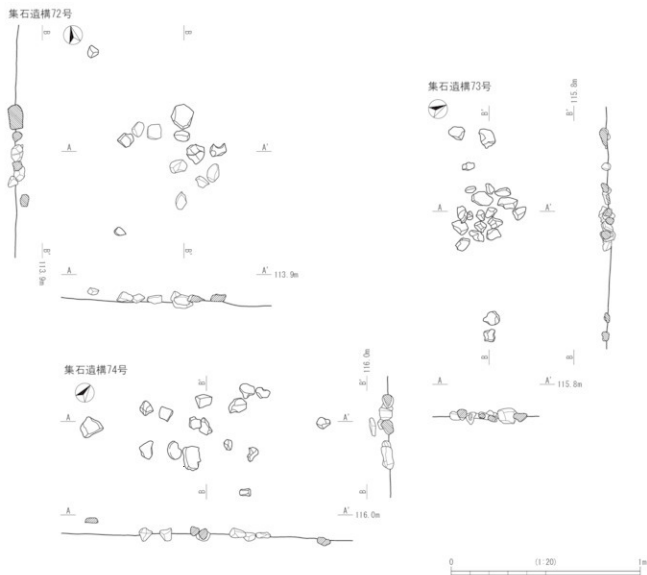
集石遺構 74号 (SQ74: 第181図)

検出状況 E・F-23区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は16個である。礫は、中心から半径0.65mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。200～300gと400～500gの礫が多く、磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。



第181図 集石遺構72号～74号

集石遺構75号 (SQ75: 第182図)

検出状況 E-21区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は35個である。礫は、中心から半径0.65mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

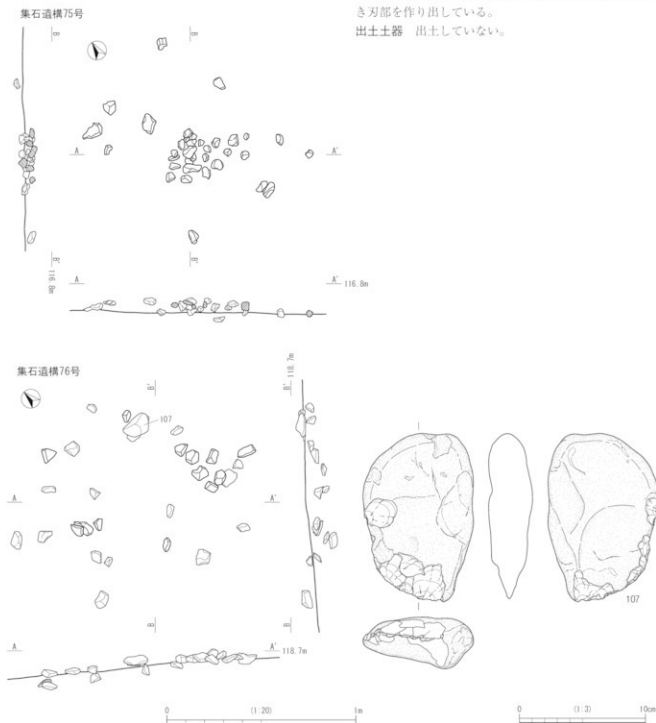
集石遺構76号 (SQ76: 第182図)

検出状況 D-15区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は30個である。礫は、中心から半径0.70mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多い。礫器の転用品が含まれ固化した。107(第182図)はホルンフェルス製の礫器である。扁平な楕円礫の縁辺を表裏両面から打ち欠き刃部を作り出している。

出土土器 出土していない。



第182図 集石遺構75号・集石遺構76号・出土遺物

集石遺構77号 (SQ77: 第183図)

検出状況 E-22区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は32個である。礫は、中心から半径0.70mの範囲に広がる。

礫構成 は凝灰岩で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200g以下の礫が多いが、1000gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構78号 (SQ78: 第183図)

検出状況 B-16区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は35個である。礫は、中心から半径0.75mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体のほとんどが熱を受けている。100～200gの礫で半数を占める。

出土土器 出土していない。



第183図 集石遺構77号・集石遺構78号

集石遺構 79号 (SQ79：第184図)

検出状況 E-10区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は16個である。礫は、中心から半径0.75mの範囲に広がる。

礫構成 構成礫は安山岩が多く砂岩・凝灰岩等も含まれ、熱を受けている礫は少ない。100g以下と200～300gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

炭化物 確認された炭化物は、科学分析の結果から、 ^{14}C 年代測定は、7,489-7,304calBCを示した。



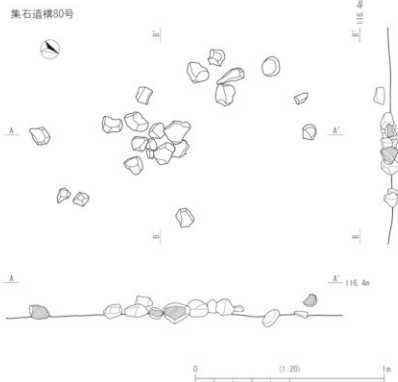
集石遺構 80号 (SQ80：第184図)

検出状況 E-22区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は22個である。礫は、中心から半径0.75mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩と花崗岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。400～500gの礫が多いが、1000gを超える礫5個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。



集石遺構 81号 (SQ81：第185図)

検出状況 E-13区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は20個である。礫は、中心から半径0.80mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫のほとんどが熱を受けている。100～200gの礫が多い。

出土土器 胴部が1点出土し、図化した。108(第185図)である。横位の沈線文を施し、その下位には、貝殻による押引文を施す。

土器分類 XVI類に該当する。

集石遺構 82号 (SQ82：第185図)

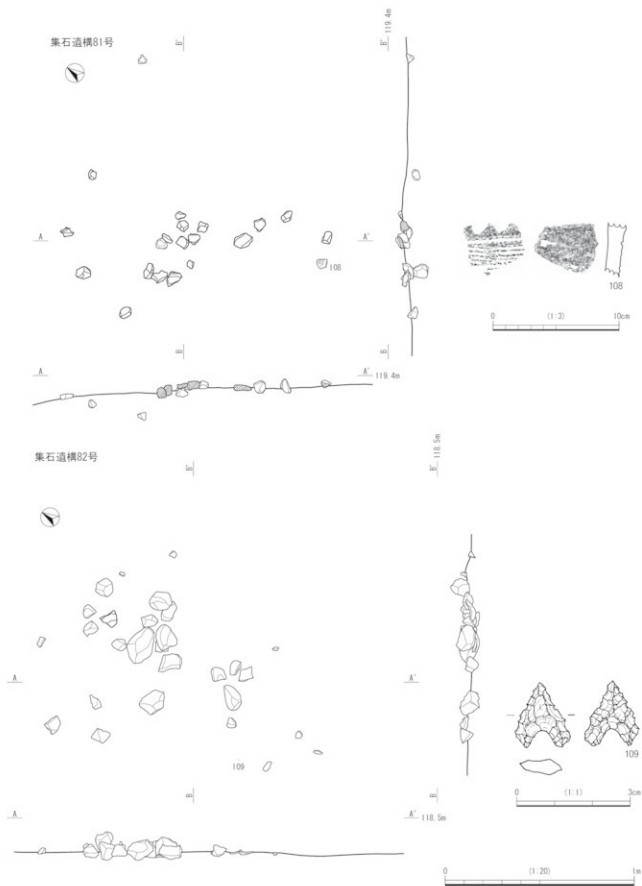
検出状況 A・B-15区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は25個である。礫は、中心から半径0.80mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は1個しか確認できなかった。100g以下の礫が多いが、1000～1500gの礫2個、2000～2500gの礫1個も含まれる。109(第185図)は黒曜石製の巴基無蓋釜である。表面に主要剥離面を残し、基部にやや深い抉りをもつ。109は、OB2類に該当する。

出土土器 出土していない。

第184図 集石遺構79号・集石遺構80号



第185図 集石遺構81号・出土遺物・集石遺構82号・出土遺物

集石遺構 83号 (SQ83 : 第186図)

検出状況 E-23区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は17個である。礫は, 中心から半径0.80mの範囲に広がる。

礫構成 構成礫は砂岩が多く凝灰岩等も含まれ, 全ての構成礫が, 熱を受けている。100 ~ 200 gの礫が多いが, 1000 gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構83号



集石遺構 84号 (SQ84 : 第186図)

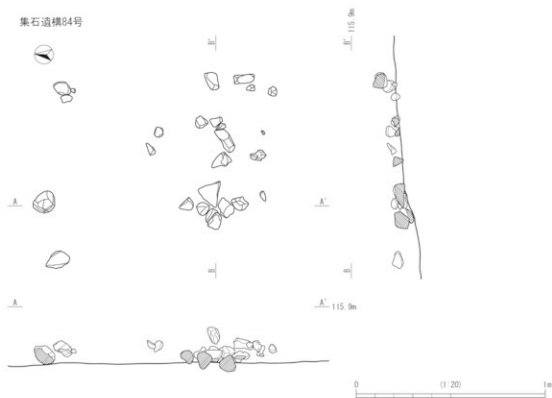
検出状況 C・D-24区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は27個である。礫は, 中心から半径0.80mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩が主体で, 全ての構成礫が熱を受けている。100 g以下の礫が多いが, 1000 gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構84号



第186図 集石遺構83号・集石遺構84号

集石遺構 85号 (SQ85 : 第187図)

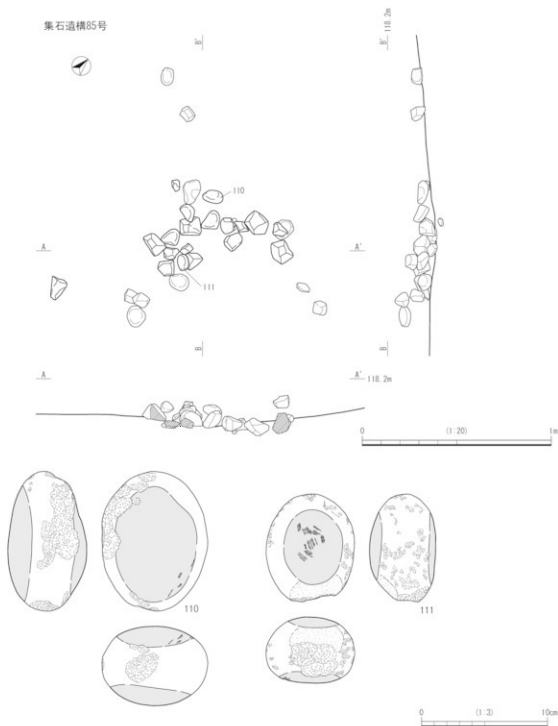
検出状況 F-16・17区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は30個である。礫は、中心から半径0.85mの範囲に広がる。

礫構成 構成礫は安山岩が多く、凝灰岩等も含まれ、構成礫全体の約50%が熟を受けている。500～600gと900～1000gの礫が多いが、1000～1500gの礫1個も含まれる。磨石・敲石類が含まれ、円化した。110・111

(第187図)は、ともに安山岩製の磨石・敲石である。110はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。111はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面として使用し、側面に敲打痕が認められ、下面で特に顕著である。被熱しており表面にスス、タールが付着する。

出土土器 出土していない。



第187図 集石遺構85号・出土遺物

集石遺構 86号 (SQ86 : 第188図)

検出状況 F-24区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は36個である。礫は、中心から半径0.85 mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200 gと200～300 gの礫が多く、石皿の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

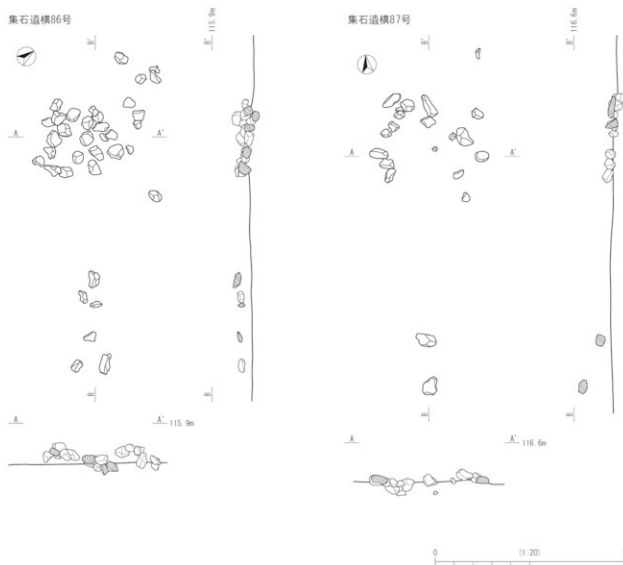
集石遺構 87号 (SQ87 : 第188図)

検出状況 G-21区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は21個である。礫は、中心から半径0.95 mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩と頁岩のみで、全ての構成礫が熱を受けている。100 g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。



第188図 集石遺構 86号・集石遺構 87号

集石遺構 88号 (SQ88: 第189図)

検出状況 E-33区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は32個である。礫は, 中心から半径0.95mの範囲に広がる。

礫構成 構成礫は安山岩が多数で, 熱を受けている礫は少ない。100～200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 89号 (SQ89: 第190図)

検出状況 K-47区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は35個である。礫は, 中心から半径1.05mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩のみで, 構成礫全体の約40%が, 熱を受けている。200～300gの礫が多いが, 1000gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 出土していない。

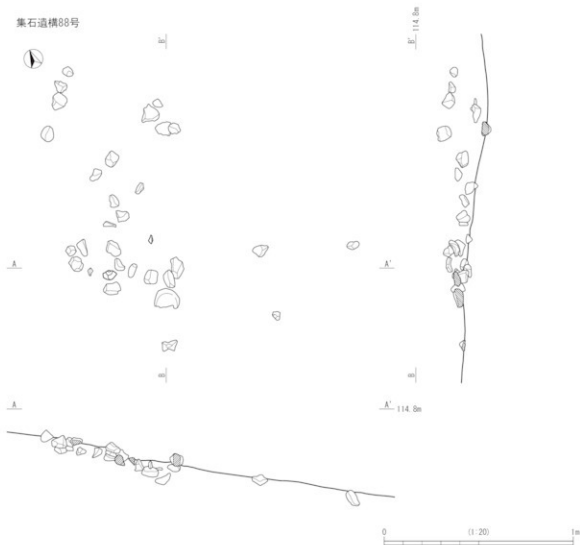
集石遺構 90号 (SQ90: 第190図)

検出状況 D-24区, XI層で検出された。

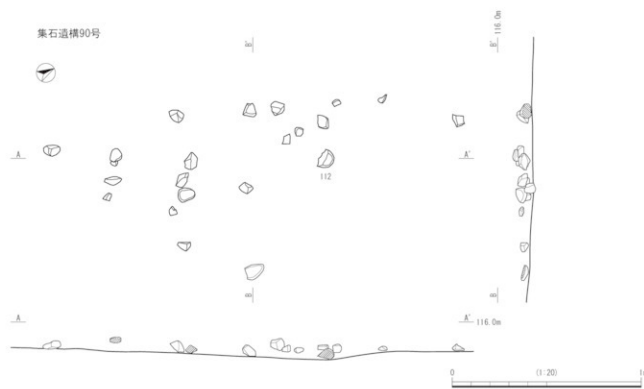
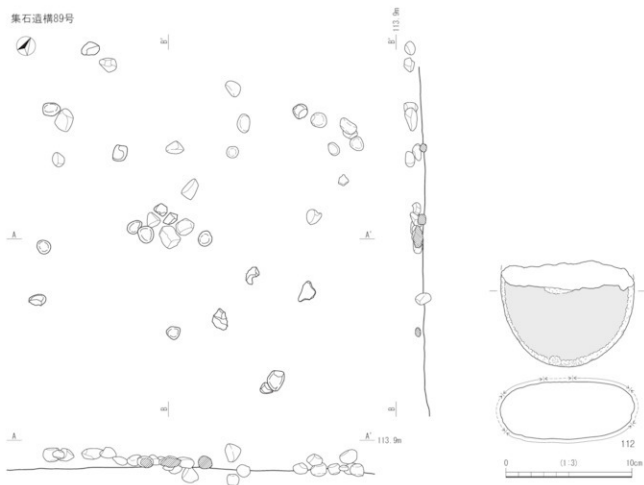
規模 構成礫総数は22個である。礫は, 中心から半径1.15mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩, 花崗岩が主体で, ほとんどの礫が熱を受けている。100g以下の礫が多く, 磨石・敲石類の転用品が確認され, 円化した。112(第190図)は安山岩製の磨石・敲石類である。上半分を欠損する。扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し, 表裏両面中央および側面に敲打痕が認められる。

出土土器 出土していない。



第189図 集石遺構88号



第190図 集石遺構89号・集石遺構90号・出土遺物

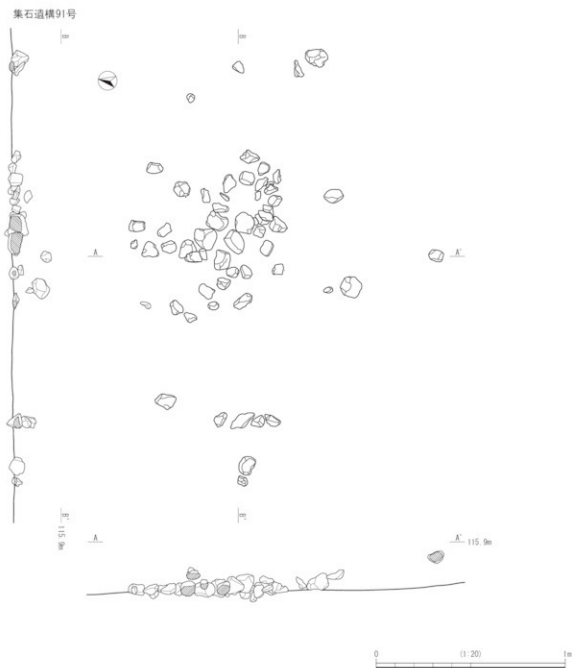
集石遺構91号 (SQ91 : 第191図)

検出状況 F-24区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は60個である。礫は、中心から半径1.20mの範囲に広がる。

礫構成 は凝灰岩で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多いが、1000gを超える礫8個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第191図 集石遺構91号

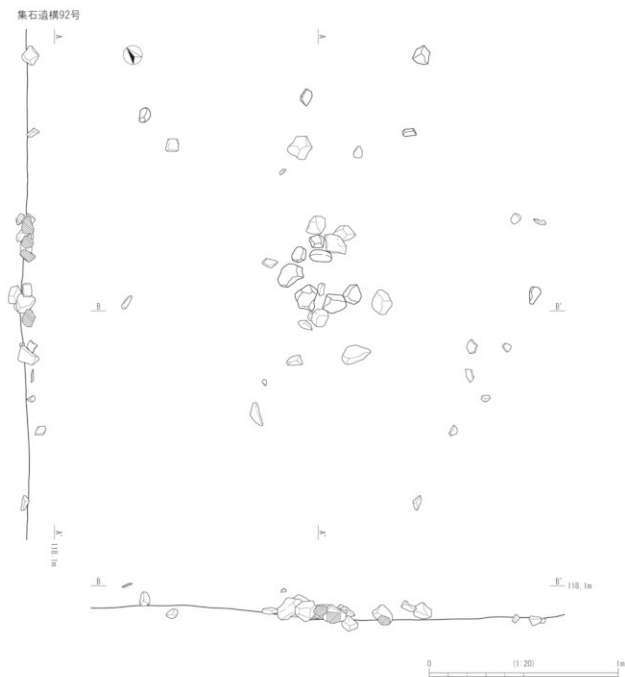
集石遺構 92号 (SQ92 : 第192図)

検出状況 A・B-17区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は38個である。礫は、中心から半径1.35mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000～1500gの礫が3個と、1500～2000gの礫3個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第192図 集石遺構92号

集石遺構93号 (SQ93 : 第193図)

検出状況 E-39区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は63個である。礫は中心から半径1.70mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約30%が熟を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫5個も含まれる。

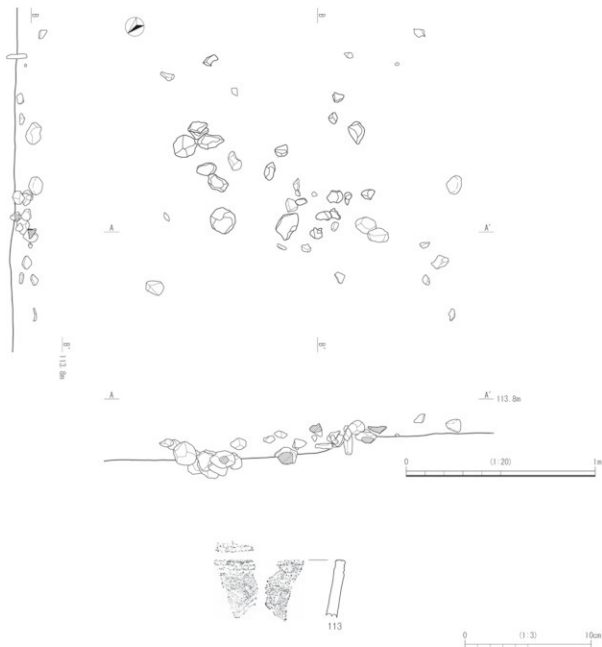
出土土器 胴部が3点、口縁部が1点出土している。そのうち1点を図化した。113 (第193図)である。113は、直行する口縁部で、口縁部外面上位に、横位貝殻刺突文

を施し、その直下には、綾杉状の貝殻条痕文を施す。口唇部は、貝殻による刺突状のキザミ2つを1単位として施す。胴部3点は、ともに斜位貝殻条痕文を施す。そのうち1点は、底部近くの胴部で、斜位貝殻条痕文の下位には、横位貝殻条痕文を施す。3点とも胎土には、金雲母は含まれていない。

土器分類 この4点は、IV類に該当する。

炭化物 確認された炭化物は、科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、7,727-7,585calBCを示した。

集石遺構93号



第193図 集石遺構93号・出土遺物

集石遺構 94号 (SQ94 : 第194図)

検出状況 D-24区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は36個である。礫は, 中心から半径0.50 mの範囲に広がる。

礫構成 凝灰岩が主体で, 全ての構成礫が熱を受けている。600 ~ 700 gの礫が多いが, 1000 gを超える礫7個も含まれる。

出土土器 出土していない。

炭化物 確認された炭化物は, 炭化材であった。科学分析の結果から, ツバキ属に同定され, ^{14}C 年代測定は, 7,457-7,188calBCを示した。

集石遺構 95号 (SQ95 : 第194図)

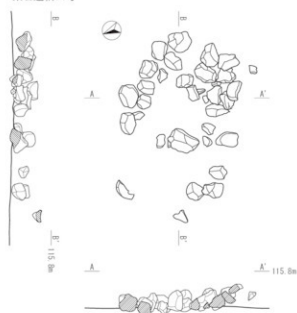
検出状況 E-36区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は27個である。礫は, 中心から半径0.95 mの範囲に広がる。

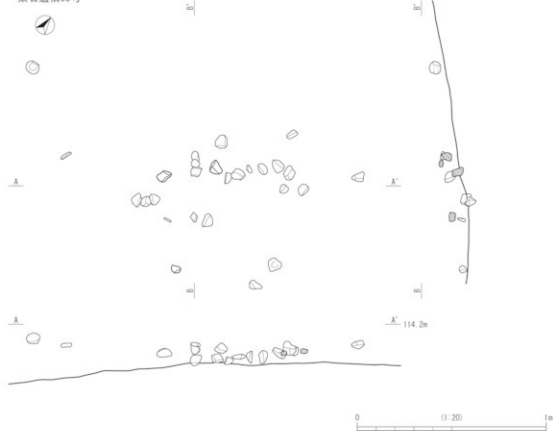
礫構成 安山岩が主体で, 熱を受けている礫は少ない。100 g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構94号



集石遺構95号



第194図 集石遺構94号・集石遺構95号

タイプII

集石遺構 96号 (SQ96: 第195図)

検出状況 E-13区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は26個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.50mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫のほとんどが熱を受けている。100g以下の礫が大半を占める。

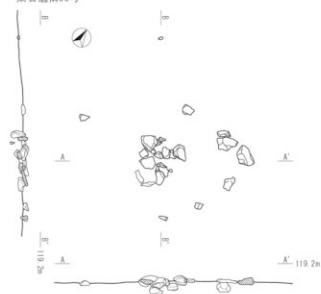
出土土器 出土していない。

集石遺構 97号 (SQ97: 第195図)

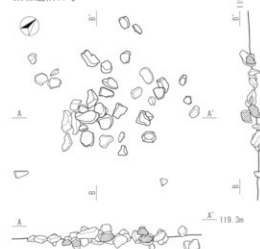
検出状況 F-13区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は20個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.50mの範囲に礫全体が広がる。

集石遺構96号



集石遺構98号



礫構成 砂岩と泥岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多く、磨石・敲石類の転用品が1点確認され、固化した。114(第195図)は安山岩製の砥石である。扁平な円礫の片面を使用面としている。被熱しており全体がやや赤化する。

出土土器 出土していない。

集石遺構 98号 (SQ98: 第195図)

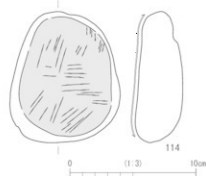
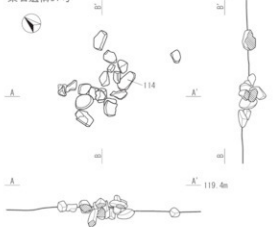
検出状況 F-13区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は40個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.55mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 砂岩が主体で、構成礫全体の60%が熱を受けている。200～300gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構97号



第195図 集石遺構96号・集石遺構97号・出土遺物・集石遺構98号

集石遺構 99号 (SQ99：第196図)

検出状況 B-17区, X層で検出された。

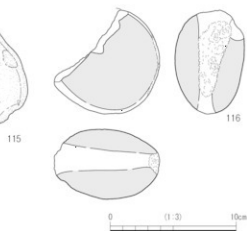
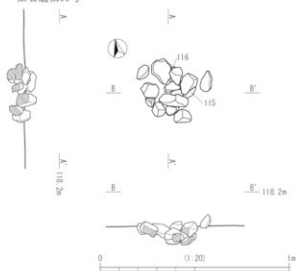
規模 構成礫総数は15個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.20mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多い。磨石・敲石類や礫器の転用品も含まれる。115（第196図）はホルンフェルス製の礫器である。扁平な円礫の縁辺を表面側から打ち欠き、片刃の刃部を作り出している。116（第196図）は安山岩製の磨石・敲石類である。左上部が欠損する。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、右側面に敲打痕が認められる。被熱しており全体がやや赤化する。

出土土器 出土していない。



集石遺構99号



集石遺構 100号 (SQ100：第196図)

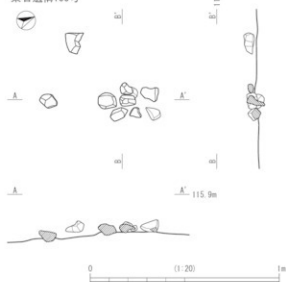
検出状況 E-29区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は10個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.45mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、ほとんどの礫が熱を受けている。

出土土器 出土していない。

集石遺構100号



第196図 集石遺構99号・出土遺物・集石遺構100号

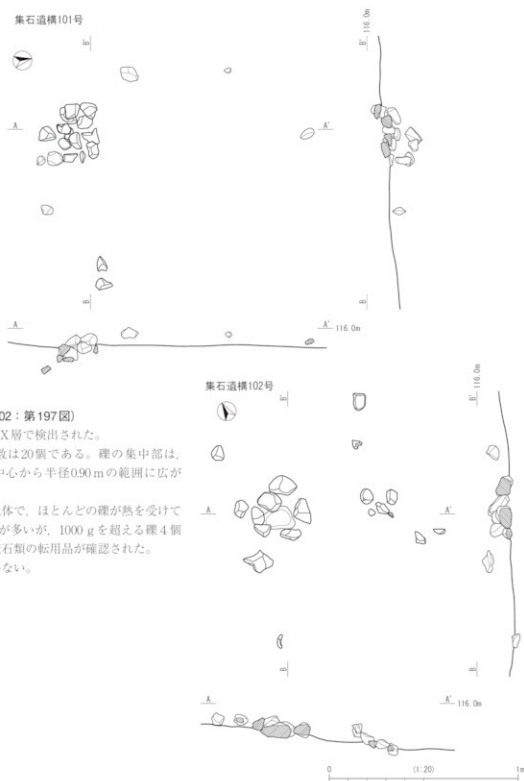
集石遺構101号 (SQ101：第197図)

検出状況 F-29区、X層で検出された。

規模 構成礫総数は22個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径1.30mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約70%が熱を受けている。300～400gの礫が多い。石皿の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。



集石遺構102号 (SQ102：第197図)

検出状況 D-28区、X層で検出された。

規模 構成礫総数は20個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.90mの範囲に広がる。

礫構成 安山岩が主体で、ほとんどの礫が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫4個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

第197図 集石遺構101号・集石遺構102号

集石遺構 103号 (SQ103: 第198図)

検出状況 D-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は26個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.60mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100～200gの礫が多く、磨石・敲石類や石皿の転用品が確認された。

出土土器 小破片の胴部が2点出土している。2点とも、外面に楕円押型文を斜位に施す。楕円の大きさ、胎土(楕円が小さめの土器片には金雲母が含まれ、大きめの方には金雲母は含まれていない)の違いから同一個体とは言い難い。いずれも図化はしていない。

土器分類 IX類に該当する。

集石遺構 104号 (SQ104: 第198図)

検出状況 C-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は42個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径1.10mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約60%が熱を受けている。1000gを超える礫3個も含まれる。

出土土器 小破片の胴部が3点出土している。1点は、外面に楕円押型文を斜位に施し、2点は剥落があるが、山形押型文を縦位に施す。この2点は、施文幅、胎土が同様であることから同一個体と思われる。3点ともガラス質鉱物が多く含まれるが、金雲母は含まれていない。いずれも図化はしていない。

土器分類 IX類に該当する。

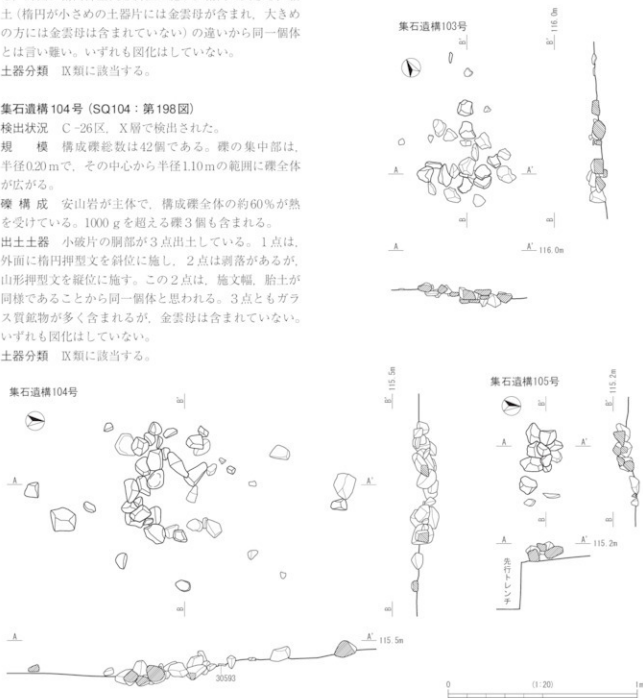
集石遺構 105号 (SQ105: 第198図)

検出状況 B-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は12個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.30mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約60%が熱を受けている。200～300gの礫が多い。

出土土器 出土していない。



第198図 集石遺構103号～105号

集石遺構 106号 (SQ106 : 第199図)

検出状況 C-20区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は35個である。礫の集中部は、半径0.30mで、その中心から半径0.50mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約80%が熱を受けている。100～200gと200～300gの礫が多いが、1000gを超えている礫3個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 107号 (SQ107 : 第199図)

検出状況 C-20区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は23個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.45mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約80%が熱を受けている。1000gを超えている礫4個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 108号 (SQ108 : 第199図)

検出状況 C-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は5個である。礫は、半径0.15mの範囲に集中している。

礫構成 ほほ安山岩で、ほとんどの礫が熱を受けている。1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

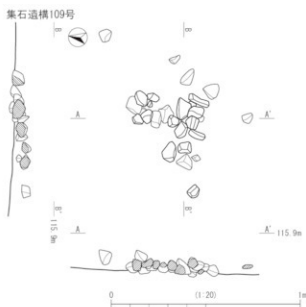
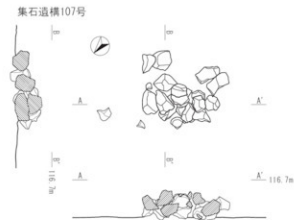
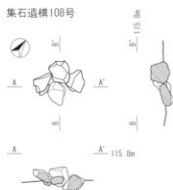
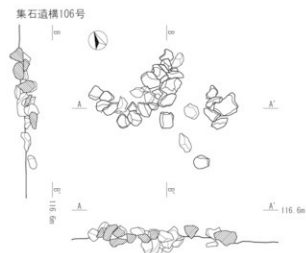
集石遺構 109号 (SQ109 : 第199図)

検出状況 D-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は28個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.55mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 凝灰岩と安山岩が主体で、構成礫全体の約50%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。



第199図 集石遺構106号～109号

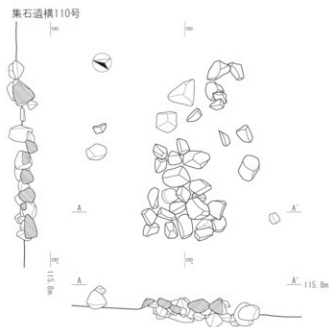
集石遺構110号 (SQ110: 第200図)

検出状況 D-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は36個である。礫の集中部は、半径0.25mで、その中心から半径0.80mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約80%が熱を受けている。1000gを超える礫6個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。



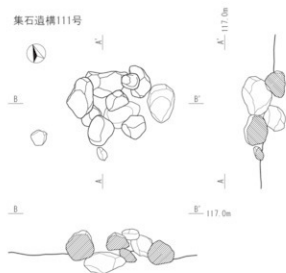
集石遺構111号 (SQ111: 第200図)

検出状況 C-20区, X層で検出された。

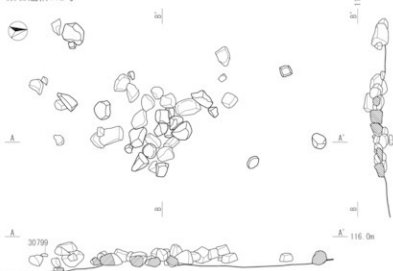
規模 構成礫総数は12個である。礫の集中部は、半径0.25mで、その中心から半径0.50mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 ほぼ安山岩で、構成礫全体の約70%が熱を受けている。1000gを超える礫9個も含まれる。

出土土器 出土していない。



集石遺構112号



集石遺構112号 (SQ112: 第200図)

検出状況 D-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は42個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.90mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約50%が熱を受けている。300～400gの礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 小破片の底部が1点出土している。山形押型文を縦位に施す。胎土には、金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類 IX類に該当する。



第200図 集石遺構110号～112号

集石遺構 113号 (SQ113: 第201図)

検出状況 E-31区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は20個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.40mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

集石遺構 114号 (SQ114: 第201図)

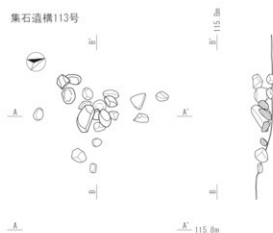
検出状況 E-35・36区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は33個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径1.00mの範囲に礫全体が広がる。

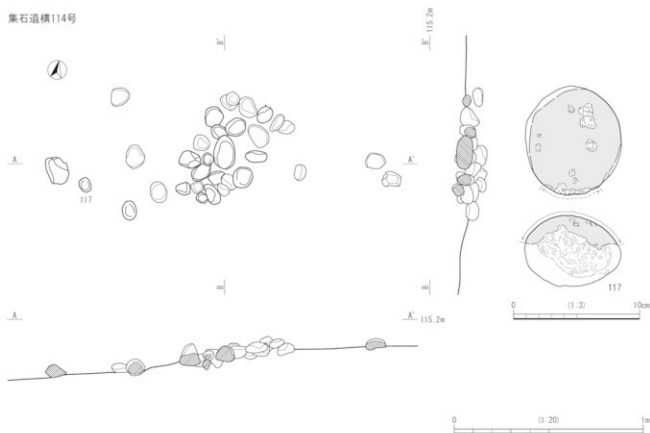
礫構成 安山岩と凝灰岩のみで、構成礫全体の約40%が熱を受けている。400～500gの礫が多いが、1000gを超える礫7個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認され、図化した。117(第201図)は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の片を磨面に使用し、下面に敲打痕が認められる。被熱しており表面にタールが付着する。

出土土器 出土していない。

集石遺構113号



集石遺構114号



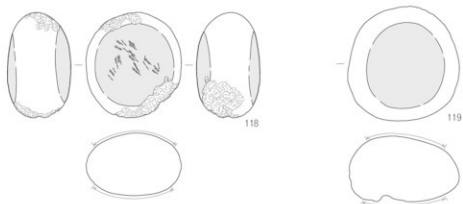
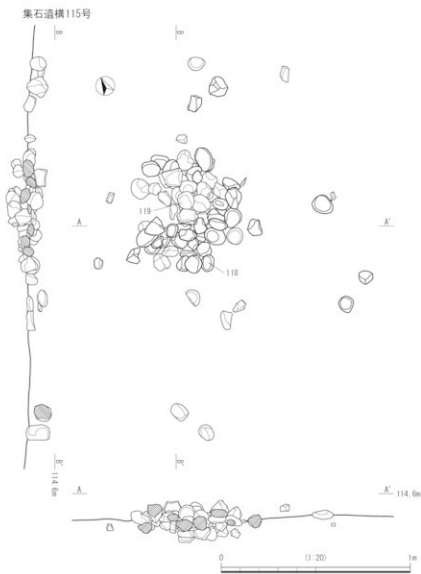
第201図 集石遺構 113号・集石遺構 114号・出土遺物

集石遺構 115号 (SQ115 : 第202図)

検出状況 E-35区, X層で検出された。
規模 構成礫総数は82個である。
礫の集中部は、半径0.25mで、その中心
から半径1.20mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、構成礫の約30%が熱を受けている。200～300gの礫が多いが、1000gを超える礫4個も含まれる。118・119(第202図)はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。118は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、側面には敲打痕が認められる。被熱しており側面にスス、タールが付着する。119は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化し裏面にタールが付着している。

出土土器 出土していない。



第202図 集石遺構115号・出土遺物

集石遺構 116号 (SQ116 : 第203図)

検出状況 C-28区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は41個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.85mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩、ホルンフェルスが主体で、熱を受けている礫は少ない。100～200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 117号 (SQ117 : 第203図)

検出状況 C-27区, X層で検出された。

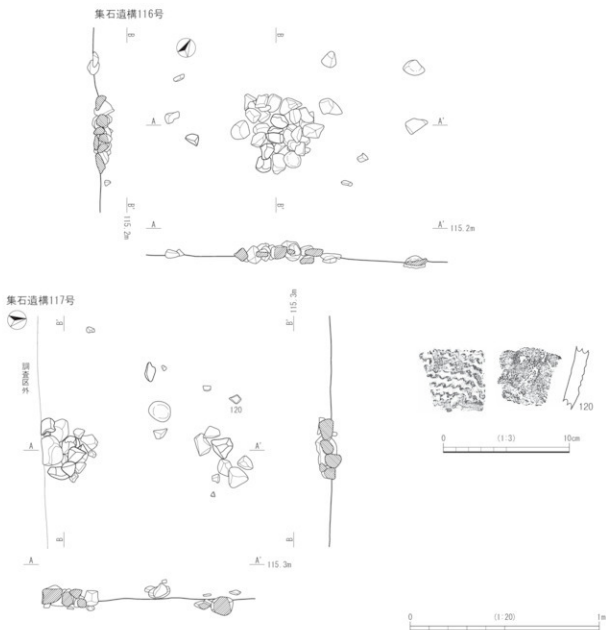
規模 構成礫総数は29個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径1.00mの範囲に礫全体

が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約20%が熱を受けている。1000gを超える礫3個も含まれる。砥石が含まれる。

出土土器 胴部が3点出土している。そのうち1点を図化した。120(第203図)である。底部に近い胴部で、山形押型文を横位に施す。内面は光沢をやや帯びており、工具によるナデをおこなう。他の2点とも施文方向は不明であるが、1点は幅の狭い山形押型文を施し、もう1点はなだらかな山形押型文を施す。2点とも金雲母が含まれている。3点は、同一個体とは言い難い。

土器分類 3点とも、IX類に該当する。



第203図 集石遺構 116号・集石遺構 117号・出土遺物

集石遺構 118号 (SQ118 : 第204図)

検出状況 C-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は66個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径2.25mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多い。

出土土器 胴部が3点、口縁部が1点出土している。そのうち2点を図化した。121・122(第204図)である。

121は口縁部で、外面に連珠押型文を横位に施す。口唇部の外面側端部は丸みを帯び、そこから1.5cm程内傾した後、稜をもつ。稜に至る口縁部内面に、文様を施していないが、棒状工具による刺突状の条痕文を施す。内面は、工具によるナデをおこなう。内外面ともに、やや光沢を帯びている。122は、口縁部に近い胴部で、内面上位に、山形押型文を横位に施す。外面にも同一の押型文を横位に施す。121・122は同一個体とは言い難い。残りの胴部のうち1点は、山形押型文を横位に施すが、

121・122と同一個体とは言い難い。また、被熱によると思われる剥落が著しい。もう1点は、底部付近の胴部と思われる。貝殻による斜位条痕文を上位に、横位条痕文をその下位に施す。図化していない胴部2点とも、胎土には金雲母は含まれていない。

土器分類 121・122はⅡ類に、図化していない山形押型文の胴部もⅡ類に、斜位条痕文を施す胴部はⅣ類に該当する。

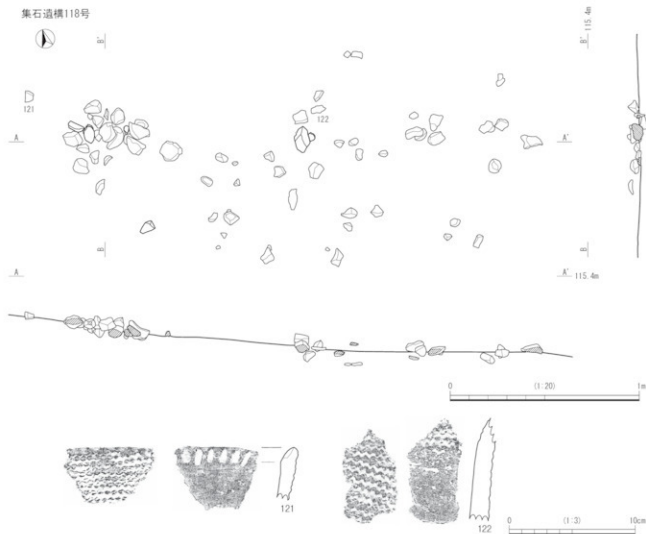
集石遺構 119号 (SQ119 : 第205図)

検出状況 C-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は16個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.60mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は1個しか確認できなかった。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第204図 集石遺構 118号・出土遺物

集石遺構 120号 (SQ120 : 第205図)

検出状況 C-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は43個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.75mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

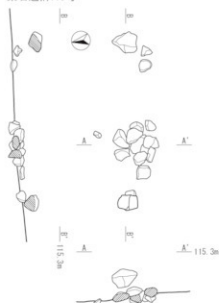
集石遺構 121号 (SQ121 : 第205図)

検出状況 K-50区, X層で検出された。

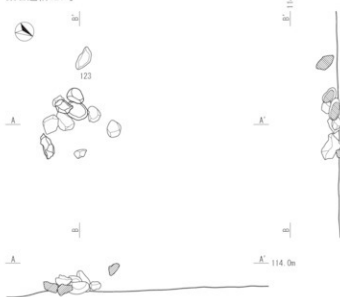
規模 構成礫総数は11個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.35mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルス、砂岩で構成され、構成礫の約40%が熱を受けている。123 (第205図)は安山岩製の磨石・敲石類である。やや扁平な円礫の片面

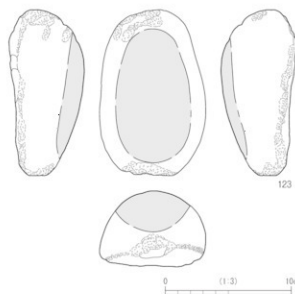
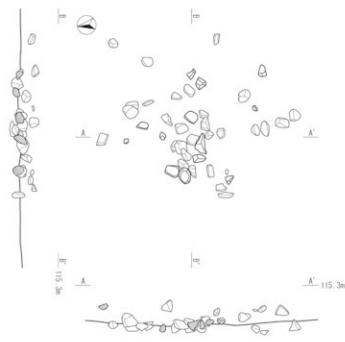
集石遺構 119号



集石遺構 121号



集石遺構 120号



第205図 集石遺構 119号～121号・出土遺物

を磨面に使用し、側面と表面側縁に敲打痕が認められる。

出土土器 小破片の胴部が2点出土している。1点には、外面調整に貝殻条痕が、内面にはナデをおこなう。もう1点は、小さな楕円押型文を施す。2点とも胎土には、金雲母が含まれている。いずれも図化はしていない。

土器分類 前者はIV類に、後者はIX類に該当する。

集石遺構122号 (SQ122: 第206図)

検出状況 J-51区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は16個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.40mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 ほぼ安山岩で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。700～800gの礫が多いが、1000gを超える礫5個も含まれる。124(第206図)は凝灰岩製の石皿である。破片資料で扁平な石の片面を使用している。側

面にも磨痕が認められる。被熱しており側面から欠損部にかけてスス、タールが付着する。

出土土器 胴部から底部が1点出土し、図化した。125(第206図)である。125の底部外面及び胴部外面は、やや光沢を帯びている。胴部外面は、工具による短沈線文を斜位に施す。底面は、平底である。

土器分類 VI類に該当する。

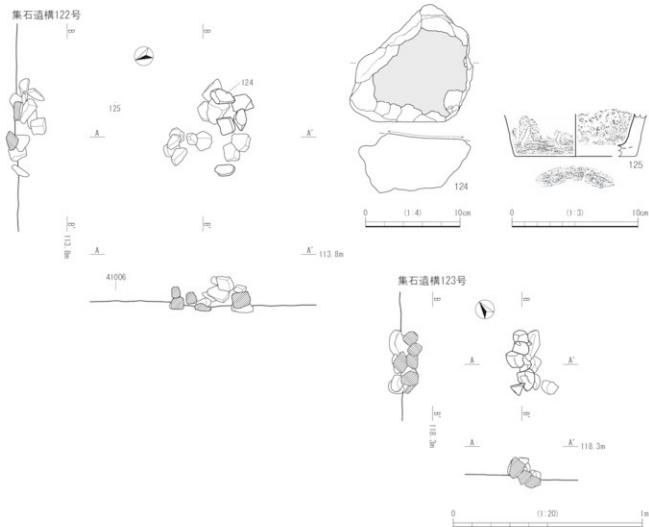
集石遺構123号 (SQ123: 第206図)

検出状況 F-18区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は10個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.20mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩のみで、構成礫全体の約40%が、熱を受けている。300～600gの礫が多いが、1000～1500gの礫1個も含まれる。

出土土器 出土しているが小破片のため不明である。



第206図 集石遺構122号・出土遺物・集石遺構123号

集石遺構 124号 (SQ124 : 第207図)

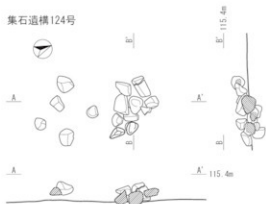
検出状況 D-30区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は16個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.30mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 ほぼ安山岩で、熱を受けている礫は少ない。200～300gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 124号



集石遺構 125号 (SQ125 : 第207図)

検出状況 H-45区, XI層で検出された。

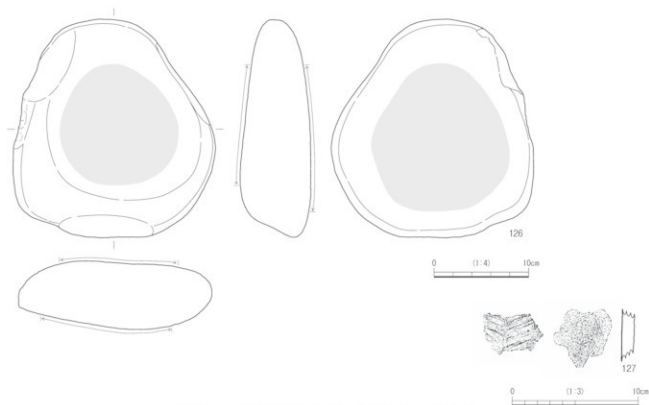
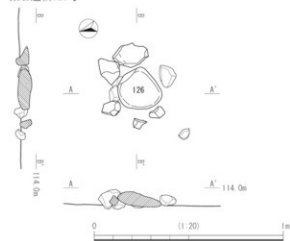
規模 構成礫総数は10個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.40mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約50%が熱を受けている。100～200gの礫が多いが、1000gを超える礫2個も含まれる。126 (第207図)は安山岩製の石皿である。扁平な石の表裏中央を使用面としている。裏面に強い被熱痕が認められススが附着する。

出土土器 胴部が1点出土し、図化した。127 (第207図)である。127は、外面に綾杉状の条痕文を施す。内面には、貝殻による調整と指によるナデをおこなう。

土器分類 IV類に該当する。

集石遺構 125号



第207図 集石遺構 124号・集石遺構 125号・出土遺物

集石遺構 126号 (SQ126 : 第208図)

検出状況 A・B-13区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は12個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.45mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩のみで、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が半数を占める。

出土土器 出土していない。

集石遺構 127号 (SQ127 : 第208図)

検出状況 C-15区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は38個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.45mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。200～300gの礫が多いが、1000～1500gの礫3個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 128号 (SQ128 : 第208図)

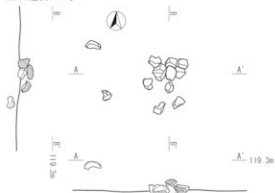
検出状況 I-52区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は21個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.65mの範囲に礫全体が広がる。

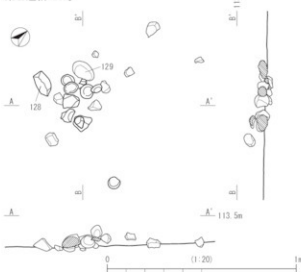
礫構成 ほぼ安山岩で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。128(第208図)は破片資料であるが、表裏面に細かい敲打痕が確認できたため台石とした。被熱しており全体にススが附着する。安山岩製である。129(第208図)はホルンフェルス製の磨石・敲石類である。やや不整形で扁平な円礫の裏面を磨面に使用し、表面には敲打痕が認められる。被熱しており全体がやや赤化し、表面から側面にかけてススが附着する。

出土土器 出土していない。

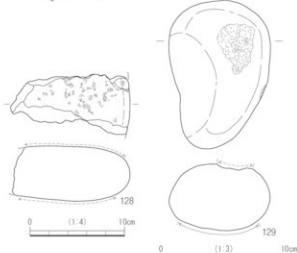
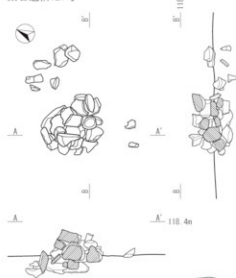
集石遺構126号



集石遺構128号



集石遺構127号



第208図 集石遺構126号～128号・出土遺物

集石遺構 129号 (SQ129: 第209図)

検出状況 E-18区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は28個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.70mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 ホルンフェルスと安山岩が主体で、構成礫全体の約20%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。出土土器 出土していない。

集石遺構 130号 (SQ130: 第209図)

検出状況 F-40区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は34個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.70mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 構成礫は安山岩とホルンフェルスが多く、構成礫の約60%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。出土土器 出土していない。

集石遺構 131号 (SQ131: 第210図)

検出状況 I-52区, XI層で検出された。

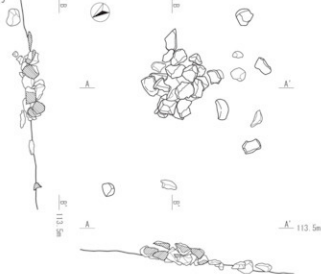
規模 構成礫総数は25個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.70mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下と100～200gの礫が多い。134(第210図)はホルンフェルス製の礫器である。扁平な礫の側縁3辺を打ち欠き、残り1辺の対面を刃部として特に鋭く作り出している。135～137(第210図)はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。135は欠損するが扁平な円礫を用いたと考えられ、表裏両面を磨面に使用し、表面

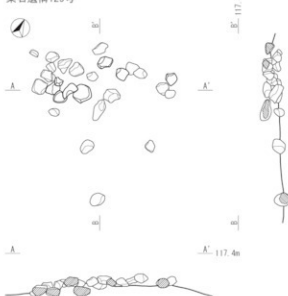
から側面にかけて敲打痕が認められる。被熱のため全体が赤化し、欠損部にタールが付着する。136は下半分を欠損する。やや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体に薄くススが付着する。137はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。被熱しており上下側面の敲打範囲にススが付着する。

出土土器 口縁部が2点、胴部が2点、底部が3点出土している。そのうち4点を図化した。130～133(第210図)である。130は、直行する口縁部で、口縁部外面には、斜位貝殻刺突文を施し、その直下に、ランダムな貝殻条痕文を施し、その下に、綾杉状の条痕文を施す。綾杉状の条痕文は、鋭いもの・太いものと規則性が見られない。口唇部は、貝殻にと思われる刺突状のキザ

集石遺構130号



集石遺構129号



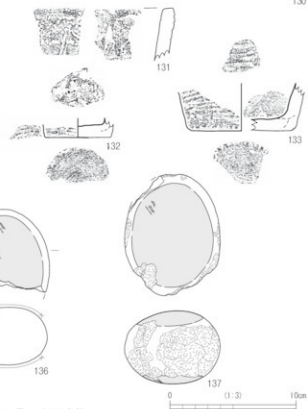
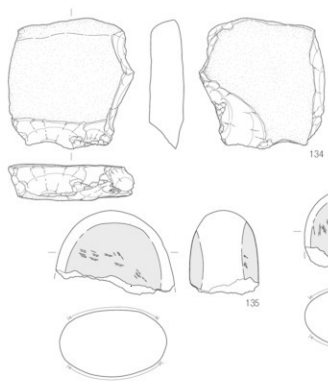
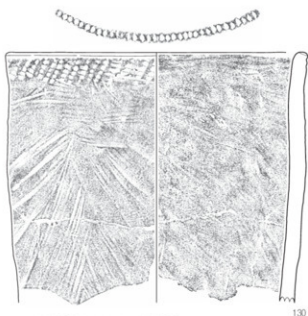
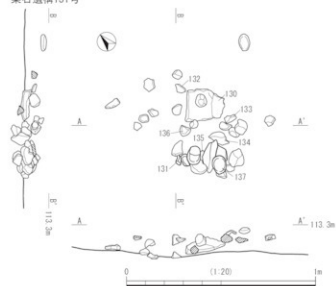
第209図 集石遺構129号・集石遺構130号

ミを施す。内面は、貝殻によるナデをおこなう。内外面とも、多少凹凸している。131も、直行する口縁部である。口縁部外面上位に、1条の横位刺突文を施し、その下位に斜位刺突文を施し、その下位に再度横位刺突文を施す。斜位刺突文部分に数条の貝殻条痕文を確認できることから、刺突文より先に施すことが分かる。132・133は、平底の底部である。2点とも底面は、光沢を帯びている。132は、底部外面端部近くまで横位条痕文を施し、内面に指おさえによる調整が確認できる。133は、底部外面端部にキザミを施し、その上位には横位や斜位条痕

文を施す。また、底部内面には貝殻による調整を確認できる。図化していないもう1点の底部外面端部にキザミはないが、横位条痕文を施す。胎土には、金雲母は含まれていない。胎土や調整等から、底部3点は同一個体とは言い難い。2点の胴部は、いずれも綾杉状の貝殻条痕文を施す。1点には金雲母が含まれ、もう1点には金雲母は含まれていないことから、胴部2点が同一個体とは言い難い。

土器分類 いずれの土器も、IV類に該当する。

集石遺構131号



第210図 集石遺構131号・出土遺物

集石遺構 132号 (SQ132 : 第211図)

検出状況 D-14区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は32個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.75mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多い。138(第211図)は安山岩製の凹基無茎鏃である。平面形は二等辺三角形を呈し、基部は両脚を欠損するがやや深い抉りをもつと考えられる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 133号 (SQ133 : 第211図)

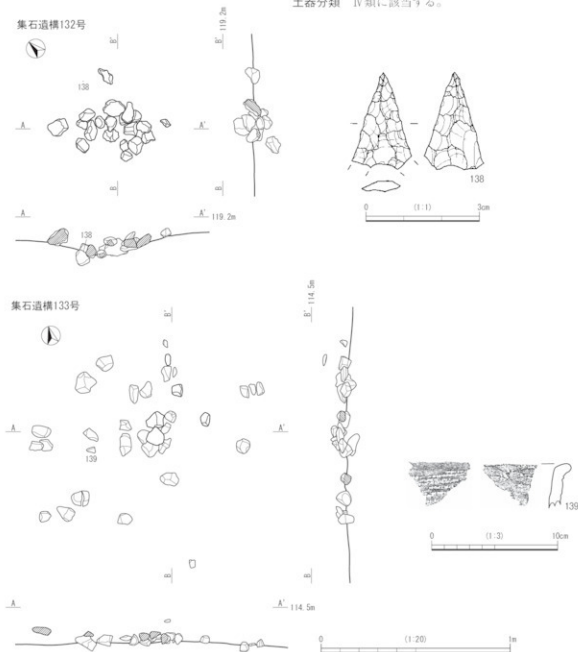
検出状況 F-35区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は32個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.75mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、構成全体礫の約10%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。

出土土器 口縁部が1点出土し、図化した。139(第211図)である。口縁端部が外反する口縁部上位には文様はなく、下位に横位刺突文を施す。口唇部に文様をもたない。内面は、工具によるナデをおこなう。

土器分類 IV類に該当する。



第211図 集石遺構 132号・出土遺物・集石遺構 133号・出土遺物

集石遺構 134号 (SQ134 : 第212図)

検出状況 C-27・28区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は12個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.75mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は1個しか確認できなかった。900～1000gの礫が多いが、1000gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 胴部が1点出土し、図化した。140(第212図)である。外面に山形押型文を横位や斜位に施す。内面は、指ナデをおこなう。

土器分類 K類に該当する。

半径0.10mで、その中心から半径0.75mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。300～400gの礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

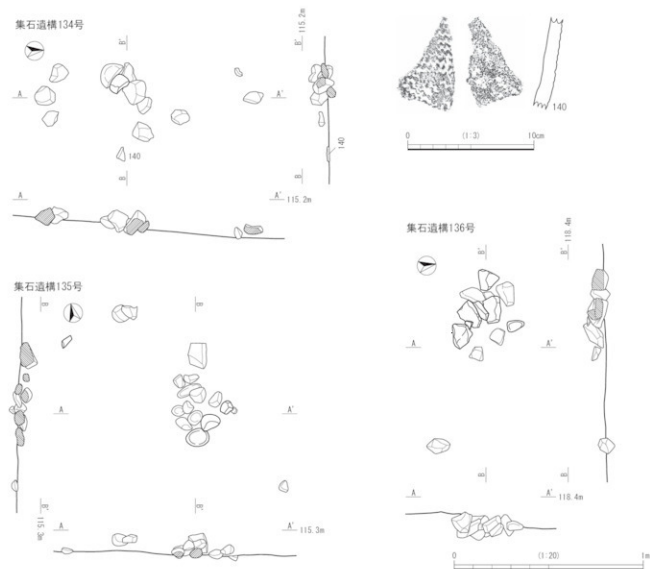
集石遺構 136号 (SQ136 : 第212図)

検出状況 F-15区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は13個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.80mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。1000～1500gの礫1個、1500～2000gの礫2個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第212図 集石遺構 134号・出土遺物・集石遺構 135号・集石遺構 136号

集石遺構 137号 (SQ137 : 第213図)

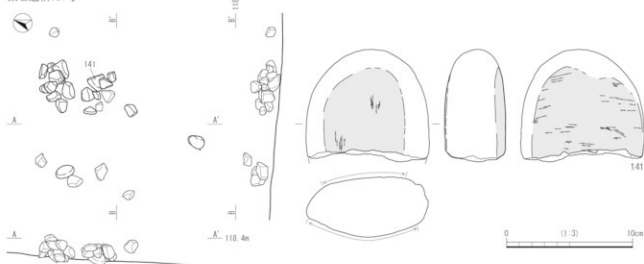
検出状況 D-15区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は26個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.85mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約60%が熱を受けている。100～200gの礫が多く、磨石・敲石類の転用品が確認された。141(第213図)は安山岩製の磨石・敲石類である。欠損するが元は扁平な円礫と考えられ、表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体にススが付着する。

出土土器 出土していない。

集石遺構137号



集石遺構 138号 (SQ138 : 第213図)

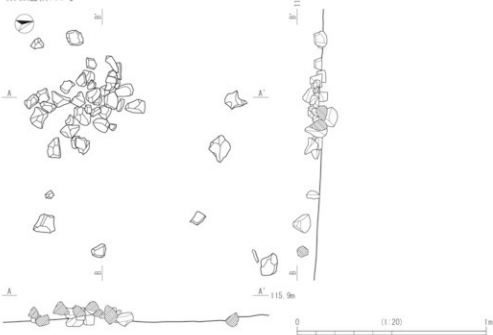
検出状況 D-24区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は43個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.90mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 ほは凝灰岩で、ほとんどの礫が熱を受けている。200～300gの礫が多いが、1000gを超える礫5個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

集石遺構138号



第213図 集石遺構 137号・出土遺物・集石遺構 138号

集石遺構 139号 (SQ139: 第214図)

検出状況 F-39区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は21個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.95mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約80%が熱を受けている。142(第214図)は花崗岩製の石皿である。破片資料であるが扁平な石の表裏面を使用していると考えられる。被熱しており表面にタールが付着する。
出土土器 出土していない。

集石遺構 140号 (SQ140: 第214図)

検出状況 I-48区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は33個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径1.00mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100~200gと200~300gの礫が多い。

出土土器 小破片の胴部が2点出土している。胴部の1点は、襷杉状に貝殻条痕文を施し、その下位には横位条痕文がわずかに確認できる。横位条痕文を襷杉状の貝殻条痕文が切っていることから、横位条痕文を先に施す。もう1点の外表面は摩滅が激しく、明確な型式の判断はできなかった。2点とも金雲母は含まれていないが、器壁の厚みや胎土の違いから同一個体の可能性は低い。いずれも図化はしていない。

土器分類 前者は、IV類に該当する。

集石遺構 141号 (SQ141: 第215図)

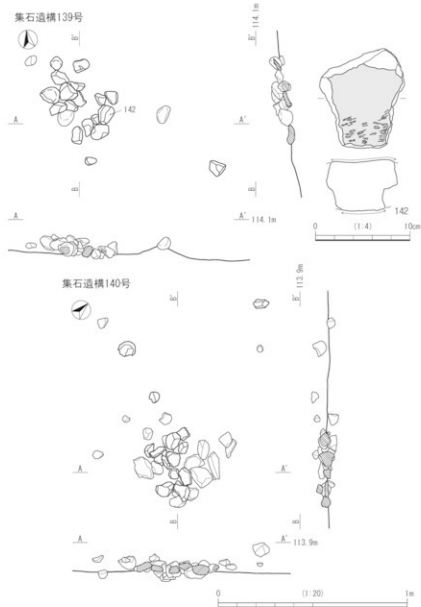
検出状況 J-49区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は45個である。礫の集中部は、半径0.40mで、その中心から半径1.00mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 はば安山岩で、熱を受けている礫は少ない。400~500gの礫が多いが、1000gを超える礫3個も含まれる。143~150(第215図)は、いずれも安山岩製の磨石・敲石類である。143は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、表面から側面にかけて敲打痕が認められる。被熱しており全体にスス、タールが付着

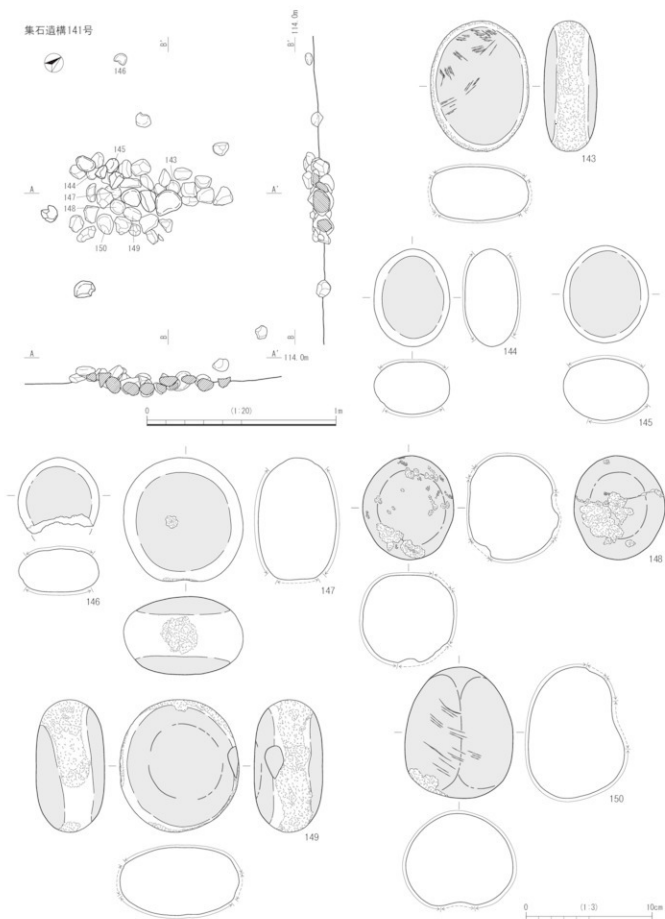
する。144はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。145はやや扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化する。146は欠損するが扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用している。被熱しており全体がやや赤化する。147は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、下面に敲打痕が認められる。被熱しており全体にススが付着する。148は円礫の全面を磨面に使用し、表裏両面に敲打痕路が認められる。149は扁平な円礫の表裏両面および右側面を磨面に使用し、側面には敲打痕が認められる。150は円礫の全面を磨面に使用し、表面に敲打痕が認められる。被熱しており表面から側面にかけてススが付着する。

出土土器 出土していない。



第214図 集石遺構 139号・出土遺物・集石遺構 140号

集石遺構141号



第215図 集石遺構141号・出土遺物

集石遺構 142号 (SQ142 : 第216図)

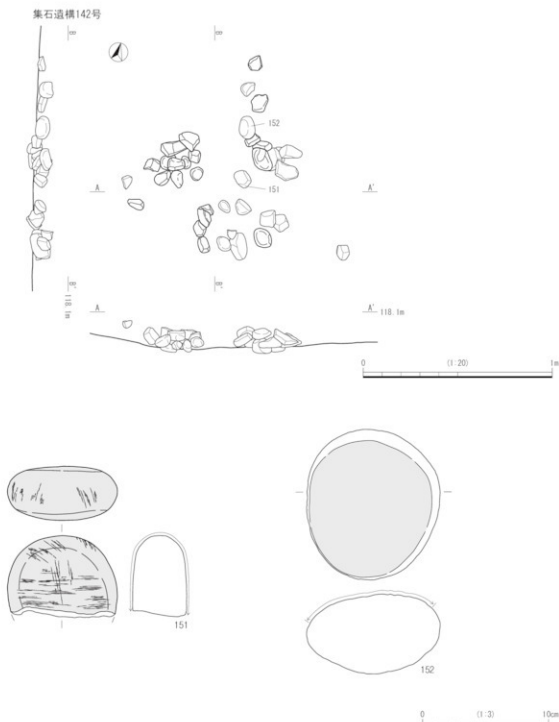
検出状況 D-16区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は37個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径1.05mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約50%が熱を受けている。400～500gの礫が多い。磨石・敲石類の転用品が確認され、図化した。151・152 (第216図)

はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。151は欠損するが元は扁平な円礫と考えられ、表裏両面および側面を磨面に使用している。被熱しており欠損部にススが付着する。152は扁平な円礫の表面を磨面に使用している。被熱しており表面にタールが付着する。

出土土器 出土していない。



第216図 集石遺構 142号・出土遺物

集石遺構 143号 (SQ143: 第217図)

検出状況 J-48区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は48個である。礫の集中部は、半径0.25mで、その中心から半径1.05mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 ほぼ安山岩で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。300～400gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 144号 (SQ144: 第218図)

検出状況 K-49区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は38個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径1.10mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 ホルンフェルスと安山岩が主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 胴部が1点出土し、円化した。153(第218図)である。153は、底部付近の胴部と思われる。外面下位に横位貝殻条痕文を施し、その上位には縦杉状の条痕文を施す。その施文順は、不明である。

土器分類 IV類に該当する。

集石遺構 145号 (SQ145: 第218図)

検出状況 D-15区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は28個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径1.20mの範囲に礫全体が広がる。

礫構成 安山岩が主体で、ほとんどの礫が熱を受けている。100～200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 146号 (SQ146: 第218図)

検出状況 F-16区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は33個である。礫は半径0.15mに集中している。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 147号 (SQ147: 第218図)

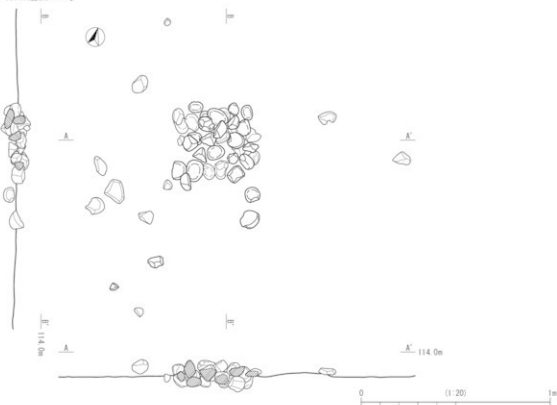
検出状況 C-23区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は17個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.30mの範囲に礫全体が広がる。

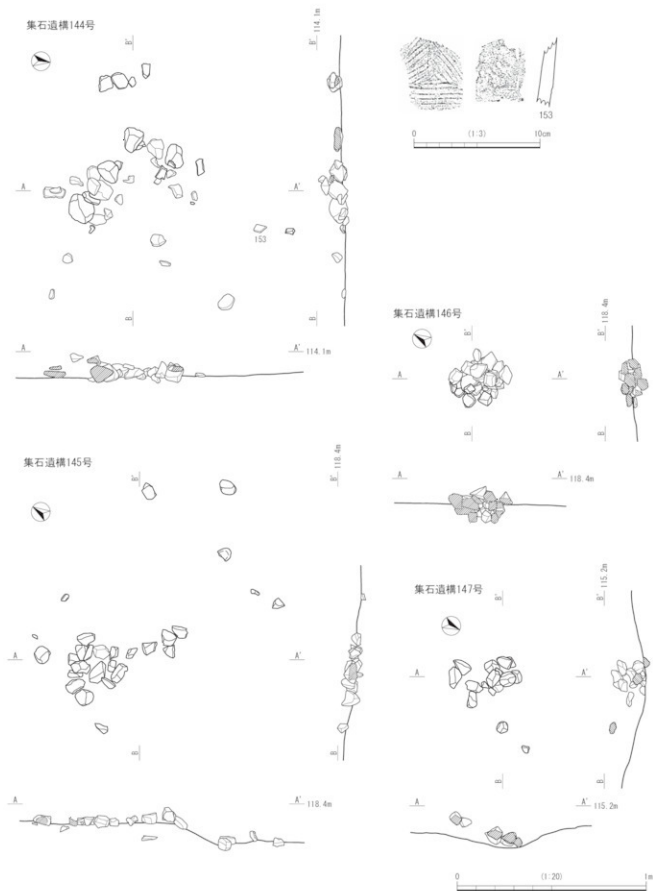
礫構成 凝灰岩と頁岩のみで、ほとんどの礫が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構143号



第217図 集石遺構143号



第218図 集石遺構144号・出土遺物・集石遺構145号～147号

タイプⅢ

集石遺構 148号 (SQ148: 第219図)

検出状況 A-21区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は73個である。礫の集中部は、半径0.50mで、その中心から半径1.00mの範囲に礫全体が広がる。0.15mの掘り込みを伴う。

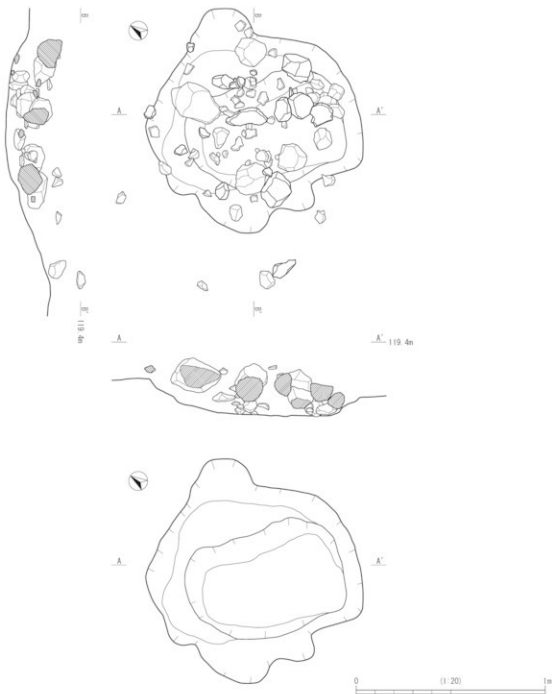
礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約20%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、

1000gを超える礫10個も含まれる。

出土土器 小破片の胴部が2点出土している。剥落が激しく型式の判断はできなかった。胎土には、金雲母は含まれていない。図化はしていない。

炭化物 埋土中で確認された炭化物は、木炭であった。科学分析の結果から、¹⁴C年代測定は、7519-7346calBCを示した。

集石遺構 148号



第219図 集石遺構 148号

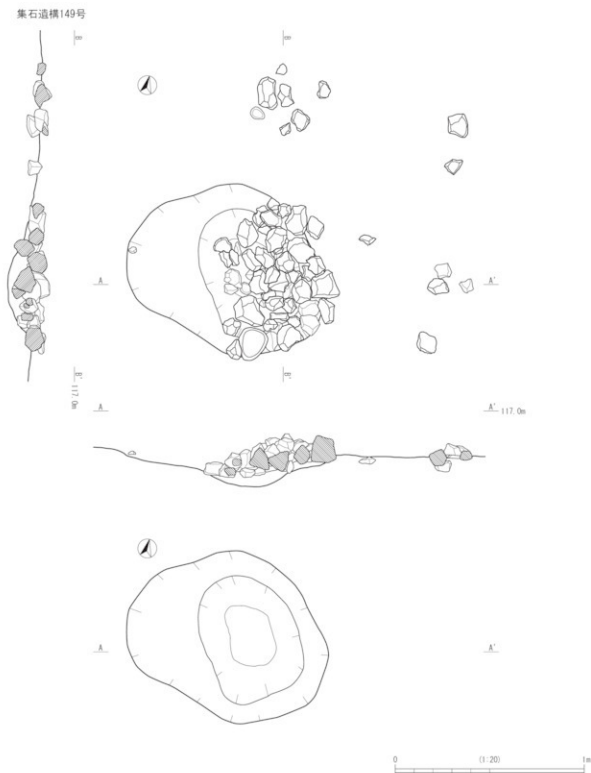
集石遺構 149号 (SQ149: 第220図)

検出状況 B-20区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は65個である。礫の集中部は、半径0.40mで、その中心から半径1.35mの範囲に礫全体が広がる。0.19mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、構成礫全体の約70%が熱を受けている。1000～1500gの礫が多いが、1500gを超える礫10個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。



第220図 集石遺構149号

集石遺構 150号 (SQ150 : 第221図)

検出状況 C-26区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は35個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.35mの範囲に礫全体が広がる。0.20mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。100～200gの礫が多いが、1000gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 出土していない。

炭化物 埋土中で確認された炭化物は、木炭であった。科学分析の結果から、カヤ属に同定され、¹⁴C年代測定は、7,362-7,318calBCを示した。

集石遺構 151号 (SQ151 : 第221図)

検出状況 F-33区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は14個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.90mの範囲に礫全体が広がる。0.07mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、構成礫全体の約30%が、熱を受けている。400～500gの礫が多いが、1000gを超える礫2個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 152号 (SQ152 : 第222図・第223図)

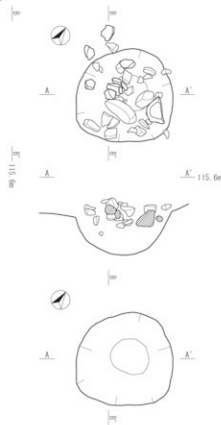
検出状況 C-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は42個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径1.25mの範囲に礫全体が広がる。0.21mの掘り込みを伴う。

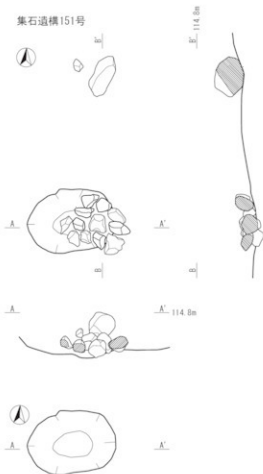
礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約10%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫13個も含まれる。154(第223図)は安山岩製の台石である。大型な扁平礫の片面を使用面とし、広く平坦な磨面が認められる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 150号

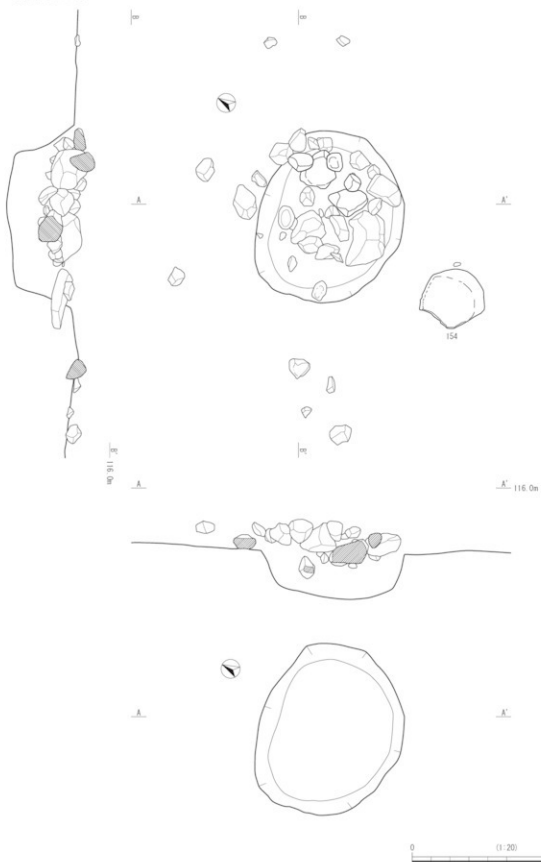


集石遺構 151号

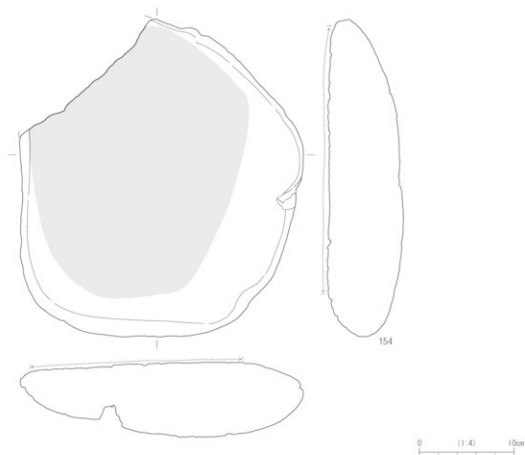


第221図 集石遺構 150号・集石遺構 151号

集石遺構152号



第222図 集石遺構152号



第223図 集石遺構152号出土遺物

集石遺構153号 (SQ153：第224図)

検出状況 B-27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は64個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径1.30mの範囲に礫全体が広がる。0.27mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫5個も含まれる。

出土土器 口縁部が2点、胴部が6点出土している。そのうち2点を図化した。155・156(第224図)である。155は、口縁部である。外面は、文様は不明であるが押型文を施したと思われる痕跡が確認できる。口唇部の外面側端部は丸みを帯び、そこから1.2cm程内傾した後、後をもつ。後に至る口縁部内面に、棒状工具による条痕文を縦位に施す。図化していないもう1点の口縁部は、口縁部内面上位に、棒状工具による条痕文を、その下位に山形押型文を横位に施す。この口縁部には、金雲母が含まれていない。156は、集石遺構153号(SQ153)内から出土した2点が接合した胴部である。外面に山形押型文を横位に施す。内面は、指おさえをおこなう。156は、617(第328図)と同一個体と思われる。図化していない

他の胴部のうち2点は、外面に山形押型文を横位に施す。残りの2点は、詳細は不明である。図化しなかった胴部4点とも、胎土には金雲母が含まれている。

土器分類 155・156はⅡ類に、図化していない不明以外の土器もⅡ類に該当する。

集石遺構154号 (SQ154：第224図)

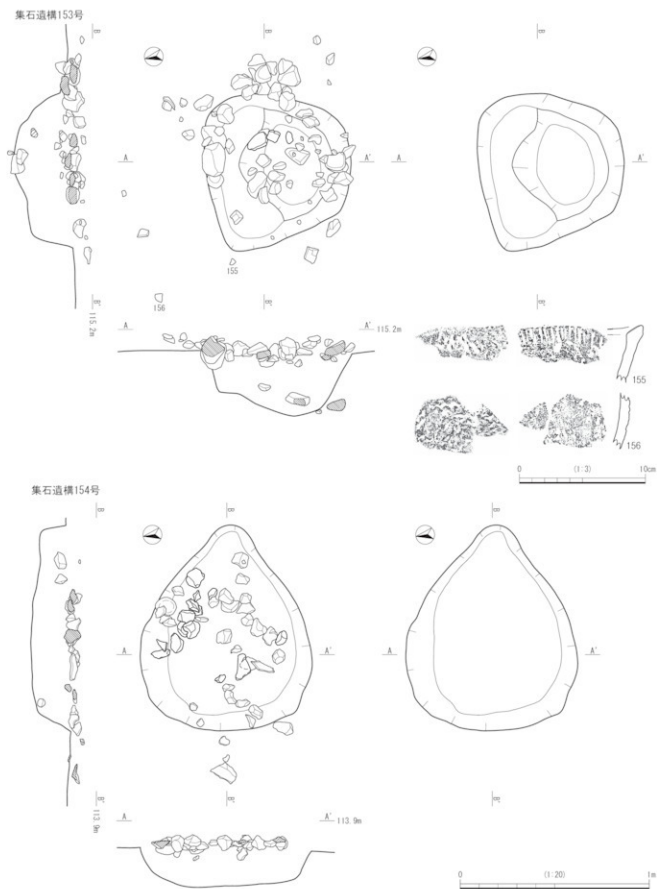
検出状況 K-52区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は45個である。礫の集中部は、半径0.10mで、その中心から半径0.90mの範囲に礫全体が広がる。0.20mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約20%が熱を受けている。200～300gの礫が多い。

出土土器 極小破片の口縁部が1点と小破片の胴部が1点出土している。口縁部の口唇部は、やや丸みを帯び、口縁部内面上部にのみ、山形押型文を施す。胎土には、金雲母が含まれている。小破片の胴部内面は剥落が激しいが、外面は、貝殻条痕文を縦位に施す。胎土には、金雲母は含まれていない。図化はしていない。

土器分類 口縁部はⅡ類に、胴部はⅣ類に該当する。



第224図 集石遺構153号・出土遺物・集石遺構154号

集石遺構 155号 (SQ155 : 第225図)

検出状況 L-54区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は8個である。礫は、半径0.51mの範囲に集中している。0.18mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩を主体に凝灰岩と構成され、熱を受けている礫は1個しか確認できなかった。

出土土器 出土していない。

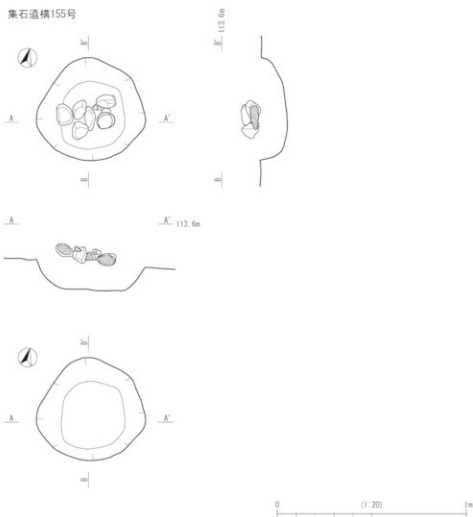
礫構成 安山岩と凝灰岩、ホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫3個も含まれる。157～159（第226図）はいずれも凝灰岩製の石皿である。157・158は小破片であるが、平坦な磨面を持つことから石皿とした。どちらも被熱しており157は磨面に、158は欠損部にススが附着する。159も破片資料だが、破損前は大型で扁平な石の片面を使用したと考えられる。全体が被熱している。

出土土器 出土していない。

集石遺構 156号 (SQ156 : 第226図)

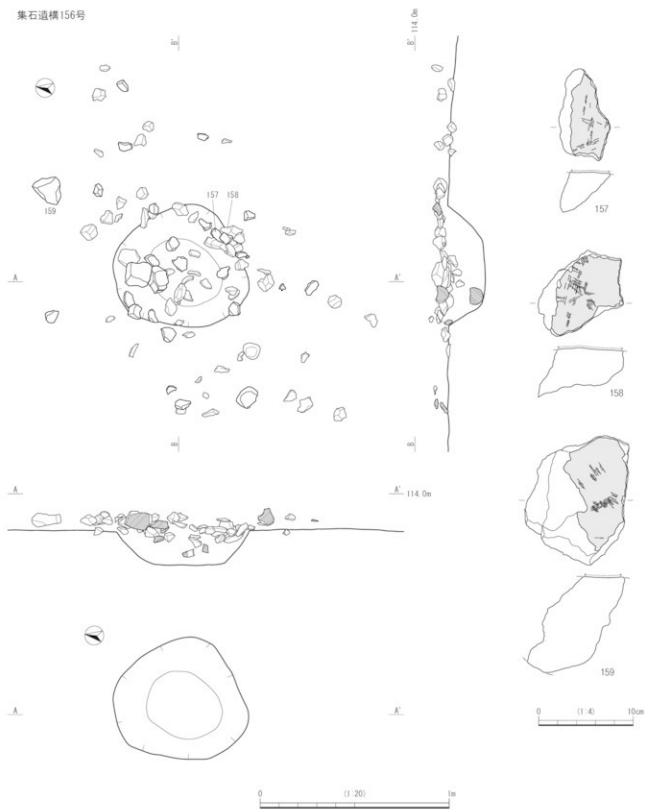
検出状況 J-50区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は86個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径1.20mの範囲に礫全体が広がる0.18mの掘り込みを伴う。



第225図 集石遺構 155号

集石遺構156号



第226図 集石遺構156号・出土遺物

集石遺構 157号 (SQ157 : 第227図)

検出状況 C-23区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は17個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.40mの範囲に礫全体が広がる。0.14mの掘り込みを伴う。

礫構成 凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多いが、1000gを超える礫4個も含まれる。

出土土器 出土していない。

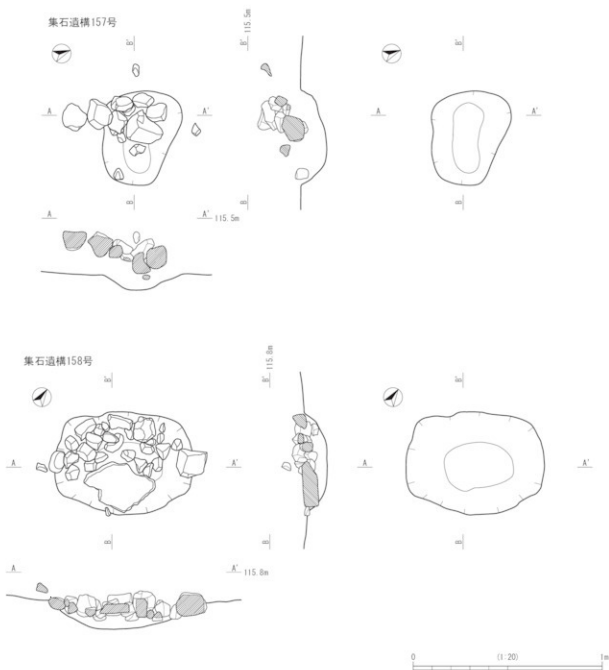
集石遺構 158号 (SQ158 : 第227図)

検出状況 D-23区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は30個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径0.45mの範囲に礫全体が広がる。0.14mの掘り込みを伴う。

礫構成 凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。200～300gの礫が多いが、1000gを超える礫6個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第227図 集石遺構 157号・集石遺構 158号

集石遺構 159号 (SQ159 : 第228図)

検出状況 B-26区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は65個である。礫の集中部は、半径0.25mで、その中心から半径0.45mの範囲に礫全体が広がる0.37mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。100～200gの礫が多い。礫器が確認された。

出土土器 出土していない。

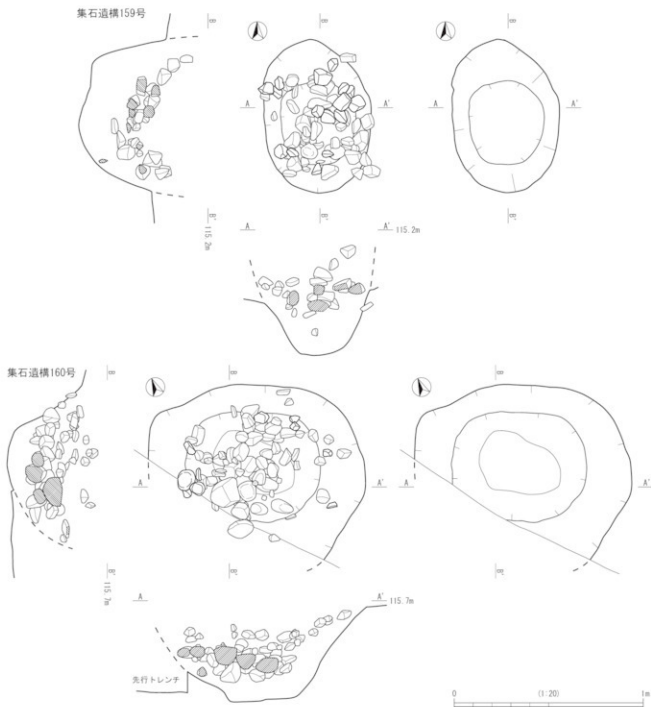
集石遺構 160号 (SQ160 : 第228図)

検出状況 C-22区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は76個である。礫の集中部は、半径0.25mで、その中心から半径0.55mの範囲に礫全体が広がる0.39mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫3個も含まれる。

出土土器 出土していない。



第228図 集石遺構 159号・集石遺構 160号

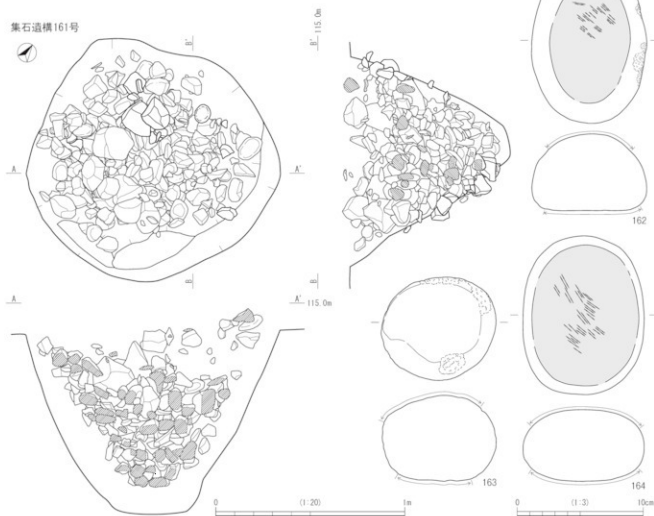
集石遺構 161号 (SQ161: 第229図)

検出状況 B-26区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は413個である。礫の集中部は、半径0.45mで、その中心から半径0.70mの範囲に礫全体が広がる。0.95mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約10%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫37個も含まれる。160～164(第229図)はいずれも安山岩製の磨石・敲石類である。160は欠損するが元は扁平な円礫と考えられ、表裏両面を磨面に使用している。161は扁平な円礫の表裏両面を磨面に使用し、側面に敲打痕が認められる。被熱しており表面にスス、タールが付着する。162は片面が平らな円礫の表裏両面を磨面に使用し、右側面に敲打痕が認められる。163は円礫の表裏両面を磨面に使用し、上側面と表面に敲打痕跡が認められる。被熱しており左側面にスス、タールが付着する。164は扁平な円礫の表裏両面を磨面として使用している。全体が被熱している。

出土土器 出土していない。



第229図 集石遺構161号・出土遺物

集石遺構 162号 (SQ162 : 第230図)

検出状況 D-10区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は193個である。礫の集中部は、半径0.45mで、その中心から半径0.75mの範囲に礫全体が広がる。0.85mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約60%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫33個も含まれる。

出土土器 出土していない。

炭化物 埋土中で確認された炭化物は、科学分析の結果から、 ^{14}C 年代測定は、7,551-7,447calBCを示した。また、もう1点は木炭で、 ^{14}C 年代測定は、7,506-7,302calBCを示した。

集石遺構 163号 (SQ163 : 第231図)

検出状況 E-38・39区, XI層で検出された。

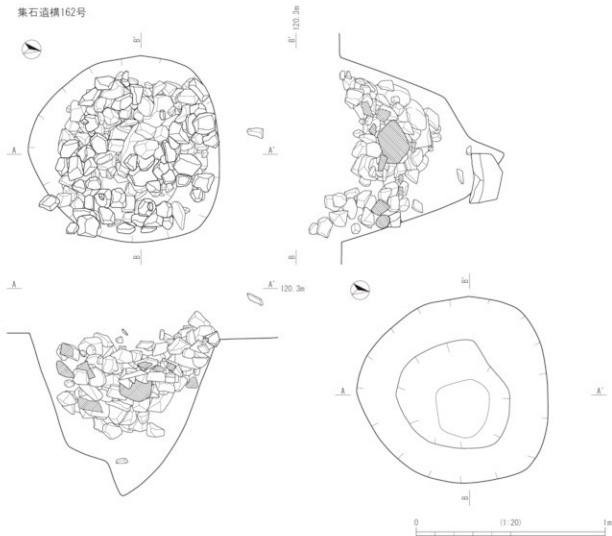
規模 構成礫総数は111個である。礫の集中部は、

半径0.40mで、その中心から半径0.75mの範囲に礫全体が広がる。0.50mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約20%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫4個も含まれる。石皿と礫器が含まれる。

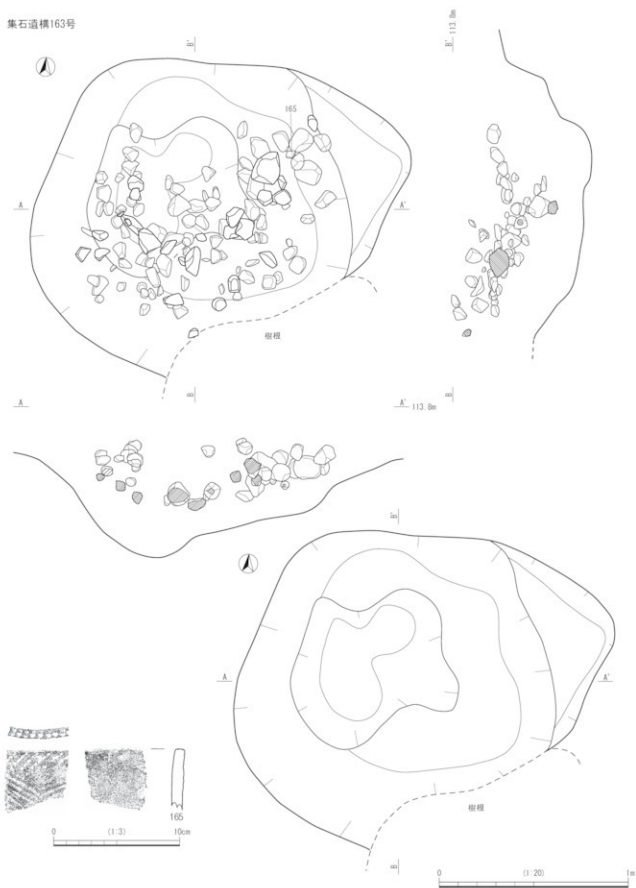
出土土器 口縁部が1点、胴部が1点出土している。そのうち1点を図化した。165 (第231図) である。165は、直行する口縁部で、口縁部外面上位に、斜位刺突文を施し、その直下に、被杉状の貝殻条痕文を施す。口唇部は、貝殻による刺突状のキザミ2つ(外面側のキザミの方が大きい)を1単位として施す。図化していない胴部は摩滅が激しいが、外面に貝殻と思われる条痕文が確認できる。胎土には金雲母は含まれていない。

土器分類 165は、IV類に該当する。



第230図 集石遺構162号

集石遺構163号



第231图 集石遺構163号・出土遺物

集石遺構 164号 (SQ164 : 第232図)

検出状況 D-25区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は119個である。礫の集中部は、半径0.25mで、その中心から半径0.80mの範囲に礫全体が広がる。0.62mの掘り込みを伴う。

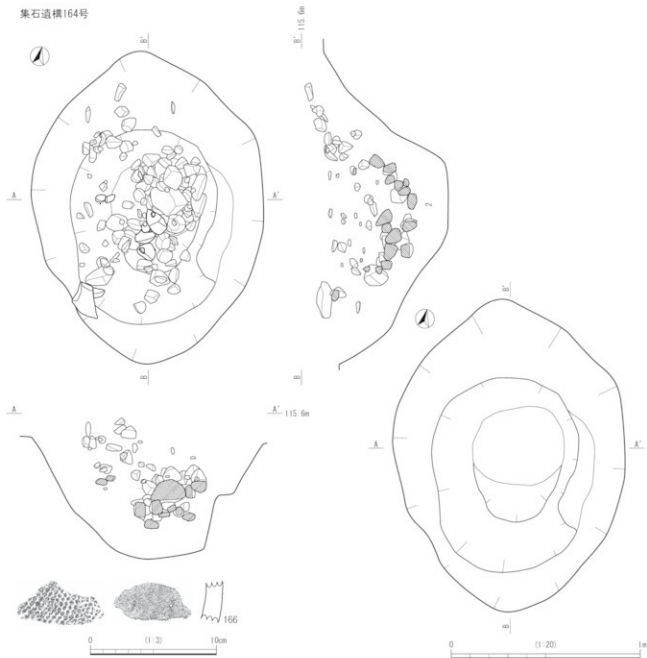
礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫7個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 胴部が2点出土し、1点を器化した。166(第232図)である。器壁が厚く、外面に楕円押型文を縦

位もしくは斜位に施す。接合はできなかったが、色調や胎土、施文方法から176(第244図)・537(第317図)と同一個体と思われる。もう1点は器壁は薄く、楕円の押型文を縦位に施す。胎土には、多くの白色鉱物と、金雲母が含まれている。この2点は、楕円の幅や器壁の厚さ、胎土の違い等から同一個体とは言い難い。

土器分類 2点とも、Ⅷ類に該当する。

炭化物 埋土中で確認された炭化物は、炭化種実であった。科学分析の結果から、鱗茎に同定され、¹⁴C年代測定は、7,450-7,180calBCを示した。



第232図 集石遺構164号・出土遺物

集石遺構 165号 (SQ165: 第233図)

検出状況 D-25区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は65個である。礫の集中部は、半径0.40mで、その中心から半径0.90mの範囲に礫全体が広がる。0.12mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫9個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 166号 (SQ166: 第234図)

検出状況 D-25区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は88個である。礫の集中部は、半径0.40mで、その中心から半径1.00mの範囲に礫全体が広がる。0.45mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩、ホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約40%が熱を受けている。1000gを超える礫24個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器 小破片の胴部が1点出土している。山形押型文が縦位と横位に施す。内面にていねいなナデをおこなう。胎土には、金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類 IX類に該当する。

集石遺構 167号 (SQ167: 第235図)

検出状況 F-22区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は59個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径1.10mの範囲に礫全体が広がる。0.12mの掘り込みを伴う。

礫構成 花崗岩と凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。200~300gの礫が多いが、1000gを超える礫4個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 168号 (SQ168: 第236図)

検出状況 C・D-25区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は142個である。礫の集中部は、半径0.50mで、その中心から半径1.10mの範囲に礫全体が広がる。0.55mの掘り込みを伴う。

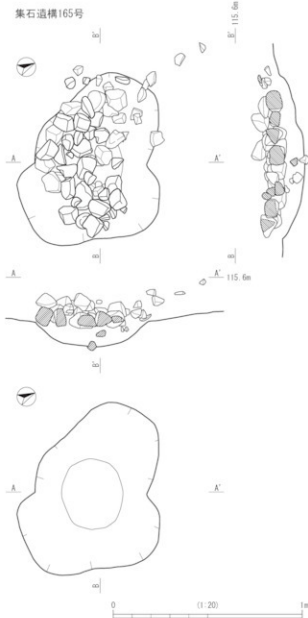
礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、構成礫全体の約20%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫19個も含まれる。石皿の転用品が確認され、図化した。167(第236図)は破片資料だが、残存状態および平坦な磨面が広く残ることから石皿とした。デイサイト製で破砕後に被熱しており、磨面から欠損部にかけてスス、タールが付着する。

出土土器 胴部が12点、口縁部が1点、底部が1点出土している。そのうち、2点を図化した。168(第236

図)は、胴部である。横位刺突文を施す。内面には、工具によるナデをおこなう。接合しなかったが、施文や胎土等から453(第304図)と同一個体と思われる。169は、胴部である。集石遺構168号(SQ168)出土の土器片が3点接合したものである。外面に貝殻刺突文をランダムに施し、一部には流水文をやや横位に施す。また、接合しなかったが、169と同一個体と思われる胴部が7点・底部が1点、SQ168から出土している。図化はしなかったが、SQ168から出土した胴部1点のみ外面に、山形押型文を施す。内面はていねいなナデをおこなう。胎土には、金雲母が含まれている。

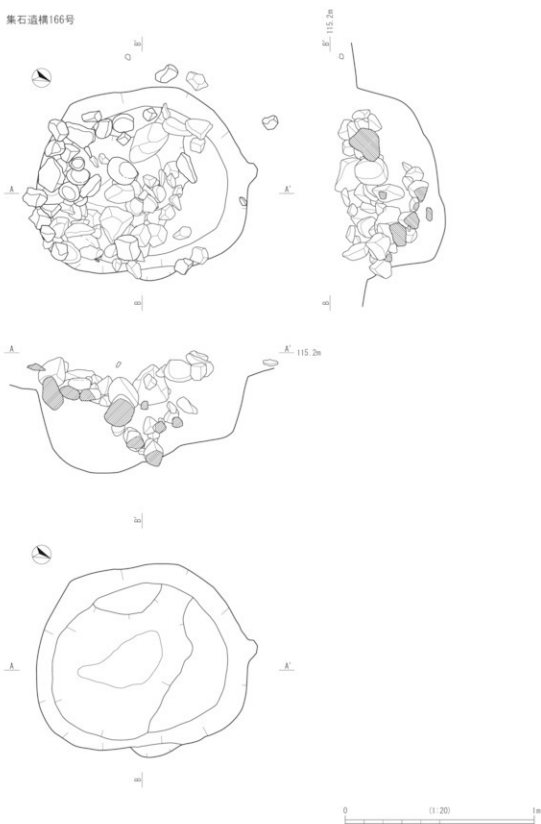
土器分類 168はV類に169はV類もしくはVI類に該当する。

集石遺構165号



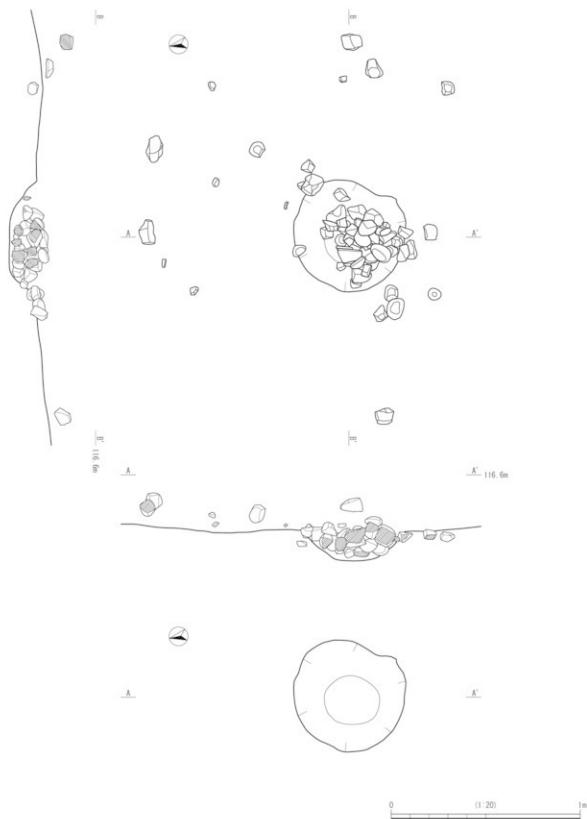
第233図 集石遺構 165号

集石遺構166号



第234図 集石遺構166号

集石遺構167号



第235図 集石遺構167号

集石遺構168号



A

B

C



169

168

115.8m

A

B

115.8m

A



B



167

0 (1:4) 10cm

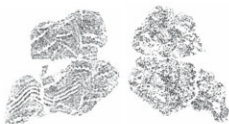


168



A

A



169

0 (1:3) 10cm

0 (1:20) 1m

第236图 集石遺構168号・出土遺物

集石遺構 169号 (SQ169：第237図)

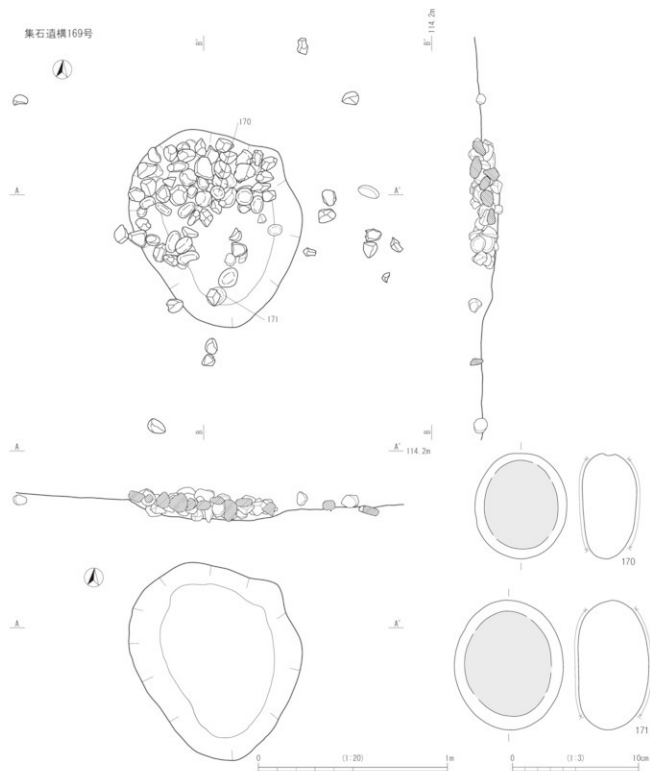
検出状況 I-46区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は92個である。礫の集中部は、半径0.25mで、その中心から半径1.10mの範囲に礫全体が広がる0.08mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約30%が熱

を受けている。400～500gの礫が多いが、1000gを超える礫6個も含まれる。170・171（第237図）はいずれも安山岩製の磨石・敲石類で、扁平な円礫の表裏両面を磨面として使用し、全体的に被熱している。

出土土器 出土していない。



第237図 集石遺構 169号・出土遺物

集石遺構 170号 (SQ170 : 第238図)

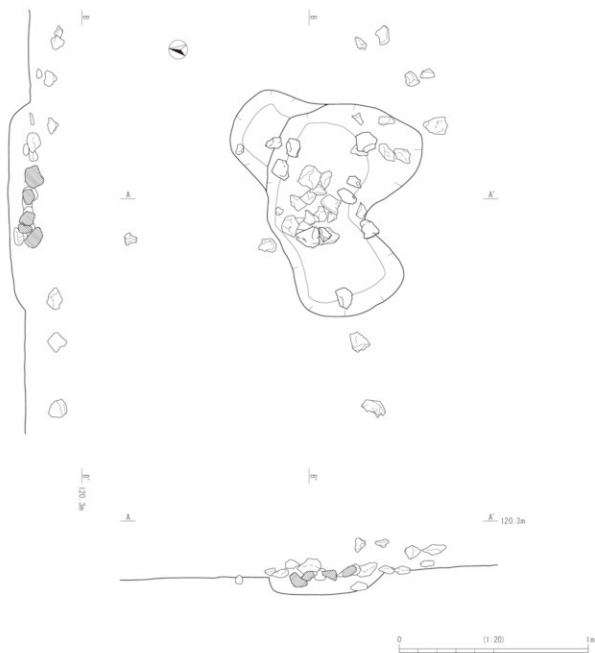
検出状況 E-12区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は40個である。礫の集中部は、半径0.20mで、その中心から半径1.20mの範囲に礫全体が広がる。0.12mの掘り込みを伴う。

礫構成 砂岩が主体で、熱を受けている礫は確認できなかった。1000gを超える礫4個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構170号



第238図 集石遺構170号

集石遺構 171号 (SQ171: 第239図)

検出状況 C-25区、XI層で検出された。

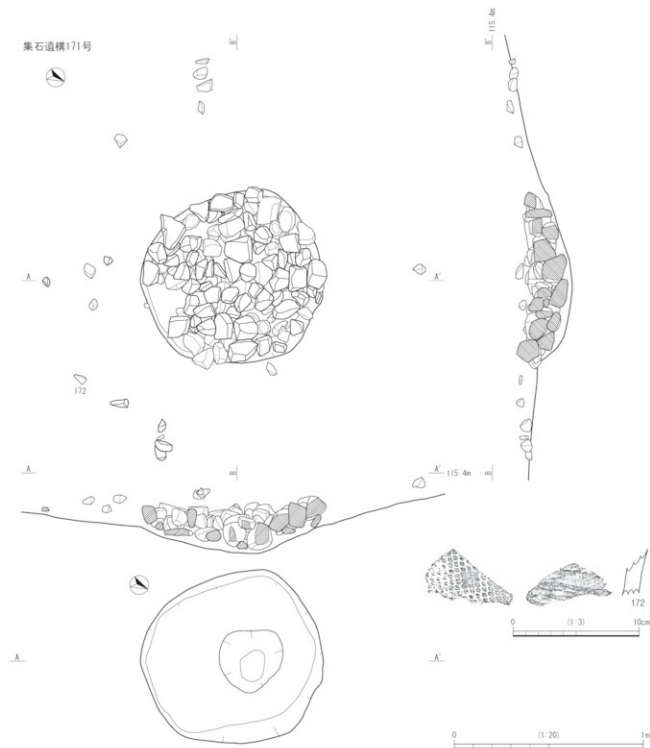
規模 構成礫総数は137個である。礫の集中部は、半径0.90mで、その中心から半径1.20mの範囲に礫全体が広がる。0.15mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体で、構成礫全体の約50%が熱を受けている。100～200gの礫が多いが、1000gを超

える礫35個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 胴部が1点出土し、図化した。172(第239図)である。外面に精円押型文を斜位に施す。胎土には、5mmを超える礫も含まれる。内面は、工具によるナデをおこなう。

土器分類 IX類に該当する。



第239図 集石遺構 171号・出土遺物

集石遺構 172号 (SQ172 : 第240図)

検出状況 C-27区、XI層で検出された。

規模 構成礫総数は116個である。礫の集中部は、半径0.30mで、その中心から半径1.25mの範囲に礫全体が広がる。0.23mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、構成礫の約20%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫7個も含まれる。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 口縁部が3点、胴部が1点出土している。そのうち3点を図化した。173・174・175 (第240図)である。173は、やや内湾する口縁部である。口縁部外面上位に横位の流水文を施し、その下位には斜位の流水文を施す。口唇部の頂上は丸みを帯び、そこから1.2cm程内傾した後、稜をもつ。稜に至る口縁部内面にのみ流水文

を横位に施す。内面は、工具によるナデをおこなう。173は集石遺構36号 (SQ36) 出土遺物及び489 (第308図) と同一個体と思われる。174は、直行する口縁部である。口縁部外面上位から山形押型文を縦位に施す。口唇部の外面側端部は丸みを帯び、そこから1.2cm程内傾した後、稜をもつ。稜に至る口縁部内面は、棒状工具による条痕文を縦位に施し、その下位に山形押型文を施す。内面は、工具によるナデをおこなう。175は、菱形押型文を斜位に施す胴部である。図化していないもう1点の口縁部は、やや外反し外面に山形押型文を施す。口縁部内面の施文等については、剥落が著しいため不明である。胎土には、金雲母が含まれている。

土器分類 173・174はⅤI類に、175はⅤX類に該当する。図化していない口縁部もⅤX類に該当する。



第240図 集石遺構172号・出土遺物

集石遺構 173号 (SQ173: 第241図)

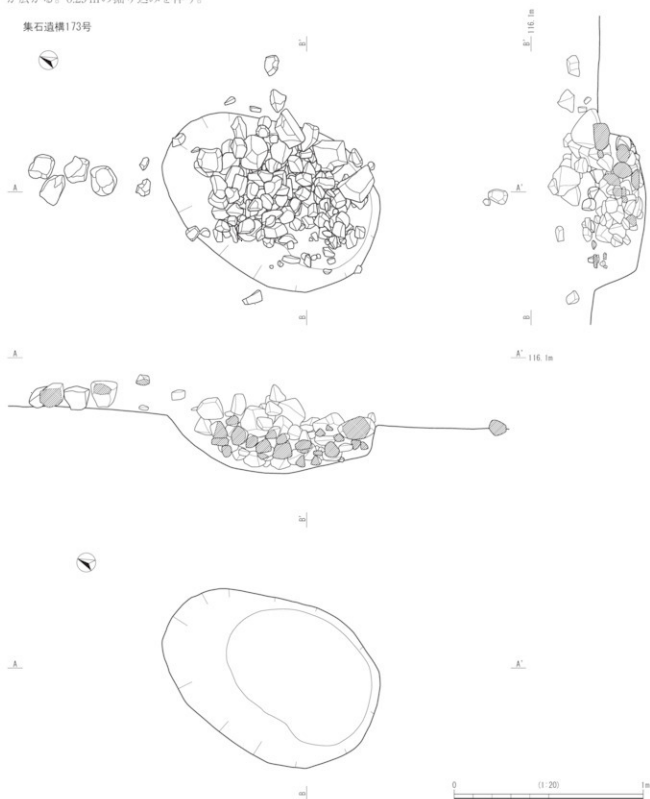
検出状況 C-24区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は184個である。礫の集中部は、半径0.35mで、その中心から半径1.30mの範囲に礫全体が広がる。0.29mの掘り込みを伴う。

礫構成 凝灰岩が主体で、全ての構成礫が熱を受けている。100～200gの礫が多いが、1000gを超える礫25個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 173号



第241図 集石遺構 173号

集石遺構 174号 (SQ174 : 第242図)

検出状況 C-26区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は55個である。礫は、半径0.35mの範囲に集中している。0.28mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、構成礫全体の約30%が熱を受けている。600~700gの礫が多く、1000gを超える礫26個も含まれる。

出土土器 出土していない。

規模 構成礫総数は87個である。礫の集中部は、半径0.30mで、その中心から半径0.45mの範囲に礫全体が広がる0.35mの掘り込みを伴う。

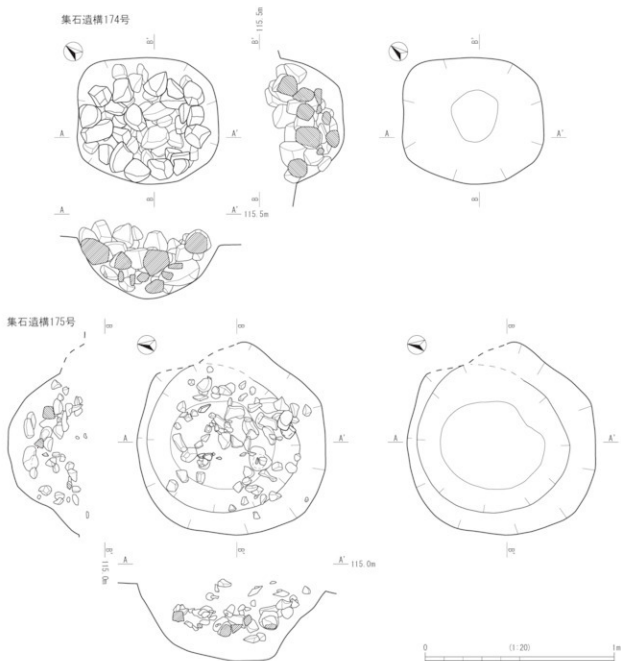
礫構成 ホルンフェルスと安山岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 小破片の胴部が1点出土している。幅の狭い山形押型文が、明確ではないが縦位もしくは斜位に施す。胎土には、金雲母が含まれている。図化はしていない。

土器分類 IX類に該当する。

集石遺構 175号 (SQ175 : 第242図)

検出状況 B-26・27区, XII層で検出された。



第242図 集石遺構 174号・集石遺構 175号

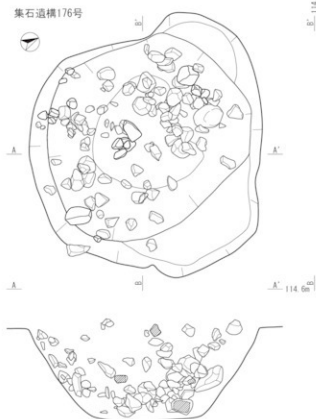
集石遺構 176号 (SQ176 : 第243図)

検出状況 C-32・33区, XII層で検出された。

規模 構成礫総数は113個である。礫の集中部が、半径0.20mに広がり、その中心から半径0.85mの範囲に礫全体が広がる。0.48mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で、熱を受けている礫は少ない。200g以下の礫が多いが、1000gを超える礫3個も含まれる。

出土土器 出土していない。



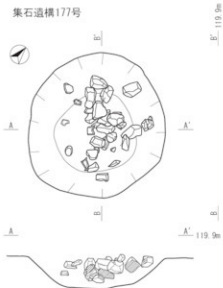
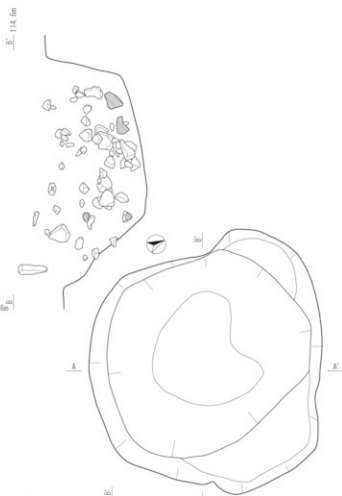
集石遺構 177号 (SQ177 : 第243図)

検出状況 D-9区, XIII層で検出された。

規模 構成礫総数は32個である。礫の集中部は、半径0.15mで、その中心から半径0.30mの範囲に礫全体が広がる。0.17mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体で、ほとんどの礫が熱を受けている。100g以下の礫が多い。

出土土器 出土していない。



第243図 集石遺構 176号・集石遺構 177号

タイプM

集石遺構 178号 (SQ178 : 第244図)

検出状況 D-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は12個である。礫は, 中心から半径0.25mの範囲に広がる。0.19mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体で, 熱を受けている礫は少ない。100g以下の礫が多い。

出土土器 口縁部1点が出土し, 図化した。176(第244図)である。外反する口縁部外面上位から楕円押型文を縦位に施す。口唇部及び口縁部内面に, 楕円押型文を横位に施す。接合はできなかったが, 色調や胎土, 施文方法から166(第232図)・537(第317図)と同一個体と思われる。

土器分類 IX類に該当する。

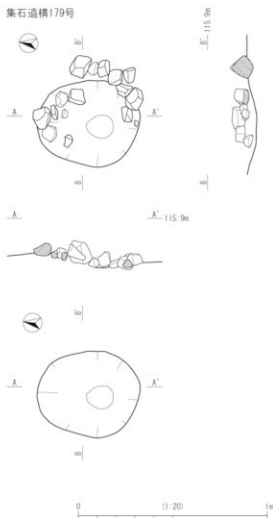
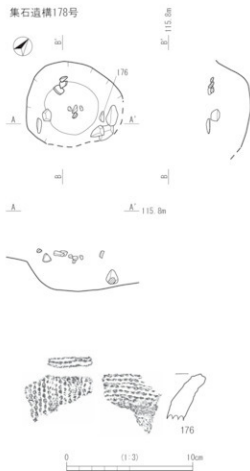
集石遺構 179号 (SQ179 : 第244図)

検出状況 C・D-26・27区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は15個である。礫は, 中心から半径0.30mの範囲に広がる。0.08mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩のみで, 構成礫全体の60%が熱を受けている。300~400gの礫が多いが, 1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 小破片の刷部が1点出土している。剥落はないが施文が確認できず, 詳細は不明である。1~5mmほどの白色の小礫が多く含まれているが, 金雲母は含まれていない。図化はしていない。



第244図 集石遺構 178号・出土遺物・集石遺構 179号

集石遺構 180号 (SQ180 : 第245図)

検出状況 B-25区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は19個である。礫は, 中心から半径0.35mの範囲に広がる。0.20mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルス、凝灰岩で、熱を受けている礫は少ない。100～200gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

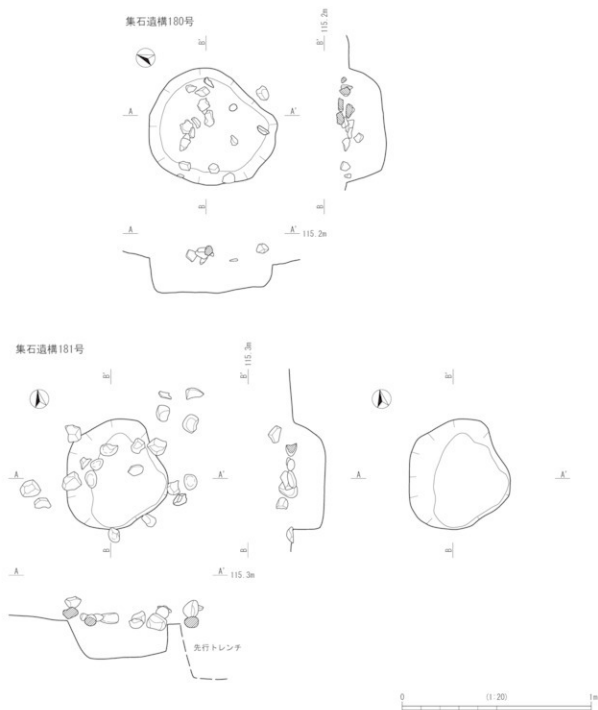
集石遺構 181号 (SQ181 : 第245図)

検出状況 D・E-32区, X層で検出された。

規模 構成礫総数は19個である。礫は, 中心から半径0.55mの範囲に広がる。0.15mの掘り込みを伴う。

礫構成 構成礫は安山岩が多数でホルンフェルス等も含まれ、熱を受けている礫は1個しか確認できなかった。300～400gの礫が多い。

出土土器 出土していない。



第245図 集石遺構 180号・集石遺構 181号

集石遺構 182号 (SQ182 : 第246図)

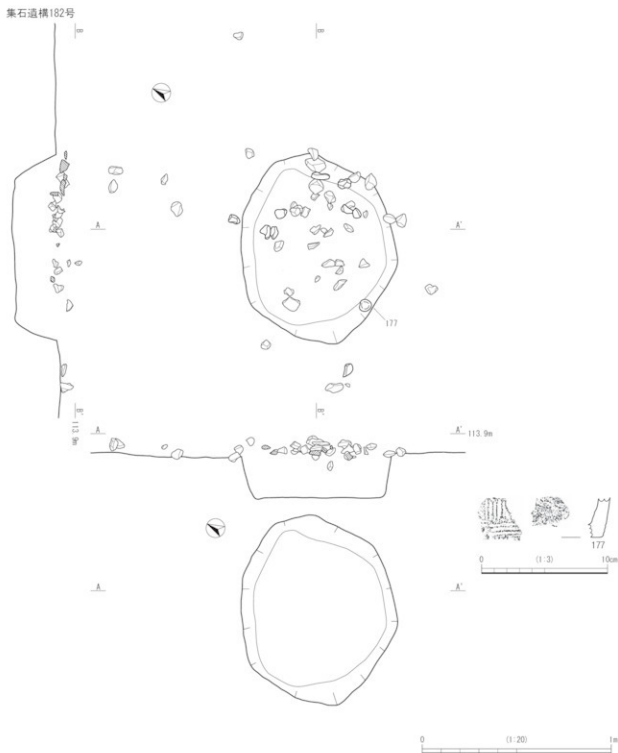
検出状況 L-51区、X層で検出された。

規模 構成礎総数は50個である。礎は、中心から半径1.00mの範囲に広がる。0.24mの掘り込みを伴う。

礎構成 ホルンフェルスと安山岩が主体で、構成礎全体の約10%が熱を受けている。100g以下の礎が多い。

出土土器 胴部から底部が1点出土し、図化した。177(第246図)である。177は、底部外面端部にキザミは施さず、胴部下部に横波沈線文を施し、その上位に、縦位の沈線文を施す。底面は、平底である。

土器分類 沈線文の施行具は不明である。IV類に該当すると思われる。



第246図 集石遺構 182号・出土遺物

集石遺構 183号 (SQ183 : 第247図)

検出状況 D-11区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は6個である。礫は, 中心から半径0.20mの範囲に広がる。0.09mの掘り込みを伴う。

礫構成 砂岩のみで, 熱を受けている礫は確認できなかった。300～400gの礫が多い。

出土土器 出土していない。

集石遺構 184号 (SQ184 : 第247図)

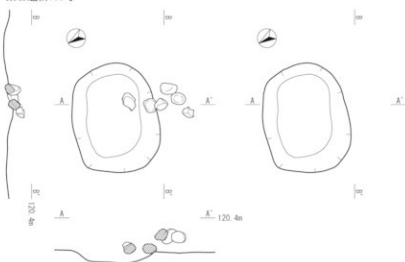
検出状況 C-10区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は9個である。礫は, 中心から半径0.25mの範囲に広がる。0.07mの掘り込みを伴う。

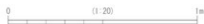
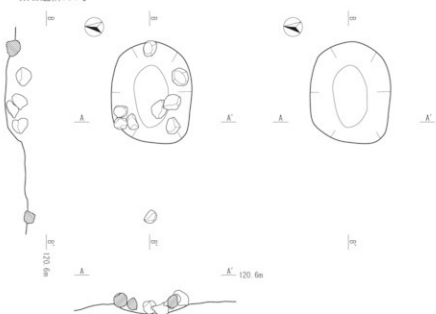
礫構成 ほほは砂岩で, 熱を受けている礫は確認できなかった。200～300gの礫が多い。磨石・敲石類の転用品が確認された。

出土土器 出土していない。

集石遺構183号



集石遺構184号



第247図 集石遺構 183号・集石遺構 184号

集石遺構 185号 (SQ185 : 第248図)

検出状況 B・C-25区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は34個である。礫は、中心から半径0.45mの範囲に広がる。0.28mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩とホルンフェルスが主体で、構成礫全体の約20%が熱を受けている。200～300gの礫が多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 小破片の土器片が4点出土している。3点は剥落や欠損が著しく、明確な分類判断はできなかった。1点は底部近くの胴部で、山形押型文を縦位に施し、胎土に

は金雲母が含まれている。いずれも図化はしていない。

土器分類 1点はⅢ類に該当する。

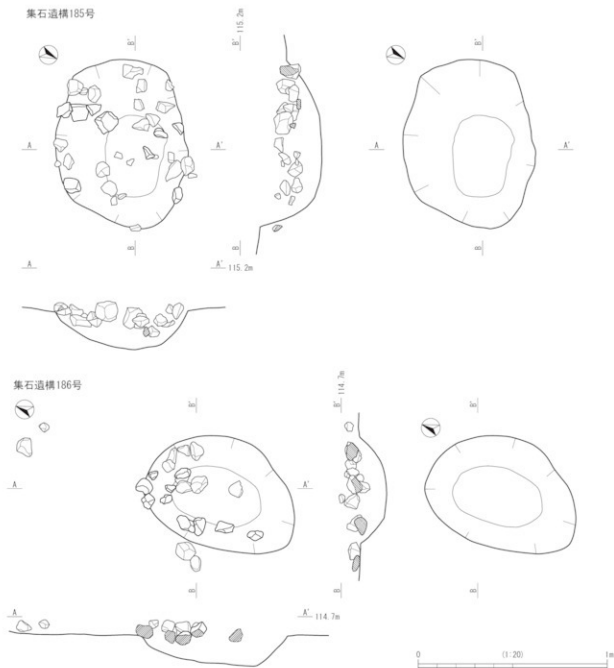
集石遺構 186号 (SQ186 : 第248図)

検出状況 1-38区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は22個である。礫は、中心から半径0.70mの範囲に広がる。0.15mの掘り込みを伴う。

礫構成 ほば安山岩で、熱を受けている礫は少ない。300～400gの礫が多い。

出土土器 出土していない。



第248図 集石遺構 185号・集石遺構 186号

集石遺構 187号 (SQ187 : 第249図)

検出状況 G-41区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は25個である。礫は, 中心から半径0.75mの範囲に広がる。0.20mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩と凝灰岩が主体で, 構成礫全体の約60%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが, 1000gを超える礫1個も含まれる。

出土土器 出土していない。

集石遺構 188号 (SQ188 : 第250図)

検出状況 E-9区, XI層で検出された。

規模 構成礫総数は115個である。礫は, 中心から半径1.00mの範囲に広がる。0.40mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体で, 構成礫全体のほとんどが熱

を受けている。100g以下の礫が半数を占める。

出土土器 出土していない。

集石遺構 189号 (SQ189 : 第250図)

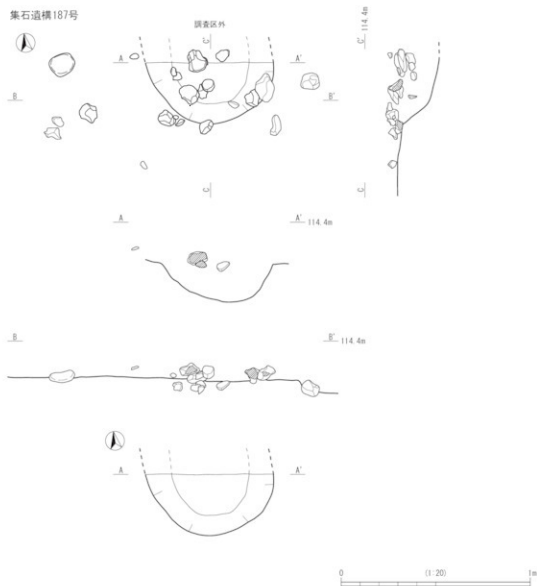
検出状況 D-24区, XII層で検出された。

規模 構成礫総数は26個である。礫は, 中心から半径0.50mの範囲に広がる。0.29mの掘り込みを伴う。

礫構成 ほぼ凝灰岩で, 全ての構成礫が熱を受けている。100~200gの礫が多いが, 1000gを超える礫2個も含まれる。

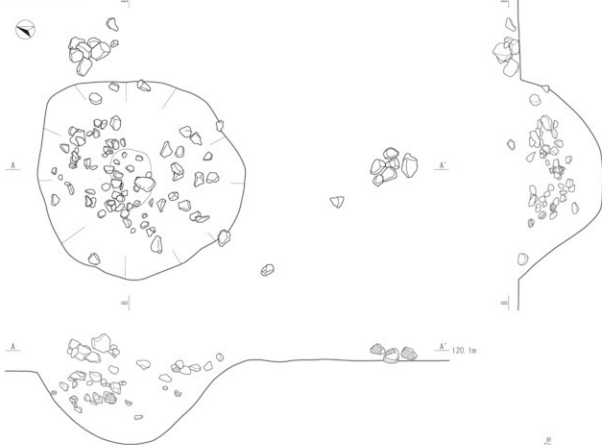
出土土器 出土していない。

炭化物 埋土中で確認された炭化物は, 炭化材であった。科学分析の結果から, コナラ属に同定され, ^{14}C 年代測定は, 7,521-7,353calBCを示した。

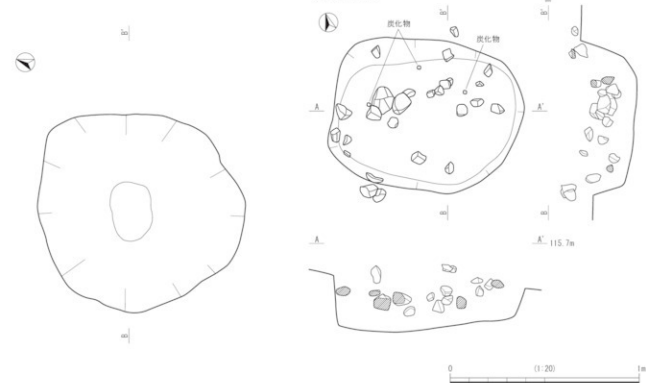


第249図 集石遺構 187号

集石遺構188号



集石遺構189号



第250図 集石遺構188号・集石遺構189号

集石遺構 190号 (SQ190：第251図)

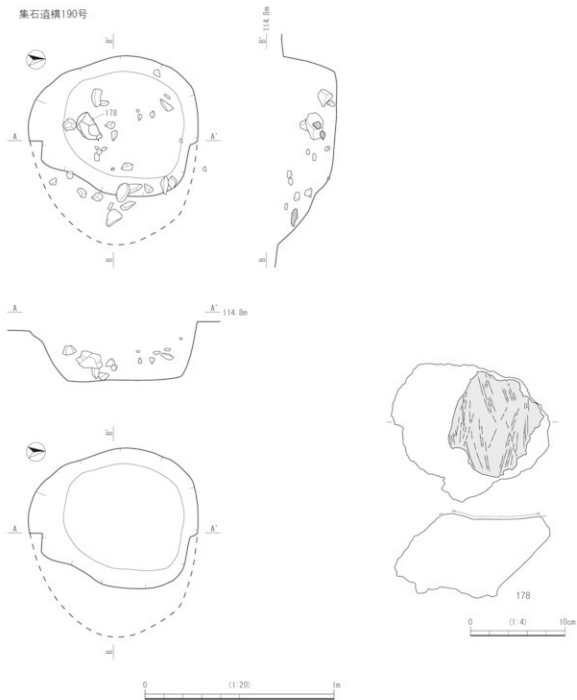
検出状況 B・C-25区, XI層で検出された。

規模 構成礎総数は32個である。礎は、中心から半径0.45mの範囲に広がる。0.28mの掘り込みを伴う。

礎構成 ホルンフェルスと凝灰岩が主体で、熱を受けている礎は少ない。100g以下の礎が多いが、1000gを

超える礎1個も含まれる。石皿の転用品が確認され、図化した。178(第251図)は破片資料だが、残存状態および浅くくぼむ磨面が残ることから石皿とした。ホルンフェルス製で、被熱しており磨面左半分周辺にススが附着する。

出土土器 出土していない。



第251図 集石遺構190号

集石遺構 191号 (SQ191：第252図)

検出状況 D-26区、Ⅻ層で検出された。

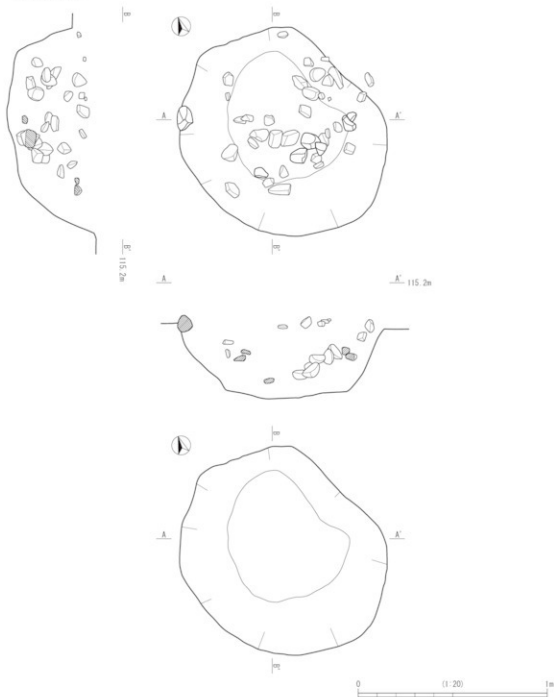
規模 構成礫総数は37個である。礫は、中心から半径0.55mの範囲に広がる。0.37mの掘り込みを伴う。

礫構成 安山岩が主体でホルンフェルス等も含まれ、熱を受けている礫は少ない。100～200gの礫が最も多いが、1000gを超える礫1個も含まれる。石皿の転用品が確認された。

出土土器 小破片の胴部が3点出土している。1点は剥落が激しく明確な分類判断はできなかった。1点は楕円押型文を施し、1点は山形押型文を施す。3点とも胎土には、金雲母が含まれている。いずれも図化はしていない。

土器分類 2点は、Ⅺ類に該当する。

集石遺構 191号



第252図 集石遺構 191号

集石遺構 192号 (SQ192：第253図)

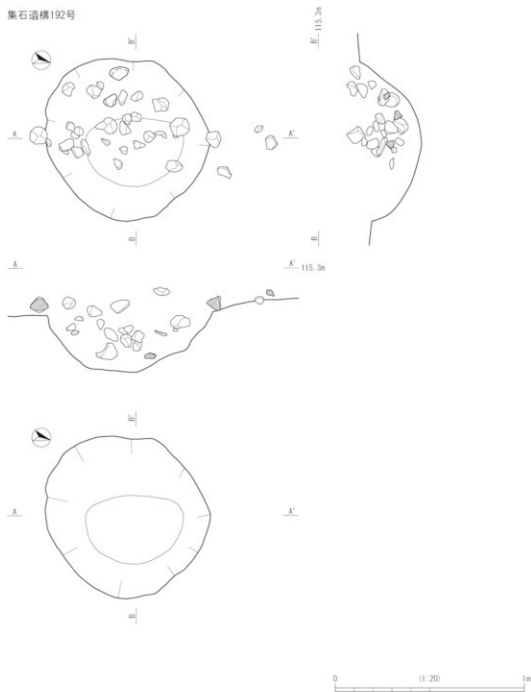
検出状況 D-25区、Ⅻ層で検出された。

規模 構成礎総数は34個である。礎は、中心から半径0.65mの範囲に広がる。0.30m掘り込みを伴う。

礎構成 安山岩と凝灰岩が主体で、熱を受けている。

礎は少ない。100g以下の礎が多い。

出土土器 出土していない。



第253図 集石遺構192号

第31表 集石遺構一覧表 1

遺構名	検出区	検出層	総積載数 (個)	タイプ	範囲		埋り込み部		石材別個数				積載数 重量 (g) 別個数															
					(半径・m)	全体	出土 土層	深さ (m)	有無	安山岩	ホルン フェルス	砂岩	凝灰岩	1	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1500	2000	2500	3000
SQ1	E-29	X	6	1	—	0.15	—	—	—	5	—	—	—	1	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1500	2000	2500	3000
SQ2	B-11	X	7	1	—	0.20	—	—	—	4	—	—	—	5	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ3	E-27	X	8	1	—	0.25	—	—	—	6	2	—	—	—	2	1	2	1	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ4	D-26-27	X	8	1	—	0.25	—	—	—	3	1	2	2	3	1	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ5	B-12	X	11	1	—	0.30	—	—	—	7	—	2	6	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ6	E-F-13	X	12	1	—	0.30	—	—	—	8	—	3	5	5	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ7	A-22	X	14	1	—	0.30	—	—	—	11	2	1	2	9	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ8	A-22	X	15	1	—	0.30	—	—	—	13	1	—	1	6	2	3	1	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ9	C-36	X	6	1	—	0.30	—	—	—	6	—	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—
SQ10	C-20	X	24	1	—	0.30	—	—	—	14	3	5	2	16	5	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ11	E-27	X	6	1	—	0.35	—	—	—	6	—	—	—	—	1	2	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
SQ12	C-22	X	15	1	—	0.35	—	—	—	8	1	1	5	1	5	2	2	1	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ13	F-29	X	16	1	—	0.40	—	—	—	11	—	4	1	8	3	2	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ14	C-25	X	17	1	—	0.40	—	—	—	8	2	—	6	2	5	5	2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
SQ15	D-27	X	51	1	—	0.40	—	—	—	40	5	2	4	28	13	1	6	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ16	E-13	X	21	1	—	0.45	—	—	—	12	—	—	5	4	9	4	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ17	F-28	X	12	1	—	0.45	—	—	—	11	—	—	3	1	6	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
SQ18	B-25	X	23	1	—	0.45	—	—	—	16	5	1	1	7	6	2	1	—	—	—	2	1	—	—	—	—	—	—
SQ19	C-36	X	14	1	—	0.50	—	—	—	6	1	—	7	4	3	1	—	—	—	—	—	1	1	1	1	2	—	—
SQ20	B-22	X	11	1	—	0.55	—	—	—	8	—	—	3	2	4	1	1	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—
SQ21	C-25	X	18	1	—	0.55	—	—	—	6	5	2	5	10	6	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ22	M-55	X	19	1	—	0.55	—	—	—	11	5	1	2	4	7	3	2	1	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—
SQ23	C-13	X	29	1	—	0.65	—	—	—	24	—	1	9	7	6	1	1	1	2	1	—	—	2	—	—	—	—	—
SQ24	B-30	X	17	1	—	0.65	—	—	—	9	4	—	4	3	4	5	3	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ25	A-B-16	X	24	1	—	0.70	—	—	—	13	—	2	2	3	6	4	—	—	—	—	—	—	—	1	1	1	3	—
SQ26	D-26	X	22	1	—	0.70	—	—	—	20	3	—	3	7	1	2	3	3	2	1	4	1	1	1	1	1	—	—
SQ27	D-26	X	22	1	—	0.70	—	—	—	15	3	1	3	5	1	2	3	2	2	2	2	—	—	—	—	—	—	—
SQ28	B-27	X	30	1	—	0.70	—	—	—	7	19	3	8	12	15	5	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ29	C-27	X	21	1	—	0.75	—	—	—	7	4	—	9	7	8	1	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ30	C-30	X	25	1	—	0.75	—	—	—	6	5	8	6	15	5	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ31	E-26	X	23	1	—	0.80	—	—	—	14	5	1	3	1	2	5	3	5	4	2	—	—	—	—	—	—	—	—
SQ32	B-20	X	21	1	—	0.80	—	—	—	15	3	—	3	4	4	1	—	—	—	—	—	1	2	2	1	1	4	—

第36表 集石遺構一覧表6

遺構名	集石区	発掘 時期 (年)	タイプ	範囲 (半径・m)			掘り込み部		土層		石材別個数										構成欄 重量(g)別個数									
				集中部	全体	有無	深さ (m)	出土 土層	安山岩	ホルン フェルス	砂岩	凝灰岩	1	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1500	2000	2500	3000	300		
SQ161	B-26	XI	413	Ⅲ	0.45	0.70	○	0.95	—	194	146	32	31	85	50	62	54	40	30	22	13	7	13	15	10	3	2	7		
SQ162	D-10	XI	193	Ⅲ	0.45	0.75	○	0.85	—	110	—	9	46	30	13	17	28	25	17	13	11	4	2	20	5	1	1	6		
SQ163	E-28-39	XI	111	Ⅲ	0.40	0.75	○	0.50	○	64	27	6	14	25	24	20	11	7	4	3	4	2	3	—	—	—	—	—		
SQ164	D-25	XI	119	Ⅲ	0.25	0.80	○	0.62	○	64	32	4	19	43	23	20	12	3	1	6	1	3	1	4	—	—	—	—		
SQ165	D-25	XI	65	Ⅲ	0.40	0.90	○	0.12	—	32	19	1	13	20	2	4	3	1	3	3	4	5	7	2	—	—	—			
SQ166	D-25	XI	88	Ⅲ	0.40	1.00	○	0.45	○	48	15	6	19	9	4	8	7	9	6	3	8	6	4	12	4	2	1	5		
SQ167	F-22	XI	59	Ⅲ	0.20	1.10	○	0.12	—	1	—	1	27	4	6	8	7	6	7	8	4	3	2	4	—	—	—			
SQ168	C-D-25	XI	142	Ⅲ	0.50	1.10	○	0.55	○	80	15	14	33	30	21	27	15	9	11	1	4	2	3	4	1	1	3	10		
SQ169	I-46	XI	92	Ⅲ	0.25	1.10	○	0.88	—	84	3	1	4	5	4	18	19	22	8	6	1	1	2	5	1	—	—			
SQ170	E-12	XI	40	Ⅲ	0.20	1.20	○	0.12	—	1	—	33	6	7	5	6	6	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—			
SQ171	C-25	XI	137	Ⅲ	0.90	1.20	○	0.15	○	89	27	1	20	13	19	17	6	12	6	7	9	7	6	16	11	3	2	3		
SQ172	C-27	XI	116	Ⅲ	0.30	1.25	○	0.23	○	70	18	5	23	30	24	19	12	6	8	4	1	5	—	—	—	—	—	—		
SQ173	C-24	XI	184	Ⅲ	0.35	1.30	○	0.29	—	—	—	1	142	23	33	24	24	17	18	8	5	2	5	10	8	1	1	5		
SQ174	C-26	XI	55	Ⅲ	0.35	—	○	0.28	—	35	7	1	12	5	4	3	3	6	3	2	3	6	3	2	3	8	11	2	2	3
SQ175	B-26-27	XI	87	Ⅲ	0.30	0.45	○	0.35	○	28	45	4	10	57	14	5	2	3	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ176	C-32-33	XI	113	Ⅲ	0.20	0.85	○	0.48	—	72	13	5	21	39	38	10	6	6	4	3	1	3	—	—	—	—	—	—		
SQ177	D-9	XII	32	Ⅲ	0.15	0.30	○	0.17	—	16	—	4	10	12	7	6	5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ178	D-25	XI	12	Ⅳ	—	0.25	○	0.19	○	7	1	2	2	8	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ179	C-D-26-27	XI	15	Ⅳ	—	0.30	○	0.88	○	11	—	4	2	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ180	B-25	XI	19	Ⅳ	—	0.35	○	0.20	—	8	6	—	5	6	7	5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ181	D-E-32	XI	19	Ⅳ	—	0.55	○	0.15	—	15	3	—	1	3	2	2	8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ182	L-51	XI	50	Ⅳ	—	1.00	○	0.24	○	10	27	7	6	26	16	6	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ183	D-11	XI	6	Ⅳ	—	0.20	○	0.69	—	—	—	6	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ184	C-10	XI	9	Ⅳ	—	0.25	○	0.07	—	—	—	8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ185	B-C-25	XI	34	Ⅳ	—	0.45	○	0.28	○	21	10	1	2	9	3	10	3	4	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ186	I-38	XI	22	Ⅳ	—	0.70	○	0.15	—	21	—	1	3	4	2	7	4	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ187	G-41	XI	25	Ⅳ	—	0.75	○	0.30	—	13	2	3	7	7	5	6	1	1	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ188	E-9	XI	115	Ⅳ	—	1.00	○	0.40	—	69	—	10	30	76	17	9	1	8	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ189	D-24	XI	26	Ⅳ	—	0.50	○	0.29	—	—	—	23	1	12	1	6	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ190	B-C-25	XI	32	Ⅳ	—	0.45	○	0.28	—	5	18	—	9	24	5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
SQ191	D-26	XI	37	Ⅳ	—	0.55	○	0.37	○	25	8	1	3	8	9	5	8	1	1	2	2	—	—	—	—	—	—	—		
SQ192	D-25	XI	34	Ⅳ	—	0.65	○	0.30	—	21	4	—	9	15	8	6	2	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

(6) 石器製作跡 (略記号: SO)

石器製作跡は、平成25年度の調査で4カ所、平成26年度の調査で1カ所の計5カ所が検出された。

検出状況 基本的には、X層を中心に黒曜石のチップ・フレイク等が密に集中するブロックが確認された。各石器製作跡の検出層及び終焉層を下表に示す。

第37表 石器製作跡の検出層及び終焉層

石器製作跡	検出層	終焉層
1	X	X
2	X	X
3	X	X
4	X	XI
5	XI	XI

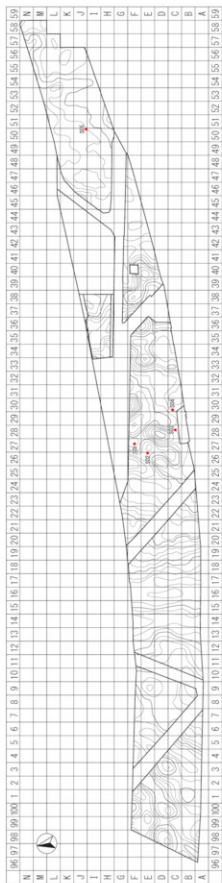
遺物 各石器製作跡で出土した黒曜石の分類点数と、その他の石材点数について下表に示す。

第38表 石器製作跡の黒曜石・その他の石材分類点数

	SO 1	SO 2	SO 3	SO 4	SO 5
OB 1	0	0	0	0	0
OB 2	4	0	0	0	0
OB 3	3	1	0	10	0
OB 4	322	130	64	1728	208
OB 5	0	0	1	0	0
OB 6	66	1	0	1	0
OB 7	8	0	0	0	0
OB 8	1	0	0	0	0
AN	2	0	0	0	212
CH	0	0	0	4	0
HF	3	3	1	1	0
砂岩	2	0	0	0	0
合計	411	135	66	1744	420

分布 石器製作跡は、調査区Dで4基、調査区Fで1基が分布する。調査区Dの4基は、北側で2基、南側で2基とさらに細分できる。また、いずれの石器製作跡も、竪穴住居跡からやや離れて存在し、他の遺構と切り合うことはない。

各石器製作跡 本遺跡で検出された石器製作跡を検出した順に報告する。



第254図 石器製作跡分布図

石器製作跡1号 (SO 1 : 第255図)

検出状況 F-27区, X層で検出された。

広がり 全体の範囲は南北8.6m・東西7.6mで、北北西～南南東に広がる。

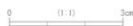
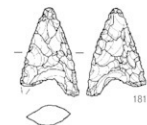
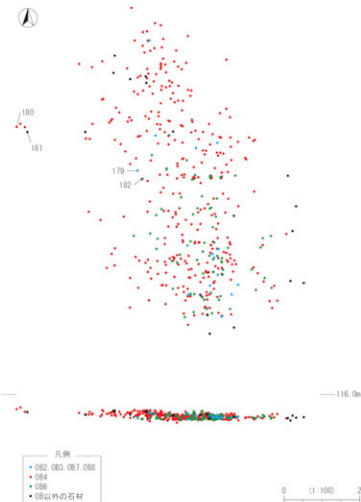
周辺遺構 土坑3基が存在し、SO 1の南西約10mには、SO 2が存在する。

素材 黒曜石OB4類のチップ・フレークが多く、次いでOB6類のチップ・フレークが多い。

出土遺物 石鏃4点が出土し、いずれも円化した。179～182は、打製石鏃である。179 (第255図)は黒曜

石製の平基無茎鏃である。小型で平面形は正三角形に近い。180 (第255図)は黒曜石製の平基無茎鏃である。基部を欠損するが、幅が広い残存状況から平面形は正三角形に近かったと考えられる。181は安山岩製の凹基無茎鏃である。平面形は二等辺三角形に近く、基部にやや深い抉りをもつ。182 (第255図)は黒曜石の凹基無茎鏃である。右臀部を欠損する。平面形は二等辺三角形に近く、基部にやや深い抉りをもつ。179はOB3類に、180はOB4類に、181は安山岩に、182はOB6類に該当する。

石器製作跡1号



第255図 石器製作跡1号・出土遺物

石器製作跡2号 (SO 2 : 第256図)

検出状況 E-26・27区, X層で検出された。

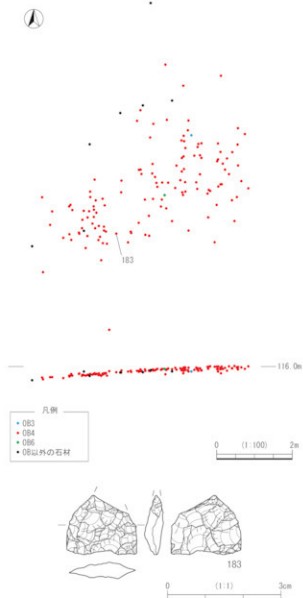
広がり 全体の範囲は南北8.6m・東西5.7mで、北東～南西に広がる。

周辺遺構 土坑3基、集石遺構4基が存在し、SO 2の北東約10mには、SO 1が存在する。

素材 黒曜石OB4類のチップ・フレークの他、OB3類、OB4類が各1点出土している。

出土遺物 石鏃1点出土し、図化した。183 (第256図)は黒曜石製の打製石鏃未成品である。先端部を欠損する。両脚部・基部は未完成だが、抉りをもつように調整を施している。183は、OB4類に該当する。

石器製作跡2号



石器製作跡3号 (SO 3 : 第256図)

検出状況 C-28区, X層で検出された。

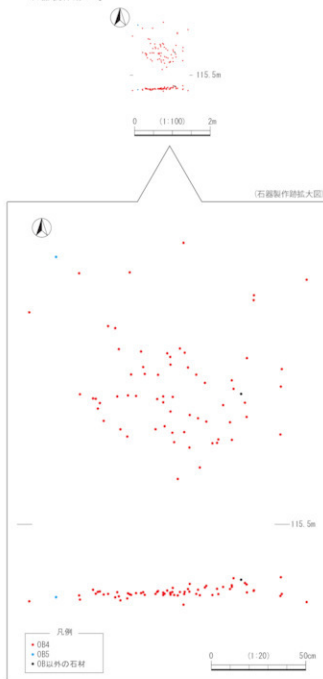
広がり 全体の範囲は南北1.3m・東西1.5mで、西～東に広がる。

周辺遺構 集石遺構1基が存在し、SO 3の東約15mには、SO 4が存在する。

素材 黒曜石OB4類のチップ・フレークの他、OB5類1点出土している。

出土遺物 遺物は出土していない。

石器製作跡3号



第256図 石器製作跡2号・出土遺物・石器製作跡3号

石器製作跡4号 (SO 4 : 第257図)

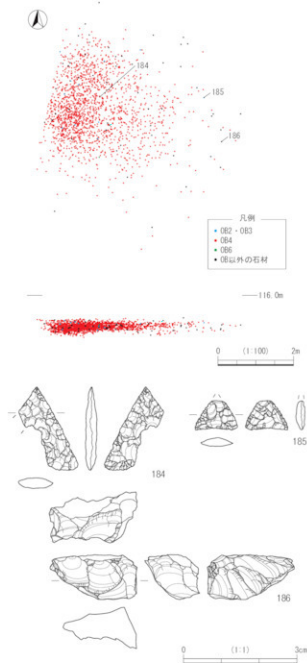
検出状況 C-29・30区, X層～Ⅹ層の範囲で検出された。西側の分布範囲が垂直に切れているのは、検出が遅れたためである。

広がり 全体の範囲は南北6.5m・東西5.4mで、西～東に広がる。

周辺遺構 集石遺構1基が存在し、SO 4の西約15mには、SO 3が存在する。

素材 黒曜石OB4類のチップ・フレークが多く、次いでOB3類のチップ・フレークが多い。

石器製作跡4号



出土遺物 石鏃が3点出土し、いずれも固化した。184・185(第257図)は打製石鏃である。184は黒曜石製の凹基無茎鏃である。左脚部を欠損する。基部に深い抉りを持ついわゆる「鍬形鏃」で、押圧剥離を丁寧に施し全体的に鋭利に仕上げている。185は黒曜石製の平基無茎鏃である。先端部を欠損する。小型で平面形は正三角形に近く、基部はごく僅かに内湾する。186は黒曜石製の石核である。主に上下方向に打ち欠き、小型剥片を採取する様子がうかがえる。184はOB4類に、185はOB2類、186は類OB4類に該当する。

石器製作跡5号 (SO 5 : 第257図)

検出状況 J-50・51区, X層～Ⅹ層の範囲で検出された。

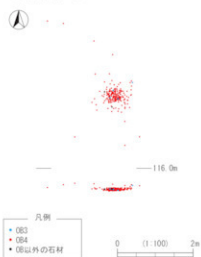
広がり 全体の範囲は南北3.3m・東西2.4mで、北西～南東に広がる。

周辺遺構 連穴土坑1基、土坑3基、集石遺構3基が存在する。

素材 黒曜石OB4類のチップ・フレークが多く、次いでOB3類のチップ・フレークが多い。

出土遺物 遺物は出土していない。

石器製作跡5号



第257図 石器製作跡4号・出土遺物・石器製作跡5号

3 遺物

(1) 土器

田原迫ノ上遺跡の縄文時代早期の土器は、IV類が最も多く、次いでIX類がそれに続く。前述したが、縄文時代早期の土器のほとんどは、X層・XI層から出土し、出土点数の少ない類を除き、ある類の土器が単一層のみから出土することはなかった。

土器の観察表は第2分冊（第72～103表）に一括して掲載した。

I類土器（第259図187・188・190）

全体の器形が窺える資料は出土していないが、口縁部から底部にかけて直線的な円筒形土器である。胴部に横位からやや斜位の条痕文を施す一群である。

187は、いぶい赤褐色を呈する胴から底部である。胴部外面にススが付着している。内面は縦位のケズリをおこなう。188は、底部である。底部縁部に胴部の粘土帯を巻き付けるように接合した痕跡をおこなう。また、底部と胴部を接合した際の指おさえ痕をおこなう。胴部接合後にナデをおこなった後、胴部は浅い貝殻条痕文を施し、底面外面端部に縦位のヘラ状工具によるキザミを施す。内面立ち上がり付近に白色の付着物をおこなう。190は、胴部である。外面上部に横位の押し状の刺突文を施す。その下位には、浅い貝殻条痕文を施す。

II類土器（第259図189・192）

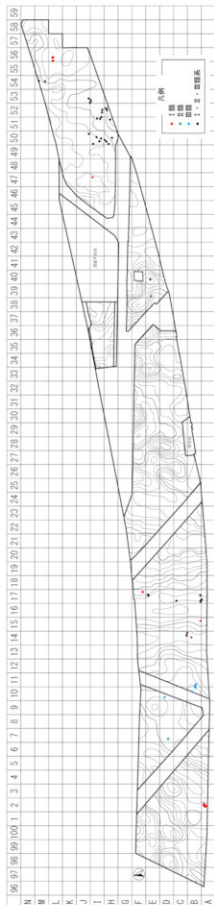
全体の器形が窺える資料は出土していない。底部から口縁部にかけて直線的、もしくは口縁部がやや外反する円筒形土器の一群である。

189は、胴部である。胴部外面に横位の押し状の刺突文を施す。192は、口縁部である。口縁部外面に、押し状の刺突文を2条施し、その間に「C」の字状・逆「C」の字状の半截竹管文を施す。

III類土器（第259図191）

底部から口縁部にかけてやや外反する円筒形土器である。口唇部は平坦となり、口縁部外面に横位貝殻刺突文を数条、胴部に貝殻条痕文を施す一群である。

191は、口縁部から胴部である。口縁部外面は4条の横位貝殻刺突文、胴部にやや斜位貝殻条痕文を施す。口縁部には、補修孔と考えられる9mm程の穿孔を施し、内面はススが付着する。



第258図 遺物分布図（I・II・III類・I・II・III類系土器）



第259图 I·II·III类土器·I·II·III类系土器

I・II・III類系土器 (第259図193～197)

I～III類のいずれかの分類に該当すると考えられる。
I～III類系という枠で報告する。

193は、口縁部である。胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部外面に横位貝殻条痕文を施し、内面はナデをおこなう。194は、底部である。底部外面に横位や斜位の浅い貝殻条痕文を施した後、底部との接合部をナデ消す。195は、胴部である。胴部外面に浅い横位貝殻刺突文を施し、内面はナデをおこなう。196は、胴部である。胴部外面に浅い横位貝殻条痕文を施し、内面はナデをおこなう。197は、196と同一個体と考えられる胴部から底部である。胴下部まで横位貝殻条痕文を施す。

IV類土器 (第262図198～第301図441)

器形は深鉢形で、口縁部は外反・外傾・直行の3タイプがあり、胴部は口縁部から底部にかけややすぼまる形状となる。底部は平底である。文様は口縁部外面に貝殻刺突文を、胴部外面に貝殻条痕文を施す。また、口縁部外面の文様と胴部外面の文様との間に横位貝殻刺突文を施すものもある。胴部外面下部に横位貝殻条痕文を施すものや、底部外面端部にキザミを施すものもある。

口縁部 (第262図198～第292図373)

口縁部と接合した胴部や底部を含むもので、以下のような基準で細分した。

① 口縁部の傾き

- a: 外反するもの(やや外反するもの、口縁端部のみ外反するもの含む)
- b: 外傾するもの
- c: 直行するもの

② 口縁部外面の文様の種類

- 斜: 斜位貝殻刺突文
- 横: 横位貝殻刺突文
- 羽: 斜位貝殻刺突文を組み合わせ、羽状となる文様
- 縦: 縦位貝殻刺突文

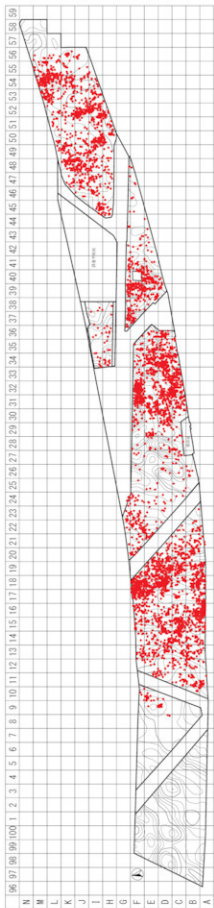
結果、次の12種類に細別ができた。

IV-a-斜類 (第262図198～第267図240)

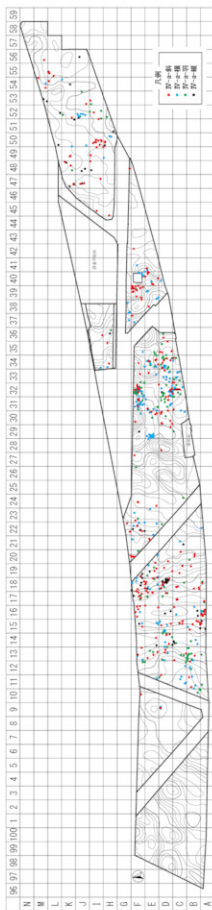
口縁部が外反し、口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施す一群である。

198～200・203・206は胴部外面に縞状の貝殻条痕文を施す。199は胴部外面に非常に深い貝殻条痕文を施す。口縁部外面の貝殻刺突文と同一の施文原体と考えられる。

200は口唇部を平坦に整形し、ヘラ状工具によりキザミを施す。口縁部外面の貝殻刺突文は、施文後にナデたため、つぶれている部分をおこなう。その下位に2条の横位貝殻刺突文を施し、胴部文様との文様区画になっている。胴部は貝殻条痕文を浅く施す。内面は工具ナデを



第260図 遺物分布図 (IV類土器)



第261図 遺物分布図 (W-a類)

おこなう。

203は口縁部から胴部下半までが出土しており、底部付近は不明であるが、口縁部から胴部は径の3/4が残存している。口縁部に2ヵ所の頂部をもつ緩い波状口縁である。口唇部はやや平坦に整形され、波頂部以外に貝殻刺突文を施す。口縁部外面に斜位貝殻刺突文を密に施し、その下位の綾杉状の貝殻条痕文を切っているため、胴部の貝殻条痕文を先に施したことが分かる。口縁部内面は稜をもち、稜の上位にはナデを、稜の下位にはケズリをおこなう。

206は完形品である。口唇部はやや平坦に整形され、ヘラ状工具によるキザミを施す。口縁部外面に斜位貝殻刺突文を1列施した後、胴部外面にやや大きめの貝殻を用いて綾杉状の浅い貝殻条痕文を施す。貝殻条痕文は底部付近ではナデ消し、底部から3cm程度は無文部となる。底部外面及び胴部内面はナデをおこなう。

201・202・204・205は胴部外面に、斜位貝殻条痕文を施す。201・202・205の口唇部は、肥厚する。

201の口唇部には、2条の横位貝殻刺突文を施す。胴部の斜位貝殻条痕文は浅い。内面は工具ナデを、口縁部内面付近はいいいなナデをおこなう。

202の口唇部には、貝殻押圧文を施す。口縁部外面と胴部外面の貝殻条痕文の間には、横位に近い斜位貝殻刺突文を施すが、文様区画の役割を果たしているとは言い難い。胴部の斜位貝殻条痕文は、部分的に綾杉状となる。

204の口唇部と口縁部外面に同一の施文原体で、貝殻刺突文を施す。口縁部には回転穿孔による補修孔が、外面側：内面側が8：2の割合で開けられる。

205の口唇部には、貝殻刺突文を施す。この口唇部の貝殻刺突文と、口縁部外面に施す斜位貝殻刺突文は同一の施文原体と考えられる。口縁部外面の貝殻刺突文は、羽状に施す部分もある。

207・208は胴部に縦位貝殻条痕文を施す。207は口縁部に回転穿孔による補修孔が開けられており、ほぼ外面からの穿孔となっている。

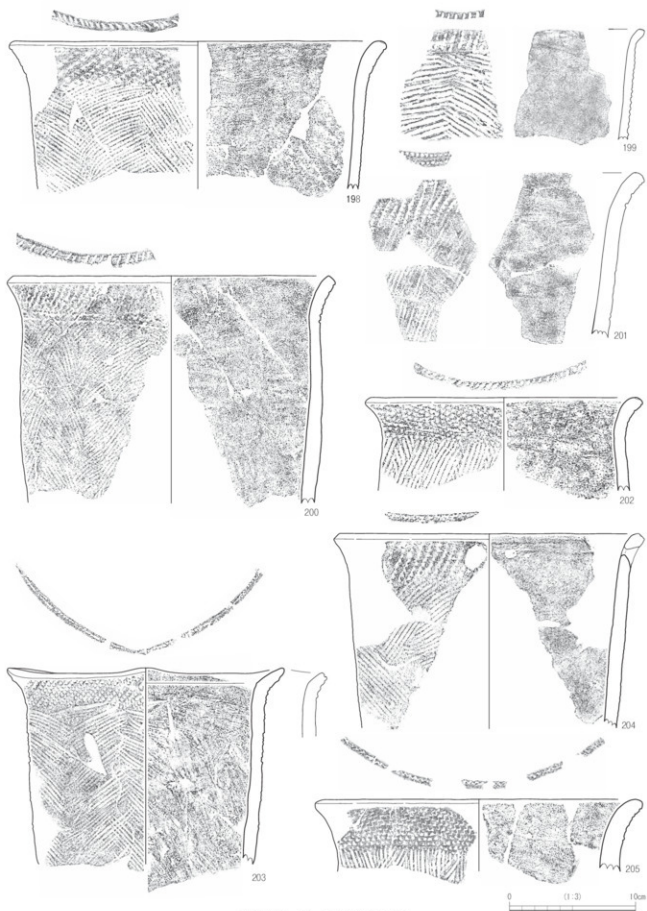
208は底部付近は不明であるが、口縁部から胴部の径が1/2程残存している。やや丸みを帯びた口唇部にはキザミを施し、ナデ消している部分もある。口縁部外面の斜位貝殻刺突文も、口縁部上端が1cm程の幅で文様をナデ消し、細い帯状の無文帯となる。

209・210・212は胴部文様が不明な一群である。209は波状口縁となる。

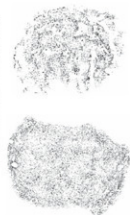
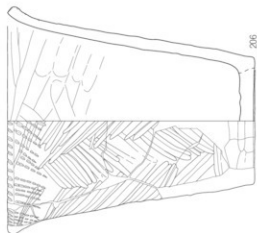
211～225は口縁部がやや外反する一群である。この一群は、胴部文様が不明なものを除くと、全ての胴部は綾杉状の貝殻条痕文である。

211は口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施した後、胴部に貝殻条痕文を施す。

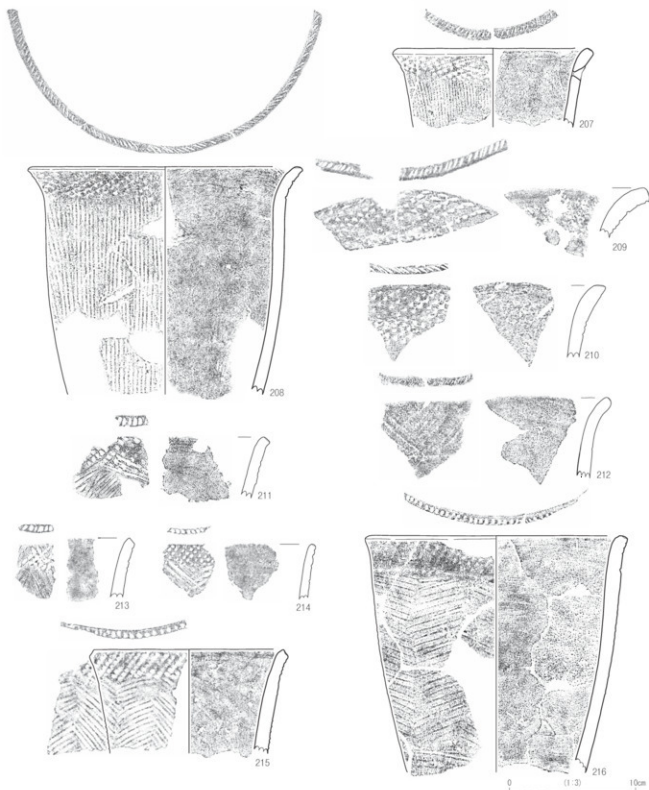
213は口縁部外面も含めた器面全体に貝殻条痕文を施



第262図 N-a-斜類土器(1)



第263图 IV-a-斜纹土器(2)



第264図 N-a-斜類土器(3)

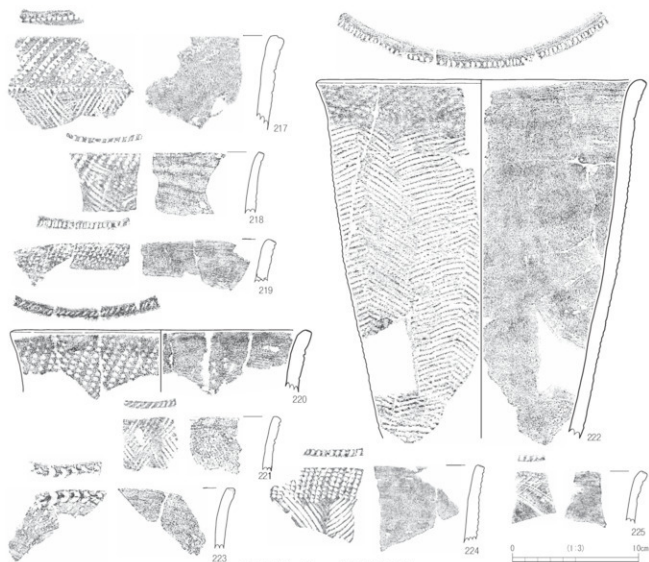
した後、口縁部外面に貝殻刺突文を施す。

215の口縁部外面の貝殻刺突文は、肉眼ではほとんど文様が確認できない。

216はやや丸みを帯びた口唇部の頂上部に貝殻押圧文を施す。口縁部外面の斜位貝殻刺突文は、施文後にナデ

消し、文様としてははっきりとしない。口縁部外面と胴部の綾杉状の貝殻条痕文は、横位貝殻刺突文で区画される。特に内面口縁部付近は、ていねいな工具ナデをおこなう。

217はやや平坦に整形された口唇部に、横位貝殻刺突



第265図 N-a-斜類土器 (4)

文を施す。口縁部外面は、口唇部の刺突文と同一の施文原体により、長めの斜位貝殻刺突文を施す。胴部の綾杉状の貝殻条痕文とその上位の横位貝殻刺突文も、同一の施文原体で施し、文様区画とする。土器の胎土はやや泥質で、器面はざらざらとしている。

218は口縁部外面に斜位貝殻刺突文を密に施す。

222は底部以外を確認できる資料である。口縁部外面の斜位貝殻刺突文と、胴部の綾杉状の貝殻条痕文は横位貝殻刺突文により文様区画とする。口縁部の斜位貝殻刺突文の施文後、文様をナデ消す部分がある。219～221・223～225は胴部文様が不明である。

226～240は、口縁端部のみ外反する一群である。

226～234は、胴部に綾杉状の貝殻条痕文を施す。226は口唇部にキザミを、口縁部外面に密に斜位貝殻刺突文を施す。胴部は貝殻条痕文を羽状に施す。文様は全て同一の施文原体である。内面は非常にいていぬいなナデをおこない、部分的にミガキのようにも見える。227は

丸みを帯びた口唇部をもち、口縁部外面の斜位貝殻刺突文と、胴部の極浅い綾杉状の貝殻条痕文との間に、非常に深い横位貝殻刺突文を1条施し文様区画とする。口縁部内面は、口縁部付近はナデを、胴部内面はケズリをおこなう。228は非常に深い貝殻刺突文を施す。特に口縁部文様と胴部文様の文様区画となる横位貝殻刺突文は顕著である。胴部に施す綾杉状の貝殻条痕文は規則的である。229・230は共に口縁部外面の斜位貝殻刺突文を部分的にナデ消す。229は口唇部頂部にキザミを施すが、230は口唇部の内面側に貝殻刺突文を施す。231は口縁部外面の幅が他より短い。胴部の貝殻条痕文は粗雑で浅い。232は口唇部に貝殻刺突文を施し、口縁部外面と胴部文様の間に1条の横位貝殻刺突文を施し文様区画とする。233は口唇部に2条の貝殻刺突文を施す。口縁部外面に斜位貝殻刺突文を施した後、胴部に浅い綾杉状の貝殻条痕文を施す。口縁部内面上部は横位に、その下位はランダムな方向に工具ナデをおこなう。234は口縁部外